



Sun Java Enterprise System 5 イ ンストールガイド (UNIX 版)



Sun Microsystems, Inc.
4150 Network Circle
Santa Clara, CA 95054
U.S.A.

Part No: 820-0101
2007年4月

本書で説明する製品で使用されている技術に関連した知的所有権は、Sun Microsystems, Inc. に帰属します。特に、制限を受けることなく、この知的所有権には、米国特許、および米国をはじめとする他の国々で申請中の特許が含まれています。

U.S. Government Rights – Commercial software. Government users are subject to the Sun Microsystems, Inc. standard license agreement and applicable provisions of the FAR and its supplements.

本製品には、サードパーティーが開発した技術が含まれている場合があります。

本製品の一部は Berkeley BSD システムより派生したもので、カリフォルニア大学よりライセンスを受けています。UNIX は、X/Open Company, Ltd. が独占的にライセンスしている米国ならびにほかの国における登録商標です。

Sun、Sun Microsystems、Sun のロゴマーク、Solaris のロゴマーク、Java Coffee Cup のロゴマーク、docs.sun.com、Java、Solaris は、米国およびその他の国における米国 Sun Microsystems, Inc. (以下、米国 Sun Microsystems 社とします) の商標もしくは登録商標です。Sun のロゴマークおよび Solaris は、米国 Sun Microsystems 社の登録商標です。すべての SPARC 商標は、米国 SPARC International, Inc. のライセンスを受けて使用している同社の米国およびその他の国における商標または登録商標です。SPARC 商標が付いた製品は、米国 Sun Microsystems 社が開発したアーキテクチャーに基づくものです。

OPEN LOOK および SunTM Graphical User Interface は、米国 Sun Microsystems 社が自社のユーザーおよびライセンス実施権者向けに開発しました。米国 Sun Microsystems 社は、コンピュータ産業用のビジュアルまたはグラフィカルユーザーインターフェースの概念の研究開発における米国 Xerox 社の先駆者としての成果を認めるものです。米国 Sun Microsystems 社は米国 Xerox 社から Xerox Graphical User Interface の非独占的ライセンスを取得しており、このライセンスは、OPEN LOOK GUI を実装するか、または米国 Sun Microsystems 社の書面によるライセンス契約に従う米国 Sun Microsystems 社のライセンス実施権者にも適用されます。

この製品は、米国の輸出規制に関する法規の適用および管理下にあり、また、米国以外の国の輸出および輸入規制に関する法規の制限を受ける場合があります。核、ミサイル、生物化学兵器もしくは原子力船に関連した使用またはかかる使用者への提供は、直接的にも間接的にも、禁止されています。このソフトウェアを、米国の輸出禁止国へ輸出または再輸出すること、および米国輸出制限対象リスト(輸出が禁止されている個人リスト、特別に指定された国籍者リストを含む)に指定された、法人、または団体に輸出または再輸出することは一切禁止されています。

本書は、「現状のまま」をベースとして提供され、商品性、特定目的への適合性または第三者の権利の非侵害の黙示の保証を含みそれに限定されない、明示的であるか黙示的であるかを問わない、なんらの保証も行われないものとします。

目次

はじめに	15
1 インストールの準備	21
Java ES インストーラのしくみ	21
Java ES インストールユーティリティ	22
このリリースで使用される Java ES コンポーネント	23
利用できるインストーラモード	24
言語の選択のしくみ	24
インストーラが既存のコンポーネントをチェックするしくみ	25
インストーラがコンポーネントの依存性を確認するしくみ	26
インストーラがシステムの準備ができているかどうかを確認するしくみ	27
インストーラが設定タイプとパラメータを設定するしくみ	27
アップグレードのしくみ	28
ログのしくみ	30
Java ES レポータのしくみ	30
アンインストールのしくみ	31
既存ホストの調査	31
Solaris OS に Java ES ソフトウェアが事前にロードされている場合	32
互換性のないコンポーネントがインストールされている場合	32
▼ グラフィカルインストーラをローカルディスプレイにアクセスさせるには	33
▼ アップグレードに関する問題の確認のためにインストーラを使用するには	34
ホストの準備が整ったかどうかの確認	35
アクセス権	35
メモリー、ディスク容量、およびスワップ空間の要件	35
システム要件	36
パッチの要件	36

▼ パッチをインストールするには	37
インストールシーケンス例を使用できるかどうかの確認	37
インストール前提条件の確認	38
Java ES ソフトウェアの入手	41
ネットワーク上のインストールイメージの作成	42
▼ DVD からイメージを作成するには	42
▼ 圧縮アーカイブからイメージを作成するには	43
2 インストールシーケンスの例	45
この章の利用方法	45
単一セッションインストールの例	47
評価の例	48
▼ Java ES 評価のシーケンスを作成するには、次の手順に従います。	48
Access Manager と Portal Server の例	49
▼ Access Manager と Portal Server のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。	49
Application Server のみをインストールする例	51
Directory Proxy Server のみをインストールする例	53
▼ Directory Proxy Server のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。	54
Directory Server のみをインストールする例	55
Message Queue のみをインストールする例	57
Monitoring Console のみをインストールする例	58
▼ Monitoring Console のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。	58
Portal Server Secure Remote Access の例	60
Service Registry のみをインストールする例	62
Web Server のみをインストールする例	64
Solaris 10 ゾーンの例	66
Solaris ゾーンの概要	66
Java ES のこのリリースでのゾーンサポート	67
特殊な状況: 共有コンポーネントを完全ルートゾーンにインストールする	68
Solaris 10 完全ルートゾーンの例	69
▼ Solaris 10 完全ルートゾーンへのインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。	70
Solaris 10 疎ルートゾーンの例	71

▼ Solaris 10 疎ルートゾーンへのインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。	71
Sun Cluster ソフトウェアの例	72
要件およびシーケンスの問題	73
第1段階: Sun Cluster フレームワークのインストールと設定	73
▼ Sun Cluster フレームワークのインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。	73
第2段階: 製品コンポーネントとエージェントのインストールと設定	75
▼ 製品コンポーネントとエージェントの設定シーケンスを作成するには、次の手順に従います。	75
コンテナの設定を使用する Access Manager SDK の例	76
要件	76
▼ ホスト A 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。	77
▼ ホスト B 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。	77
アイデンティティ管理の例	79
要件	79
▼ ホスト A 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。	80
▼ ホスト B 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。	80
リモートの Access Manager を使用する Portal Server の例	81
要件	82
▼ ホスト A 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。	82
▼ ホスト B 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。	82
Web とアプリケーションサービスの例	84
要件およびシーケンスの問題	84
▼ Web とアプリケーションサービスのインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。	85
root 以外のユーザーでのインストール例	86
3 グラフィカルインタフェースによるインストール	87
インストールの前に	87
前提条件と要件の確認	87

(オプション) リモートホストのローカルディスプレイの設定	88
ソフトウェアの入手	88
グラフィカルモードでのインストーラの実行	89
▼ インストールを開始するには	89
▼ コンポーネントと言語を選択するには	89
▼ 依存性と互換性の問題を解決するには	92
▼ インストールディレクトリを指定し、システムチェックを開始するには	94
▼ 設定の種類と共通設定を指定するには	97
▼ 設定データを指定するには	99
▼ ソフトウェアをインストールするには	101
▼ インストールセッションを終了するには	102
コンポーネントの追加	103
次の手順	104
4 テキストベースのインタフェースによるインストール	105
インストールの前に	105
前提条件の確認	105
ソフトウェアの入手	106
テキストベースのインタフェースの使用方法	106
テキストベースモードでのインストーラの実行	107
▼ インストールを開始するには	107
▼ コンポーネントと言語を選択するには	107
▼ インストールディレクトリを指定し、システムチェックを開始するには	111
▼ 設定の種類と共通サーバー設定を指定するには	112
▼ コンポーネントの設定データを指定するには	114
▼ ソフトウェアをインストールするには	116
コンポーネントの追加	117
次の手順	117
5 サイレントモードでのインストール	119
サイレントインストールの作業手順	119
状態ファイルの作成	120
初期状態ファイルの生成	120
状態ファイルの編集	121
プラットフォームに適した状態ファイル ID の作成	124

▼ インストーラを使用して状態ファイル ID を生成するには	125
サイレントモードでのインストーラの実行	125
▼ サイレントモードでインストーラを実行するには	126
▼ サイレントインストールの進行状況を監視するには	126
次の手順	127
6 インストール後の設定の実行	129
この章の利用方法	130
マニュアルページの確認	131
▼ MANPATH 変数を更新するには	131
Monitoring Console のインストール後の設定	133
Sun Cluster のインストール後の設定	133
フェーズ I. Sun Cluster フレームワーク	133
フェーズ II. 製品コンポーネントデータサービス	134
Access Manager のインストール後の設定	134
「今すぐ設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定 ..	134
「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定 ..	135
Application Server のインストール後の設定	135
▼ 「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Application Server を設定する には	135
Directory Server のインストール後の設定	138
「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Directory Server および Directory Proxy Server の設定	138
「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Directory Server Control Center の設定	138
HADB のインストール後の設定	139
「あとで設定」設定オプションでのインストール後の HADB の設定	139
Java ES レポータのインストール後の設定	139
▼ Java ES レポータを有効または無効にするには	139
Message Queue のインストール後の設定	140
Portal Server および Portal Server Secure Remote Access のインストール後の設定	140
Service Registry のインストール後の設定	141
Web Proxy Server のインストール後の設定	141
▼ 「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Web Proxy Server を設定する には	141
Web Server のインストール後の設定	142

▼ 「あとで設定」 設定オプションでのインストール後に Web Server を設定するには	142
Sun Cluster データサービスの設定	142
▼ Java ES 以外の製品で高可用性を実装するには	145
Java 仮想マシン (JVM) の設定	146
ルート以外の ID による製品コンポーネントの設定	146
次の手順	147
7 インストール済み製品コンポーネントの確認	149
この章の利用方法	150
インストール後の確認	150
▼ インストールが成功したかどうかの確認	151
インストール後設定のあとの確認	153
Web コンテナを起動した状態での Portal Server デスクトップへのアクセス	155
▼ Sun Web コンテナから Portal Server デスクトップへのアクセス	155
▼ BEA WebLogic から Portal Server デスクトップへのアクセス	156
▼ IBM WebSphere から Portal Server デスクトップへのアクセス	157
Access Manager の起動と停止	157
▼ Access Manager のログインページへのアクセス	157
Application Server の起動と停止	158
▼ Application Server のドメインの起動	158
▼ 管理コンソールへのアクセス	159
▼ Application Server の停止	159
Directory Proxy Server の起動と停止	159
▼ Directory Proxy Server の起動	159
▼ Directory Proxy Server の停止	160
Directory Server の起動と停止	160
▼ Directory Server の起動	160
▼ Directory Server の停止	160
Message Queue の起動と停止	161
▼ Message Queue ブローカの起動	161
▼ Message Queue ブローカの停止	161
Monitoring Console の起動と停止	161
Portal Server Secure Remote Access の起動と停止	161
▼ Portal Server Secure Remote Access ゲートウェイの起動	162

▼ Portal Server Secure Remote Access ゲートウェイの停止	162
Sun Cluster ソフトウェアの停止と再起動	163
Web Proxy Server の起動と停止	163
▼ Web Proxy Server Administration Server とインスタンスの起動	163
▼ Socks サーバーの起動	163
▼ 管理サーバーのグラフィカルインタフェースへのアクセス	164
▼ Web Proxy Server の停止	164
▼ Socks サーバーの停止	164
Web Server の起動と停止	165
▼ Web Server の起動	165
▼ Web Server の停止	165
次の手順	166
8 アンインストール	167
アンインストーラのしくみ	167
アンインストーラの制限	168
相互依存性の処理	168
前提条件の確認	170
アンインストールの計画	171
インストール済み Java ES ソフトウェアの調査	171
▼ アンインストーラによるインストール済みソフトウェアの表示	171
▼ Solaris の prodreg ユーティリティによるインストール済みソフトウェアの 表示	172
Java ES 製品コンポーネントのアンインストール動作の確認	172
アンインストーラ用の管理者アクセス権の付与	184
アンインストーラの実行	185
グラフィカルモードでのアンインストーラの実行	185
▼ グラフィカルアンインストーラの起動	185
▼ アンインストールする製品コンポーネントの選択	186
▼ 管理者アクセス権の付与	187
▼ ソフトウェアのアンインストール	187
テキストベースモードでのアンインストーラの実行	188
▼ テキストベースモードでのアンインストーラの起動	188
▼ アンインストールする製品コンポーネントの選択	189
▼ 管理者アクセス権の付与	190

▼ ソフトウェアのアンインストール	190
サイレントモードでのアンインストールの実行	191
▼ 状態ファイルの作成	191
▼ サイレントモードでのアンインストールの実行	192
▼ サイレントアンインストールの進行状況の監視	192
Java ES レポータのアンインストール	193
▼ Java ES レポータのアンインストール	193
Sun Cluster ソフトウェアのアンインストール	194
アンインストール後の作業の完了	195
Access Manager アンインストール後の問題	195
Access Manager アンインストール後の作業 (Application Server はアンインストール されていない)	195
▼ Access Manager のアンインストール後の Application Server の再起動	196
Service Registry アンインストール後の作業	196
Web Server アンインストール後の作業 (Web Server はアンインストールされてい ない)	197
▼ Access Manager のアンインストール後の Web Server の再起動	197
9 トラブルシューティング	199
問題の解決方法	199
インストールログファイルの検証	200
▼ ログファイルによるトラブルシューティング	201
ログビューアの使用	201
▼ ログビューアの実行	203
製品の依存関係の検証	203
リソースと設定のチェック	204
インストール後の設定のチェック	205
配布メディアのチェック	205
Directory Server の接続性チェック	205
Web Server のファイルおよびディレクトリの削除	205
パスワードの確認	206
製品コンポーネントのインストール状態の検証	206
アンインストールするための管理者アクセスの確認	206
インストールに関する問題の解決	207
アンインストール時に残されたファイルによるインストールの失敗	207
▼ 部分的なインストールのクリーンアップ	207

アンインストール後に製品レジストリに含まれる共有コンポーネントが削除されたためにインストールが失敗する	208
IBM WebSphere を Portal Server の Web コンテナとして設定できない	209
予期せぬ外部エラーが発生する	210
グラフィカルインストーラが応答しない	210
サイレントインストールの失敗: 状態ファイルに互換性がない、または破損している	211
状態ファイルの編集後にサイレントインストールに失敗した	211
マニュアルページが表示されない	212
アンインストールに関する問題の解決	212
アンインストーラが見つからない	212
アンインストールが失敗し、ファイルが削除されずに残った	213
▼ 手動でのパッケージのクリーンアップ	213
製品レジストリが破損している	214
Common Agent Container の問題の解決	214
ポート番号の競合	215
ルートパスワードの安全性が危惧される場合	216
▼ Solaris OS の場合のキー生成	216
▼ Linux および HP-UX の場合のキー生成	217
インストール後の起動/再起動の問題の解決	217
監視規則が動作しなくなる (状態は不明)	217
▼ Application Server から Monitoring Console への通信の再確立	218
Java DB の再起動後、ポータルデータベースが見つからない	218
製品コンポーネントのトラブルシューティングのためのヒント	219
Access Manager のトラブルシューティングのヒント	219
Application Server のトラブルシューティングのヒント	220
Directory Server のトラブルシューティングのヒント	220
Message Queue のトラブルシューティングのヒント	221
Monitoring Console のトラブルシューティングのヒント	221
Portal Server のトラブルシューティングのヒント	222
Portal Server Secure Remote Access のトラブルシューティングのヒント	223
Service Registry のトラブルシューティングのヒント	223
Sun Cluster ソフトウェアのトラブルシューティングのヒント	224
Web Proxy Server のトラブルシューティングのヒント	224
Web Server のトラブルシューティングのヒント	225
トラブルシューティングの追加情報	225

A	このリリースの Java ES コンポーネント	227
	製品コンポーネント	227
	共有コンポーネント	230
B	インストールコマンド	233
	installer または install コマンド	233
	例	235
	uninstall コマンド	236
	例	237
	viewlog コマンド	237
	例	238
C	状態ファイルの例	239
	索引	247

表目次

表 1-1	Java ES インストーラのアップグレードサポート	29
表 1-2	UNIX のパッケージコマンドの対応関係	33
表 1-3	インストール前のチェックリスト	38
表 2-1	インストールシーケンスのガイドライン	46
表 4-1	テキストベースインストーラのプロンプトに対する応答	106
表 5-1	サイレントインストールの作業	120
表 5-2	サイレントインストールでよく編集される状態ファイルのパラメータ	122
表 6-1	マニュアルページのデフォルトの場所	131
表 6-2	Sun Cluster Agents (データサービス)	143
表 6-3	各製品コンポーネントのルート以外の ID の設定	147
表 7-1	Java ES の推奨起動シーケンス	154
表 8-1	アンインストール前のチェックリスト	170
表 8-2	Access Manager のアンインストールの詳細	173
表 8-3	Application Server のアンインストールの詳細	174
表 8-4	Directory Proxy Server のアンインストールの詳細	175
表 8-5	Directory Server のアンインストールの詳細	176
表 8-6	HADB のアンインストールの詳細	176
表 8-7	Message Queue のアンインストールに関する詳細	177
表 8-8	Monitoring Console のアンインストールの詳細	178
表 8-9	Portal Server のアンインストールの詳細	179
表 8-10	Portal Server Secure Remote Access のアンインストールに関する詳細 ...	180
表 8-11	Service Registry のアンインストールに関する詳細	181
表 8-12	Sun Cluster と Sun Cluster Geographic Edition のアンインストールの詳細	182
表 8-13	Web Proxy Server のアンインストールの詳細	182
表 8-14	Web Server のアンインストールの詳細	183
表 8-15	必要な管理情報	184
表 9-1	ログファイルの形式	200

表 9-2	Access Manager のトラブルシューティングのヒント	219
表 9-3	Application Server のトラブルシューティングのヒント	220
表 9-4	Directory Server のトラブルシューティングのヒント	220
表 9-5	Message Queue のトラブルシューティングのヒント	221
表 9-6	Monitoring Console のトラブルシューティングのヒント	221
表 9-7	Portal Server のトラブルシューティングのヒント	222
表 9-8	Service Registry のトラブルシューティングのヒント	223
表 9-9	Sun Cluster ソフトウェアのトラブルシューティングのヒント	224
表 9-10	Web Proxy Server のトラブルシューティングのヒント	224
表 9-11	Web Server のトラブルシューティングのヒント	225
表 B-1	Java ES インストールコマンドのオプション	234
表 B-2	Java ES アンインストールのコマンド行オプション	236
表 B-3	Java ES ログビューアのコマンド行オプション	238

はじめに

この『Java Enterprise System インストールガイド (UNIX 版)』には、Sun Solaris™ Operating System (Solaris OS)、Linux、または HP-UX オペレーティング環境への Sun Java™ Enterprise System (Java ES) ソフトウェアのインストール手順が記載されています。このマニュアルには、特定のプラットフォームのみに当てはまり、異なるプラットフォームには適用されない情報も含まれます。こうした情報は、プラットフォーム名を明記して記載されています。ただし、大部分の手順はプラットフォーム別に分類されておらず、すべての UNIX オペレーティングシステムに適用されます。

対象読者

このマニュアルに記載される内容は、Java ES ソフトウェアをインストールする評価担当者、システム管理者、およびソフトウェア技術者を対象としています。このマニュアルは、次の事項に習熟している方を対象に記述されています。

- エンタープライズレベルのソフトウェア製品のインストール
- サポートする Java ES プラットフォーム上のシステム管理とネットワーク
- クラスターリングモデル (クラスターリングソフトウェアをインストールする場合)
- インターネットと World Wide Web

Java ES のマニュアルセット

Java ES マニュアルセットでは、配備計画とシステムインストールについて説明します。システムマニュアルの URL は <http://docs.sun.com/coll/1657.1> です。Java ES の概要については、次の表に示されている順序で各マニュアルを参照してください。

表 P-1 Java Enterprise System のマニュアル

マニュアルタイトル	内容
『Sun Java Enterprise System 5 リリースノート (UNIX 版)』	既知の問題など、Java ES に関する最新の情報が記載されています。これ以外に、コンポーネントごとのリリースノートがリリースノートコレクション (http://docs.sun.com/coll/1315.2) に記載されています。
『Sun Java Enterprise System 5 リリースノート (Windows 版)』	
『Sun Java Enterprise System 5 技術の概要』	Java ES の技術的および概念的な基礎について説明します。コンポーネント、アーキテクチャー、プロセス、および機能について説明しています。
『Sun Java Enterprise System Deployment Planning Guide』	Java ES に基づく企業配備ソリューションの計画および設計に関する情報を提供します。配備の計画および設計に関する基本的概念と原則を示し、ソリューションのライフサイクルについて説明し、Java ES に基づくソリューションを計画する際に使用する高度な例と戦略を提供します。
『Sun Java Enterprise System 5 インストール計画ガイド』	Java ES の配備に関し、ハードウェア、オペレーティングシステム、およびネットワーク面の実装仕様の開発に役立つ情報を提供します。インストールおよび設定計画を遂行する上で注意すべきコンポーネントの依存関係などの問題について説明します。
『Sun Java Enterprise System 5 インストールガイド (UNIX 版)』	Java ES のインストールのプロセスについて説明します。また、インストール後にコンポーネントを設定する方法、および設定したコンポーネントが正常に機能するかどうかを確認する方法についても説明します。
『Sun Java Enterprise System 5 インストールガイド (Windows 版)』	
『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』	設定パラメータに関する追加情報、設定計画で使用するワークシート、および Solaris オペレーティングシステムと Linux オペレーティング環境でのデフォルトのディレクトリやポート番号などの参考資料を示します。
『Sun Java Enterprise System 5 アップグレードガイド (UNIX 版)』	インストール済みのバージョンから Java ES 5 にアップグレードする手順について説明します。
『Sun Java Enterprise System 5 Upgrade Guide for Microsoft Windows』	
『Sun Java Enterprise System 5 監視ガイド (UNIX 版)』	各製品での Monitoring Framework の設定方法と、Monitoring Console を使用してリアルタイムデータを参照し、監視規則を作成する方法を示します。
『Sun Java Enterprise System 用語集』	Java ES ドキュメントで使用される用語について説明します。

デフォルトパスの規則

次の表は、このマニュアルで使用するデフォルトインストールパスの表記について説明したものです。

表 P-2 デフォルトパスの規則

ブレースホルダの例	説明	デフォルト値の例
<i>Application/Server-base</i>	Application Server のベースインストールディレクトリを表します。	Solaris OS の場合: /opt/SUNWappserver/appserver Linux および HP-UX の場合: /opt/sun/appserver

表記上の規則

このマニュアルでは、次のような字体や記号を特別な意味を持つものとして使用します。

表 P-3 表記上の規則

字体または記号	意味	例
AaBbCc123	コマンド名、ファイル名、ディレクトリ名、画面上のコンピュータ出力、コード例を示します。	.login ファイルを編集します。 ls -a を使用してすべてのファイルを表示します。 machine_name% you have mail.
AaBbCc123	ユーザーが入力する文字を、画面上のコンピュータ出力と区別して示します。	machine_name% su Password:
<i>aabbcc123</i>	変数を示します。実際に使用する特定の名前または値で置き換えます。	ファイルを削除するには、rm <i>filename</i> と入力します。
『』	参照する書名を示します。	『コードマネージャー・ユーザーズガイド』を参照してください。
「」	参照する章、節、ボタンやメニュー名、強調する単語を示します。	第5章「衝突の回避」を参照してください。 この操作ができるのは、「スーパーユーザー」だけです。

表 P-3 表記上の規則 (続き)

字体または記号	意味	例
\	枠で囲まれたコード例で、テキストがページ行幅を超える場合に、継続を示します。	sun% grep '^#define \ XV_VERSION_STRING'

コード例は次のように表示されます。

- C シェル

```
machine_name% command y|n [filename]
```

- C シェルのスーパーユーザー

```
machine_name# command y|n [filename]
```

- Bourne シェルおよび Korn シェル

```
$ command y|n [filename]
```

- Bourne シェルおよび Korn シェルのスーパーユーザー

```
# command y|n [filename]
```

[] は省略可能な項目を示します。上記の例は、*filename* は省略してもよいことを示しています。

| は区切り文字 (セパレータ) です。この文字で分割されている引数のうち 1 つだけを指定します。

キーボードのキー名は英文で、頭文字を大文字で示します (例: Shift キーを押します)。ただし、キーボードによっては Enter キーが Return キーの動作をします。

ダッシュ (-) は 2 つのキーを同時に押すことを示します。たとえば、Ctrl-D は Control キーを押したまま D キーを押すことを意味します。

コマンド例で使用されるシェルプロンプト

次の表は、デフォルトのシステムプロンプトとスーパーユーザープロンプトを示しています。

表P-4 シェルプロンプト

シェル	プロンプト
UNIX および Linux システムの C シェル	machine_name%
UNIX および Linux システムの C シェルのスーパーユーザー	machine_name#
UNIX および Linux システムの Bourne シェルおよび Korn シェル	\$
UNIX および Linux システムの Bourne シェルおよび Korn シェルのスーパーユーザー	#
Microsoft Windows のコマンド行	C:\

記号の規則

次の表は、この用語集で使用される記号の一覧です。

表P-5 記号の規則

記号	説明	例	意味
[]	省略可能な引数やコマンドオプションが含まれます。	ls [-l]	-l オプションは必須ではありません。
{ }	必須のコマンドオプションの選択肢を囲みます。	-d {y n}	-d オプションには y 引数か n 引数のいずれかを使用する必要があります。
\${ }	変数参照を示します。	\${com.sun.javaRoot}	com.sun.javaRoot 変数の値を参照します。
-	同時に押すキーを示します。	Control-A	Control キーを押しながら A キーを押します。
+	順番に押すキーを示します。	Ctrl+A+N	Control キーを押してから放し、それに続くキーを押します。
→	グラフィカルユーザーインタフェースでのメニュー項目の選択順序を示します。	「ファイル」→「新規」 →「テンプレート」	「ファイル」メニューから「新規」を選択します。「新規」サブメニューから「テンプレート」を選択します。

マニュアル、サポート、およびトレーニング

Sunのサービス	URL	内容
マニュアル	http://jp.sun.com/documentation/	PDF 文書および HTML 文書をダウンロードできます。
サポートおよび トレーニング	http://jp.sun.com/supporttraining/	技術サポート、パッチのダウンロード、および Sun のトレーニングコース情報を提供します。

◆◆◆ 第 1 章

インストールの準備

この章では、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) ソフトウェアをインストールする際に役立つ情報を提供します。このマニュアルで説明している作業を開始する前に、『Sun Java Enterprise System 5 インストール計画ガイド』に従ってインストール計画を立てておいてください。また、『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』に記載されている Java ES インストール関連の参考資料についても、よく理解しておくようにしてください。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 21 ページの「Java ES インストーラのしくみ」
- 31 ページの「既存ホストの調査」
- 35 ページの「ホストの準備が整ったかどうかの確認」
- 37 ページの「インストールシーケンス例を使用できるかどうかの確認」
- 38 ページの「インストール前提条件の確認」
- 41 ページの「Java ES ソフトウェアの入手」
- 42 ページの「ネットワーク上のインストールイメージの作成」

Java ES インストーラのしくみ

Sun Java Enterprise System (Java ES) は、いくつかの Sun のサーバー側製品を統合し、分散型のエンタープライズアプリケーションをサポートします。このマニュアルでは、これらの製品を「Java ES 製品コンポーネント」と呼びます。共有コンポーネントと呼ばれる一連のサポートソフトウェアも含まれています。Java ES インストーラを実行すると、Java ES 製品コンポーネントと共有コンポーネントがさまざまに組み合わせられて一度に1つのホストにインストールされます。これらのコンポーネント間には複雑な相互関係が存在するため、それらをインストールする際には、単一の製品コンポーネントをインストールする場合よりも多くのインストール前作業やインストール後作業が必要となります。

Java ES インストーラでは、コンポーネントパッケージ (Solaris OS)、RPM (Linux)、または Depot (HP-UX) がローカルホストに追加されます。製品コンポーネントをアンイ

インストールするために、設定を解除するためのインタフェースが表示されるアンインストールユーティリティーが用意されています。操作の途中で、ログレコードが生成されてファイルに保存されます。

ここで説明する内容は、次のとおりです。

- 22 ページの「Java ES インストールユーティリティー」
- 23 ページの「このリリースで使用される Java ES コンポーネント」
- 24 ページの「利用できるインストーラモード」
- 24 ページの「言語の選択のしくみ」
- 25 ページの「インストーラが既存のコンポーネントをチェックするしくみ」
- 26 ページの「インストーラがコンポーネントの依存性を確認するしくみ」
- 27 ページの「インストーラがシステムの準備ができていかどうかを確認するしくみ」
- 27 ページの「インストーラが設定タイプとパラメータを設定するしくみ」
- 28 ページの「アップグレードのしくみ」
- 30 ページの「ログのしくみ」
- 30 ページの「Java ES レポートのしくみ」
- 31 ページの「アンインストールのしくみ」

Java ES インストールユーティリティー

インストールユーティリティー (installer) は、`/jes5install/Solaris_sparc` などの、Java ES をインストールするプラットフォームディレクトリにあります。Product ディレクトリ、`release_info` という名前のテキストファイル、および `installer` スクリプト実行可能ファイルが入っています。インストーラにパッチが適用されている場合を除いて、インストーラはここから起動します。

別のディレクトリには、パッチを適用するために使用されるパッケージ版のインストーラが入っています。パッチインストールスクリプト (`install`) は、ログビューアユーティリティー (`viewlog`) と一緒に次のディレクトリにあります。

- Solaris OS の場合: `/var/sadm/prod/SUNWentsys5i`
- Linux および HP-UX の場合: `/var/sadm/prod/sun-entsys5i`

`installer` にバグがある場合は、Sun が `installer` を修正して、そのインストーラパッケージ用のパッチを作成することがあります。パッチの適用以降は、そのリリースにはパッケージ版のインストーラを使用するようにしてください。つまり、パッチによる修正が含まれるインストーラを起動することになります。

注-使用している配備環境で、パッチを適用した Java ES インストーラを使用する場合にのみ、パッチユーティリティーを使用します。

インストールが完了すると、Java ES のアンインストールユーティリティー (`uninstall`) が次の場所に配置されます。

- Solaris OS の場合: /var/sadm/prod/SUNWentsys5
- Linux および HP-UX の場合: /var/sadm/prod/sun-entsys5

Java ES インストールユーティリティーの構文と例は、付録 B に記載されています。

このリリースで使用される **Java ES** コンポーネント

Java ES ソフトウェアは、Sun のサーバー側製品とそれらをサポートする共有コンポーネントで構成されています。これらは、ネットワーク上に分散されたアプリケーションをサポートするために、連携して動作するようになっています。Java ES 5 リリースでは、次のコンポーネントを選択することができ、さらにその多くのコンポーネントでサブコンポーネントを選択することができます。

このマニュアルで使用されている代替名または省略名は、コンポーネント名とバージョンのあとに括弧で囲まれています。

注 - HP-UX では、Sun Cluster コンポーネント、Directory Preparation Tool、HADB、またはサードパーティーの Web コンテナはサポートされません。Linux で「今すぐ設定」設定オプションを使用する場合、Sun Cluster コンポーネントはサポートされず、サードパーティーコンテナは BEA WebLogic のみがサポートされます。

- Access Manager 7.1
- Application Server 8.2 Enterprise Edition およびパッチ (Application Server)
- Directory Preparation Tool 6.4
- Directory Proxy Server 6.0
- Directory Server Enterprise Edition 6.0 (Directory Server)
- High Availability Session Store 4.4 (HADB)
- Java DB 10.1
- Message Queue 3.7 UR1
- Monitoring Console 1.0
- Portal Server 7.1
- Portal Server Secure Remote Access 7.1
- Service Registry 3.1
- Sun Cluster 3.1 8/05 (Sun Cluster ソフトウェア)
- Sun Cluster Agents 3.1
- Sun Cluster Geographic Edition 3.1 2006Q4 (Sun Cluster Geographic)
- Web Proxy Server 4.0.4
- Web Server 7.0

注 - Directory Preparation Tool は Communications 製品でのみ使用されます。便宜上 Java ES リリースでは Directory Server に含まれています。Directory Preparation Tool については、『Sun Java Communications Suite 5 インストールガイド』の第 8 章「Directory Preparation Tool (comm_dssetup.pl)」を参照してください。

Java ES インストーラに表示されるサービスおよびサブコンポーネントの完全な一覧については、[付録 A](#) を参照してください。この付録では、今回のリリースで提供する共有コンポーネントの一覧も示します。

利用できるインストーラモード

Java ES インストーラは、Solaris pkgadd、Linux rpm、HP-UX swinstall のいずれかのユーティリティーを使って Java ES ソフトウェアをシステムに転送するためのインストールフレームワークです。Java ES のインストールは、対話的に実行することも、再利用可能なスクリプトを使用して実行することもできます。

- **グラフィカルモード (対話式):** グラフィカルワークステーションへの Java ES ソフトウェアのインストール作業の手順を示す、対話式のグラフィカルウィザードを提供します。
- **テキストモード (対話式):** グラフィカルモードと同じ機能を提供しますが、端末ウィンドウのコマンド行で 1 行ごとに応答が求められます。
- **サイレントモード:** 入力を指定するために生成した状態ファイルを使用して、複数のホスト上でインストーラを実行する機能を提供します。

ヒント - ソフトウェアをインストールせずに Java ES インストーラを実行することができます。これは、ホスト上の Java ES ソフトウェアを調査する場合に便利です。

言語の選択のしくみ

対話式 Java ES インストーラは、ホストのオペレーティングシステムのロケール設定で指定されている言語で実行されます。次の言語を利用できます。

- 英語
- フランス語
- ドイツ語
- 日本語
- 韓国語
- スペイン語
- 簡体字中国語
- 繁体字中国語

オペレーティングシステムの言語がこのリストに含まれていない場合、インストーラは英語で実行されます。インストーラにより、英語版の Java ES のコンポーネントがすべて自動的にインストールされます。デフォルトでは、インストールするコンポーネントを選択すると、多言語パッケージが選択されます。

以前にインストールしたコンポーネントに対し、インストーラを使用して追加言語パッケージをインストールすることはできません。ただし、`pkgadd`、`rpm`、または `swinstall` ユーティリティを使用して、いつでもローカライズ版パッケージをインストールできます。言語パッケージの一覧は、『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の第 5 章「インストール可能なパッケージの一覧」にあります。

インストーラが既存のコンポーネントをチェックするしくみ

インストール時に、Java ES インストーラは、インストールするホスト上にすでにインストールされているソフトウェアを調べ、次のコンポーネントを識別します。

- 互換性のある Java ES 製品コンポーネント
互換性のある製品コンポーネントは再インストールの必要がなく、またインストーラでは選択できません。
- 互換性のない Java ES 製品コンポーネント
インストーラが選択した製品コンポーネントとすでにローカルにインストールされている製品コンポーネントとで互換性がないことを確認した場合、すでにインストールされている互換性のない製品コンポーネントを削除またはアップグレードする必要があります。Solaris OS では、いくつかのバンドル版コンポーネントは、インストーラによってアップグレードできます (Application Server、Message Queue、HADB)。その他の互換性のないコンポーネントは、手動で削除またはアップグレードする必要があります。これらの互換性のないコンポーネントが処理されるまで、インストーラを続けて実行することはできません。詳細は、[28 ページの「アップグレードのしくみ」](#)を参照してください。
- 互換性のない Java ES 共有コンポーネント
NSS など、各種バージョンの Java ES 共有コンポーネントが既存のホストにすでに含まれていることはよくあることです。インストーラがインストールしようとする Java ES のバージョンと互換性のない共有コンポーネントのバージョンを検出した場合、これらの共有コンポーネントがリスト表示されます。インストールを続行すると、インストーラにより共有コンポーネントが互換性のあるバージョンに自動的にアップグレードされます。

インストーラがコンポーネントの依存性を確認するしくみ

製品コンポーネントの多くは、主要な機能を提供するために、ほかのコンポーネントの存在に依存しています。インストール時に選択した製品コンポーネントが共存して正常に機能するように、インストーラはコンポーネント間のチェックを広範囲に行います。このため、ユーザーの選択に応じて、特定の製品コンポーネントをインストールに含めるよう求められます。

通常、インストーラは、次の規則を使用して Java ES 製品コンポーネント間の依存性を処理します。

- **製品コンポーネントの選択:** インストールする製品コンポーネントを選択すると、ほとんどの場合、インストーラはすべてのサブコンポーネントを自動的に選択します。

また、インストーラは、選択した製品コンポーネントが依存するコンポーネントとサブコンポーネントも選択します。たとえば、Application Server を選択すると、インストーラは HADB、Java DB、および Message Queue を自動的に選択します。

- **製品コンポーネントの選択の解除:** 製品コンポーネントの選択を解除すると、ほとんどの場合、インストーラはすべてのサブコンポーネントの選択を自動的に解除します。

選択している別の製品コンポーネントがローカルまたはリモートに必要とする製品コンポーネントの選択を解除すると、インストール手順を進めるときに、インストーラはさまざまな警告メッセージを表示します。

- **サブコンポーネントの選択:** サブコンポーネントを選択すると、インストーラはそのサブコンポーネントが属する製品コンポーネントを自動的に選択しますが、必ずしもその他のサブコンポーネントは選択しません。

選択したサブコンポーネントがほかのコンポーネントまたはサブコンポーネントに依存する場合、依存関係にあるこれらのコンポーネントは自動的に選択されません。

- **サブコンポーネントの選択の解除:** サブコンポーネントの選択を解除すると、インストーラはそのサブコンポーネントの選択のみを解除します。その他のサブコンポーネントの選択は解除しません。

選択している別の製品コンポーネントがローカルまたはリモートに必要とするサブコンポーネントの選択を解除すると、インストール手順を進めるときに、インストーラはさまざまな警告メッセージを表示します。

インストーラがシステムの準備ができているかどうかを確認するしくみ

選択したコンポーネントをインストールできることがわかり、インストール先ディレクトリを指定すると、選択したコンポーネントの要件をホストが満たしているかどうかを確認するために、Java ES インストーラによるシステムチェックが実行されます。

インストーラは、選択したコンポーネントと指定されたインストールディレクトリに基づいて、ディスク容量、メモリー、スワップ空間、オペレーティングシステムのパッチ、オペレーティングシステムのリソースをチェックします。次のメッセージを使用してホストの状態を通知します。

- インストールの準備ができました。このメッセージが表示されたときは、インストーラの処理を続けることができます。
- インストールの準備ができました。メモリーが推奨レベルに対して不足しています。このメッセージが表示されたときは、インストーラの処理を続けることができますが、リソースを追加することを検討する必要があります。
- システムは最低限のシステム要件を満たしていません。このメッセージが表示されると、ほとんどの場合、インストーラの処理を続行できません。よくある状況はパッチが適用されていないことです。インストールを続行する前に、適用されていないパッチの大半をインストールする必要があります。場合によっては、適用されていないパッチをインストールせずに続行できます。この場合、処理を続けようとする、インストールが失敗するか、またはソフトウェアが正しく機能しない可能性があることを示す警告が表示されます。インストールを続行するときは、適用していないパッチをインストールしないでインストールすることを明示的に承認する必要があります。パッチの詳細については、[36 ページ](#)の「[パッチの要件](#)」または[37 ページ](#)の「[パッチをインストールするには](#)」を参照してください。

インストーラが設定タイプとパラメータを設定するしくみ

Java ES の製品コンポーネントの多くは、インストール時にある程度の設定を行う必要があります。インストール時に実行する必要がある設定の範囲は、選択した製品コンポーネントおよびインストールタイプによって異なります。

注- 次のコンポーネントは Java ES インストーラでは設定できないので、インストール後に設定する必要があります。Directory Proxy Server、Java DB、Monitoring Console、Service Registry、および Sun Cluster コンポーネント。

インストーラで、次の設定タイプを使用できます。

- あとで設定:インストール時は、インストールに必要な最小限の値だけを入力し、インストール後に詳細な設定を行います。
- 今すぐ設定:インストール中、インストール時の設定が可能な製品コンポーネントの設定情報を指定します。指定する情報は、いくつかの共通パラメータだけの場合もあれば(共通サーバー設定)、コンポーネントに固有の詳細なパラメータを含む場合もあります(製品コンポーネント設定)。

インストール時の設定やインストール後の設定を行うときは、設定情報の値を記録しておくことが重要になります。多くの製品コンポーネントが正しく機能するかどうかは、ほかのコンポーネントの設定パラメータの値によって決まります。「今すぐ設定」インストールの終わりに表示される「インストールの要約」を見れば、指定した設定パラメータを確認できます。

共通サーバー設定は、複数の製品に影響するパラメータです。たとえば、ほとんどの製品コンポーネントでは、管理 ID およびパスワードを指定する必要があります。これらの共通の値を設定することで、インストールする製品コンポーネントの管理 ID とパスワードのデフォルト値を設定します。

製品コンポーネント設定は、特定の製品コンポーネントに適用するパラメータを設定します。これらの設定は、インストール時に「今すぐ設定」タイプを選択した場合にのみ要求されます。これらの設定の一部は、共通サーバー設定から取り込まれます。

アップグレードのしくみ

Java ES インストーラは、選択した製品コンポーネントの共有コンポーネントを自動的にアップグレードして、Java ES のリリースに必要なレベルに一致させます。共有コンポーネントを手動でアップグレードする場合は、インストーラを終了し、共有コンポーネントをアップグレードしてから、インストーラを再度使用する必要があります。共有コンポーネントのインストールまたはアップグレードは、共有コンポーネントだけをインストールして現在のリリースと同期をとるだけの専用インストールセッションを使って行うこともできます。「共有コンポーネント」項目をインストールする場合は、Java ES リリースに必要なすべての共有コンポーネントがインストールまたはアップグレードされます。

注 - 疎ルートファイルシステムを使用して非大域 Solaris ゾーンでインストーラを実行する場合は、「共有コンポーネント」項目は選択できません。

Solaris OS では、一部の製品コンポーネントはすでにオペレーティングシステムにインストールされています。その場合は、Java ES インストーラを使用してこれらの製品コンポーネントをアップグレードできます。グラフィカルモードのインストールセッションでは、アップグレード可能な製品コンポーネントがホスト上で検出され

ると、「ソフトウェアコンポーネントの選択」ページの「状況」列に「アップグレード可」と表示されます。テキストベースのインストーラの場合は、アップグレード可能な製品コンポーネントの一覧が別のウィンドウに表示されます。次の表は、インストーラでアップグレードできるコンポーネントの一覧です。該当する場合は、Solaris ゾーンの問題も説明しています。

表 1-1 Java ES インストーラのアップグレードサポート

構成要素	Java ES インストーラでアップグレードできる状況	Solaris ゾーンの問題
Application Server	Application Server 7.0 が Solaris 9 にバンドルされている場合	Application Server を非大域疎ルートゾーンにインストールする前に、バンドルされた Application Server を大域ゾーンから削除する必要があります。 大域ゾーンの Application Server をアップグレードすると、大域ゾーンの既存のバージョンと、完全ルートまたは疎ルートゾーンのすべてのバージョンが置き換えられます。
	Application Server 8.0 が Solaris 10 にバンドルされている場合	
	Application Server 8.1.0 が Java ES 3 (2005Q1) と一緒にインストールされた場合	
	Application Server 8.1.2 が Java ES 4 (2005Q4) と一緒にインストールされた場合	
HADB	HADB が Java ES 2005Q1 (リリース 3) と一緒にインストールされた場合	
	HADB が Java ES 2005Q4 (リリース 4) と一緒にインストールされた場合	
Message Queue	Message Queue が Solaris 9 にバンドルされている場合	Message Queue は、大域ゾーンまたは完全ルート非大域ゾーンにのみインストールできます。 大域ゾーンの Message Queue は、常に非大域ゾーンに伝播されます。
	Message Queue が Solaris 10 にバンドルされている場合	
	Message Queue が Java ES 3 (2005Q1) と一緒にインストールされた場合	
	Message Queue が Java ES 4 (2005Q4) と一緒にインストールされた場合	

互換性のない製品コンポーネントバージョンのうち、アップグレードできないものがインストーラによって検出された場合は、それらの製品コンポーネントを削除するか手でアップグレードしないとインストールを続行できないというメッセージが表示されます。このようなアップグレードについては、『Sun Java Enterprise System 5 アップグレードガイド (UNIX 版)』に詳しく記載されています。

ログのしくみ

インストールまたはアンインストールの実行中に、実行される処理のログレコードが生成されます。これらのレコードは、1つのファイルに ULF (Unified Logging Format) 形式と呼ばれる形式で保存されます。Java ES インストーラのログビューアユーティリティ (`viewlog`) には、これらのログレコードを調べるための使いやすいインタフェースが用意されています。Java ES インストールの完了後、ログビューアは次の場所に格納されています。

- Solaris OS の場合: `/var/sadm/prod/SUNWentsys5i`
- Linux および HP-UX の場合: `/var/sadm/prod/sun-entsys5i`

アンインストール後に、`viewlog` ユーティリティは削除されます。ULF ログ自体は削除されず、次の場所に残ります。

- Solaris OS の場合: `/var/sadm/install/logs`
- Linux および HP-UX の場合: `/var/opt/sun/install/logs`

Java ES ログとログビューアの使用手順については、[200 ページ](#)の「インストールログファイルの検証」を参照してください。

Java ES レポータのしくみ

Java ES レポータは、対話式の Java ES インストールセッションが正常に完了後、匿名の製品登録を実行するコマンド行ユーティリティです。Java ES コンポーネントがインストールされるとすぐに、レポータのインストールが開始されます。コマンド行で、レポータがインターネット経由で Sun にアクセスするために使用するプロキシの URL または IP アドレスを入力することを求められます。インストールはメッセージを表示せずに続行され、それ以上の操作は必要ありません。

レポータをインストールしない場合は、Java ES インストールセッションの起動時に、`installer` コマンドに `-noreporter` オプションを指定できます。`-noreporter` オプションの使用後、または Java ES のサイレントインストール後にレポータのみをインストールするには、UNIX プラットフォームで別のオプションを使用できます (`-reporter`)。Java ES インストーラのレポータオプションについては、[233 ページ](#)の「`installer` または `install` コマンド」を参照してください。

レポータのインストール後、設定ファイルを編集してレポータを有効または無効にすることができます。これらの手順は、[139 ページ](#)の「Java ES レポータのインストール後の設定」に記載されています。

レポータはインストーラの Java ES コンポーネントではないため、Java ES アンインストールを使用してアンインストールできません。レポータをアンインストールする手順は、[193 ページ](#)の「Java ES レポータのアンインストール」に記載されています。

アンインストールのしくみ

Java ES には、Java ES インストーラを使用してローカルホストにインストールしたコンポーネント製品を消去するためのアンインストールユーティリティ (`uninstall`) が用意されています。Java ES アンインストールは、アンインストールが稼働しているホストで製品の依存関係をチェックし、他の製品への依存が検出された場合は警告メッセージを出力します。一部の製品コンポーネントについては、アンインストール後に特定のファイルが残り、手動での削除が必要となる場合があります。アンインストールに関する各製品コンポーネントに固有の事項については、[172 ページの「Java ES 製品コンポーネントのアンインストール動作の確認」](#)を参照してください。

アンインストールは、グラフィカル、テキストベース、またはサイレントの各モードで実行できます。Java ES インストールの完了後、アンインストールは次の場所に格納されています。

- Solaris OS の場合: `/var/sadm/prod/SUNWentsys5`
- Linux および HP-UX の場合: `/var/sadm/prod/sun-entsys5`

アンインストール後に、`uninstall` ユーティリティはホストから削除されます。アンインストールの使用手順については、[第 8 章](#)を参照してください。

共有コンポーネントは、Java ES アンインストールを使用して削除できません。共有コンポーネントは、新しいバージョンの Java ES をインストールするときに Java ES インストーラによってアップグレードされます。一部の共有コンポーネントは、『Sun Java Enterprise System 5 アップグレードガイド (UNIX 版)』に記載されている手順を使用して手動でアップグレードできます。Java ES レポータをアンインストールする手順は、[193 ページの「Java ES レポータのアンインストール」](#)に記載されています。

インストール済みの Sun Cluster ソフトウェアのバージョンを Java ES アンインストールを使用して削除することはできません。Sun Cluster ソフトウェアのアンインストールについては、[194 ページの「Sun Cluster ソフトウェアのアンインストール」](#) および [182 ページの「Sun Cluster ソフトウェアと Sun Cluster Geographic Edition のアンインストール動作」](#)を参照してください。

既存ホストの調査

インストールの前に、Java ES ソフトウェアをインストールしようとするホストにどのようなコンポーネントが存在するかを把握することが重要です。Java ES ソフトウェアがあらかじめ組み込まれている新しい Solaris システムを使用する場合、ホストの調査は不要です。ただし、既存のホストに Java ES コンポーネントがすでにインストールされている場合、新しい Java ES リリースの Java ES インストーラを実行する前に、ソフトウェアの一部をアップグレードするか、または削除する必要があるかもしれません。

ここで説明する内容は、次のとおりです。

- 32 ページの「Solaris OS に Java ES ソフトウェアが事前にロードされている場合」
- 32 ページの「互換性のないコンポーネントがインストールされている場合」
- 35 ページの「ホストの準備が整ったかどうかの確認」

Solaris OS に Java ES ソフトウェアが事前にロードされている場合

事前にソフトウェアがロードされた Sun Solaris ハードウェアシステムを使用する場合、Java ES ソフトウェアのインストールイメージは、すでにシステムにコピーされています。Java ES ソフトウェアがホストに事前にロードされている場合は、次のディレクトリが存在します。

```
/var/spool/stage/JES_06Q4_architecture /
```

architecture 変数は、SPARC または x86 など、システムのハードウェアのアーキテクチャーを示します。

このマニュアルで説明されているとおり、インストールイメージを展開し、Java ES インストーラを使用して、事前にロードされた Java ES ソフトウェアをインストールし、設定する必要があります。Java ES コンポーネントの中には、Solaris OS にバンドルされ、ホストに存在しているものもあります。この場合は、インストーラによってこれらのコンポーネントをアップグレードするオプションが表示されます。詳細は、28 ページの「アップグレードのしくみ」を参照してください。

注 - ロード済みの Java ES ソフトウェアが Solaris 10 システム上に存在している場合、インストールイメージを展開する前に 66 ページの「Solaris 10 ゾーンの例」を参照してください。

互換性のないコンポーネントがインストールされている場合

インストーラはインストール時に、ホストにすでにインストールされている Java ES コンポーネントがインストールする Java ES のリリースと互換性があるかどうかをチェックします。コンポーネントの一部に互換性がない場合、互換性がないことを示すエラーメッセージが表示され、インストールが中断する場合があります。したがって、インストール済みのソフトウェアを調べ、必要なアップグレードを行ったあとで、Java ES ソフトウェアをインストールすることをお勧めします。

インストールを実行するときに、ホストにある互換性のないコンポーネントを確認できます。Application Server、Message Queue、または HADB をインストールする場合は、インストーラを使ってこれらのコンポーネントをアップグレードできます。そ

他の製品コンポーネントについては、インストーラを使用してアップグレードすることはできません。代わりに、『Sun Java Enterprise System 5 アップグレードガイド (UNIX 版)』の手順に従って、それらの互換性のないコンポーネントを削除またはアップグレードする必要があります。

Java ES インストーラは、インストールする製品コンポーネントで必要となるすべての共有コンポーネントを、アップグレードまたはインストールします。

prodreg や pkginfo などの Solaris コマンド、Linux の rpm コマンド、または HP-UX の swlist コマンドを使用して、インストール済みのソフトウェアを調べることができます。次の表に、各 UNIX プラットフォームの基本的なパッケージコマンドの対応関係を示します。

表 1-2 UNIX のパッケージコマンドの対応関係

作業	Solaris	Linux	HP-UX
インストール済みパッケージの表示	pkginfo	rpm -qa	swlist
パッケージのインストール	pkgadd	rpm -i	swinstall
パッケージの削除	pkgrm	rpm -e	swremove

また、インストーラそのものを使用して、この項で説明する手順に従って、パッケージベースのソフトウェアインストールを調べることができます。

注-インストールされているソフトウェアに関する情報を得るために、Java ES インストーラだけを頼りにすることは、避けるべきです。インストール済みのソフトウェアについて、ホストを独自に調査して確認することも必要です。

▼ グラフィカルインストーラをローカルディスプレイにアクセスさせるには

1 DISPLAY 環境変数を設定します。

リモートホストにログインしているときには、DISPLAY 環境変数がローカルディスプレイに適切に設定されていることを確認します。DISPLAY 変数が正しく設定されていないと、インストーラはテキストベースモードで実行されます。

- C Shell での例 (ホスト名は myhost):

```
setenv DISPLAY myhost:0.0
```

- Korn Shell での例 (ホスト名は myhost):

```
DISPLAY=myhost:0.0
```

2 表示権限を付与します。

ローカルディスプレイでインストーラを実行するには、表示権限の付与が必要になる場合があります。たとえば、次のコマンドを使用して、myhost から serverhost のルートユーザーに表示権限を付与することができます。

```
myhost\> xauth extract - myhost:0.0|rsh -l root serverhost xauth merge -
```

このような権限を安全に付与する手順については、『Solaris X Window System Developer's Guide』の「Manipulating Access to the Server」の章を参照してください。

▼ アップグレードに関する問題の確認のためにインストーラを使用するには

1 ソフトウェアをインストールしないことを示す -no オプションを指定してインストーラを起動します。

グラフィカルインストーラの場合、次のとおり入力します。

```
./installer -no
```

テキストベースのインストーラの場合、次のとおり入力します。

```
./installer -nodisplay -no
```

2 コンポーネントの選択に進みます。

3 このホストにインストールする製品コンポーネントを選択します。

状態列は、選択した製品コンポーネントに必要な製品と、アップグレード可能なコンポーネントを示します。

4 インストーラが選択可能な製品コンポーネントのバージョンに互換性がないことを検出した場合、互換性のないバージョンのアップグレードまたは削除が求められます。

Solaris にバンドルされている Application Server、Message Queue、および HADB の場合は、インストーラを使ってアップグレードすることができます。詳細は、28 ページの「アップグレードのしくみ」を参照してください。

この問題を解決したら、選択リストを更新し、選択し、インストーラを先に進めます。

5 インストーラが共有コンポーネントのバージョンに互換性がないことを検出した場合、アップグレードの必要がある共有コンポーネントのリストが表示されます。

表示された各共有コンポーネントについて、「インストール済みのバージョン」と「必要なバージョン」を比較し、アップグレードする必要があるかどうかを確認

します。新しい Java ES バージョンの共有コンポーネントと、ホスト上でその共有コンポーネントを使用するほかのアプリケーションとの間に互換性があるかどうかを確認する必要があります。

- 6 必要に応じてインストーラを終了し、必要なアップグレードを実行します。
 - インストーラがアップグレードできない製品コンポーネントについては、『Sun Java Enterprise System 5 アップグレードガイド (UNIX 版)』を参照してください。
 - 共有コンポーネントの場合は、インストール時に大部分のアップグレードを実行できます。
- 7 各ホストに対して手順を繰り返します。

注-インストーラは Solaris OS によって配布される Directory Server のバージョンを調べ、この Solaris の配布の中に含まれている Directory Server のスクリプトの名前がインストーラによって変更されることを警告します。何の操作も必要ありません。

ホストの準備が整ったかどうかの確認

インストーラを起動する前に、以下の事項を調べて、システムの準備が整っているかどうかを確認します。

- 35 ページの「アクセス権」
- 35 ページの「メモリー、ディスク容量、およびスワップ空間の要件」
- 36 ページの「システム要件」
- 36 ページの「パッチの要件」

アクセス権

Java ES ソフトウェアをインストールするには、root としてログインするか、スーパーユーザーになる必要があります。

メモリー、ディスク容量、およびスワップ空間の要件

選択したコンポーネントが必要とするメモリー、ディスク容量、およびスワップ空間が十分であるかどうかについて、インストーラはホストを検証します。

- ホストのディスク容量が不足している場合は、インストーラは処理を中断します。この問題を解決してからインストールを再開する必要があります。

- ホストのメモリーまたはスワップ空間が Java ES の要件を満たしていないことが判明した場合、インストーラは警告メッセージを表示します。インストールは続行可能ですが、あとで問題を解決してください。

注 - Solaris 10 の非大域ゾーンにインストールする場合には、メモリーチェックは実行されません。

システム要件

Java ES をインストールする前に、配備内のホストがハードウェアとオペレーティングシステムの最小要件を満たしていることを確認します。サポートされているプラットフォーム、ソフトウェア要件、およびハードウェア要件に関する最新情報については、『Sun Java Enterprise System 5 リリースノート (UNIX 版)』の「ハードウェアおよびソフトウェアの要件」を参照してください。ホストに実装されているオペレーティングシステムが Java ES の要件を満たしていないことが判明した場合、インストーラは処理を中断します。インストール前に、この問題を解決する必要があります。

便宜上、Solaris OS 用に推奨される Java ES パッチクラスタが次の SunSolve サイトに用意されています。<http://sunsolve.sun.com>。Java ES パッチクラスタには、Java ES の特定のリリースに必要なすべての Solaris パッチが含まれています。これらのパッチクラスタには、Solaris カーネルパッチが含まれている場合があるため、パッチクラスタ Readme ファイル、特にカーネルパッチ用の Readme ファイルに十分に目を通す必要があります。パッチクラスタはシングルユーザーモードでインストールし、インストール後にホストを再起動する必要があります。

ヒント - Java ES インストーラを実行する前にプラットフォームにパッチクラスタを適用することで、インストーラがホストでシステムチェックを実行する際に、適用されていないパッチを見つけるのに要する時間を短縮させることができます。ただし、最新バージョンの Solaris OS を実行している場合は、Java ES インストーラを最初に行い、インストーラが適用されていないと識別したパッチのみを更新することをお勧めします。

パッチの要件

Java ES インストーラはインストール中に、適用されていないソフトウェアパッチがあるかどうかを検査し、そのようなパッチがある場合にはホストにインストールすることを求めるメッセージを表示します。インストールを続行する前に、適用されていないパッチの大半をインストールする必要があります。ただし、場合によっては、適用されていないパッチをインストールせずに続行できます。この場合、処理を続けようとする、インストールが失敗するか、またはソフトウェアが正しく機

能しない可能性があることを示す警告が表示されます。インストールを続行するときは、適用していないパッチをインストールしないでインストールすることを明示的に承認する必要があります。

Java ES のこのリリースに必要なパッチについては、『Sun Java Enterprise System 5 リリースノート (UNIX 版)』を参照してください。

▼ パッチをインストールするには

次の手順例は、Solaris OS パッチをインストールする手順を示しています。

- 1 **Sunsolve** サイトに移動します:<http://sunsolve.sun.com>
(HP-UX パッチの場所:<http://www.itrc.hp.com>、Linux パッチの場所:<http://www.redhat.com>)
- 2 「パッチやアップデート」をクリックします。
- 3 「パッチ検索」テキストボックスにパッチ番号を入力し、「**Find Patch**」をクリックします。
- 4 パッチの **zip** ファイルをダウンロードします。
- 5 **zip** ファイルを展開します。例: `unzip 112785-44.zip`
パッチファイルのディレクトリが作成されます。
- 6 パッチを適用します。例: `patchadd 117885-44`
- 7 **Java ES** インストーラに戻り、「再チェック」をクリックします。すべてのシステム要件が再びチェックされます。

インストールシーケンス例を使用できるかどうかの確認

システムのホストに Java ES 製品コンポーネントをインストールする順番は、インストールを成功させるためにきわめて重要です。第 2 章に含まれる 1 つ以上のシーケンス例を参考にできる可能性があります。これらのシーケンスには、いくつかの典型的な Java ES インストールで必要となる高レベルの作業が含まれています。

インストール計画の完全な手順については、『Sun Java Enterprise System 5 インストール計画ガイド』を参照してください。

インストール前提条件の確認

次の表は、すべての種類のインストールを開始する前に必要なタスクを示しています。左の列は、タスクの一般的な実行順序を示し、右の列は、手順の参照先と便利なその他の情報を示しています。すべてのインストールですべてのタスクが必要なわけではありません。

注-HP-UX では、Sun Cluster コンポーネント、Directory Preparation Tool、HADB、またはサードパーティーの Web コンテナはサポートされません。Linux で「今すぐ設定」設定オプションを使用する場合、Sun Cluster コンポーネントはサポートされず、サードパーティーコンテナは BEA WebLogic のみがサポートされます。

表 1-3 インストール前のチェックリスト

作業	便利な情報と参照先
1. Java ES インストールを計画します。	『Sun Java Enterprise System 5 インストール計画ガイド』を参照してください。 Sun Cluster ソフトウェアをインストールする場合は、72 ページの「Sun Cluster ソフトウェアの例」を参照してください。 Monitoring Console をインストールする場合は、『Sun Java Enterprise System 5 監視ガイド (UNIX 版)』を参照してください。
2. インストールに影響する問題がリリースノートに記載されていないか確認します。	インストールガイドの手順を実行する前に、『Sun Java Enterprise System 5 リリースノート (UNIX 版)』をお読みください。このリリースノートには、個別の配備に影響するインストール時の問題についての情報が記載されています。
3. ホスト上の既存ソフトウェアを調査します。	31 ページの「既存ホストの調査」を参照してください。 アップグレードする必要がある場合は、『Sun Java Enterprise System 5 アップグレードガイド (UNIX 版)』を参照してください。
4. Java ES 5 リリースとの互換性を持たない既存のコンポーネントをアップグレードします。 注意: Solaris OS では、既存のバージョンの Application Server と Message Queue は通常、Java ES インストーラでアップグレードできます。	32 ページの「互換性のないコンポーネントがインストールされている場合」を参照してください。 『Sun Java Enterprise System 5 アップグレードガイド (UNIX 版)』を参照してください。 プラットフォームパッケージコマンドの使用方法については、それぞれのマニュアルページを参照してください。

表 1-3 インストール前のチェックリスト	(続き)
作業	便利な情報と参照先
5. システム要件が満たされていることを確認します。	<p>35 ページの「ホストの準備が整ったかどうかの確認」を参照してください。</p> <p>『Sun Java Enterprise System 5 リリースノート (UNIX 版)』の「プラットフォームの要件と問題点」を参照してください。</p>
6. 使用可能なインストールシーケンス例が存在するか確認します。	第 2 章を参照してください。
7. 「今すぐ設定」設定オプションでのインストールの場合、製品コンポーネントの設定情報を収集します。	<p>製品コンポーネントの設定情報については、『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の第 3 章「設定情報」を参照してください。</p> <p>データ収集用ワークシートについては、『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の第 4 章「設定ワークシート」を参照してください。</p>
8. 製品レジストリファイルのコピーを作成します。バックアップコピーは、インストール失敗時の復旧に役立ちます。	<p>Solaris OS の場合: /var/sadm/install/productregistry</p> <p>Linux の場合: /var/opt/sun/install/productregistry</p> <p>HP-UX の場合: /var/adm/sw/productregistry</p>
9. Directory Server のルート以外のユーザーとして実行する場合は、設定の前にシステムアカウントを作成します。	ルート以外のユーザーに必要なシステムアカウントを作成します。
10. すでにインストールされているサーバーまたはサービスに依存する製品コンポーネントをインストールする場合は、既存のサーバーおよびサービスがアクセス可能であることを確認します。	たとえば、Portal Server Secure Remote Access サブコンポーネントをインストールする場合は、Secure Remote Access コアが稼働し、アクセス可能である必要があります。
11. Directory Server をインストールする場合、Perl がインストールされていることを確認します。	<p>Solaris OS の場合: Perl パッケージ (SUNWperl5*) は Solaris メディアに入っています。</p> <p>Linux の場合: /usr/bin/perl</p> <p>HP-UX の場合: /opt/perl/bin/perl</p> <p>インストールの前に Perl が存在していなければなりません。Perl が存在しない場合、pkgadd、rpm -i、または swinstall を使用してパッケージを追加します。</p>

表 1-3 インストール前のチェックリスト	(続き)
作業	便利な情報と参照先
<p>12. インストール先システムに <code>getent hosts</code> を実行して、2 番目の列に単純なホスト名ではなく FQDN が返されることを確認します。</p>	<p>次のコマンドを実行します。</p> <pre>getent hosts ip-address</pre>
<p>13. ロードバラン্সプラグインと Apache Web Server をインストールする場合は、Java ES のインストールを開始する前に Apache Web Server をインストールして設定する必要があります。</p> <p>Linux の場合は、まず Application Server をインストールし、次に Apache Web Server をインストールし、最後にロードバラン্সプラグインをインストールする必要があります。</p> <p>HP-UX は Apache Web Server をサポートしていません。</p>	<p>Apache Web Server をまだインストールしていない場合は、インストールして設定します。詳細については、『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.2 高可用性 (HA) 管理ガイド』の「HTTP 負荷分散の設定」を参照してください。</p>
<p>14. サードパーティー製の Web コンテナに配備する目的で Access Manager をインストールする場合、「あとで設定」タイプを選択し、インストール後設定スクリプトを実行する必要があります。</p> <p>注意: HP-UX では、サードパーティーの Web コンテナはサポートされません。Linux で「今すぐ設定」設定オプションを使用する場合、サードパーティー Web コンテナは BEA WebLogic のみがサポートされます。</p>	<p>詳細については、『Sun Java System Access Manager 7.1 Postinstallation Guide』を参照してください。</p>
<p>15. 再インストールを行う場合、Web Server のインストールディレクトリが存在「しない」ことを確認します。存在する場合、そのディレクトリを削除するか、名前を変更します。</p>	<p>Web Server のデフォルトインストールディレクトリ:</p> <p>Solaris OS の場合: <code>/opt/SUNWwbsvr7</code></p> <p>Linux および HP-UX の場合: <code>/opt/sun/webserver7</code></p>
<p>16. J2SE ソフトウェアをアップグレードする場合は、インストール中に J2SE コンポーネントに依存するその他の製品が停止されていることを確認します。</p>	<p>詳細は、『Sun Java Enterprise System 5 アップグレードガイド (UNIX 版)』を参照してください。</p>
<p>17. ホストからインターネットに直接接続しない場合は、HTTP プロキシを指定する必要があります。</p>	<p>Application Server の例は、『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.2 管理ガイド』にあります。</p>
<p>18. Linux 上に <code>/usr/share/db/db.jar</code> リンクが存在する場合は、リンクを削除します。</p>	

表 1-3 インストール前のチェックリスト	(続き)
作業	便利な情報と参照先
19. Linux 上のホストに Ant 1.5.2 がいないことを確認します: <code>rpm -qa grep ant</code>	削除するには: <code>rpm -e ant-1.5.2-23 ant-libs-1.5.2-23</code>
20. Linux 上で、Korn シェルがインストールされていることを確認します。	Korn シェルがインストールされていない場合は、RPM ディレクトリに移動し、 <code>rpm -i pdksh</code> コマンドを実行します。
21. HP-UX 上でインストーラを起動する前に、バージョン 5.0 Update 3 の Java がインストールされていることを確認します。	ホストにインストールされている JDK のバージョンを確認するには、次のコマンドを実行します。 “swlist Jdk15” 必要に応じて、正しいバージョンの Java を次の場所からダウンロードしてインストールします: http://www.hp.com/products1/unix/java/
22. HP-UX 上に Web Proxy Server がデフォルト設定でインストールされている場合、ユーザー nobody が有効なユーザーであることを確認します。	<code>/etc/passwd</code> および <code>/etc/group</code> ファイルでは、nobody のユーザー ID とグループ ID は正の値にしてください。
23. インストールに当てはまるインストールシーケンスのガイドラインに従います。	表 2-1 を参照してください。

これらの前提条件に加えて、表 2-1 を参照して、Java ES をインストールする前に役立つ可能性のある情報を探してください。

Java ES ソフトウェアの入手

Java ES ソフトウェアは、次のいずれかの方法で入手できます。

- **Web** ダウンロード
 - Sun Download Center (<http://www.sun.com/download>) から、Java ES ソフトウェアをいくつかの形式でダウンロードできます。次の形式が用意されています。
 - 単一オペレーティングシステム用のすべてのインストールファイルを含む圧縮アーカイブ
 - スイート用のすべてのインストールファイルを含む圧縮アーカイブ
- **DVD**

<http://www.sun.com/software/javaenterprisesystem/index.html> またはご購入先から、サポートされているすべてのアーキテクチャーを含む DVD メディアキットを入手できます。DVD には、オペレーティングシステム用のインストールファイル、Java ES インストーラプログラム、およびすべてのコンポーネントパッケージが収録されています。

- システムに事前にロードまたはインストールされているソフトウェア
ソフトウェアが事前にロードまたはインストールされている Sun のハードウェアシステムを注文した場合は、Java ES ソフトウェアがシステムにすでにロードされている可能性があります。システムに次のディレクトリが存在すれば、Java ES ソフトウェアは事前にロードされています。

```
/var/spool/stage/java_es-5-ga-architecture/
```

この *architecture* は、たとえば *solaris-sparc* など、システムのハードウェアアーキテクチャーを示します。

注 - Sun Cluster ソフトウェアをあらかじめ組み込ませることはできますが、あらかじめインストールしておくことはできません。

- ネットワーク上のファイルサーバー
各企業の操作手順によっては、社内ネットワークに Java ES のインストールファイルが用意されている場合があります。このような環境に該当するかどうかについて、システムを操作または管理する担当者に確認してください。
Java ES のインストールファイルを利用可能にする責任がある場合には、42 ページの「ネットワーク上のインストールイメージの作成」を参照してください。

このリリースの配布バンドルの一覧については、『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の第 1 章「Java ES の配布内容」を参照してください。

ネットワーク上のインストールイメージの作成

Java ES の配布は、共有される場所にインストールファイルを格納できるように設計されています。この設計の利点は、インストールファイルをこの共有の場所から何度でも実行できることです。

▼ DVD からイメージを作成するには

Java ES では複数のアーキテクチャーがサポートされます。この手順例では、Solaris SPARC インストールイメージを作成してサイトのネットワークで公開するための手順を示します。

- 1 rootとしてログインするか、スーパーユーザーになります。
- 2 ネットワーク上に共有ディレクトリを作成します。例:

```
mkdir shared-location/java_es-5
```
- 3 **DVD**のインストールファイルにアクセスします。
DVDにはJava ESバージョンの複数のアーキテクチャーが収録されています。必要なものだけをコピーします。
- 4 ファイルとメディア構造をメディアルートディレクトリにコピーします。

```
find . -print -maxdepth 1 | cpio -pdum shared-location/java_es-5
```
- 5 ライセンスフォルダをコピーします。

```
find ./License -print | cpio -pdum shared-location/java_es-5
```
- 6 **README**フォルダをコピーします。

```
find ./README -print | cpio -pdum shared-location/java_es-5
```
- 7 必要なアーキテクチャーをコピーします。

```
find ./Solaris_sparc -print | cpio -pdum shared-location/java_es-5
```

注-すべてのアーキテクチャーをコピーするときは、次のコマンドを実行します。

```
cd /cdrom/cdrom0  
find . -print | cpio -pdum shared-location/java_es-5
```

▼ 圧縮アーカイブからイメージを作成するには

- 1 rootとしてログインするか、スーパーユーザーになります。
- 2 ネットワーク上に共有ディレクトリを作成します。例:

```
mkdir shared-location/java_es-5
```
- 3 **Web**サイトに含まれるインストールファイルにアクセスします。
- 4 圧縮されたアーカイブからインストールイメージを作成します。例:

```
cd shared-location/java_ent_sys_5  
unzip pathname/java_es-5-ga-solaris-sparc.zip
```
- 5 その他の圧縮アーカイブファイルについても、この手順を繰り返します。

注- 複数プラットフォームのファイルを共有の場所にコピーした場合、README ファイルと COPYRIGHT ファイルに関する次のようなプロンプトが表示されます。

File already exists. OK to overwrite?

Yes と入力します。これらのファイルはすべてのプラットフォームで共通です。

インストールシーケンスの例

この章では、一般的な Sun Java™ Enterprise System (Java ES) インストールシーケンスの大まかなガイドラインについて説明します。これらは文字どおりの手順を示すものではありませんが、特定の配備シナリオの実装に必要な手順を順を追って説明します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 45 ページの「この章の利用方法」
- 47 ページの「単一セッションインストールの例」
- 66 ページの「Solaris 10 ゾーンの例」
- 72 ページの「Sun Cluster ソフトウェアの例」
- 76 ページの「コンテナの設定を使用する Access Manager SDK の例」
- 79 ページの「アイデンティティ管理の例」
- 81 ページの「リモートの Access Manager を使用する Portal Server の例」
- 84 ページの「Web とアプリケーションサービスの例」
- 86 ページの「root 以外のユーザーでのインストール例」

この章の利用方法

単一セッションの例では、単一ホストに、単一インストールセッションで1つまたは複数の Java ES 製品コンポーネントをインストールする代表的な手順について説明します。この章のその他のすべての例では、さまざまなソリューションのために、複数ホストで、複数インストールセッションを実行する状況について説明します。ほとんどの場合、この章のシーケンスは、『Sun Java Enterprise System 5 インストール計画ガイド』に示す製品コンポーネント間の依存関係に基づきます。

コンポーネントの選択では、Java ES インストーラは、コンポーネントの互換性のないバージョンと要件に適合しないバージョンを識別します。問題が識別されると警告メッセージが出力され、対処する必要のある内容が示されます。これらのメッセージの多くは、適合しない要件に関する指示を出力します。その他のメッセージは、インストールしようとするコンポーネントの一部または全部が、す

でローカルホスト上に存在するコンポーネントのバージョンと互換性がないことを示します。Java ES インストーラを使用して、ローカルホストにすでに存在しているコンポーネントを識別することができます。詳細については、[32 ページの「互換性のないコンポーネントがインストールされている場合」](#)を参照してください。

ヒント - Java ES コンポーネントの互換性のないバージョンを識別し、インストーラを起動する前に削除またはアップグレードすると、インストールをほぼ円滑に行うことができます。

次の表では、コンポーネントをインストールするシーケンス、または複数のホストまたは複数のインストールセッションでタスクを実行するときの順序に影響を与える可能性のある状況のうち、一般的な状況について説明します。左の列は状況、右の列はその状況の対処方法になっています。

表 2-1 インストールシーケンスのガイドライン

状況	説明
Monitoring が含まれている。	Monitoring Console は、監視する Java ES 製品コンポーネントと同じホスト上では実行できません。そのため、Monitoring Console は別のホストにインストールしてください。
一部のコンポーネントをインストール時に設定できない。	次のコンポーネントは、「今すぐ設定」インストールでインストールできますが、インストール中に設定することはできません。Sun Cluster コンポーネント、Monitoring Console、および Service Registry。インストール中に、インストール後に設定するよう指示するメッセージが表示されます。
コンポーネントのアップグレードが要求される。	製品コンポーネントがすでにホスト上に存在する場合には、それらの削除またはアップグレードを求めるメッセージが表示されることがあります。Solaris OS では、一部のバンドル版のコンポーネント (Application Server、Message Queue、および HADB) は、インストール中にアップグレードできます。その他のすべてのコンポーネントについては、『Sun Java Enterprise System 5 アップグレードガイド (UNIX 版)』のアップグレード手順を参照してください。
Solaris 10 ゾーンが使用される。	Solaris 10 ゾーン環境では、共有コンポーネントをローカルゾーンにインストールする前に、それらを大域ゾーンにもインストールする必要があります。Message Queue は大域ゾーンにのみインストールできます。インストールすると、すべての非大域ゾーンに伝播されます。詳細なガイドラインについては、 66 ページの「Solaris 10 ゾーンの例」 を参照してください。

表 2-1 インストールシーケンスのガイドライン (続き)

状況	説明
Sun Cluster ソフトウェアが含まれている。(Solaris OS のみ)	配備に Sun Cluster ソフトウェアが含まれる場合は、Java ES 製品コンポーネントをインストールする前に一連のタスクを正確に実行する必要があります。Sun Cluster に設定できる Java ES コンポーネントは、Application Server、Directory Server、HADB、Message Queue、および Web Server です。Sun Cluster のガイドラインについては、72 ページの「Sun Cluster ソフトウェアの例」を参照してください。
リモートコンポーネントが使用される。	リモート製品コンポーネントを使用して、依存性の要件を満たす場合は、依存する Java ES 製品コンポーネントをインストールする前に、リモート製品コンポーネントをインストールし、稼働しておく必要があります。
サードパーティーコンポーネントが使用される。	サードパーティー製品を Web コンテナとして使用する場合は、それに依存する Java ES 製品コンポーネントをインストールする前に、サードパーティー製品をインストールして稼働しておく必要があります。 注意: HP-UX では、サードパーティーの Web コンテナはサポートされません。Linux で「今すぐ設定」設定オプションを使用する場合、サードパーティーコンテナは BEA WebLogic のみがサポートされます。
Access Manager のモード	Access Manager を Portal Server と一緒にインストールする場合は、レルム (7.x) モードまたは旧バージョン (6.x) モードを選択できます (Portal Server には旧バージョンモードが必要であることを知らせるインストーラメッセージは無視する)。ただし、Access Manager が Directory Server と一緒に設定され、データストアとして AM SDK が設定されている場合にのみ、Portal Server はレルムモードをサポートします。

単一セッションインストールの例

次の例は、単一セッションで、単一ホストにインストールする場合に適用されます。

- 48 ページの「評価の例」
- 49 ページの「Access Manager と Portal Server の例」
- 51 ページの「Application Server のみをインストールする例」
- 53 ページの「Directory Proxy Server のみをインストールする例」
- 55 ページの「Directory Server のみをインストールする例」
- 57 ページの「Message Queue のみをインストールする例」
- 58 ページの「Monitoring Console のみをインストールする例」
- 60 ページの「Portal Server Secure Remote Access の例」
- 62 ページの「Service Registry のみをインストールする例」
- 64 ページの「Web Server のみをインストールする例」

評価の例

評価インストールでは、通常、インストールがどのように行われるかを確認するために、トライアル配備、つまりクイックインストールが検討されます。この例は、グラフィカルインタフェースと「今すぐ設定」タイプを使用します。設定ページが表示されたら、可能な限りデフォルト設定を受け入れます。

この例では、単一インストールセッションで、Sun Cluster ソフトウェアおよび Monitoring Console を除くすべての Java ES 製品コンポーネントを単一ホストにインストールします。Web Server を Web コンテナとして使用するため、Application Server をインストールしません。

▼ Java ES 評価のシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいって次のタスクが必要です。

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
どのシーケンスガイドラインを適用するのかをチェックします。表 2-1 を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。
どのインストール前提条件を適用するのかをチェックします。表 1-3 を参照してください。
- 3 Java ES グラフィカルインストーラを起動します。
グラフィカルインストーラまたはテキストベースのインストーラを使用します。
- 4 コンポーネントの選択で「すべて選択」を選択してから、Application Server、Sun Cluster ソフトウェア、および Monitoring Console 製品コンポーネントを選択解除します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 5 インストールディレクトリを確認します
- 6 「今すぐ設定」タイプを選択します。
インストール時に設定できない製品コンポーネントを示すメッセージが表示されません。

- 7 デフォルト設定がある場合は、それを受け入れます。
非デフォルトの設定情報を使用する場合は、『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の第3章「設定情報」の該当する設定の表を確認します。
- 8 インストールサマリーとログを表示します
- 9 インストール後の設定を完了します。
インストール後の設定の手順については、[第6章](#)を参照してください。
- 10 製品コンポーネントを起動します。
[153 ページ](#)の「インストール後設定のあとの確認」には、推奨 Java ES 起動シーケンスが記載されています。この表の起動手順に従います。

Access Manager と Portal Server の例

この例では、単一ホストの Access Manager で、Web コンテナとして Web Server を使用して、Portal Server をインストールします。Portal Server と Access Manager で同じ種類の Web コンテナを使用してください。

Access Manager コアサービス、Access Manager 管理コンソール、および連携の共有ドメインサービスを異なるホスト上で使用する場合は、これらの Access Manager サブコンポーネントの選択を解除します。

Access Manager を Portal Server と一緒にインストールする場合は、レルム (7.x) モードまたは旧バージョン (6.x) モードを選択できます (Portal Server には旧バージョンモードが必要であることを知らせるインストーラメッセージは無視する)。ただし、Access Manager が Directory Server と一緒に設定され、データストアとして AM SDK が設定されている場合のみ、Portal Server はレルムモードをサポートします。

▼ Access Manager と Portal Server のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいって次のタスクが必要です。

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
どのシーケンスガイドラインを適用するのかわかるようにチェックします。[表 2-1](#)を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。
どのインストール前提条件を適用するのかわかるようにチェックします。[表 1-3](#)を参照してください。

3 Java ES インストーラを実行します。

4 コンポーネントの選択で、**Portal Server** と **Web Server** を選択します。

Access Manager、Directory Server、Directory Preparation Tool、Java DB、および Service Registry は自動的に選択されます。

- Directory Server のリモートコピーを使用する場合は、Directory Server の選択を解除し、プロンプト表示でリモートコピーを指定します。

注-その他任意の製品コンポーネントをインストールする前に、リモートの Directory Server を実行する必要があります。Directory Server のインストール手順については、55 ページの「[Directory Server のみをインストールする例](#)」を参照してください。

- Access Manager のリモートコピーを使用する場合は、Access Manager の選択を解除し、インストール後の設定時にリモートコピーを指定します。

5 非互換性の問題を解決します。

インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。

6 「今すぐ設定」または「あとで設定」タイプを選択します。

- 「今すぐ設定」タイプでは、インストール時の設定が可能な製品コンポーネントを示す設定ページが表示されます。リモートに配置する製品コンポーネントでは、デフォルトを受け入れずに、リモートの情報を使用してください。
- 「あとで設定」タイプでは、設定ページは表示されません。

7 インストールを実行します。

8 インストールサマリーとログを表示します

9 インストール後の設定を完了します。

- 142 ページの「[Web Server のインストール後の設定](#)」
- 134 ページの「[Access Manager のインストール後の設定](#)」
- 140 ページの「[Portal Server および Portal Server Secure Remote Access のインストール後の設定](#)」

10 製品コンポーネントを起動します。

- 160 ページの「[Directory Server の起動と停止](#)」
- 165 ページの「[Web Server の起動と停止](#)」 (Access Manager と Portal Server が Web Server とともに自動的に起動する)。

- 11 デフォルトの **Access Manager** ログインページにアクセスします。
 旧バージョンモードの場合: `http://webserver-host:port/amconsole`
 レルムモードの場合: `http://webserver-host:port /amserver`
 次の表には、Access Manager の追加情報が含まれています。

作業	関連情報
インストーラの設定情報	『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の「Access Manager 設定情報」
インストール後の設定	134 ページの「Access Manager のインストール後の設定」
起動と停止	157 ページの「Access Manager の起動と停止」
アンインストール	173 ページの「Access Manager のアンインストール動作」
トラブルシューティング	219 ページの「Access Manager のトラブルシューティングのヒント」
アップグレード	『Sun Java Enterprise System 5 アップグレードガイド (UNIX 版)』

次の表には、Portal Server の追加情報が含まれています。

作業	関連情報
インストーラの設定情報	『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の「Portal Server の設定情報」
インストール後の設定	140 ページの「Portal Server および Portal Server Secure Remote Access のインストール後の設定」
起動と停止	155 ページの「Web コンテナを起動した状態での Portal Server デスクトップへのアクセス」
アンインストール	179 ページの「Portal Server のアンインストール動作」
トラブルシューティング	222 ページの「Portal Server のトラブルシューティングのヒント」
アップグレード	『Sun Java Enterprise System 5 アップグレードガイド (UNIX 版)』

Application Server のみをインストールする例

この例では、Application Server を単一ホストにインストールするためのガイドラインについて説明します。

要件

Application Server は、HADB、Java DB、および Message Queue のローカルコピーが必要です。負荷分散を使用する場合は、Web Server のローカルコピーが必要です。

▼ **Application Server** のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
どのシーケンスガイドラインを適用するのかわかるようにチェックします。表 2-1 を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。
どのインストール前提条件を適用するのかわかるようにチェックします。表 1-3 を参照してください。
- 3 **Java ES** インストーラを実行します。
- 4 コンポーネントの選択で、**Application Server** を選択します。
Message Queue、HADB、および Java DB は自動的に選択されます。ロードバランスポラグインおよび Application Server ノードエージェントは選択されません。
(オプション) 負荷分散を実装する場合は、Application Server を展開し、ロードバランスポラグインのサブコンポーネントを選択します。Web Server をインストールする場合は、同じセッションで Web Server を選択します。Web Server 6.0 または Apache Web Server を使用する場合は、すでに Web Server 6.0 または Apache Web Server がインストールされている必要があります。
- 5 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 6 インストールディレクトリを確認します
- 7 「今すぐ設定」または「あとで設定」タイプを選択します。
 - a. 「今すぐ設定」タイプでは、インストール時の設定が可能なローカル製品コンポーネントを示す設定ページが表示されます。
『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の「Application Server の設定情報」に示す表から、Application Server の設定情報を収集します。

- b. 「あとで設定」タイプでは、設定ページは表示されません。
- 8 インストールを実行します。
 - 9 インストールサマリーとログを表示します
 - 10 インストール後の設定を完了します。
 - 135 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Application Server を設定するには」
 - (オプション) 142 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Web Server を設定するには」
 - (オプション) 140 ページの「Message Queue のインストール後の設定」
 - 139 ページの「HADB のインストール後の設定」
 - 11 Application Server を起動します (Message Queue が自動的に起動する)。
 - 158 ページの「Application Server の起動と停止」
 - (オプション) 165 ページの「Web Server の起動と停止」

次の表には、Application Server の追加情報が含まれています。

作業	関連情報
インストーラの設定情報	『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の「Application Server の設定情報」
インストール後の設定	135 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Application Server を設定するには」
起動と停止	158 ページの「Application Server の起動と停止」
アンインストール	174 ページの「Application Server のアンインストール動作」
トラブルシューティング	220 ページの「Application Server のトラブルシューティングのヒント」
アップグレード	『Sun Java Enterprise System 5 アップグレードガイド (UNIX 版)』

Directory Proxy Server のみをインストールする例

この例では、Directory Proxy Server を単一ホストにインストールするためのガイドラインについて説明します。

▼ **Directory Proxy Server** のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいって次のタスクが必要です。

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
どのシーケンスガイドラインを適用するのかわかります。表 2-1 を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。
どのインストール前提条件を適用するのかわかります。表 1-3 を参照してください。
- 3 **Java ES** インストーラを実行します。
- 4 コンポーネントの選択で、**Directory Proxy Server** を選択します。
- 5 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 6 インストールディレクトリを確認します
- 7 「今すぐ設定」または「あとで設定」オプションを選択します。
- 8 インストールを実行します。
- 9 インストールサマリーとログを表示します
- 10 **Directory Proxy Server** のインスタンスを作成します。
- 11 **Directory Proxy Server** を起動します。
[159 ページの「Directory Proxy Server の起動と停止」](#)
次の表には、Directory Proxy Server の追加情報が含まれています。

作業	関連情報
起動と停止	159 ページの「Directory Proxy Server の起動と停止」
アンインストール	175 ページの「Directory Proxy Server のアンインストール動作」
アップグレード	『Sun Java Enterprise System 5 アップグレードガイド (UNIX 版)』

Directory Server のみをインストールする例

Directory Server Enterprise Edition では、Directory Server Core、Directory Proxy Server、およびディレクトリサービスを管理するためのツールをリモートインストールできます。Directory Server には LDAP および DSML ディレクトリサービスが用意されており、ディレクトリデータベースへのクライアントアクセスを管理できます。

Directory Proxy Server が提供するプロキシ LDAP サービスを使えば、負荷分散とルーティングを設定できます。Directory Proxy Server では、データ分散によって高いスケラビリティを実現し、LDAP およびリレーショナルデータベースに対して仮想ディレクトリアccessを行うこともできます。リモート管理ツールとして、Web ベースの Directory Service Control Center とコマンドラインリモート設定ツールが用意されています。

標準的な本稼働配備では、各 Directory Server Enterprise Edition コンポーネントは専用のホストに配備します。Directory Server Enterprise Edition ソフトウェアを本稼働環境に配備する前に、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Deployment Planning Guide』を参照してください。

この例では、Directory Server を単一ホストにインストールするためのガイドラインについて説明します。

要件およびシーケンスの問題

Directory Server は、ほかの Java ES 製品コンポーネントとの依存関係はありません。

- この製品コンポーネントを Sun Cluster ソフトウェアで使用する場合、製品コンポーネントをインストールする前に一連のタスクを正確に実行する必要があります。72 ページの「Sun Cluster ソフトウェアの例」を参照してください。
- Directory Server は、Directory Server に依存するその他の製品コンポーネントをインストールする前に実行する必要があります。
- 配備で Schema 2 が必要な場合、その他の製品コンポーネントを実装する前に Schema 2 用の Directory Server を設定する必要があります。

▼ Directory Server のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいって次のタスクが必要です。

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
どのシーケンスガイドラインを適用するのかわかります。表 2-1 を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。
どのインストール前提条件を適用するのかわかります。表 1-3 を参照してください。

- 3 スキーマを計画します。
ガイドラインについては、『Sun Java Enterprise System 5 インストール計画ガイド』の「LDAP スキーマと LDAP ディレクトリツリーの構造」を参照してください。
- 4 Java ES インストーラを実行します。
- 5 コンポーネントの選択で、**Directory Server** を選択します。
Directory Preparation Tool は自動的に選択されます。
- 6 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 7 インストールディレクトリを確認します
- 8 「今すぐ設定」または「あとで設定」タイプを選択します。
 - a. 「今すぐ設定」タイプでは、インストール時の設定が可能なローカル製品コンポーネントを示す設定ページが表示されます。
『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の第 3 章「設定情報」にある表から設定情報を収集します。
 - b. 「あとで設定」タイプでは、設定ページは表示されません。
- 9 インストールを実行します。
- 10 インストールサマリーとログを表示します
- 11 **Directory Server** を起動します。
[160 ページの「Directory Server の起動と停止」](#)
次の表には、Directory Server の追加情報が含まれています。

作業	関連情報
インストーラの設定情報	『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の「Directory Server 設定情報」
起動と停止	160 ページの「Directory Server の起動と停止」
アンインストール	176 ページの「Directory Server のアンインストール動作」

作業	関連情報
トラブルシューティング	220 ページの「Directory Server のトラブルシューティングのヒント」
アップグレード	『Sun Java Enterprise System 5 アップグレードガイド (UNIX 版)』

Message Queue のみをインストールする例

注 - Solaris 10 では、Message Queue は大域ゾーンにのみインストールできます。インストールすると、すべての非大域ゾーンに伝播されます。

この例では、Message Queue を単一ホストにインストールするためのガイドラインについて説明します。

要件

Message Queue は、ほかの Java ES 製品コンポーネントとの依存関係はありません。

▼ Message Queue のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
どのシーケンスガイドラインを適用するのかがチェックします。表 2-1 を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。
どのインストール前提条件を適用するのかがチェックします。表 1-3 を参照してください。
- 3 Java ES インストーラを実行します。
- 4 コンポーネントの選択で、Message Queue を選択します。
- 5 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 6 「あとで設定」タイプを選択します。
Message Queue は、インストール時に設定できません。

- 7 インストールを実行します。
- 8 インストールサマリーとログを表示します
- 9 **Message Queue** を起動します。

161 ページの「[Message Queue の起動と停止](#)」

次の表には、Message Queue の追加情報が含まれています。

作業	関連情報
インストール後の設定	140 ページの「 Message Queue のインストール後の設定 」
起動と停止	161 ページの「 Message Queue の起動と停止 」
アンインストール	177 ページの「 Message Queue のアンインストール動作 」
トラブルシューティング	221 ページの「 Message Queue のトラブルシューティングのヒント 」
アップグレード	『Sun Java Enterprise System 5 アップグレードガイド (UNIX 版)』

Monitoring Console のみをインストールする例

製品コンポーネントで Java ES Monitoring が使用される場合は、その他の製品コンポーネントがインストールされていない別のホストに、Monitoring Console コンポーネントをインストールする必要があります。Java ES コンポーネントと同じホストでは Monitoring Console を実行できません。

▼ **Monitoring Console** のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
どのシーケンスガイドラインを適用するのかわかります。表 2-1 を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。
どのインストール前提条件を適用するのかわかります。表 1-3 を参照してください。

- 3 **Java ES** インストーラを実行します。
ほかの Java ES コンポーネント製品が **Monitoring Console** と同じホストにインストールされていないことを確認します。
- 4 コンポーネントの選択で、**Monitoring Console** を選択します。
- 5 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 6 「あとで設定」タイプを選択します。
Monitoring Console はインストール時に設定できません。
- 7 インストールを実行します。
- 8 インストールサマリーとログを表示します
- 9 インストール後の設定を完了します。
監視の対象となるすべてのコンポーネントをインストールしたら、『Sun Java Enterprise System 5 監視ガイド (UNIX 版)』の手順を使用して、監視できるように設定します。このマニュアルには、Java ES Monitoring を管理および使用する手順も記載されています。

次の表には、**Monitoring Console** の追加情報が含まれています。

作業	関連情報
インストール後の設定	133 ページの「 Monitoring Console のインストール後の設定 」
起動と停止	『Sun Java Enterprise System 5 監視ガイド (UNIX 版)』
アンインストール	178 ページの「 Monitoring Console のアンインストール動作 」
トラブルシューティング	221 ページの「 Monitoring Console のトラブルシューティングのヒント 」
アップグレード	『Sun Java Enterprise System 5 アップグレードガイド (UNIX 版)』

Portal Server Secure Remote Access の例

この例では、単一ホストの Access Manager で、Web コンテナとして Web Server を使用して、Portal Server Secure Remote Access のみをインストールする方法について説明します。

要件

Portal Server Secure Remote Access は、Access Manager または Access Manager SDK のローカルコピーが必要です。Portal Server Secure Remote Access コアには、ゲートウェイの場合を除き Portal Server のローカルコピーが必要です。ゲートウェイの場合、Portal Server Secure Remote Access は Portal Server のローカルコピーは必要とせず、別のホストにインストールできます。Portal Server Secure Remote Access は、Portal Server と同じ場所にインストールする必要があります。Directory Server は Portal Server で必要になりますが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。Access Manager は、ローカル Web コンテナが必要です(この例では Web Server)。

▼ Portal Server Secure Remote Access のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいって次のタスクが必要です。

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
どのシーケンスガイドラインを適用するのかわかります。表 2-1 を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。
どのインストール前提条件を適用するのかわかります。表 1-3 を参照してください。
- 3 Java ES インストーラを実行します。
- 4 コンポーネントの選択で、Portal Server Secure Remote Access、Portal Server、および Web Server を選択します。
Portal Server、Access Manager、Directory Server、Java DB、および Service Registry は自動的に選択されます。
 - Directory Server のリモートコピーを使用する場合は、Directory Server の選択を解除し、プロンプト表示でリモートコピーを指定します。
 - Access Manager のリモートコピーを使用する場合は、Access Manager の選択を解除し、インストール後の設定時にリモートコピーを指定します。

- 5 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 6 「今すぐ設定」または「あとで設定」タイプを選択します。
 - a. 「今すぐ設定」タイプでは、インストール時の設定が可能な製品コンポーネントを示す設定ページが表示されます。
リモートに配置する製品コンポーネントでは、デフォルトを受け入れずに、リモートの情報を使用してください。

『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の第3章「設定情報」にある表から設定情報を収集する必要があります。
 - b. 「あとで設定」タイプでは、設定ページは表示されません。
- 7 インストールを実行します。
- 8 インストールサマリーとログを表示します
- 9 インストール後の設定を完了します。
「今すぐ設定」の場合は、次を参照してください。
 - 134 ページの「「今すぐ設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定」
 - 140 ページの「Portal Server および Portal Server Secure Remote Access のインストール後の設定」「あとで設定」の場合は、次を参照してください。
 - 135 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定」
 - 142 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Web Server を設定するには」
 - 140 ページの「Portal Server および Portal Server Secure Remote Access のインストール後の設定」
- 10 製品コンポーネントを起動します。
 - 160 ページの「Directory Server の起動と停止」
 - 165 ページの「Web Server の起動と停止」(Access Manager と Portal Server が自動的に起動する)
 - 161 ページの「Portal Server Secure Remote Access の起動と停止」
- 11 デフォルトの Access Manager ログインページにアクセスします。
`http://webserver-host:port/amserver`

- 12 ポータルにアクセスします。
`http://webserver-host:port/portal/dt`
- 13 「Portal Server の配備」 ページで **Portal Server Secure Remote Access** を有効にします。
 これにより、Portal Server Secure Remote Access サブコンポーネントが起動します。
- 14 **Portal Gateway** にアクセスします。
`https://gateway-server:port/`
 次の表には、Portal Server Secure Remote Access の追加情報が含まれています。

作業	関連情報
インストーラの設定情報	『Sun Java Enterprise System 5 インストーリ ファレンス (UNIX 版)』の「Portal Server Secure Remote Access の設定情報」
起動と停止	161 ページの「Portal Server Secure Remote Access の起動と停止」
アンインストール	180 ページの「Portal Server Secure Remote Access のアンインストール動作」
トラブルシューティング	223 ページの「Portal Server Secure Remote Access のトラブルシューティングのヒント」
アップグレード	『Sun Java Enterprise System 5 アップグレードガ イド (UNIX 版)』

Service Registry のみをインストールする例

この例では、Service Registry を単一ホストにインストールするためのガイドラインについて説明します。

要件

Service Registry は、Application Server のローカルコピーと少なくとも2つの Application Server サブコンポーネント、つまりドメイン管理サーバーとコマンド行管理ツールが必要です。Message Queue、HADB、および Java DB も必要です。

注 - Solaris 10 へのインストールでは、Service Registry を個別の非大域ゾーンにインストールするようにしてください。詳細は、66 ページの「Solaris 10 ゾーンの例」を参照してください。

▼ **Service Registry** のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいって次のタスクが必要です。

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
どのシーケンスガイドラインを適用するのかをチェックします。表 2-1 を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。
どのインストール前提条件を適用するのかをチェックします。表 1-3 を参照してください。
- 3 **Java ES** インストーラを実行します。
- 4 コンポーネントの選択で、**Service Registry** を選択します。
Application Server とその必須サブコンポーネント、および HADB、Java DB、Message Queue は自動的に選択されます。
- 5 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 6 インストールディレクトリを確認します
- 7 「今すぐ設定」または「あとで設定」タイプを選択します。
Service Registry は、インストール時に設定できません。
 - a. 「今すぐ設定」タイプでは、インストーラによって **Application Server** および **HADB** の設定ページが表示されます。
『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の第 3 章「設定情報」にある表から設定情報を収集します。
 - b. 「あとで設定」タイプでは、設定ページは表示されません。
- 8 インストールを実行します。
- 9 インストールサマリーとログを表示します

- 10 次の順序で、インストール後の設定を完了します。
Application Server および HADB のインストール後の設定は、これらのサービスが個別に使用される場合または Application Server に「あとで設定」を選択した場合にだけ必要になります。
- a. [135 ページの「Application Server のインストール後の設定」](#)
 - b. 『Service Registry 3.1 管理ガイド』
 - c. [139 ページの「HADB のインストール後の設定」](#)
- 11 **Service Registry** を起動します。
手順は、『Service Registry 3.1 管理ガイド』を参照してください。
次の表には、Service Registry のインストールの追加情報が含まれています。

作業	関連情報
インストール後の設定	141 ページの「Service Registry のインストール後の設定」
アンインストール	181 ページの「Service Registry のアンインストール動作」
トラブルシューティング	223 ページの「Service Registry のトラブルシューティングのヒント」

Web Server のみをインストールする例

この例では、Web Server を単一ホストにインストールするためのガイドラインについて説明します。

要件

Web Server は、ほかの製品コンポーネントとの依存関係はありません。

- ▼ **Web Server のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。**
大まかにいて次タスクが必要です。
 - 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
どのシーケンスガイドラインを適用するかをチェックします。[表 2-1](#)を参照してください。

- 2 インストールの前提要件をチェックします。
どのインストール前提条件を適用するのかをチェックします。表 1-3を参照してください。
- 3 **Java ES** インストーラを実行します。
- 4 コンポーネントの選択で、**Web Server** を選択します。
- 5 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 6 インストールディレクトリを確認します
- 7 「今すぐ設定」または「あとで設定」タイプを選択します。
 - a. 「今すぐ設定」タイプでは、インストーラによって **Web Server** 設定ページが表示されます。
Web Server 設定タイプ(「Admin」または「Agent」)を選択するように求められます。デフォルトは「Admin」です。
『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の第 3 章「設定情報」にある表から設定情報を収集します。
 - b. 「あとで設定」タイプでは、設定ページは表示されません。
- 8 インストールを実行します。
- 9 インストールサマリーとログを表示します
- 10 インストール後の設定を完了します。
[142 ページの「Web Server のインストール後の設定」](#)
- 11 **Web Server** を起動します。
[165 ページの「Web Server の起動と停止」](#)
次の表には、Web Server.のインストールの追加情報が含まれています。

作業	関連情報
インストール後の設定	142 ページの「Web Server のインストール後の設定」

作業	関連情報
起動と停止	165 ページの「Web Server の起動と停止」
アンインストール	183 ページの「Web Server のアンインストール動作」
トラブルシューティング	225 ページの「Web Server のトラブルシューティングのヒント」
アップグレード	『Sun Java Enterprise System 5 アップグレードガイド (UNIX 版)』

Solaris 10 ゾーンの例

ここでは、Java ES の現在のリリースの Solaris 10 ゾーンをサポートについてその概要を説明します。インストールシーケンスの例が含まれます。この節では、次のトピックについて説明します。

- 66 ページの「Solaris ゾーンの概要」
- 67 ページの「Java ES のこのリリースでのゾーンサポート」
- 68 ページの「特殊な状況: 共有コンポーネントを完全ルートゾーンにインストールする」
- 69 ページの「Solaris 10 完全ルートゾーンの例」
- 71 ページの「Solaris 10 疎ルートゾーンの例」

Solaris ゾーンの概要

Solaris 10 ゾーン (Solaris コンテナとも呼ばれる) 機能は、Solaris OS のインスタンス内に、オペレーティングシステム環境を仮想化する手段を提供します。この機能により、ホストの別のアクティビティーとは分離して1つまたは複数のプロセスが実行可能になります。たとえば、ゾーンで実行するプロセスは、ユーザー ID やその他の資格情報に関係なく、同じゾーンの別のプロセスに信号だけを送信することができます。

すべての Solaris 10 ホストには、1つの大域ゾーンが含まれています。大域ゾーンは、ホストのデフォルトゾーンであると同時にシステム全体の管理コントロールに使用するゾーンです。グローバル管理者によって非大域ゾーンが作成されない場合、すべてのプロセスが大域ゾーンで実行されます。Sun Cluster ソフトウェアなど一部の Java ES 製品コンポーネントは、大域ゾーンにのみインストールできます。非大域ゾーンは、ボックスとみなすことができます。残りのホストと相互に作用することなく、このボックス内で1つまたは複数のアプリケーションを実行することができます。各非大域ゾーンは、その非大域ゾーンに特有の設定およびその他の情報を持つ、インストールされた Solaris 10 オペレーティングシステムの独自のインスタンスであるように見えます。パッケージが大域ゾーンにインストールされると、デ

フォルトではすべての非大域ゾーンに伝播されます。つまり、パッケージは大域ゾーンだけでなく非大域ゾーンにもインストールされます。この伝播により、非大域ゾーンは、大域ゾーンにインストールされたパッケージからアクセスして利用できるようになります。この伝播動作は、パッケージを追加したときに大域ゾーンだけに伝播されるように抑制することもできます。デフォルトでは、非大域ゾーンは大域ゾーンのファイルシステムの一部を共有するように設定されます。2種類の非大域ゾーンがサポートされます。完全ルートゾーンと疎ルートゾーンです。

「完全ルートゾーン」には、大域ゾーンに存在するファイルシステムの読み取り/書き込みコピーが含まれます。完全ルートゾーンを作成すると、大域ゾーンにインストールされているすべてのパッケージをその完全ルートゾーンで利用できます。パッケージデータベースを作成すると、すべてのパッケージが完全ルートゾーンにコピーされます。つまり、すべてのファイルのコピーが、完全ルートゾーンだけが使用できる独立したコピーとして作成されます。

「疎ルートゾーン」には、大域ゾーンに存在するファイルシステムの一部だけの読み取り/書き込みコピーが含まれます。その他のファイルシステムは、ループバック仮想ファイルシステム (`/usr` など) として大域ゾーンから読み取り専用としてマウントされます。グローバル管理者は、疎ルートゾーンを作成するときに、疎ルートゾーンと共有するファイルシステムを選択します。

注 - Java ES では、疎ルートゾーンに対して `/opt` ファイルシステムは大域ゾーンから継承されず、そのため書き込み可能であると想定されます。

ゾーンを正常に配備するには、配備タスクとそれらのシーケンスを慎重に計画することが重要です。Java ES コンポーネントは、ほぼすべてのゾーンにインストールすることができ、その組み合わせや順序に制限はほとんどありません。ただし、Java ES 製品コンポーネントをインストールする順序、および非大域ゾーンを作成する順序が重要になる場合もあります。Solaris ゾーン環境に Java ES を実装する計画の詳細については、『Sun Java Enterprise System 5 インストール計画ガイド』の付録 A 「Java ES と Solaris 10 ゾーン」を参照してください。

Java ES のこのリリースでのゾーンサポート

Java ES のこのリリースでのゾーンサポートのレベルは、次のとおりです。

1. 完全ルートゾーンと疎ルートゾーンの両方がサポートされます。
2. 非大域ゾーンがすでに存在する場合、Java ES を大域ゾーンにインストールできます。
3. 非大域ゾーンは、Java ES を大域ゾーンにインストールした後に作成できます。
4. ゾーン内で共有されるすべてのコンポーネントは、同じリリースの Java ES のコンポーネントでなければなりません。

5. Java ES の完全ルートと疎ルートを1つのコンピュータ上に混在して配備しないでください。
6. Java ES インストーラを使って Java ES コンポーネントを疎ルートゾーンにインストールできますが、次の例外があります。
 - Sun Cluster ソフトウェア、Sun Cluster Geographic Edition、および Sun Cluster Agents は、大域ゾーンにのみインストールできます。
 - Message Queue は、大域ゾーンまたは完全ルートゾーンのみでインストールまたはアップグレードできます。
 - 共有コンポーネントは、大域ゾーンまたは完全ルートゾーンのみでインストールまたはアップグレードできます。
 - Application Server を疎ルートゾーンにインストールするには、オペレーティングシステムにバンドルされているあらゆるバージョンの Application Server を事前に手動で大域ゾーンから削除する必要があります。
7. Java ES インストーラでは、大域ゾーンにインストールするパッケージの伝播が次のように制御されます。
 - 共有コンポーネントは常に伝播されます。
 - Message Queue および Java DB は常に伝播されます。
 - その他のすべての製品コンポーネントは伝播されません。
8. 以前のバージョンの Java ES を完全ルートゾーンにインストールしている場合は、Java ES を大域ゾーンにインストールしないでください。

特殊な状況: 共有コンポーネントを完全ルートゾーンにインストールする

特定のバージョンの Sun Java Web Console が完全ルートゾーンにすでにインストールされている場合は、共有コンポーネントを完全ルートゾーンにインストールできないことがあります。その結果、製品コンポーネントを完全ルートゾーンにインストールできなくなることがあります。

注 - この状況については、『Sun Java Enterprise System 5 リリースノート (UNIX 版)』のバグ 6451030 で扱っています。

以前のバージョンの Sun Java Web Console パッケージのうち一部のバージョンには、Sun Java Web Console を完全ルートゾーンでアップグレードすることを妨げる不正な属性設定が含まれています。この不正な属性設定が含まれる Sun Java Web Console パッケージは、Solaris 10、Solaris 10 Update 1 (1/06)、Solaris 10 Update 2 (6/06)、および Java ES 4 (2005Q4) と一緒に出荷されました。これらのパッケージは、Solaris 10 Update

3(11/06) および Java ES 5 で修正されています。ホストにインストールされているパッケージに問題があるかどうかを判断するには、大域ゾーンで次のコマンドを実行してください。

```
pkgparam -v SUNWmcon SUNW_PKG_ALLZONES
```

次の値が返された場合は、ホストにインストールされているパッケージに問題があります。

```
SUNW_PKG_ALLZONES='true'
```

Java ES 5 を完全ルートゾーンにインストールする場合は、最初に Sun Java Web Console パッケージを大域ゾーンでアップグレードする必要があります。次の方法があります。

- 方法 1: Java ES インストーラを大域ゾーンで実行し、「すべての共有コンポーネント」だけをインストールします。Sun Java Web Console パッケージがアップグレードされ、ゾーン属性が修正されます。また、その他の Java ES 5 共有コンポーネントがすべて大域ゾーンにインストールされ、すべての非大域ゾーンに伝播されます。この方法は、状況によっては利用できないことがあります。以前のバージョンの Java ES を完全ルートゾーンにインストールしている場合は、推奨されない方法です。
- 方法 2: Sun Java Web Console パッケージだけを大域ゾーンでアップグレードします。この処理を行うには、大域ゾーンにログインし、Solaris の Java ES 5 インストールディレクトリに移動します。スーパーユーザーとして、次のコマンドを実行します。

```
cd Product/sunwebconsole  
./setup
```

Sun Java Web Console が、修復されたゾーン属性が含まれるバージョン 3.0.2 にアップグレードされます。

注 - `Product/sunwebconsole` ディレクトリは完全版の Java ES 5 インストーラにのみ存在し、Java ES スイートのインストーラでは利用できません。スイートのインストーラを使用している場合、このディレクトリにアクセスするには、完全版の Java ES 5 インストーラをダウンロードして解凍する必要があります。

いずれかの方法を適用したら、完全ルートゾーンに Java ES 5 コンポーネントをインストールできます。

Solaris 10 完全ルートゾーンの例

この例では、Solaris 10 完全ルートゾーンに Java ES ソフトウェアをインストールためのガイドラインについて説明します。

▼ **Solaris 10** 完全ルートゾーンへのインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいって次のタスクが必要です。

- 1 ホストに **Solaris 10** がインストールされているかどうかを確認します。
大域ゾーンは自動的に作成されます。
- 2 すべての完全ルートゾーンが実行状態であることを確認します。
ゾーンは、設定、インストール、およびブートが完了すると実行状態になります。
完全ルートゾーンの作成に関する詳細については、『System Administration Guide: Solaris Containers-Resource Management and Solaris Zones』の第 18 章「Planning and Configuring Non-Global Zones (Tasks)」を参照してください。
- 3 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
どのシーケンスガイドラインを適用するのかわかります。表 2-1 を参照してください。
- 4 インストールの前提要件をチェックします。
どのインストール前提条件を適用するのかわかります。表 1-3 を参照してください。
- 5 希望する完全ルートゾーンで **Java ES** インストーラを起動します。
- 6 コンポーネントの選択で、希望するコンポーネントを選択します。
コンポーネントを完全ルートゾーンにインストールできない場合は、そのコンポーネントをコンポーネントの選択で選択できません。
- 7 インストールサマリーとログを表示します
- 8 必要に応じて、インストール後の設定を完了します
インストール後の設定手順については、第 6 章を参照してください。
- 9 製品コンポーネントを起動します。
Java ES 製品コンポーネントの起動と停止の手順については、第 7 章を参照してください。
- 10 必要に応じて、追加の完全ルートゾーンでこのプロセスを繰り返します。

Solaris 10 疎ルートゾーンの例

この例では、Solaris 10 疎ルートゾーンに Java ES ソフトウェアをインストールするためのガイドラインについて説明します。

- ▼ **Solaris 10 疎ルートゾーンへのインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。**
- 1 ホストに **Solaris 10** がインストールされているかどうかを確認します。
大域ゾーンは自動的に作成されます。
 - 2 すべての疎ルートゾーンが実行状態であることを確認します。
ゾーンは、設定、インストール、およびブートが完了すると実行状態になります。疎ルートゾーンについては、『System Administration Guide: Solaris Containers-Resource Management and Solaris Zones』の第 18 章「Planning and Configuring Non-Global Zones (Tasks)」を参照してください。
 - 3 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
どのシーケンスガイドラインを適用するのかわかるようにチェックします。表 2-1 を参照してください。
 - 4 インストールの前提要件をチェックします。
どのインストール前提条件を適用するのかわかるようにチェックします。表 1-3 を参照してください。
 - 5 **Java ES** インストーラを大域ゾーンで起動し、共有コンポーネントだけを選択します。
「すべての共有コンポーネント」だけを選択します。その他のコンポーネントは選択しないでください。共有コンポーネントのインストールが完了すると、共有コンポーネントが大域ゾーンにインストールされ、すべての非大域ゾーンに伝播します。
-
- 注 - 多言語パッケージを使用する共有コンポーネントの場合は、Java ES 多言語パッケージが大域ゾーンに存在する必要があります。
-
- 6 **Message Queue** または **Application Server** が使用されている場合は、大域ゾーンで **Message Queue** をアップグレードします。
Message Queue は Solaris 10 のインストール中にインストールされることが多く、疎ルートゾーンへのインストールはサポートされていません。そのため、Message Queue は大域ゾーンにのみインストールできます。インストールすると、すべての非大域ゾーンに伝播されます。

- 7 **Application Server** が使用されている場合は、大域ゾーンからバンドルされた **Application Server** を削除します。

Application Server が配備環境で使用されている場合は、Solaris 10 にバンドルされている Application Server を大域ゾーンから削除する必要があります。大域ゾーンのホストで、次のコマンドを使用して Application Server パッケージの一覧を表示します。

```
pkginfo -i | grep -i "application server"
```

Application Server パッケージが存在する場合は、大域ゾーンから削除します。これらのパッケージはすべての非大域ゾーンから自動的に削除されるため、各疎ルートゾーンに移動して Application Server を再インストールする必要があります。

- 8 希望する疎ルートゾーンで **Java ES** インストーラを起動します。
- 9 コンポーネントの選択で、希望するコンポーネントを選択します。
コンポーネントを疎ルートゾーンにインストールできない場合は、そのコンポーネントをコンポーネントの選択で選択できません。
- 10 インストールサマリーとログを表示します
- 11 必要に応じて、インストール後の設定を完了します
インストール後の設定手順については、[第6章](#)を参照してください。
- 12 製品コンポーネントを起動します。
Java ES 製品コンポーネントの起動と停止の手順については、[第7章](#)を参照してください。
- 13 必要に応じて、追加の疎ルートゾーンでこのプロセスを繰り返します。

Sun Cluster ソフトウェアの例

単一サーバーではなく、クラスタ内で実行するように設定できるコンポーネントには、Application Server、Directory Server、HADB、Message Queue、および Web Server があります。クラスタ内で実行するように設定できる Communications Suite コンポーネントには、Calendar Server、Instant Messaging、および Messaging Server があります。

注 - HP-UX および Linux では、Sun Cluster コンポーネントはサポートしません。

この例では、Sun Cluster フレームワークに Messaging Server をインストールするためのガイドラインについて説明します。

Sun Cluster ソフトウェアをインストールまたは設定する前に、クラスタ用に選択するハードウェアとソフトウェアの組み合わせが、現在サポートされている Sun Cluster 設定であることを確認します。Sun Cluster ソフトウェアを Java ES 環境に実装するためのガイドラインについては、『Sun Cluster Software Installation Guide for Solaris OS』の第2章「Installing and Configuring Sun Cluster Software」、および『Sun Cluster 3.1 8/05 Sun Java Enterprise System 5 用特記事項 (Solaris OS 版)』を参照してください。

要件およびシーケンスの問題

Messaging Server は Directory Server が必要ですが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。Directory Server、および Messaging Server 用の Sun Cluster Core コンポーネントおよび Sun Cluster エージェントが必要です。リモート Directory Server が使用されている場合は、Directory Server 用の Sun Cluster エージェントは必要ありません。

Sun Cluster の実装を成功させるには、製品コンポーネントを正しい順序でインストールし、設定し、起動することがきわめて重要です。

1. Java ES Sun Cluster 製品コンポーネントをインストールします。
2. Sun Cluster フレームワークを設定します。
3. 『Sun Java Communications Suite 5 インストールガイド』の手順を使用して、Messaging Server をインストールして設定します。
4. ほかに必要な Java ES 製品コンポーネントをインストールします。
5. 関連する Java ES 製品コンポーネントのエージェントを使用して、Sun Cluster データサービスを設定します。

クラスタの各ノードで、少なくとも3つのインストールセッションが実行されます。1つは Communications Services インストーラを使用するセッションで、2つは Java ES インストーラを使用するセッションです。Communications Services インストーラを使用する手順については、『Sun Java Communications Suite 5 インストールガイド』を参照してください。

第1段階: Sun Cluster フレームワークのインストールと設定

クラスタのすべてのノードで、次のタスクを実行する必要があります。

▼ Sun Cluster フレームワークのインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

- 1 ハードウェアがクラスタに正しく接続されているかどうか確認します。

- Sun Cluster 3.0–3.1 Hardware Collection for Solaris OS (SPARC Platform Edition)
<http://docs.sun.com/coll/1024.1>
 - Sun Cluster 3.0–3.1 Hardware Collection for Solaris OS (x86 Platform Edition)
<http://docs.sun.com/coll/1142.1>
- 2 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
どのシーケンスガイドラインを適用するのかわかるようにチェックします。表 2-1 を参照してください。
 - 3 インストールの前提要件をチェックします。
どのインストール前提条件を適用するのかわかるようにチェックします。表 1-3 を参照してください。
 - 4 **Java ES** インストーラを実行します。
Solaris 10 では、Sun Cluster ソフトウェアを大域ゾーンにのみインストールできます。
 - 5 コンポーネントの選択で、**Sun Cluster** 製品コンポーネントだけを選択します。

ヒント- 「今すぐ設定」 インストール時に、Sun Cluster のリモート設定のサポートを有効にするかどうかの指定が求められます。「はい」を選択すると、Sun Cluster ソフトウェアのインストール後の設定が容易になります。

- 6 「あとで設定」タイプを選択します。
- 7 必要に応じて、追加機能に対応するための **Sun Cluster** サポートを手動でインストールします。**RSM API** (SUNWscrif)、**SCI-PCI アダプタ** (SUNWsci)、**RSMRDT ドライバ** (SUNWscrdt) です。
詳細は、『Sun Cluster Software Installation Guide for Solaris OS』を参照してください。
- 8 手順に従って、クラスタの各ホストに対して **Sun Cluster** フレームワークを設定します。
『Sun Cluster Software Installation Guide for Solaris OS』の第 2 章「Installing and Configuring Sun Cluster Software」に示す手順に従います。Sun Cluster のドキュメントで Sun Cluster CD-ROM の部分を、同等の Java ES CD-ROM の名前に置き換えてください。
リソースグループの作成およびデータサービスの設定に関するドキュメントについては、『Sun Cluster Data Services Planning and Administration Guide for Solaris OS』を参照してください。

第2段階:製品コンポーネントとエージェントのインストールと設定

クラスタのすべてのノードで、次のタスクを実行する必要があります。

▼ 製品コンポーネントとエージェントの設定シーケンスを作成するには、次の手順に従います。

- 1 **Java ES** 以外の製品をインストールして設定します。
適切な Sun Cluster Agents など、Messaging Server をインストールして設定する手順については、『Sun Java Communications Suite 5 インストールガイド』を参照してください。
- 2 **Java ES** インストーラを実行します。
- 3 **Java ES** インストーラで、**Messaging Server** と一緒にインストールされなかった **Java ES** コンポーネントのうち、必要なコンポーネントを選択します。
 - a. (オプション)**Directory Server** のリモートコピーを使用する場合は、**Directory Server** の選択を解除し、プロンプト表示でリモートコピーを指定します。
 - b. **Sun Cluster** エージェント
- 4 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ノード上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 5 インストールディレクトリを確認します
- 6 「今すぐ設定」または「あとで設定」タイプを選択します。
Sun Cluster Agents は、インストール時に設定できません。
- 7 **Sun Cluster Agents** を除く、選択したすべての製品コンポーネントを設定します。
- 8 次の順序で、**Sun Cluster Agents** を除くすべての製品コンポーネントを起動します。
 - a. [160 ページの「Directory Server の起動と停止」](#)
 - b. **Messaging Server** を起動します。
Messaging Server を起動する手順については、『Sun Java Communications Suite 5 インストールガイド』の「Messaging Server の起動と停止」を参照してください。

- 9 インストールして設定した製品コンポーネントのデータサービスを設定します。

142 ページの「Sun Cluster データサービスの設定」

次の表には、Sun Cluster の追加情報が含まれています。

作業	関連情報
インストール後の設定情報	133 ページの「フェーズ I. Sun Cluster フレームワーク」 142 ページの「Sun Cluster データサービスの設定」
起動と停止	163 ページの「Sun Cluster ソフトウェアの停止と再起動」
アンインストール	182 ページの「Sun Cluster ソフトウェアと Sun Cluster Geographic Edition のアンインストール動作」
トラブルシューティング	224 ページの「Sun Cluster ソフトウェアのトラブルシューティングのヒント」
アップグレード	『Sun Java Enterprise System 5 アップグレードガイド (UNIX 版)』

コンテナの設定を使用する Access Manager SDK の例

この例では、リモートホストにすでにインストールされている Access Manager のコピーを使用して、Access Manager SDK をインストールするためのガイドラインについて説明します。

注 - このシーケンス例を使用する場合は、『Sun Java Enterprise System 5 リリースノート (UNIX 版)』の既知の問題 6293225 も参照してください。

要件

Access Manager SDK をインストールする前に、リモートホストに Access Manager Services Core をインストールし、稼動しておく必要があります。このインストールの例で実行中に指定する Web コンテナの情報と Directory Server の設定情報は、Access Manager Services Core のインストール時に指定した Web コンテナ情報および Directory Server 設定情報と一致する必要があります。

注-インストーラが Web コンテナと Directory Server に関する情報を要求するとき、ローカルホストの設定に基づいたデフォルト値が表示されます。デフォルト値は形式の例としてだけ使用し、これらの値をそのまま適用しないでください。ここでは、デフォルト値の代わりに、リモートホストの正しい情報を指定する必要があります。

Access Manager SDK だけをインストールする場合、Java ES インストーラでは Web コンテナを設定することはできません。

▼ **ホスト A 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。**

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
どのシーケンスガイドラインを適用するかをチェックします。表 2-1 を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。
どのインストール前提条件を適用するかをチェックします。表 1-3 を参照してください。
- 3 **Access Manager** コアサービスをインストールし、起動します。
[79 ページの「アイデンティティ管理の例」](#)

▼ **ホスト B 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。**

大まかにいて次のタスクが必要です。

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。
どのシーケンスガイドラインを適用するかをチェックします。表 2-1 を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。
どのインストール前提条件を適用するかをチェックします。表 1-3 を参照してください。
- 3 **Java ES** インストーラを実行して **Web** コンテナをインストールします。
Web コンテナを設定して起動する必要があります。
- 4 **Java ES** インストーラを実行して **Access Manager SDK** をインストールします。

- 5 非互換性の問題を解決します。
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 6 「あとで設定」タイプを選択します。
- 7 インストールを実行します。
- 8 インストールサマリーとログを表示します
- 9 **Web** コンテナがインストールされ、稼働されていることを確認します。
- 10 *AccessManager-base* ディレクトリで *amsamplesilent* ファイルを編集します。
Solaris OS の場合: `/opt/SUNWam/bin`
Linux および HP-UX の場合: `/opt/sun/identity/bin`
 - a. *amsamplesilent* ファイルを *am.sdk_install* にコピーします。
 - b. 次のパラメータを変更して *am.sdk_install* ファイルを編集します。
 - `SERVER_NAME`
 - `SERVER_HOST`
 - `SERVER_PORT`
 - `ADMIN_PORT`
 - `DS_HOST`
 - `DS_DIRMGRPASSWD`
 - `ROOT_SUFFIX`
 - `ADMINPASSWD`
 - `AMLdapUSERPASSWD`
 - `COOKIE_DOMAIN`
 - `AM_ENC_PWD`
 - `NEW_OWNER`
 - `NEW_GROUP`
 - `PAM_SERVICE_NAME`
 - `WEB_CONTAINER`
 - c. *am.sdk_install* ファイルの次のパラメータだけを次のように変更します。
 - `DEPLOY_LEVEL` は4に設定してください。
 - `SERVER_HOST` と `SERVER_PORT` は、Access Manager SDK で使用するサーバーのホストとポートに設定してください。
 - `DS_HOST`、`DS_DIRMGRPASSWD`、および `ROOT_SUFFIX` は、ホスト A Directory Server のホスト名、ディレクトリマネージャーパスワード、およびルートサフィックスに設定してください。

- ADMINPASSWD と AMLDAPUSERPASSWD は、ホスト A で使用する amadmin パスワードと amldapuser パスワードに設定してください。
 - AM_ENC_PWD は、ホスト A で使用するパスワードの暗号鍵に設定してください。Access Manager SDK では、ホスト B への Access Manager のリモートインストール時に指定した暗号鍵と同じ暗号鍵を AM_ENC_PWD に使用します。Solaris OS では、この値は次のコマンドを使用して取得します。grep pwd /etc/opt/SUNWam/config/AMConfig.properties。Linux および HP-UX では、grep pwd /etc/opt/sun/identity/config/AMConfig.properties を使用します。
 - WEB_CONTAINER は、使用している Web コンテナに対応する値に設定してください。
 - BASEDIR は、Access Manager SDK の「あとで設定」インストール時に使用したインストールディレクトリに設定してください。
 - ホスト A でレルムモードを使用する場合は AM_REALM を「Enabled」に、旧バージョンモードを使用する場合は「Disabled」に設定してください。
 - SDK で使用する Web コンテナに対応する設定値を見つけ、それらの設定値を当該 Web コンテナの詳細情報を使用して変更します。たとえば、WEB_CONTAINER を WS (Sun Java System Web Server) に設定した場合は、WS_INSTANCE、WS_HOME、WS_PROTOCOL など WS_ プレフィックスの付く設定値を変更してください。
- 11 スーパーユーザーとして、編集した am.sdk_install ファイルを使用し、Access Manager を配備します。
- ```
./amconfig -s ./am.sdk_install
```
- 12 Web コンテナを再起動します。

## アイデンティティ管理の例

この例では、リモートホストの Directory Server で、Access Manager と Directory Server をインストールして、アイデンティティ管理を実装します。

### 要件

Access Manager は Directory Server が必要ですが、必ずしもローカルコピーである必要はありません。Access Manager は、Web コンテナが必要です (この例では Web Server)。その他任意の製品コンポーネントをインストールする前に、リモートの Directory Server を実行する必要があります。

▼ **ホスト A 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。**

大まかにいて次タスク必要です。

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。  
どのシーケンスガイドラインを適用するのかをチェックします。表 2-1 を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。  
どのインストール前提条件を適用するのかをチェックします。表 1-3 を参照してください。
- 3 **Directory Server** をインストールし、起動します。  
55 ページの「[Directory Server のみをインストールする例](#)」

▼ **ホスト B 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。**

大まかにいて次タスク必要です。

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。  
どのシーケンスガイドラインを適用するのかをチェックします。表 2-1 を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。  
どのインストール前提条件を適用するのかをチェックします。表 1-3 を参照してください。
- 3 **Java ES** インストーラを実行します。
- 4 コンポーネントの選択で、**Access Manager** と **Web Server** を選択します。  
Directory Server と Directory Preparation Tool は自動的に選択されます。
- 5 **Directory Server** の選択を解除し、プロンプト表示でリモートコピーを指定します。
- 6 非互換性の問題を解決します。  
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。

- 7 「今すぐ設定」または「あとで設定」タイプを選択します。
  - a. 「今すぐ設定」タイプでは、インストール時の設定が可能な製品コンポーネントを示す設定ページが表示されます。

リモートに配置する製品コンポーネントでは、デフォルトを受け入れずに、リモートの情報を使用してください。『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の第 3 章「設定情報」にある表から設定情報を収集する必要があります。
  - b. 「あとで設定」タイプでは、設定ページは表示されません。
- 8 インストールを実行します。
- 9 インストールサマリーとログを表示します
- 10 インストール後の設定を完了します。

「今すぐ設定」の場合は、次を参照してください。

[134 ページの「「今すぐ設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定」](#)

「あとで設定」の場合は、次を参照してください。

  - [142 ページの「Web Server のインストール後の設定」](#)
  - [135 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定」](#)
- 11 製品コンポーネントを起動します。

[165 ページの「Web Server の起動と停止」](#) (Access Manager は自動的に起動する)
- 12 レルムモードのデフォルトの Access Manager ログインページにアクセスします。

`http://webserver-host:port/amserver`
- 13 初期ユーザーを確立し、シングルサインオンを設定します。

## リモートの Access Manager を使用する Portal Server の例

この例では、Directory Server を使用して別のホストにすでにインストールした Access Manager のコピーを使用して、Portal Server とそれに必要な製品コンポーネントを 1 つのホストにインストールするためのガイドラインについて説明します。Access Manager と Portal Server は、ホストで同じ種類の Web コンテナを使用する必要があります。

## 要件

Portal Server は、Access Manager が必要です。Access Manager は、Directory Server のローカルまたはリモートのコピーと、ローカルの Web コンテナが必要です。Access Manager とは別のホストで Portal Server を実行することができます。この場合、Portal Server は Access Manager SDK のローカルコピーとローカルの Web コンテナが必要です。Portal Server と Access Manager SDK をインストールする場合、Access Manager の不要なサブコンポーネントの選択を解除する必要があります。(Portal Server の選択時に、インストーラは、すべての Access Manager のサブコンポーネントを自動的に選択する。)

### ▼ ホスト A 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次タスクが必要です。

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。  
どのシーケンスガイドラインを適用するのかわかるようにしてください。表 2-1 を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。  
どのインストール前提条件を適用するのかわかるようにしてください。
- 3 Access Manager と Directory Server がインストールされ、稼働していることを確認します。  
[79 ページの「アイデンティティ管理の例」](#)

### ▼ ホスト B 用のインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。

大まかにいて次タスクが必要です。

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。  
どのシーケンスガイドラインを適用するのかわかるようにしてください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。  
どのインストール前提条件を適用するのかわかるようにしてください。
- 3 Java ES インストーラを実行します。

- 4 コンポーネントの選択で、**Portal Server** を選択します。  
Access Manager SDK、Access Manager コアサービス、管理コンソール、連携管理、Directory Server Core Server、Directory Preparation Tool、Java DB、および Service Registry は自動的に選択されます。Web コンテナは選択されません。Web Container Selection ページが表示され、Web コンテナの選択が求められます。
- 5 **Directory Server** と、**Access Manager SDK** を除く **Access Manager** のすべてのサブコンポーネントの選択を解除します。  
依存性に関するメッセージに従って、次のとおり実行します。
  - a. **Application Server**、**Web Server**、または以前にインストールしたローカルの **Web コンテナ** を選択します。
  - b. **Access Manager** のリモートインスタンスを選択します。
- 6 非互換性の問題を解決します。  
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 7 「今すぐ設定」タイプを選択します。  
設定ページが表示されます。
- 8 「**Access Manager: 設定情報を指定してください**」ページで、リモートの **Access Manager** に次の値を設定します。

---

注 - amAdmin および amldapuser のパスワードは異なっている必要があります。

---

- 管理者 (amAdmin) パスワード (再入力)
  - LDAP ユーザー (amldapuser) パスワード (再入力)
  - パスワードの暗号鍵 (ホスト A に入力した暗号鍵と一致させる)
- 9 「**Access Manager: Directory Server 情報**」ページで、ホスト A の **Directory Server** の情報を指定します。
    - Directory Server 情報
    - ディレクトリマネージャーパスワード
    - 接尾辞
  - 10 「**Access Manager: Sun Java System Access Manager サービスを実行するための Web コンテナ**」で、ホスト A 上のリモートの **Access Manager** についての情報を指定します。  
ホスト名は、ホスト A の完全修飾名にしてください。
  - 11 「**Portal Server: webcontainer**」ページで、**Portal Server** が稼動している **Web コンテナ** (および任意の設定パラメータ) を指定します。

- 12 インストールを実行します。
- 13 インストールサマリーとログを表示します
- 14 必要なインストール後の設定を完了します。

140 ページの「Portal Server および Portal Server Secure Remote Access のインストール後の設定」

## Web とアプリケーションサービスの例

HADB (高可用性セッションストレージで使用) は、Application Server で動作し、セッションの持続性を含むフェイルオーバー機能を提供します。

この例では、負荷分散を装備する2ノードのHADBクラスタを実装するガイドラインについて説明します。ただし、お勧めするソリューションは、他に何もインストールされていない4つのホストにHADBをインストールすることです。管理用HADBのコピーとロードバランサを装備するドメイン管理サーバー (DAS) と Web Server は、別個のマシンにインストールされます。

パーティション化されたオペレーティングシステムの場合、それぞれ少なくとも1つのHADBインスタンスを実行する2つのサーバー (ホストまたはゾーン) をインストールすることをお勧めします。

## 要件およびシーケンスの問題

Application Server は、HADB、Java DB、および Message Queue のローカルコピーが必要です。Application Server が提供する統合管理ツールを利用するために、Application Server と HADB は同じホスト上になければなりません。Application Server のロードバランサプラグイン・サブコンポーネントは Web サーバーが必要です。

一般的な手順には、次のものがあります。

1. Java ES 製品コンポーネントをインストールします。
2. サーバーを起動します。
3. HADB を設定します。
4. 負荷分散を設定します。

次のガイドラインを使用して、すべての製品コンポーネントを1つのノードまたはゾーンにインストールできます。以降のノードには、配備に必要な製品コンポーネントをインストールします。最小で2つのインストールセッションが必要になります。

▼ **Webとアプリケーションサービスのインストールシーケンスを作成するには、次の手順に従います。**

大まかにいって次のタスクが必要です。

- 1 インストールシーケンスのガイドラインをチェックします。  
どのシーケンスガイドラインを適用するのかをチェックします。表 2-1 を参照してください。
- 2 インストールの前提要件をチェックします。  
どのインストール前提条件を適用するのかをチェックします。表 1-3 を参照してください。
- 3 ハードウェアがクラスタに正しく接続されているかどうか確認します。
- 4 **Java ES** インストーラを実行します。
- 5 コンポーネントの選択で、**Application Server** を選択します。  
Message Queue、HADB、Java DB と、Application Server Node Agent および Load Balancing Plugin を除くすべての Application Server のサブコンポーネントは、自動的に選択されます。
- 6 **Application Server** 製品コンポーネントを展開し、**Load Balancing Plugin** を選択します。

---

注 - 同じファイルシステムアクセス権を使用して、Web Server と Load Balancing Plug-in をインストールする必要があります。

---

- 7 非互換性の問題を解決します。  
インストーラは、ホスト上のソフトウェアを検証し、非互換性が識別された場合のガイダンスを示します。
- 8 「今すぐ設定」タイプを選択します。  
Message Queue は、設定が不要です。  
インストール時に設定可能な製品コンポーネントに対して、設定ページが表示されます。『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の「HADB の設定情報」にある表から設定情報を収集します。
- 9 インストールを実行します。
- 10 インストールサマリーとログを表示します
- 11 製品コンポーネントを起動します。

- 158 ページの「Application Server の起動と停止」 (Message Queue は自動的に起動)
  - 165 ページの「Web Server の起動と停止」
- 12 HADB のインストール後の設定を完了します。  
139 ページの「「あとで設定」設定オプションでのインストール後の HADB の設定」を参照してください。
- 13 負荷分散の設定を完了します。  
『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.2 高可用性 (HA) 管理ガイド』の第 5 章「HTTP 負荷分散の設定」を参照してください。

## root 以外のユーザーでのインストール例

Java ES インストーラは root で実行するように設計されていますが、一部のコンポーネントは root にならなくてもインストールすることができます。これは通常の処理ではありませんが、配備によっては必要になります。Access Manager または Portal Server を root 以外のユーザーで Solaris OS または Linux にインストールするには、次の説明を参照してください。

- **Access Manager**。Access Manager を root 以外のユーザーでインストールするときは、『Sun Java System Access Manager 7.1 Postinstallation Guide』の第 9 章「Configuring Access Manager to Run as a Non-root User」の手順に従ってください。
- **Portal Server**。Portal Server を root 以外のユーザーでインストールするときは、『Sun Java System Portal Server 7.1 Configuration Guide』の手順に従ってください。

---

注 - HP-UX では root 以外のユーザーでのインストールはサポートされません。

---

root 以外のユーザーでの設定方法については、このマニュアルの 146 ページの「ルート以外の ID による製品コンポーネントの設定」説明も参照してください。

# グラフィカルインタフェースによるインストール

---

この章では、対話的なグラフィカルインタフェースを使用して、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) ソフトウェアをインストールする方法を説明します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 87 ページの「インストールの前に」
- 89 ページの「グラフィカルモードでのインストーラの実行」
- 103 ページの「コンポーネントの追加」
- 104 ページの「次の手順」

## インストールの前に

この章で説明する作業を開始する前に、インストールの順序を作成し、インストールに関する一般的な要件や前提条件をすべて満たしておいてください。これらの作業を完了すると、インストールの準備ができます。

この節で説明する内容は、次のとおりです。

- 87 ページの「前提条件と要件の確認」
- 88 ページの「(オプション) リモートホストのローカルディスプレイの設定」
- 88 ページの「ソフトウェアの入手」

## 前提条件と要件の確認

今回のリリースの Java ES に固有の前提条件については、38 ページの「インストール前提条件の確認」を参照してください。

システム要件については、『Sun Java Enterprise System 5 リリースノート (UNIX 版)』の「プラットフォームの要件と問題点」を参照してください。

インストールの順序に影響する可能性のある一般的な状況についての情報は、表 2-1 を参照してください。

## (オプション) リモートホストのローカルディスプレイの設定

リモートホストにログインしているときには、DISPLAY 環境変数がローカルディスプレイに適切に設定されていることを確認します。DISPLAY 変数が正しく設定されていないと、インストーラはテキストベースモードで実行されます。

- C Shell での例 (ホスト名は myhost):

```
setenv DISPLAY myhost:0.0
```

- Korn Shell での例 (ホスト名は myhost):

```
DISPLAY=myhost:0.0
```

ローカルディスプレイでインストーラを実行するには、表示権限の付与が必要になる場合があります。たとえば、次のコマンドを使用して、myhost から serverhost のルートユーザーに表示権限を付与することができます。

```
myhost\> xauth extract - myhost:0.0 | rsh -l root serverhost xauth merge -
```

このような権限を安全に付与する手順については、『Solaris X Window System Developer's Guide』の「Manipulating Access to the Server」の章を参照してください。

## ソフトウェアの入手

- ダウンロードの場合。Java ES インストールバンドルをダウンロードしたディレクトリに移動し、バンドルを展開します。例:

```
unzip java_es-5-solaris-sparc.zip
```

Copyright ファイル、README ディレクトリ、およびオペレーティングシステムのディレクトリ (Solaris\_sparc など) が表示されます。オペレーティングシステムのディレクトリには、Product ディレクトリ、release\_info ファイル、installer スクリプトがあります。

- DVD の場合。プラットフォームと一致する名前の DVD ディレクトリに移動します。

Java ES ソフトウェアの入手方法の詳細については、[41 ページの「Java ES ソフトウェアの入手」](#)を参照してください。

## グラフィカルモードでのインストーラの実行

installer コマンドのオプションの詳細については、[付録 B](#) を参照してください。

インストール中に問題が発生した場合は、[第 9 章](#) のトラブルシューティング情報を参照してください。

### ▼ インストールを開始するには

- 1 root としてログインしていない場合は、スーパーユーザーになります。
- 2 グラフィカルインストーラを起動します。

```
./installer
```

「ようこそ」ページが表示されます。

---

注-途中で「取消し」をクリックすると、インストールセッションを本当に終了するか確認された後に、インストーラが終了します。

---

- 3 「次へ」をクリックして次に進みます。  
「ソフトウェアライセンス契約」ページが表示されます。
- 4 ライセンス契約のすべての条項に同意する場合は、「はい、ライセンス契約に同意します」をクリックします。  
ライセンス契約のすべての条項に同意しない場合は、「同意しません」を選択します。インストールセッションが終了します。

### ▼ コンポーネントと言語を選択するには

ライセンス条項に同意したら、Java ES インストーラがホスト上のソフトウェアを調査して、「ソフトウェアコンポーネントの選択」ページを表示します。

- 1 インストールするソフトウェアを選択します。

---

注-HP-UX では、Sun Cluster コンポーネント、Directory Preparation Tool、HADB、またはサードパーティーの Web コンテナはサポートされません。Linux での「今すぐ設定」設定オプションによるインストールの場合、Sun Cluster コンポーネントはサポートされず、サードパーティーコンテナは BEA WebLogic のみがサポートされます。

---

次の画面例は、「ソフトウェアコンポーネントの選択」ページを示しています。



注 - Monitoring Console は、監視対象の Java ES コンポーネントが配置されているホスト上では実行できません。インストーラを実行するとこれらも一緒にインストールされてしまうので、Monitoring Console をほかの Java ES コンポーネントとは別のホストにインストールするためのインストールセッションを、単独で実行する必要があります。

- インストーラウィンドウが小さすぎてすべてのテキストが表示されない場合は、ウィンドウの隅をドラッグして手でウィンドウのサイズを変更することができます。
- 個別の製品コンポーネントについての情報を見るには、その項目の上にカーソルを置きます。その項目の説明が、ページ下部のテキストボックスに表示されます。
- 製品コンポーネントの互換性状態についての情報を見るには、「詳細」列の省略記号 (...) をクリックします (存在する場合)。
- すでにインストールされている製品コンポーネントの選択は解除 (グレー表示) されます。これらを上グレードできる場合は、「状況」が「アップグレード可」になっています。

注 - インストーラでアップグレードできる製品コンポーネントは、Application Server、Message Queue、JavaDB、および HADB のみです (Solaris OS のみ)。Java ES コンポーネントのアップグレード手順については、『Sun Java Enterprise System 5 アップグレードガイド (UNIX 版)』を参照してください。

- このページのオンラインヘルプを表示するには、「ヘルプ」ボタンをクリックします。

- **Solaris 10:** インストーラを非大域ゾーンで実行する場合、非大域ゾーンにインストールできないコンポーネントは無効になります。

---

ヒント-Solaris 10 ゾーンでインストールまたはアップグレードするときは、いくつかの点に注意する必要があります。詳細については、66 ページの「Solaris 10 ゾーンの例」を参照してください。

---

「ソフトウェアコンポーネントの選択」ページでは、次のようなコンポーネントをインストールすることを選択できます。

- すべてのコンポーネント。すべての製品コンポーネントとそれらが必要とする共有コンポーネントを選択するには、「すべて選択」を選択します。
  - 一部のコンポーネント。一部の製品コンポーネントをインストールするには、製品コンポーネントを個別に選択します。製品コンポーネントを選択するたびに、そのコンポーネントが依存する製品コンポーネントが自動的に選択されます。
  - サブコンポーネント。サブコンポーネントを選択するには、コンポーネントの左にある展開ターナーをクリックして、サブコンポーネントリストを展開します。サブコンポーネントを選択するたびに、選択したコンポーネントが依存する製品サブコンポーネントが自動的に選択または選択解除されます。
  - 共有コンポーネント: すべての共有コンポーネントを最新の Java ES リリースにアップグレードするには、「すべての共有コンポーネント」を選択します。この項目を選択しない場合は、選択した製品コンポーネントに対応する共有コンポーネントのみがインストールまたはアップグレードされます。
  - 言語パッケージ。デフォルトでは、選択したコンポーネントの多言語パッケージがインストールされます。選択するコンポーネントを追加するたびに、インストールされる多言語パッケージが追加されるので、インストールに必要なディスク容量が増えていきます。多言語パッケージをインストールしないことを選択した場合は、その選択を確認する画面が表示され、ローカライズ版パッケージをあとからインストールすることはできないことを警告されます。
- 2 選択可能な場合には、**Web コンテナ**を選択します。
- Web コンテナ用に使用する製品コンポーネントが確定していない場合、Application Server と Web Server の両方を選択し、設定タイプの入力を求められたときに「今すぐ設定」オプションを選択することができます。Web コンテナの選択は、インストールセッションの設定ページ上であとで行うこともできます。
  - Access Manager と Portal Server は、ホストで同じ種類の Web コンテナを使用する必要があります。
  - Web Server を Web コンテナとして使用するときは、Web Server の設定中に Web Server 設定タイプモードを質問されたときに、「エージェント」ではなく「サーバー」に設定する必要があります。デフォルト値は「サーバー」です。
- 3 選択可能な場合には、サードパーティー製の**Web コンテナ**を選択します。

---

注-HP-UX では、サードパーティーの Web コンテナはサポートされません。「今すぐ設定」については、Linux では BEA WebLogic サードパーティーコンテナのみがサポートされます。

---

サードパーティー製の Web コンテナを使用するには、次のように操作します。

- a. 「ソフトウェアコンポーネントの選択」ページで **Application Server** と **Web Server** の選択を解除します。  
「次へ」をクリックすると、「Web コンテナの選択」ページが表示されます。
  - b. 「サードパーティーの Web コンテナを使用」を選択します。
  - c. 「了解」をクリックします。
- 4 指定可能な場合には、リモート依存性を指定します。  
ほかのホストにインストールされた製品コンポーネントを使うことによって依存性を満たすには、次の手順に従います。
- a. 製品コンポーネントを選択したら、サブコンポーネントを表示するために展開し、コンポーネントリスト全体を調べます。  
選択したコンポーネントを調べて、インストーラによって自動的に選択されたコンポーネントを確認します。
  - b. リモートホスト上でアクセスする製品コンポーネントの選択を解除します。  
たとえば、事前にインストールおよび設定済みの Directory Server には、通常はリモートアクセスします。
  - c. 「次へ」をクリックすると、「依存関係の警告」ポップアップが表示されます。  
選択肢が表示されます。
  - d. 「リモートホストにインストールされたバージョンの使用」を選択します。
  - e. 「了解」をクリックします。

## ▼ 依存性と互換性の問題を解決するには

インストーラは、選択された製品コンポーネントと関連する共有コンポーネントの依存性チェックを実行します。問題がある場合、問題を通知して対処を促す1つ以上のメッセージがインストーラによって表示されます。

- 1 製品コンポーネントの依存性に関する問題を解決します。

Solaris OS では、インストーラがアップグレードできるのは、Application Server、Message Queue、JavaDB、および HADB のみです。Java ES コンポーネントのアップグレード手順については、『Sun Java Enterprise System 5 アップグレードガイド (UNIX 版)』を参照してください。

- 2 「次へ」をクリックします。
- 3 次の処理に進めるようになるまで、手順 1 と 2 を繰り返します。

- 4 **Solaris OS の場合、J2SE SDK の互換性の問題を解決します。**

Solaris OS で、互換性のないシステム全体バージョンの J2SE SDK が検出された場合、「J2SE Software Development Kit のアップグレードが必要です」ページが表示されます。実行する処理についての選択肢が表示されます。(1) SDK バージョンを自動的にアップグレードするか、または (2) 手動でアップグレードするかを選択します。ページの内容を確認してから、アップグレードを自動または手動のどちらで行うかを決定します。デフォルト値は「自動的に」です。

必要なバージョンよりも上のバージョンの JDK が検出され、1 つ以上の JDK パッケージが存在しない場合 (例: 64 ビット JVM)、インストーラはこのバージョンを互換性のないバージョンとして扱います。そのような場合、選択肢 (1) または (2) を選択すると、Java ES が要求する JDK のバージョンに JDK がダウングレードされます。

- 5 共有コンポーネントの互換性の問題を解決します。

製品コンポーネントの問題が解決されたあとで、インストーラはすでにインストールされている共有コンポーネントの互換性チェックを行います。共有コンポーネントの互換性のないバージョンが検出された場合は、「アップグレードの必要がある共有コンポーネント」ページが表示されます。



注意 - JES 以外のアプリケーションについては、ホストに存在する依存関係を確認せずに共有コンポーネントをアップグレードしないでください。必要となる共有コンポーネントの Java ES バージョンと、これらの既存のアプリケーションとの間に互換性があるかどうかを最初に確認する必要があります。

- a. アップグレードしないときは、「取消し」をクリックします。

「取消し」を選択した場合は、互換性のない共有コンポーネントを手動で削除する必要があります。削除しない場合は、これ以上インストールを続行できなくなります。

- b. 互換性のない共有コンポーネントをこのインストールセッションでアップグレードするときは、「次へ」をクリックします。

「インストールディレクトリ」ページが表示されます。次の画面例には、インストールディレクトリのデフォルトの場所が表示されています。

## ▼ インストールディレクトリを指定し、システムチェックを開始するには

選択された各製品コンポーネントについて、デフォルトのインストールディレクトリが表示されます。



- 1 デフォルトのインストールディレクトリについて、次のことを確認します。  
すべてのデフォルトディレクトリおよびポートの完全なリストについては、『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の第2章「デフォルトのインストールディレクトリとポート」を参照してください。
  - これから行う配備のディレクトリが正しいことを確認します。
  - デフォルトのディレクトリが適していない場合は、必要に応じて別のパスを参照し、変更します。

注-デフォルト値をそのまま使わずに別の値を入力することを選択した場合は、その項目をインストーラまたはコンフィギュレータから要求された場合には、選択したその値を常に指定する必要があります。

- 2 「次へ」をクリックしてシステムチェックを開始します。  
インストーラは、選択されたコンポーネントに基づいて、ディスク容量、メモリー、スワップ空間、オペレーティングシステムのパッチ、オペレーティングシステムのリソースをチェックします。次の表の左側の列には、システムチェックの結果表示されるメッセージを示しています。右の列は、それぞれの結果に対して必要となる対処方法を示しています。

| 表示されるメッセージ             | 対処方法               |
|------------------------|--------------------|
| システムはインストールの準備が完了しています | 「次へ」をクリックして次に進みます。 |

| 表示されるメッセージ             | 対処方法                                                                                                                                                                         |
|------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| システムはインストールの準備が完了しています | <p>メモリーまたはスワップ空間の量が推奨レベルに達していないことを示す警告メッセージを含む。</p> <p>「次へ」をクリックしてインストールを続行しますが、インストール完了後にメモリーまたはスワップ空間を追加します。メモリーまたはスワップ空間を追加しない場合、パフォーマンスに深刻な影響が生じる可能性があります。</p>           |
| システムはインストールの準備ができていません | <p>「レポートの参照」をクリックし、インストーラによって検出された問題に関する情報を参照します。必要なパッチがインストールされていない場合、このレポートにはパッチ番号が報告されません。インストーラを停止することなく、レポートされた問題を解決できる場合は、問題を解決したあとで「再チェック」をクリックし、システムの再チェックを行います。</p> |

**Solaris 10:** インストーラを非大域ゾーンで実行している場合、メモリー情報を取得できないことを知らせるメッセージが表示されます。

メモリーの不足など、問題によってはインストールを続行できる場合もありますが、その他の問題(ディスク容量の不足など)の場合は、問題を解決しないとインストーラの処理を続行できません。

### 3 適用されていないオペレーティングシステムパッチをインストールします。

インストールを続行する前に、適用されていないパッチの大半をインストールする必要があります。方法については、[37 ページの「パッチをインストールするには」](#)を参照してください。場合によっては、適用されていないパッチをインストールせずに続行できます。この場合、処理を続けようとする、インストールが失敗するか、またはソフトウェアが正しく機能しない可能性があることを示す警告が表示されます。インストールを続行するときは、適用していないパッチをインストールしないでインストールすることを明示的に承認する必要があります。



- 4 システムチェックが完了し、システムの状態に問題がなければ、「次へ」をクリックします。

## ▼ 設定の種類と共通設定を指定するには

選択した製品コンポーネントの中に、インストール時に設定可能なものがある場合、「設定タイプ」ページが表示されます。次の中から設定の種類を選択します。

- 1 次のオプションから設定の種類を指定します。
  - 今すぐ設定 (デフォルト):インストール時に設定可能な製品コンポーネントを設定できます。「今すぐ設定」の作業には、共通サーバー設定や、選択した製品コンポーネントの設定情報の入力が含まれます。

---

注-一部の製品コンポーネントは、インストール時に設定できません。これらの製品コンポーネントを選択した場合、インストール後にこれらの製品コンポーネントの設定が必要なことを知らせる警告が表示されます。

---

- あとで設定:パッケージのコピーに必要な最小限の値だけを入力します。インストーラは、詳細設定を行わずに処理を先に進めます。「あとで設定」設定オプションを選択する場合、101 ページの「ソフトウェアをインストールするには」に進みます。
- 2 「今すぐ設定」の場合は、管理者ユーザーの ID とパスワードの入力方法を選択します。  
管理者ユーザーの ID とパスワードを使用する製品コンポーネントを複数選択する場合は、「パスワード選択パネル」が表示されます。



- 「次の情報をすべての管理者アカウントに使用する」。(デフォルト)デフォルトをそのまま使用する場合は、管理者ユーザーの ID とパスワードを 1 度だけ入力します。これらのフィールドは、これ以降設定ページに表示されなくなります。
- 「製品ごとに異なる管理者アカウントを使用する」。このオプションを選択する場合は、選択した製品コンポーネントのうち、管理者 ID とパスワードを使用するコンポーネントのそれぞれの設定ページで、管理者ユーザー ID とパスワードを入力することを求められます。

注-Java ES インストーラでは、管理パスワードに空白は使用できません。また、次の記号も使用できません。 ; & ( ) ! | < > ' " \$ ^ \ # / , @ %

### 3 「今すぐ設定」インストールの場合は、共通サーバー設定を指定します。

デフォルト値をそのまま使用するか、または別のデータを使用して、これらのグローバルフィールドに関するインストーラの質問に答えます。ここに入力する値は、以降の製品コンポーネント設定ページにデフォルト値として表示されます。これらのフィールドについては、オンラインヘルプか、『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の「共通設定」を参照してください。

注-デフォルト値をそのまま使わずに別の値を入力することを選択した場合は、その項目をインストーラまたはコンフィギュレータから要求された場合には、選択したその値を常に指定する必要があります。

次の画面例は、「共通サーバー設定の指定」ページを示しています。この例では、ここまでのインストールセッションで 1 つの管理者アカウントを使用することを選択しているため、管理者ユーザー ID と管理者パスワードに関連するフィールドは表示されていません。



- 4 「次へ」をクリックして次に進みます。  
「今すぐ設定」インストールの場合は、インストール時に設定可能な各製品コンポーネントの設定ページが順番に表示されます。

ヒント-インストール処理中に、インストーラは設定情報を収集します。インストールが完了したあとで、次の場所にあるインストールサマリーでこの情報を確認できます。

Solaris OS の場合: /var/sadm/install/logs

Linux および HP-UX の場合: /var/opt/sun/install/logs

## ▼ 設定データを指定するには

「今すぐ設定」設定オプションでのインストールの場合、インストーラは、選択した製品コンポーネントのうち、インストール時に設定可能なコンポーネントの設定ページを1つ以上表示します。選択を行う際には、次の情報が役立ちます。

- 各ページの構成値の詳細については、各ページの下部にあるオンラインヘルプボタンをクリックします。これらの情報については、『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の第3章「設定情報」も参照してください。
- 設定情報を収集するための設定ワークシートが、『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の第4章「設定ワークシート」に用意されています。
- 次の製品コンポーネントは Java ES インストーラでは設定できないので、インストール後に設定する必要があります。Directory Proxy Server、Java DB、Monitoring Console、Service Registry、および Sun Cluster ソフトウェア。

- Sun Cluster ソフトウェア自体はインストール時に設定できませんが、インストール後の設定を簡単にするためにリモートサポートを有効にするオプションがあります。デフォルトは Yes です。

設定ページの一部のフィールドには、「共通サーバー設定」ページに指定したデフォルト値が表示されます。これらの値は編集可能です。ただし、デフォルト値をそのまま使わずに別の値を入力することを選択した場合は、その項目をインストーラまたはコンフィギュレータから要求された場合には、選択したその値を常に指定する必要があります。

注 - Access Manager を Portal Server と一緒にインストールする場合は、Access Manager に対してレルム (Access Manager 7.x 互換) モードまたは旧バージョン (Access Manager 6.x 互換) モードを選択できます。Portal Server には旧バージョンモードが必要であることを知らせるインストーラメッセージを無視します。ただし、Access Manager が Directory Server と一緒に設定され、データストアとして AM SDK が設定されている場合にのみ、Portal Server はレルムモードをサポートします。Communications 製品を使用する場合は、旧バージョンモードが必要です。

次の画面例は、製品コンポーネントの設定ページを示しています。



- 1 表示される各設定ページに、設定に関する情報を指定します。パスワード以外の設定値には、デフォルト値が表示されます。
- 2 「次へ」をクリックして、次の製品コンポーネントの設定ページに進みます。
- 3 最後の設定ページで「次へ」をクリックすると、インストール時の設定が完了します。「インストールの準備が完了しています」ページが表示されます。



## ▼ ソフトウェアをインストールするには

ホストにソフトウェアを転送する前に、インストーラは、選択されたコンポーネントを表示します。ここには共有コンポーネントは表示されませんが、それらはすでに確認されており、必要に応じてインストールされます。

- 1 表示されたコンポーネントの一覧を確認し、必要な変更を行います。
  - a. 「ソフトウェアコンポーネントの選択」ページに戻るには、「戻る」ボタンをクリックします。  
「ソフトウェアコンポーネントの選択」ページが表示されるまで、各ページの「戻る」ボタンをクリックし続けます。必要な変更を行います。
  - b. インストーラの先のページに進むには、「次へ」をクリックします。  
すでに入力されている値を再入力する必要はありません。依存性が再チェックされ、システムチェックが繰り返されます。
- 2 「インストールの準備が完了しています」ページの情報が適切であることを確認したら、「次へ」をクリックします。
- 3 「インストール」をクリックして、コンポーネントパッケージのインストールを開始します。

---

注-Linux の場合は、インストーラの実行中に rpm コマンドを使用しないでください。HP-UX の場合は、swlist、swcopy、または swinstall コマンドを使用しないでください。Java ES インストールの実行中にこれらのコマンドを使用すると、インストーラがハングアップする可能性があります。

---

インストール中の状態は、次のようになります。

- インストール中に表示される項目は次のとおりです。
- インストールがどこまで完了したか、割合を示す進捗バー。

インストールのサイズと複雑さによっては、この処理に長い時間がかかる場合があります。

---

注- 「進行中」 ページが表示されているときに「取消し」をクリックすると、インストールセッションを本当に終了するか確認された後に、インストーラが終了します。

インストールの進行中に「中止」をクリックすると、インストーラはそれまでにインストールされたすべてのコンポーネントパッケージをロールバックして、「サマリー」 ページを表示します。インストールセッションを終了するかどうかを確認するよう求められます。

---

## ▼ インストールセッションを終了するには

インストールが完了すると、「インストールが完了しました」 ページが表示されません。メモリー不足など、インストールに関する問題はこのページに表示されます。また、このページからインストールサマリーおよびログを参照することができます。

- 1 「サマリーの表示」または「ログの表示」 ボタンをクリックすると、インストールに関する情報が表示されます。
  - インストールサマリー。インストールされた各製品コンポーネントおよび指定した設定をリストにして表示します。「今すぐ設定」を選択した場合、このサマリーファイルにはすべての設定値が記録されます。
  - インストールログ。インストーラによるコンポーネントのログメッセージを表示します。

この情報は次の場所に保存されており、いつでもアクセスできます。

Solaris OS の場合: `/var/sadm/install/logs`

Linux および HP-UX の場合: `/var/opt/sun/install/logs`

Java ES ログの詳細については、[200 ページの「インストールログファイルの検証」](#)を参照してください。

- 2 インストール後の手順を表示するには、このインストールガイドを自動的に表示するチェックボックスを選択します。  
インストール時に拡張設定を行なっている場合もありますが、ほとんどの製品コンポーネントでは追加設定が必要です。手順については、[第6章](#)を参照してください。
- 3 「閉じる」をクリックしてインストーラを終了します。  
これでインストールセッションは完了です。インストールされた製品コンポーネントは、インストール後の作業をすべて完了したあとで開始する必要があります。[104ページ](#)の「[次の手順](#)」に進みます。
- 4 正常なインストールを登録します。  
Java ES インストールが正常に完了したあと、インストーラを起動したコンソールまたは端末ウィンドウで Java ES レポータインストールユーティリティーが自動的に起動します。レポータがインターネット経由で Sun にアクセスするために使用するプロキシの URL または IP アドレスを指定することを求められます。その他の入力はありません。

---

注 - Java ES レポータの詳細な説明については、[30ページ](#)の「[Java ES レポータのしくみ](#)」を参照してください。

---

## コンポーネントの追加

インストーラを再び実行し、追加のコンポーネントをインストールできます。インストーラは、インストール済みコンポーネントを検出し、これらを使用して、追加されたコンポーネントの依存関係を設定します。インストール済み製品コンポーネントは、「ソフトウェアコンポーネントの選択」ページで無効になっています。

たとえば、今回のインストールで Access Manager とそれに必要なコンポーネントをインストールしたとします。そのあとで、Portal Server をインストールすることになりました。Access Manager に対する Portal Server の依存性を満たすために、Access Manager の既存のインスタンスが使用されます。Access Manager を再インストールするように求められることはありません。

---

注 - Java ES がすでにインストールされているホストに製品コンポーネントを追加するときに、すでにインストールおよび設定済みの製品コンポーネントがその新しい製品コンポーネントで使用される場合は、必ず正しいパスとパスワードを使用するようにしてください。正しいパスとパスワードを忘れてしまった場合は、製品コンポーネントをそのホストに追加する前に、インストール済みコンポーネントの「インストールサマリー」を参照してください。

---

## 次の手順

インストーラによる Java ES のインストールが完了したなら、次の手順に進みます。

- [第6章](#)には、インストール後の設定の手順が示されています。
- [150 ページの「インストール後の確認」](#)には、ここで行ったインストール作業が正常に実行されたかを確認する手順が示されています。

# テキストベースのインタフェースによるインストール

---

この章では、対話的なテキストベースのインタフェースを使用して、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) ソフトウェアをインストールする方法を説明します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 105 ページの「インストールの前に」
- 107 ページの「テキストベースモードでのインストーラの実行」
- 117 ページの「コンポーネントの追加」
- 117 ページの「次の手順」

## インストールの前に

この章で説明する作業を開始する前に、インストールの順序を作成し、インストールに関する一般的な要件や前提条件をすべて満たしておいてください。これらの作業を完了すると、インストールの準備ができます。

この節で説明する内容は、次のとおりです。

- 105 ページの「前提条件の確認」
- 106 ページの「ソフトウェアの入手」
- 106 ページの「テキストベースのインタフェースの使用法」

## 前提条件の確認

今回のリリースの Java ES に固有の前提条件については、38 ページの「インストール前提条件の確認」を参照してください。

システム要件については、『Sun Java Enterprise System 5 リリースノート (UNIX 版)』の「プラットフォームの要件と問題点」を参照してください。

インストールの順序に影響する可能性のある一般的な状況についての情報は、表 2-1 を参照してください。

## ソフトウェアの入手

- ダウンロードの場合。Java ES インストールバンドルをダウンロードしたディレクトリに移動し、バンドルを展開します。例:

```
unzip java_es-5-solaris-sparc.zip
```

Copyright ファイル、README ディレクトリ、およびオペレーティングシステムのディレクトリ (Solaris\_sparc など) が表示されます。オペレーティングシステムのディレクトリには、Product ディレクトリ、release\_info ファイル、installer スクリプトがあります。

- DVD の場合。プラットフォームと一致する名前の DVD ディレクトリに移動します。

Java ES ソフトウェアの入手方法の詳細については、[41 ページ](#)の「[Java ES ソフトウェアの入手](#)」を参照してください。

## テキストベースのインタフェースの使用法

テキストベースのインストーラでは、グラフィカルインタフェースは表示されず、一連の質問の形式で情報が要求されます。次の表は、インストーラのテキストベースのプロンプトに応答する方法の説明です。

表 4-1 テキストベースインストーラのプロンプトに対する応答

| 操作                              | 入力                                                                                                                                                                            |
|---------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 角カッコ ([ ]) 内に示されているデフォルト値を受け入れる | Return キーを押します。                                                                                                                                                               |
| リストから項目を選択する                    | 項目の番号を入力し、複数の場合はコンマで区切り、Return キーを押します。空白文字は使用できません。たとえば、リスト内の項目 2 を選択するには、2 と入力して Return キーを押します。<br><br>項目 1、3、4 を選択するには、1,3,4 と入力して Return キーを押します。                        |
| リストに含まれる項目の選択を解除する              | 項目番号の前にマイナス記号 (-) を入力し、複数の場合はコンマで区切り、Return キーを押します。空白文字は使用できません。たとえば、リスト内の項目 2 の選択を解除するには、-2 を入力して Return キーを押します。<br><br>項目 1、3、4 の選択を解除するには、-1,-3,-4 と入力して Return キーを押します。 |
| テキストフィールドに値を指定する                | 値を入力し、Return キーを押します。                                                                                                                                                         |

表 4-1 テキストベースインストーラのプロンプトに対する応答 (続き)

| 操作         | 入力                                                                                                                                                    |
|------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| パスワードを指定する | パスワードを入力し、Return キーを押します。<br>パスワードは端末ウィンドウには表示されません。<br>注意: Java ES インストーラでは、管理パスワードに空白は使用できません。また、次の記号も使用できません。 ; & ( ) !   < > ' " \$ ^ \ # / , @ % |
| 前のページに戻る   | 左向きの不等号 (<) を入力し、Return キーを押します。                                                                                                                      |
| セッションを終了する | 感嘆符 (!) を入力し、Return キーを押します。                                                                                                                          |

## テキストベースモードでのインストーラの実行

installer コマンドのオプションの詳細については、[付録 B](#) を参照してください。

インストール中に問題が発生した場合は、[第 9 章](#) のトラブルシューティング情報を参照してください。

### ▼ インストールを開始するには

- 1 root としてログインしていない場合は、スーパーユーザーになります。
- 2 テキストベースのインストーラを起動します。  

```
./installer -nodisplay
```

「ようこそ」情報が表示されます。
- 3 Return キーを押して、「ソフトウェアライセンス契約」を表示します。  
Return キーを押し続けて、契約書を最後まで読みます。
- 4 ライセンス契約の条項に同意する場合は、yes と入力して Return キーを押します。  
ライセンス契約のすべての条項に同意しない場合は、Return キーを押すことによってデフォルトの no を選択します。インストールセッションが終了します。

### ▼ コンポーネントと言語を選択するには

インストーラは、すでにインストールされている Java ES 製品コンポーネントのバージョンがないかホストを調べます。一部の製品コンポーネント (Application Server、Message Queue、Java DB、および HADB) は、インストーラによってアップグレードできます。例:

このシステムでは次のコンポーネント製品が検出されました。バンドル版の製品の場合は、インストール対象として選択すればアップグレードできます。その他の製品は、次の「ソフトウェアコンポーネントの選択 - メインメニュー」では無効 (\* \*) として表示されます。

High Availability Session Store 4.4 v4.4.2.7 - アップグレード可, 互換  
Sun Java(TM) System Message Queue v3.6.25 - アップグレード可, 互換

<続行するには ENTER キーを押してください>

このほかに互換性のないコンポーネントが検出された場合は、それらを手作業で削除またはアップグレードする必要があります。Java ES インストーラを使わずにアップグレードする手順については、『Sun Java Enterprise System 5 アップグレードガイド (UNIX 版)』を参照してください。互換性に関する問題が解決されたら、インストーラを続行できます。

---

注 - HP-UX では、Sun Cluster コンポーネント、Directory Preparation Tool、HADB、またはサードパーティーの Web コンテナはサポートされません。Linux での「今すぐ設定」設定オプションによるインストールの場合、Sun Cluster コンポーネントはサポートされず、サードパーティーコンテナは BEA WebLogic のみがサポートされます。

---

#### ソフトウェアコンポーネントの選択 - メインメニュー

-----

注: \*\* \*" は、選択が無効であることを示します。

- [ ] 1. Directory Preparation Tool 6.4
- [ ] 2. Web Server 7.0
- [ ] 3. Sun Cluster Geographic Edition 3.1 2006Q4
- [ ] 4. Web Proxy Server 4.0.4
- [ ] 5. Directory Server Enterprise Edition 6.0
- [ ] 6. High Availability Session Store 4.4
- [ ] 7. Access Manager 7.1
- [ ] 8. Sun Cluster 3.1 8/05
- [ ] 9. Message Queue 3.7 UR1
- [ ] 10. Application Server Enterprise Edition 8.2
- [ ] 11. Service Registry 3.1
- [ ] 12. Portal Server Secure Remote Access 7.1
- [ ] 13. Monitoring Console 1.0
- [ ] 14. Portal Server 7.1
- [ ] 15. Java DB 10.1
- [ ] 16. Sun Cluster Agents 3.1
- [ ] 17. すべての共有コンポーネント

インストールする製品のリストをコンマで区切って入力するか、または R を入力してリストを更新します

[ ] {"<" 戻る, "!" 終了};

- 1 インストールするコンポーネントに対応する番号をコンマで区切って入力し、**Return** キーを押します。

「ソフトウェアコンポーネントの選択 — 選択内容の確認」というリストが表示され、選択したコンポーネントが表示されます。

- 2 選択したコンポーネントが正しければ、**Return** キーを押します。

選択した各コンポーネントのサブコンポーネントをインストールするかどうかを、インストーラから確認されます。例:

コンポーネントの選択 - "Directory Server Enterprise Edition 6.0"

```

*[X] 1. Directory Server Core Server
*[X] 2. Directory Service Control Center
*[X] 3. Directory Server Enterprise Edition 6 コマンドラインユーティリティー
*[X] 4. Directory Proxy Server 6 Core Server
```

インストールするコンポーネントのリストをコンマで区切って入力します (すべてを選択する場合は **D** を入力)  
[D] {"<" 戻る, "!" 終了}

サブコンポーネントがない製品コンポーネントもあります。その場合は製品コンポーネントだけが表示され、応答する必要はありません。サブコンポーネントが表示された場合は、応答する必要があります。

- 3 サブコンポーネントの選択を完了します。

サブコンポーネントの選択がすべて完了すると、インストーラによって多言語パッケージをインストールするかどうかを確認されます。

- 4 選択したすべてのコンポーネントに多言語パッケージをインストールする場合は、「**Yes**」を選択して **Return** キーを押します。

デフォルトでは、選択したコンポーネントの多言語パッケージがインストールされます。「**No**」を選択した場合は、英語版のパッケージのみがインストールされます。この場合は、選択を確認する画面が表示され、ローカライズ版のパッケージをあとでインストールすることはできないという警告が表示されます。

- 5 製品コンポーネントの依存性に関するエラーを解決します。

コンポーネントの依存性に問題がある場合、問題の種類に応じて「製品の依存関係のチェック」エラーまたは警告が表示されます。一般的な問題には次のものがあります。

- ローカル依存性が満たされていない

この場合、「ソフトウェアコンポーネントの選択」に戻り、ローカル依存関係を解決できるように、適切な製品コンポーネントを選択します。

- あとで行うインストール後設定の間にリモート依存性が満たされる

リモートインストールを指定するつもりがない場合、「ソフトウェアコンポーネントの選択」に戻り、ローカルで依存性を満たすように適切な製品コンポーネントを選択します。

- 製品コンポーネントの以前のバージョンがローカルホストにすでにインストールされている

互換性のないバージョンの製品コンポーネントが見つかったら、インストーラを終了して、その互換性のないバージョンをアップグレードまたは削除する必要があります。

## 6 共有コンポーネントの依存性に関するエラーを解決します。

ホスト上で互換性のないバージョンの共有コンポーネントが見つかった場合は、これらをアップグレードするかどうかを確認されます。「アップグレードの必要がある共有コンポーネント」リストを確認し、それらの共有コンポーネントをインストーラが自動的にアップグレードしても問題がないかどうか判断してください。



注意 - JES 以外のアプリケーションについては、ホストに存在する依存関係を確認せずに共有コンポーネントをアップグレードしないでください。必要となる共有コンポーネントの Java ES バージョンと、これらの既存のアプリケーションとの間に互換性があるかどうかを最初に確認する必要があります。アップグレードについては、『Sun Java Enterprise System 5 アップグレードガイド (UNIX 版)』を参照してください。

- 1 (デフォルト) を入力するか Return キーを押すと、インストーラはそれらの共有コンポーネントを自動的にアップグレードします。
- 2 を入力してインストールセッションを取り消した場合は、それらの共有コンポーネントを手動でアップグレードできます。

2 を入力した場合は、「アップグレードの必要がある共有コンポーネント」リストにある共有コンポーネントを削除またはアップグレードしないと、インストールを続行できません。

## 7 Solaris OS の場合は、インストーラが J2SE SDK をアップグレードするべきかどうかを指定します。

Solaris OS で、互換性のないシステム全体バージョンの J2SE SDK が検出された場合、「J2SE Software Development Kit のアップグレードが必要です」ページが表示されます。実行する処理についての選択肢が表示されます。(1) SDK バージョンを自動的にアップグレードするか、または (2) 手動でアップグレードするかを選択します。ページの内容を確認してから、アップグレードを自動または手動のどちらで行うかを決定します。デフォルト値は「自動的に」です。

必要なバージョンよりも上のバージョンの JDK が検出され、1 つ以上の JDK パッケージが存在しない場合 (例: 64 ビット JVM)、インストーラはこのバージョンを

互換性のないバージョンとして扱います。そのような場合、選択肢 (1) または (2) を選択すると、Java ES が要求する JDK のバージョンに JDK がダウングレードされます。

## ▼ インストールディレクトリを指定し、システムチェックを開始するには

- 1 選択した製品コンポーネントのデフォルトのインストール先をそのまま使用するか、またはデフォルトの場所を変更して **Return** キーを押します。

注-デフォルト値をそのまま使わずに別の値を入力することを選択した場合は、その項目をインストーラまたはコンフィギュレータから要求された場合には、選択したその値を常に指定する必要があります。

選択された各製品コンポーネントについて、デフォルトのインストールディレクトリが表示されます。例:

インストールディレクトリ

=====

製品ごとにインストール先のディレクトリの名前を入力してください:

```
Directory Server [/opt/SUNWdsee] {"<" 戻る, "!" 終了}
Web Server [/opt/SUNWwbsvr7] {"<" 戻る, "!" 終了}
Web Server インスタンス [/var/opt/SUNWwbsvr7] {"<" 戻る, "!" 終了}
```

- 2 システムチェックによって見つかった問題をすべて確認します。

インストールディレクトリの選択が完了すると、インストーラは、選択したコンポーネントに基づいて、ディスク容量、メモリー、スワップ空間、オペレーティングシステムのパッチ、およびオペレーティングシステムリソースのチェックを自動的に開始します。次の表の左側の列には、システムチェックの結果表示されるメッセージを示しています。右の列は、それぞれの状況に対して必要となる対処方法を示しています。

| 表示されるメッセージ             | 対処方法          |
|------------------------|---------------|
| システムはインストールの準備が完了しています | インストールを続行します。 |

| 表示されるメッセージ             | 対処方法                                                                                                                                                 |
|------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| システムはインストールの準備が完了しています | メモリーまたはスワップ空間の量が推奨レベルに達していないことを示す警告メッセージを含む。<br><br>インストールを続行しますが、インストールの完了後にメモリーまたはスワップ空間を追加してください。メモリーまたはスワップ空間を追加しない場合、パフォーマンスに深刻な影響が生じる可能性があります。 |
| システムはインストールの準備ができていません | 必要なパッチがインストールされていない場合は、そのパッチ番号が表示されます。インストーラを停止しなくても報告された問題を解決できる場合は、そのようにしてからインストールを続行します。                                                          |

メモリーの不足など、問題によってはインストールを続行できる場合もありますが、その他の問題(ディスク容量の不足など)の場合は、問題を解決しないとインストーラの処理を続行できません。

**Solaris 10:** インストーラを非大域ゾーンで実行している場合、メモリー情報を取得できないことを知らせるメッセージが表示されます。

### 3 適用されていないオペレーティングシステムパッチをインストールします。

インストールを続行する前に、適用されていないパッチの大半をインストールする必要があります。方法については、[37 ページの「パッチをインストールするには」](#)を参照してください。場合によっては、適用されていないパッチをインストールせずに続行できます。この場合、処理を続けようとする、インストールが失敗するか、またはソフトウェアが正しく機能しない可能性があることを示す警告が表示されます。インストールを続行するときは、適用していないパッチをインストールしないでインストールすることを明示的に承認する必要があります。

### 4 システムがインストールできる状態になったら、**Return** キーを押して続行します。インストールする設定の種類とグローバル設定の指定を求められます。

## ▼ 設定の種類と共通サーバー設定を指定するには

### 1 次のオプションから設定の種類を指定します。

- **今すぐ設定 (デフォルト):** インストール時に設定可能な製品コンポーネントを設定できます。「今すぐ設定」の設定作業には、共通サーバー設定や、選択した製品コンポーネントの設定情報の入力が含まれます。

---

注-一部の製品コンポーネントは、インストール時に設定できません。これらの製品コンポーネントを選択した場合、インストール後にこれらの製品コンポーネントの設定が必要なことを知らせる警告が表示されます。

---

- あとで設定:パッケージのインストールに必要な最小限の値だけを入力します。インストーラは、詳細設定を行わずに処理を先に進めます。「あとで設定」設定オプションを選択する場合、101 ページの「ソフトウェアをインストールするには」に進みます。
- 2 「今すぐ設定」の場合は、管理者ユーザーの ID とパスワードの入力方法を選択します。

管理者ユーザーの ID とパスワードを使用する製品コンポーネントを複数選択した場合、選択することを求められます。

---

注-Java ES インストーラでは、管理パスワードに空白は使用できません。また、次の記号も使用できません。 ; & ( ) ! | < > ' " \$ ^ \ # / , @ %

---

- 「次の情報をすべての管理者アカウントに使用する」。(デフォルト)デフォルトをそのまま使用する場合は、管理者ユーザーの ID とパスワードを1度だけ入力します。これらのフィールドは、これ以降設定ページに表示されなくなります。
  - 「製品ごとに異なる管理者アカウントを使用する」。このオプションを選択する場合は、選択した製品コンポーネントのうち、管理者 ID とパスワードを使用するコンポーネントのそれぞれの設定ページで、管理者ユーザー ID とパスワードを入力することを求められます。
- 3 「今すぐ設定」インストールの場合は、共通サーバー設定を指定します。
- 選択したコンポーネントに対応する共通サーバー設定とそのデフォルト値のリストが、インストーラによって表示されます。例:

共通サーバー設定の指定

```

ホスト名の入力 [myComputer] {"<" 戻る, "!" 終了}
DNS ドメイン名の入力 [example.com] {"<" 戻る, "!" 終了}
IP アドレスの入力 [192.168.255.255] {"<" 戻る, "!" 終了}
サーバー管理ユーザー ID の入力 [Admin] {"<" 戻る, "!" 終了}
管理ユーザーパスワードの入力 (パスワードは 8 文字以上でなければなりません) [] {"<" 戻る, "!" 終了}
管理ユーザーパスワードの確認 [] {"<" 戻る, "!" 終了}
システムユーザーを入力してください [root] {"<" 戻る, "!" 終了}
システムグループを入力してください [root] {"<" 戻る, "!" 終了}

```

デフォルト値をそのまま使用するか、または別の値を使用してこれらのグローバルパラメータを設定します。パラメータの詳細については、『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の「共通設定」を参照してください。

## ▼ コンポーネントの設定データを指定するには

「今すぐ設定」設定オプションでのインストールの場合、インストーラは、選択した製品コンポーネントのうち、インストール時に設定可能なコンポーネントの設定に対する質問を1つ以上表示します。選択を行う際には、次の情報が役立ちます。

- 各ページの構成値の詳細については、各ページの下部にあるオンラインヘルプボタンをクリックします。これらの情報については、『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の第3章「設定情報」も参照してください。
- 設定情報を収集するための設定ワークシートが、『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の第4章「設定ワークシート」に用意されています。
- 次の製品コンポーネントはJava ES インストーラでは設定できないので、インストール後に設定する必要があります。Directory Proxy Server、Java DB、Monitoring Console、Service Registry、およびSun Cluster ソフトウェア。
- Sun Cluster ソフトウェア自体はインストール時に設定できませんが、インストール後の設定を簡単にするためにリモートサポートを有効にするオプションがあります。デフォルトはYes です。

---

ヒント-インストールが完了したあとで、次の場所にある「インストールサマリー」で設定情報を確認できます。

Solaris OS の場合: /var/sadm/install/logs

Linux および HP-UX の場合: /var/opt/sun/install/logs

---

### 1 各製品コンポーネントの設定を指定します。

デフォルト値を受け入れるか、または製品コンポーネントのワークシートで収集した情報を使用して、各製品コンポーネントに関するインストーラの質問に答えます。

標準的な設定の質問は次のように表示されます。

Web Server: インスタンス設定を指定してください

サーバー名 [myComputer.example.com] {"<" 戻る, "!" 終了}

HTTP ポートの入力 [80] {"<" 戻る, "!" 終了}

実行時 UNIX ユーザー ID を入力してください [webservd] {"<" 戻る, "!" 終了}

ドキュメントルートディレクトリを入力してください [/var/opt/SUNWwbsvr7/docs] {"<" 戻る, "!" 終了}

---

注 - Access Manager を Portal Server と一緒にインストールする場合は、Access Manager に対してレルム (Access Manager 7.x 互換) モードまたは旧バージョン (Access Manager 6.x 互換) モードを選択できます。Portal Server には旧バージョンモードが必要であることを知らせるインストーラメッセージを無視します。ただし、Access Manager が Directory Server と一緒に設定され、データストアとして AM SDK が設定されている場合のみ、Portal Server はレルムモードをサポートします。Communications 製品を使用する場合は、旧バージョンモードが必要です。

---



---

注 - Web Server を Web コンテナとして使用するときは、「Web Server: 設定タイプを選択してください」ページで Web Server 設定タイプモードを質問されたときに、「エージェント」ではなく「サーバー」に設定する必要があります。デフォルト値は「サーバー」です。

---

## 2 選択した製品コンポーネントとサブコンポーネントのリストを確認します。

設定値を設定すると、選択されたコンポーネントとサブコンポーネントの「インストール準備完了」リストがインストーラによって表示されます。例:

インストール準備完了

-----

次のコンポーネントがインストールされます。

製品: Java Enterprise System 5

アンインストールの場所: /var/sadm/prod/SUNWentsys5

必要な容量: 199.10 M

-----

Web Server 7.0

Web Server CLI

Web Server Core

Web Server サンプル

Directory Preparation Tool 6.4

Directory Server Enterprise Edition 6.0

Directory Server Core Server

Directory Service Control Center

Directory Server Enterprise Edition コマンド行ユーティリティー

Directory Proxy Server Core Server

Monitoring Console 1.0

変更する必要がある場合は、これまでの質問の中で変更が必要なものが表示されるまで、<を入力して Return キーを押します。ここには共有コンポーネントは表示されませんが、それらはすでに確認されており、選択した製品コンポーネントが必要とする場合にはインストールされます。

## ▼ ソフトウェアをインストールするには

「インストール準備完了」リストに問題がなければ、インストールを開始できません。

---

注-Linuxの場合は、インストーラの実行中に rpm コマンドを使用しないでください。HP-UX の場合は、swlist、swcopy、または swinstall コマンドを使用しないでください。Java ES インストールの実行中にこれらのコマンドを使用すると、インストーラがハングアップする可能性があります。

---

- 1 インストールを開始するには、**Return** キーを押してデフォルトの「1」を受け入れます。

インストール処理が開始され、進捗バーにインストールの状況が表示されます。例:

Java Enterprise System

```
| -1%-----25%-----50%--
```

インストールのサイズと複雑さによっては、この処理に長い時間がかかる場合があります。

インストールが正常に完了すると、「インストールが完了しました」というメッセージが表示されます。

- 2 インストールサマリーとインストールログを調べます。

インストールが完了すると、メモリーの不足など、インストール時に見つかった問題が画面に表示されます。次のファイルにも有効な情報が含まれています。

- [1] インストールサマリー。インストールされた各コンポーネントおよび指定した設定をリストにして表示します。「今すぐ設定」を選択した場合、このサマリーファイルにはすべての設定値が記録されます。
- [2] インストールログ。インストーラによるコンポーネントのログメッセージを表示します。

インストール後、これらのファイルは次の場所に配置されます。

Solaris OS の場合: /var/sadm/install/logs

Linux および HP-UX の場合: /var/opt/sun/install/logs

Java ES ログの完全なリストについては、[200 ページ](#)の「インストールログファイルの検証」を参照してください。

- 3 インストーラを終了します。

これでインストーラセッションは完了です。インストールされた製品コンポーネントは、インストール後の作業をすべて完了したあとで開始する必要があります。[117 ページ](#)の「次の手順」に進みます。

#### 4 正常なインストールを登録します。

Java ES インストールが正常に完了したあと、インストーラを起動したコンソールまたは端末で Java ES レポータインストールユーティリティが自動的に起動します。レポータがインターネット経由で Sun にアクセスするために使用するプロキシの URL または IP アドレスを指定することを求められます。その他の入力はありません。

---

注 - Java ES レポータの詳細な説明については、30 ページの「Java ES レポータのしくみ」を参照してください。

---

## コンポーネントの追加

インストーラを再び実行し、追加のコンポーネントをインストールできます。インストーラは、インストール済みコンポーネントを検出し、これらを使用して、追加される製品コンポーネントの依存関係を設定します。インストール済み製品コンポーネントは、「ソフトウェアコンポーネントの選択」ページで無効になっています。

たとえば、今回のインストールで Access Manager とそれに必要な製品コンポーネントをインストールしたとします。そのあとで、Portal Server をインストールすることになりました。Access Manager に対する Portal Server の依存性を満たすために、Access Manager の既存のインスタンスが使用されます。Access Manager を再インストールするように求められることはありません。

---

注 - Java ES がすでにインストールされているホストに製品コンポーネントを追加するときに、すでにインストールおよび設定済みの製品コンポーネントがその新しい製品コンポーネントで使用される場合は、必ず正しいパスとパスワードを使用するようにしてください。正しいパスとパスワードを忘れてしまった場合は、製品コンポーネントをそのホストに追加する前に、インストール済みコンポーネントの「インストールサマリー」を参照してください。

---

## 次の手順

インストーラによる Java ES のインストールが完了したなら、次の手順に進みます。

- **第6章**には、インストール後の最終的な設定に関する手順が示されています。
- **150 ページの「インストール後の確認」**には、ここで行ったインストール作業が正常に実行されたかを確認する手順が示されています。



## サイレントモードでのインストール

---

サイレントインストールは、類似した設定を共有している複数のホストに、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) を対話処理なしでインストールする方法です。この章では、サイレントモードを使用して Java ES ソフトウェアをインストールする方法を説明します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 119 ページの「サイレントインストールの作業手順」
- 120 ページの「状態ファイルの作成」
- 124 ページの「プラットフォームに適した状態ファイル ID の作成」
- 125 ページの「サイレントモードでのインストーラの実行」
- 127 ページの「次の手順」

### サイレントインストールの作業手順

サイレントインストールを実行するには、最初に `installer` コマンドのサイレントインストール構文を使用して対話式インストールを実行します。対話セッションの間、インストーラへの応答がキャプチャーされ、名前と値のペアの集合として状態ファイルに記録されます。名前と値の各ペアとは、インストール処理における 1 つのプロンプトまたはフィールドを表します。この状態ファイルを入力として使用して、ほかのホストでインストーラを実行します。このプロセスにより、複数のホストに同一設定を配備することができます。

インストーラは、異なるバージョンの Java ES の状態ファイルを実行することはできません。つまり、Java ES 5 を使用して状態ファイルを作成した場合は、この状態ファイルを使用して Java ES 2005Q4 をインストールすることはできません。

次の表は、サイレントインストールでの主な作業の一覧です。右の列は、それぞれの説明へのリンクになっています。

表 5-1 サイレントインストーラの作業

| 作業                                                                 | 説明の場所                               |
|--------------------------------------------------------------------|-------------------------------------|
| 1. ホストが Java ES インストールの前提条件を満たしていることを確認します。                        | 38 ページの「インストール前提条件の確認」。             |
| 2. 対話式インストールセッションを実行して、状態ファイルを生成します。                               | 120 ページの「初期状態ファイルの生成」               |
| - グラフィカルインストーラを使用する場合                                              | 第 3 章                               |
| - テキストベースのインストーラを使用する場合                                            | 第 4 章                               |
| 3. 状態ファイルを別のホストにコピーして、そのホスト用に状態ファイルを編集します。                         | 121 ページの「状態ファイルの編集」                 |
| 4. (オプション) 状態ファイルが生成されたプラットフォームと異なるプラットフォーム上で実行するために、状態ファイルを編集します。 | 124 ページの「プラットフォームに適した状態ファイル ID の作成」 |
| 5. 各ホスト上でサイレントインストールセッションを実行します。                                   | 125 ページの「サイレントモードでのインストーラの実行」       |

## 状態ファイルの作成

状態ファイルを作成するには、インストーラの対話式セッションを実行する必要があります。インストーラが生成する状態ファイルを使用することで、リアルタイムの依存性チェックとエラーレポートを活用することができます。



注意-状態ファイルは手動で作成しないでください。この方法では、インストール時、設定時、またはサーバーの起動時に問題が発生する可能性があります。

## 初期状態ファイルの生成

初期状態ファイルを作成するには、`installer` コマンドのパラメータを使用して対話式インストーラを実行し、インストーラにユーザーの回答を記録します。インストーラのページを進む過程で、回答がキャプチャーされ、状態ファイルが生成されます。製品コンポーネントのインストール順序はインストーラが決定するので、コンポーネントは任意の順序で指定できます。インストールが完了すると、指定された場所にある状態ファイルが利用可能になります。

このセッションでソフトウェアをインストールしない場合は、`-no` オプションを使用できます。

構文の例:

- グラフィカルインタフェースを使用して状態ファイルを作成するには、次のようにします。

```
./installer -saveState statefile_path
```

- テキストベースのインタフェースを使用して状態ファイルを作成するには、次のようにします。

```
./installer -nodisplay -saveState statefile_path
```

- このセッションでソフトウェアをインストールせずに、グラフィカルインタフェースを使用して状態ファイルを作成するには、次のようにします。

```
./installer -no -saveState statefile_path
```

installer コマンドの完全な構文については、[付録 B](#) を参照してください。

生成された状態ファイルの例については、[付録 C](#) を参照してください。

## 状態ファイルの編集

状態ファイルを作成したら、インストール先ホストに対してローカルパラメータが正しく設定されることを保証するために、生成された状態ファイルを編集する必要があります。これらのパラメータには、ホスト名、ドメイン名、IP アドレスなどの設定が含まれます。



注意-サイレントインストール用に作成した状態ファイルの一部のパラメータには、管理者パスワードなどの機密データが指定されます。配備しても安全なように、ファイルが保護されていることを確認してください。

初期状態ファイルの生成元と異なるプラットフォームへのインストールを計画している場合、状態ファイルの ID の変更が必要になる場合があります。

この節で説明する内容は、次のとおりです。

- [121 ページの「状態ファイルの編集のガイドライン」](#)
- [122 ページの「ローカルパラメータの編集」](#)
- [124 ページの「プラットフォームに適した状態ファイル ID の作成」](#)

### 状態ファイルの編集のガイドライン

状態ファイルを編集するときは、ここで示すガイドラインに従ってください。

- 値を編集する以外は、パラメータを変更しないでください。
  - 値が指定されていない場合でも、パラメータを削除しないでください。

- パラメータを追加しないでください。
- パラメータの順序を変更しないでください。
- 元のタイプと形式に注意し、新しい値を入力するときはそれに従ってください。  
例:
  - 古い値がホスト名の場合、ドメインの完全修飾名ではなく、ホスト名を入力します。
  - 古い値の先頭にスラッシュ (/) が付いている場合、新しい値の先頭にも必ずスラッシュを付けます。
- 削除する値の代わりに、ほかの値を入力します。必須パラメータの場合、そのパラメータが削除されているとインストールまたは設定に失敗する可能性があります。
- 元の値の大文字/小文字の区別を維持します。

## ローカルパラメータの編集

次の表は、インストールする製品コンポーネントやホストに応じて編集の必要があるパラメータを示しています。たとえば、状態ファイルを生成したホストが、インストール先のホストと同じドメインに含まれるか、などの条件が影響します。

各パラメータの説明については、『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の第3章「設定情報」にある表を参照してください。

表 5-2 サイレントインストールでよく編集される状態ファイルのパラメータ

| 構成要素     | パラメータ名             |
|----------|--------------------|
| 共通サーバー設定 | CMN_HOST_NAME      |
|          | CMN_DOMAIN_NAME    |
|          | CMN_IPADDRESS      |
|          | CMN_ADMIN_USER     |
|          | CMN_ADMIN_PASSWORD |
|          | CMN_SYSTEM_USER    |
|          | CMN_SYSTEM_GROUP   |

表 5-2 サイレントインストールでよく編集される状態ファイルのパラメータ (続き)

| 構成要素               | パラメータ名                                        |
|--------------------|-----------------------------------------------|
| Access Manager     | IS_WS_HOST_NAME                               |
|                    | IS_WS_INSTANCE_DIR (Web Server が Web コンテナの場合) |
|                    | CONSOLE_HOST                                  |
|                    | IS_SERVER_HOST                                |
|                    | IS_DS_HOST                                    |
|                    | IS_DS_HOSTNAME                                |
|                    | COOKIE_DOMAIN_LIST                            |
| Application Server | ASNA_ADMIN_HOST_NAME                          |
|                    | AS_WEB_SERVER_LOCATION                        |
|                    | AS_WEB_SERVER_PLUGIN_TYPE                     |
| Directory Server   | CREATE_INSTANCE                               |
|                    | DSEE_INSTANCE_DIR                             |
|                    | DSEE_INSTANCE_PORT                            |
|                    | DSEEE_INSTANCE_SSL_PORT                       |
|                    | DSEE_DN_MANAGER                               |
|                    | DSEE_INSTANCE_USER                            |
|                    | DSEE_INSTANCE_GROUP                           |
|                    | DSEE_INSTANCE_PASSWORD                        |
| DSEE_SUFFIX        |                                               |
| Portal Server      | PS_PORTALACCESS_URL                           |
|                    | 形式は //hostname.domainname :port+deploy_uri)   |
|                    | PS_DEPLOY_INSTANCE                            |

表 5-2 サイレントインストールでよく編集される状態ファイルのパラメータ (続き)

| 構成要素                               | パラメータ名                    |
|------------------------------------|---------------------------|
| Portal Server Secure Remote Access | SRA_SERVER_DOMAIN         |
|                                    | SRA_GW_HOSTNAME           |
|                                    | SRA_GW_DOMAIN             |
|                                    | SRA_GW_IPADDRESS          |
|                                    | SRA_NLP_HOSTNAME          |
|                                    | SRA_NLP_DOMAIN            |
|                                    | SRA_NLP_IPADDRESS         |
|                                    | SRA_RWP_HOSTNAME          |
|                                    | SRA_RWP_DOMAIN            |
|                                    | SRA_RWP_IPADDRESS         |
| Web Server                         | WS_ADMIN_HOST             |
| Web Proxy Server                   | CMN_WPS_INSTALLDIR        |
|                                    | WPS_ADMIN_USER            |
|                                    | WPS_ADMIN_PASSWORD        |
|                                    | WPS_ADMIN_PORT            |
|                                    | WPS_ADMIN_RUNTIME_USER    |
|                                    | WPS_INSTANCE_RUNTIME_USER |
|                                    | WPS_INSTANCE_PORT         |
|                                    | WPS_INSTANCE_AUTO_START   |
|                                    | WPS_PROXY_DOMAIN          |

## プラットフォームに適した状態ファイルIDの作成

状態ファイルは、状態ファイルが生成されたホストとプラットフォームの種類が同じであるホストでのみ実行できます。プラットフォームが異なる場合、状態ファイルIDを編集する必要があります。プラットフォーム別にタイプの異なる状態ファイルIDが存在します。

## ▼ インストーラを使用して状態ファイルIDを生成するには

この手順では、サイレントインストールを実行するプラットフォームでインストーラを実行することによって、状態ファイルIDを生成します。

---

注-次のコマンドは、コマンドを実行しているのと同じプラットフォームに対するIDを生成する場合にのみ正しく機能します。

---

- 1 rootとしてログインしていない場合は、スーパーユーザーになります。
- 2 インストーラが格納されているディレクトリに移動します。  
`cd installer-directory`
- 3 `-id` オプションを指定してインストーラコマンドを実行します。  
`./installer -id`  
このコマンドにより、暗号化されたIDが生成されます。
- 4 IDをコピーし、`STATE_BEGIN`パラメータおよび`STATE_DONE`パラメータの値として状態ファイルに貼り付けます。

次に、状態ファイル内の状態ファイルIDの例を示します。

```
[STATE_BEGIN Sun Java(tm) Enterprise System \
f31c7e86a64605bc5b9b629931a30b275a0eb447]
.
.
.
[STATE_DONE Sun Java(tm) Enterprise System \
f31c7e86a64605bc5b9b629931a30b275a0eb447]
```

## サイレントモードでのインストーラの実行

状態ファイルを生成したホストと同じオペレーティングシステムがインストールされているホストで、インストーラを実行するようにしてください。この操作を実行できない場合は、[124 ページの「プラットフォームに適した状態ファイルIDの作成」](#)を参照してください。

インストール中に問題が生じる場合は、[第9章](#)を参照してください。

## ▼ サイレントモードでインストーラを実行するには

インストールしようとしている製品コンポーネントの数とタイプによっては、時間がかかる場合があります。

- 1 状態ファイルがホスト用に正しく編集されていることを確認します。



注意-サイレントインストール用に作成した状態ファイルの一部のパラメータには、管理者パスワードなどの機密データが指定されます。配備しても安全なように、ファイルが保護されていることを確認してください。

- 2 rootとしてログインしていない場合は、スーパーユーザーになります。
- 3 インストーラユーティリティが格納されているディレクトリに移動します。

```
cd installer-directory
```

- 4 次の構文を使用してインストーラを実行します。

```
./installer -noconsole -state statefile
```

`-noconsole` ユーザーインタフェースを抑制し、インストーラをサイレントモードで起動します。

`-state` 指定された状態ファイルをサイレントインストールの入力として使用します。

`statefile` 状態ファイルへの絶対または相対パス名を指定します。

- 5 インストールが完了したら、次のホストに進み、手順1～4を繰り返します。

## ▼ サイレントインストールの進行状況を監視するには

- 1 サイレントインストールを監視するには、次のログファイルディレクトリに移動します。

Solaris OS の場合: `cd /var/sadm/install/logs`

Linux および HP-UX の場合: `cd /var/opt/sun/install/logs`

- 2 現在のインストールのログファイルを探します。

最初に共有コンポーネントがインストールされ、次に製品コンポーネントがインストールされます。`timestamp` 変数は、ログの作成時刻を表します。変数の形式は `MMddhhmm` です。

*MM* 月を示す  
*dd* 日付を示す  
*hh* 時間を示す  
*mm* 分を示す

- 3 `tail` コマンドを使用して、ログに書き込まれるメッセージを監視します。

```
tail -f logfile-name
```

`tail` プログラムを終了するには、`Ctrl+C` キーを押します。

## 次の手順

インストーラによる Java ES のインストールが完了したなら、次の手順に進みます。

- [第6章](#)には、インストール後の設定の手順が示されています。
- [150 ページの「インストール後の確認」](#)には、ここで行ったインストール作業が正常に実行されたかを確認する手順が示されています。



## インストール後の設定の実行

---

この章では、インストール後に Sun Java™ Enterprise System (Java ES) 製品コンポーネントの初期設定を実行する手順について説明します。この章に挙げられていない製品コンポーネントについては、インストール後の設定は必要ありません。ただし、Monitoring または Sun Cluster データサービスをインストールする場合は、これらの製品コンポーネントに関連するインストール後の作業が必要になる場合があります。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 130 ページの「この章の利用方法」
- 131 ページの「マニュアルページの確認」
- 133 ページの「Monitoring Console のインストール後の設定」
- 133 ページの「Sun Cluster のインストール後の設定」
- 134 ページの「Access Manager のインストール後の設定」
- 135 ページの「Application Server のインストール後の設定」
- 138 ページの「Directory Server のインストール後の設定」
- 139 ページの「HADB のインストール後の設定」
- 139 ページの「Java ES レポートのインストール後の設定」
- 140 ページの「Message Queue のインストール後の設定」
- 140 ページの「Portal Server および Portal Server Secure Remote Access のインストール後の設定」
- 141 ページの「Service Registry のインストール後の設定」
- 141 ページの「Web Proxy Server のインストール後の設定」
- 142 ページの「Web Server のインストール後の設定」
- 142 ページの「Sun Cluster データサービスの設定」
- 146 ページの「Java 仮想マシン (JVM) の設定」
- 146 ページの「ルート以外の ID による製品コンポーネントの設定」
- 147 ページの「次の手順」

## この章の利用方法

Java ES インストーラによるインストールが完了したあと、ほとんどの製品コンポーネントで追加の設定を行わないと、Java ES 環境が使える状態になりません。その作業の範囲は、選択した設定の種類(「今すぐ設定」または「あとで設定」設定オプション)や、Monitoring または Sun Cluster ソフトウェアによる高可用性を使用するために製品コンポーネントを設定するかどうかによって異なります。

インストール時に「あとで設定」設定タイプを選択した場合は、インストーラによって、製品コンポーネントパッケージファイルがパッケージ別のディレクトリに配置されます。パラメータの設定は行われておらず、実行時サービスを利用できないため、ほとんどの製品コンポーネントはそのままでは機能しません。「あとで設定」設定タイプを選択した場合のインストールを完了するために、多くの製品コンポーネントには設定ツールが用意されています。設定ツールを実行するとき、本書および各製品コンポーネントのマニュアルに記載されている手順に従ってさらに変更を加えることもできます。

この章の説明に従って作業する前に、Java ES コンポーネントをインストールしておく必要があります。製品のレジストリを調べるか、Solaris OS `pkginfo` コマンド、Linux `rpm` コマンド、または HP-UX `swlist` コマンドを使用すれば、コンポーネントパッケージがインストール済みであることを確認できます。コンポーネントに関連付けられたパッケージの一覧については、『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の第 5 章「インストール可能なパッケージの一覧」を参照してください。

インストールの間に設定された値を記録した概要レポートは、次の場所から参照できます。

Solaris OS の場合: `/var/sadm/install/logs`

Linux および HP-UX の場合: `/var/opt/sun/install/logs`

インストールの完了後、この章に記載されている手順に目を通し、インストールした製品コンポーネントを見つけます。製品コンポーネントの追加設定が必要ないことが判明した場合には、第 7 章の手順に従って製品コンポーネントを起動できます。

---

注 - Java ES 製品コンポーネントのデフォルトのインストール場所は、プラットフォームごとに異なる可能性があります。そのため、この章の説明では、これらの場所を表す変数がよく使用されています。たとえば、`ApplicationServer-base` は、プラットフォームの種類にかかわらず、Application Server のインストール先ディレクトリを表します。

---

## マニュアルページの確認

マニュアルページを持つコンポーネントの場合には、`MANPATH` 環境変数が正しく設定されていることを確認する必要があります。インストール後、Java ES コンポーネントのマニュアルページはデフォルトのディレクトリに配置されています。コンポーネントのマニュアルページの正しい場所が、`MANPATH` 環境変数にすでに設定されている場合もあります。マニュアルページの場所が存在していない場合は、その場所を `MANPATH` 環境変数に追加します。

次の表は、Java ES コンポーネントのマニュアルページのデフォルトの場所を示します。一覧中にコンポーネントがない場合、そのコンポーネントにはマニュアルページがありません。

表 6-1 マニュアルページのデフォルトの場所

| 構成要素                                          | マニュアルページの場所                                                                                                                                                                   |
|-----------------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Application Server                            | Solaris OS の場合: <code>/opt/SUNWappserver/share/man</code><br>Linux の場合: <code>/opt/sun/appserver/share/man</code><br>HP-UX の場合: <code>/opt/sun/appserver/man/share/man</code> |
| Common Agent Container                        | Solaris OS 上の Sun Cluster の場合: <code>/opt/SUNWcacao/man</code><br>Linux および HP-UX の場合: <code>/opt/sun/man</code>                                                              |
| Directory Server (および Directory Proxy Server) | Solaris OS の場合: <code>/opt/SUNWdsee/dsee6/man</code><br>Linux および HP-UX の場合: <code>/opt/sun/dsee6/man</code>                                                                  |
| Monitoring                                    | Solaris OS の場合: <code>/opt/SUNWmfwk/man</code><br>Linux の場合: <code>/opt/sun/man</code>                                                                                        |
| Sun Cluster                                   | Solaris OS の場合: <code>/usr/cluster/man/</code>                                                                                                                                |

### ▼ `MANPATH` 変数を更新するには

次の手順例は、C Shell を使用して Application Server のマニュアルページを確実に参照できるようにする方法を示しています。

- 1 `MANPATH` 環境変数をチェックして、正しいパスが設定されているかどうかを確認します。  
`env | grep MANPATH`
- 2 正しいパスが設定されていない場合には、Java ES コンポーネントのマニュアルページの場所を `MANPATH` 環境変数に追加します。

- Solaris OS では、次のコマンド例は現在のセッションを対象に MANPATH 環境変数を設定します。

```
setenv MANPATH {$MANPATH}:/usr/dt/man:/usr/man:/opt/SUNWappserver/share/man
```

ログインするたびに適用されるようにこの環境変数を設定するには、setenv コマンドの内容を、.login または .cshrc ファイルに追加します。

- Linux では、必要な MANPATH を指定して /etc/man.config ファイルを更新します。たとえば、/etc/man.config ファイルに次の行を追加します。

```
MANPATH /opt/sun/man
```

これで、新しいマニュアルページが、パスに関係なく常に参照できるようになります。

---

注-Linux 環境で、各ユーザーのシェル別に MANPATH を設定する場合、Solaris OS の場合の手順を使用します。これにより、ユーザーの個人設定を、/etc/man.config ファイルの設定よりも優先させることができます。MANSECT 変数も設定する必要があります。

---

- HP-UX では、必要な MANPATH を使用して /etc/MANPATH ファイルを更新します。たとえば、/etc/MANPATH ファイルに次の行を追加します。

```
/opt/sun/man
```

- 3 Linux では、MANSECT 環境変数の設定が必要になることがあります。

/etc/man.config ファイルの MANSECT 行を編集します。例:

```
and the MANSECT environment variablle is not set.
MANSECT 1:8:2:3:4:5:6:7:9:tcl:n:l:p:o
```

2 行目を次のように変更します。

```
MANSECT 1:8:2:3:4:5:6:7:9:tcl:n:l:p:o:5:dsconf:5dpconf:5dssd:5dsat:5dsoc
```

- 4 マニュアルページが表示されることを確認します。

たとえば、次のコマンドによって、Application Server の asadmin のマニュアルページが表示されます。

```
man asadmin
```

## Monitoring Console のインストール後の設定

インストールした製品コンポーネントが Java ES Monitoring を使用する場合は、Monitoring Framework を有効にする前に、多数のコンポーネントでインストール後の設定を行う必要があります。設定手順については、『Sun Java Enterprise System 5 監視ガイド (UNIX 版)』の第 3 章「Monitoring Console のインストールと使用」を参照してください。

## Sun Cluster のインストール後の設定

Solaris OS では、Sun Cluster ソフトウェアは、データベース、アプリケーションサーバー、Web サーバーなどのアプリケーションを管理するための高可用性プラットフォームを提供します。Sun Cluster ソフトウェアをインストールまたは設定する前に、クラスタ用に選択するハードウェアとソフトウェアの組み合わせが、現在サポートされている Sun Cluster 設定であることを確認します。

Sun Cluster ソフトウェアを使って管理できる Java ES 製品コンポーネントは、次のとおりです。

- Application Server
- Application Server EE (HADB)
- Directory Server
- Message Queue (インストール後の設定は不要)
- Web Server

インストールした Java ES 製品コンポーネントが環境に組み込まれる予定の場合、製品コンポーネントを設定する前に Sun Cluster フレームワークをまず設定する必要があります。次に、選択した Java ES 製品コンポーネントを設定します。

Communications Suite からコンポーネントをインストールする場合は、『Sun Java Communications Suite 5 インストールガイド』を参照してください。最後に、インストールした製品コンポーネントによっては、Sun Cluster データサービスを設定する必要があることもあります。

## フェーズ I. Sun Cluster フレームワーク

Java ES インストーラは、コア Sun Cluster パッケージの単純な pkgadd インストールを実行し、`/usr/cluster/bin` ディレクトリを設定します。インストール中には何の設定も行われません。したがって、インストール後の最初の作業は、『Sun Cluster Software Installation Guide for Solaris OS』の説明に従ってクラスタフレームワークを設定することです。

このフェーズでは、`scinstall` ユーティリティによって Sun Cluster パッケージが検証されます。パッケージが見つからない場合、エラーメッセージが表示されます。

このエラーが表示される場合は、正しい Sun Cluster パッケージがインストールされていることを確認する必要があります。『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の第 5 章「インストール可能なパッケージの一覧」を参照してください。

## フェーズ II. 製品コンポーネントデータサービス

Sun Cluster フレームワークと、その他の Java ES および非 Java ES コンポーネントのインストールと設定が完了すると、Sun Cluster エージェントソフトウェアを使って Sun Cluster データサービスを設定する準備が整います。

---

注 - Sun Cluster データサービスを設定するには、関連する Sun Cluster エージェントをインストール中に選択しておく必要があります。Sun Cluster のインストールシーケンスの例については、72 ページの「Sun Cluster ソフトウェアの例」を参照してください。

---

Sun Cluster データサービスの設定に関する指針については、142 ページの「Sun Cluster データサービスの設定」を参照してください。

## Access Manager のインストール後の設定

すべての Access Manager インストールについて、Web コンテナを再起動する必要があります。Web Server または Application Server 上で完全インストールを実行している場合、インストーラは Web コンテナインスタンスを停止するので、インスタンスの起動だけがが必要です。Access Manager の再起動手順については、157 ページの「Access Manager の起動と停止」を参照してください。

### 「今すぐ設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定

「今すぐ設定」でのインストールを実行したあとは、Access Manager を起動して Access Manager コンソールにログインすることができます。ただし、いくつかの最終的な設定手順を完了するまで、基本的なユーザー管理操作を実行することはできません。これらの手順は、すでにユーザーデータがプロビジョニングされた Directory Server インスタンスを Access Manager が使用するかどうかによって異なります。配備状況に応じて、次のような設定作業がさらに必要になることもあります。

- Directory Server プロビジョニングの状況を把握する
- Directory Server 参照整合性検査プラグインを有効にする
- Access Manager インデックスを Directory Server に追加する

これらの作業の実行手順については、『Sun Java System Access Manager 7.1 Postinstallation Guide』を参照してください。

## 「あとで設定」設定オプションでのインストール後の Access Manager の設定

「あとで設定」設定オプションでのインストールが完了すると、パッケージがインストールされ、Access Manager 設定スクリプト `AccessManager-base/bin/amconfig` を使って Access Manager を設定できるようになります。このプログラムの使用方法については、『Sun Java System Access Manager 7.1 Postinstallation Guide』を参照してください。

Solaris OS 上のサードパーティー製 Web コンテナ (BEA WebLogic または IBM WebSphere Application Server) 向けに Access Manager を設定する手順については、『Sun Java System Access Manager 7.1 Postinstallation Guide』を参照してください。

## Application Server のインストール後の設定

Application Server の場合、「今すぐ設定」設定オプションでのインストール完了後にインストール後の設定を行う必要はありません。

ロードバランス用に Application Server を設定する方法については、『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.2 高可用性 (HA) 管理ガイド』の第 5 章「HTTP 負荷分散の設定」の「HTTP 負荷分散の設定」の節を参照してください。

必要に応じて、Sun Cluster ソフトウェアと組み合わせて使用できるように Application Server を設定します。133 ページの「[Sun Cluster のインストール後の設定](#)」を参照してください。

### ▼ 「あとで設定」設定オプションでのインストール後に Application Server を設定するには

「あとで設定」設定オプションでのインストール後、インストール後のスクリプトを実行して Application Server 環境を設定する必要があります。スクリプトは、`ApplicationsServer8-base/bin/*` シェルスクリプトと `config/asenv` ファイルを、インストール中にインストールされるテンプレートから設定および作成します。「今すぐ設定」設定オプションでのインストールでは、インストール中に作成されます。

- 1 Java ES 5 配布の次のディレクトリに移動します。例:

```
cd /os_arch /Product/application_server/Tools
```

- 2 postInstall についての README ファイルを開き、手順に従って次の操作を行います。
  - a. postInstall スクリプトを実行します。  
./postInstall Application8Server-base ApplicationServer8Config-base
  - b. 新しいドメインを作成します。  
asadmin create-domain コマンドを使用して新しいドメインを作成するときは、次の2つのパラメータに値を指定します。adminPort および instancePort です。adminPort 値は、サーバーインスタンスによって使用される値と同じにすることができます。ただし、instancePort 値はサーバーインスタンスによって使用される値と同じにするべきではありません。
- 3 必要に応じて、ApplicationServer-base /samples/common.properties ファイルで環境変数を変更します。  
不明なパスがある場合は、ApplicationServer-base/config/asenv.conf ファイルからコピーすることができます。例:

---

**Solaris**のプロパティ

---

com.sun.aas.derbyRoot=/opt/SUNWappserver/appserver/derby

---

com.sun.aas.webServicesLib=/opt/SUNWappserver/appserver/lib

---

com.sun.aas.imqHome=/var/opt/SUNWappserver/domains/domain1/imq

---

com.sun.aas.imqBinDir=/usr/bin

---

com.sun.aas.imqUserMgr=/usr/bin/imqusermgr

---

com.sun.aas.imqLib=/usr/share/lib

---

com.sun.aas.installRoot=/opt/SUNWappserver/appserver

---

com.sun.aas.javaRoot=/usr/jdk/entsys-j2se

---

com.sun.aas.domains.dir=/var/opt/SUNWappserver/domains

---

#admin.password= 管理パスワードはデフォルトでは保存されません。ユーザーは、パスワードを入力し、それを手動で保存することができます。

---

admin.host=jws-v210-4

---

appserver.instance=server

---

appserver.instance.port=8080

---

admin.user=admin

---

**Solaris**のプロパティ

---

admin.port=4849

---

derby.port=1527

---

domain.name=domain1

---

server.cert.alias=slas

---

keystore=\${com.sun.aas.domains.dir}/\${domain.name}/config/keystore.jks

---

keystore.password=changeit

---

trustStore=\${com.sun.aas.domains.dir}/\${domain.name}/config/cacerts.jks

---

**Linux**および**HP-UX**のプロパティ

---

**#admin.password=**管理パスワードはデフォルトでは保存されません。ユーザーは、パスワードを入力し、それを手動で保存することができます。

---

server.cert.alias=slas

---

keystore=\${com.sun.aas.domains.dir}/\${domain.name}/config/keystore.jks

---

domain.name=domain1

---

com.sun.aas.imqHome=/var/opt/sun/appserver/domains/domain1/imq

---

com.sun.aas.imqUserMgr=/opt/sun/mq/bin/imqusermgr

---

com.sun.aas.domains.dir=/var/opt/sun/appserver/domains

---

admin.user=admin

---

appserver.instance=server

---

com.sun.aas.imqBinDir=/opt/sun/mq/bin

---

trustStore=\${com.sun.aas.domains.dir}/\${domain.name}/config/cacerts.jks

---

com.sun.aas.imqLib=/opt/sun/mq/share/lib

---

keystore.password=changeit

---

com.sun.aas.derbyRoot=/opt/sun/javadb

---

admin.port=4849

---

derby.port=1527

---

com.sun.aas.webServicesLib=/opt/sun/appserver/lib

---

admin.host=jws-linuxpc-2

---

com.sun.aas.javaRoot=/usr/jdk/entsys-j2se

Linux および HP-UX のプロパティ

---

com.sun.aas.installRoot=/opt/sun/appserver

---

appserver.instance.port=8080

---

- 4 必要に応じて、負荷分散するように **Application Server** を設定します。  
『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.2 高可用性 (HA) 管理ガイド』の第 4 章「負荷分散のための Web Server の設定」に記載されている手順を実行します。
- 5 必要に応じて、**Sun Cluster** ソフトウェアと組み合わせて使用できるように **Application Server** を設定します。

## Directory Server のインストール後の設定

「今すぐ設定」設定オプションでのインストール完了後は、Directory Server またはそのサブコンポーネントで追加設定を行う必要はありません。

### 「あとで設定」設定オプションでのインストール後の **Directory Server** および **Directory Proxy Server** の設定

Directory Server または Directory Proxy Server の「あとで設定」設定オプションでのインストールを実行後、コンポーネントを使用するには、その前にインスタンスを作成する必要があります。手順については、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Installation Guide』のパート I 「Installing Directory Service Control Center, Directory Proxy Server, Directory Server, and Directory Server Resource Kit」を参照してください。

### 「あとで設定」設定オプションでのインストール後の **Directory Server Control Center** の設定

Directory Service Control Center の「あとで設定」設定オプションでのインストールを実行後、初期化を完了し、必要な場合はシステム再起動時に Directory Service Control Center が再起動できるようにする必要があります。手順については、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 Installation Guide』のパート I 「Installing Directory Service Control Center, Directory Proxy Server, Directory Server, and Directory Server Resource Kit」を参照してください。

## HADB のインストール後の設定

「今すぐ設定」設定オプションでのインストール完了後に追加設定を行う必要はありません。

### 「あとで設定」設定オプションでのインストール後の HADB の設定

「あとで設定」設定オプションでのインストールが完了すると、パッケージがインストールされ、HADB の設定作業を実行できるようになります。HADB のインストール後設定手順と追加情報については、『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.2 高可用性 (HA) 管理ガイド』を参照してください。

必要に応じて、Sun Cluster ソフトウェアと組み合わせて使用できるように HADB を設定します。142 ページの「Sun Cluster データサービスの設定」を参照してください。

## Java ES レポータのインストール後の設定

Java ES レポータのインストール後に、レポータを無効にして Sun にレポートを送信しないようにしたり、無効にしたあとでレポータを再度有効にしたりすることができます。

### ▼ Java ES レポータを有効または無効にするには

- 1 レポータ設定ファイルを探します。

Solaris OS の場合: /etc/opt/SUNWmfwk/config/reporter/config.properties

Linux および HP-UX の場合: /etc/opt/sun/mfwk/config/reporter/config.properties

- 2 ファイルを編集して、**enabled** プロパティを **true** または **false** に設定します。

enabled=true # レポータは有効

enabled=false # レポータは無効

- 3 共通エージェントコンテナを再起動します。

```
cacaoadm start
```

## Message Queue のインストール後の設定

Message Queue の場合、インストール後に追加設定を行う必要はありません。

Message Queue が Sun Cluster 構成内に含まれる場合には、133 ページの「[Sun Cluster のインストール後の設定](#)」を参照してください。

よく行われる「省略可能な」作業は、Message Queue が自動的に起動されるように設定することです。それには、スーパーユーザーになり、`imqbrokerd.conf` 設定ファイル (Solaris OS の場合は `/etc/imq` 内、Linux および HP-UX の場合は `/etc/opt/sun/mq` 内) で、次のプロパティを編集します。

- **AUTOSTART:** 起動時にブローカを自動起動するかどうか (YES または NO) を指定します。デフォルト値は NO です。
- **ARGS:** ブローカ起動コマンドに渡すコマンド行オプションと引数を指定します。`imqbrokerd` のコマンド行オプションの一覧と説明については、『Sun Java System Message Queue 3 2005Q4 管理ガイド』を参照してください。(例: `-name instancename`)
- **RESTART:** 起動されたブローカに異常がある場合に自動再起動するかどうか (YES または NO) を指定します。デフォルト値は YES です。

Message Queue の追加設定については、『Sun Java System Message Queue 3 2005Q4 管理ガイド』を参照してください。たとえば、デフォルトの管理パスワードを変更することができます。

## Portal Server および Portal Server Secure Remote Access のインストール後の設定

「今すぐ設定」または「あとで設定」設定オプションでのインストールが完了すると、パッケージがインストールされ、『Sun Java System Portal Server 7.1 Configuration Guide』にある手順で Portal Server の設定作業を実行できるようになります。

- **今すぐ設定:**1 つのホストが Web Server を Web コンテナとして使用する状況のための基本的な設定は完了しています。特定の配備の設定手順については、『Sun Java System Portal Server 7.1 Configuration Guide』を参照してください。この設定が完了したら、このマニュアルに戻って最終的なインストールを確認し、問題があれば、トラブルシューティングを行ってください。
- **あとで設定:**ソフトウェアはホスト上にあり、Portal Server 設定ツールを実行する準備が整っています。この設定が完了したら、このマニュアルに戻って最終的なインストールを確認し、問題があれば、トラブルシューティングを行ってください。

サードパーティの Web コンテナを使用するように Portal Server を設定する手順については、『Sun Java System Portal Server 7.1 Configuration Guide』も参照してください。

## Service Registry のインストール後の設定

Service Registry は、インストール中に(「今すぐ設定」を使って)設定することはできません。

「あとで設定」設定オプションでのインストールが完了すると、パッケージがインストールされ、Service Registry の設定作業を実行できるようになります。Service Registry は root 以外のユーザーとして設定することをお勧めします。詳細については、『Service Registry 3.1 管理ガイド』の「Service Registry の設定」、特に作業『Service Registry 3.1 管理ガイド』の「インストール後の設定のあとでカスタムプロパティを使って Service Registry を root 以外のユーザーとして設定する」を参照してください。

## Web Proxy Server のインストール後の設定

「今すぐ設定」設定オプションでのインストール完了後に追加設定を行う必要はありません。

「あとで設定」設定オプションでのインストールが完了すると、パッケージがインストールされ、次の手順で Web Proxy Server を設定できるようになります。

### ▼ 「あとで設定」設定オプションでのインストール後に **Web Proxy Server** を設定するには

- 1 設定を含むプロパティファイルを作成します。

wps.properties ファイルに含まれる設定の例を示します。

```
WPS_JDK_HOME=/usr/jdk/entsys-j2se/jre
WPS_SERVER_ROOT=/opt/SUNWproxy
WPS_ADMIN_NAME=admin
WPS_ADMIN_PWD=admin123
WPS_ADMIN_PORT=8889
WPS_START_ON_BOOT=N
WPS_ADMIN_SERVER_USER=root
WPS_SERVER_NAME=jws-v60x-4.red.ipplanet.com
WPS_SERVER_PORT=8081
WPS_SERVER_ID=proxy-server1
WPS_ADMIN_SERVER_ID=proxy-admserv
WPS_SERVER_USER=root
```

- 2 ファイルを作成し終わったら、次のコマンドを実行します。

```
WebProxyServer-base/bin/proxy/bin/configureServer -l logfile -f path/wps.properties
```

## Web Server のインストール後の設定

Sun Cluster または 64 ビット設定を使用しない場合には、「あとで設定」設定オプションでのインストール後に、さらに設定を行う必要はありません。

- Sun Cluster に含まれる場合。この製品コンポーネントが Sun Cluster 設定に含まれる場合は、133 ページの「Sun Cluster のインストール後の設定」および 142 ページの「Sun Cluster データサービスの設定」に進みます。
- 64 ビットサポートの場合。Web Server に対して 64 ビットの JVM サポートを有効にする場合は、『Sun Java System Web Server 7.0 Installation and Migration Guide』の「Enabling 64-bit Support」を参照してください。

### ▼ 「あとで設定」設定オプションでのインストール後に **Web Server** を設定するには

「あとで設定」設定オプションでのインストールが完了すると、パッケージがインストールされ、次の手順で Web Server を設定できるようになります。

- 1 **Web Server** の実行時設定を作成します。  
『Sun Java System Web Server 7.0 Installation and Migration Guide』の「Configure Later Mode (Java ES Only)」に記載されている手順に従って Web Server コンフィギュレータを実行します。
- 2 共通サーバー設定を確認し、その設定を必要に応じて更新します。  
『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の「Web Server の設定情報」の表を参照してください。

## Sun Cluster データサービスの設定

クラスタの確立および製品コンポーネントの設定が完了すると、各種の Java ES 製品コンポーネント用に Sun Cluster データサービスを設定できるようになります。インストールされる Sun Cluster エージェントは、アプリケーションがクラスタを利用できるようにするソフトウェアプログラムです。エージェントソフトウェアおよび追加の設定ファイルは、(Web Server や Oracle データベースなどの)アプリケーションを、単一のサーバー上ではなくクラスタ上で実行できるようにするデータサービスを構成します。データサービスは、Sun Cluster フレームワークソフトウェアおよびマルチホストディスクと組み合わせることによって、アプリケーションの高可用性とスケーラビリティを実現します。

データサービスおよびサポートされるすべての層 (ボリュームマネージャー、クラスタファイルシステム、リソースグループ情報) が完全に設定されるまでは、Sun

Cluster のインストールは完了しません。データサービスの詳細については、『Sun Cluster Overview for Solaris OS』を参照してください。

注 - Access Manager および Portal Server は、高可用性の Web コンテナ内に配備できません。ただし、Web コンテナに配備されるその他の Web アプリケーションと同様に、それらに障害が発生する可能性があります。その場合、Web コンテナのフェイルオーバーは行われません。

Java ES 製品コンポーネントの場合は、製品コンポーネントをインストールする各ノード上で Java ES インストーラを実行してから、Sun Cluster エージェントの HA Sun Java System サブコンポーネントのうち Sun Java System 製品コンポーネントに対応するサブコンポーネントをインストールします。Java ES インストーラでは、「あとで設定」設定タイプを選択します。インストールディレクトリを指定するときは、製品コンポーネントに対しては、そのノードのローカルファイルシステム上の場所を使用し、コンポーネントの設定および製品の場所に対しては、クラスタファイルシステム上の場所を使用します。

次の表は、Java ES インストーラの Sun Cluster Agents コンポーネントで設定されるエージェントの一覧です。特に参照する必要のあるマニュアルへのリンクもいくつか示されています。

表 6-2 Sun Cluster Agents (データサービス)

| エージェント名                         | 特別な指示                                                                                                                                                                                                 | プラットフォーム  |
|---------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------|
| HA Application Server           | 『Sun Cluster Data Service for Sun Java System Application Server EE (HADB) Guide for Solaris OS』の第 1 章「Sun Cluster HA for Sun Java System Application Server EE (Supporting HADB Versions as of 4.4)」 | SPARC、x86 |
| HA Application Server EE (HADB) | 『Sun Cluster Data Service for Sun Java System Application Server EE (HADB) Guide for Solaris OS』                                                                                                      | SPARC、x86 |
| HA Directory Server             |                                                                                                                                                                                                       | SPARCx86  |
| HA Message Queue                | フェイルオーバーのためのインストールと設定については、『Sun Cluster Data Service for Sun Java System Message Queue Guide for Solaris OS』を参照してください。                                                                                | SPARC、x86 |

表 6-2 Sun Cluster Agents (データサービス) (続き)

| エージェント名                              | 特別な指示                                                                                                                                     | プラットフォーム  |
|--------------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|-----------|
| HA/Scalable Web Server               | フェイルオーバーまたはスケラビリティのためのインストールと設定については、『Sun Cluster Data Service for Sun Java System Web Server Guide for Solaris OS』を参照してください。             | SPARC、x86 |
| HA Agfa IMPAX                        |                                                                                                                                           | SPARC     |
| HA Apache Tomcat                     |                                                                                                                                           | SPARC、x86 |
| HA Apache                            |                                                                                                                                           | SPARC     |
| HA Broadvision One-to-One Enterprise |                                                                                                                                           | SPARC     |
| HA Calendar Server                   | フェイルオーバーのためのインストールと設定については、『Sun Java System Calendar Server 6.3 管理ガイド』の第6章「Calendar Server 6.3 ソフトウェアでの高可用性 (フェイルオーバーサービス) の設定」を参照してください。 | SPARC     |
| HA DHCP                              |                                                                                                                                           | SPARC、x86 |
| HA DNS                               |                                                                                                                                           | SPARC、x86 |
| HA Instant Messaging                 | 高可用性のためのインストールと設定については、『Sun Java System Instant Messaging 7.2 管理ガイド』を参照してください。                                                            | SPARC     |
| HA Messaging Server                  | フェイルオーバーのためのインストールと設定については、『Sun Java System Messaging Server 6.3 管理ガイド』の第3章「高可用性の設定」を参照してください。                                            | SPARC     |
| HA MySQL                             |                                                                                                                                           | SPARC、x86 |
| HA NetBackup                         |                                                                                                                                           | SPARC     |
| HA Sun N1 Service Provisioning       |                                                                                                                                           | SPARC     |
| HA NFS                               |                                                                                                                                           | SPARC、x86 |
| HA Oracle                            |                                                                                                                                           | SPARC     |
| HA Oracle Application Server         |                                                                                                                                           | SPARC     |
| HA Oracle E-Business Suite           |                                                                                                                                           | SPARC     |
| HA Oracle Real Application Clusters  |                                                                                                                                           | SPARC     |

表 6-2 Sun Cluster Agents (データサービス) (続き)

| エージェント名                        | 特別な指示 | プラットフォーム  |
|--------------------------------|-------|-----------|
| HA Samba                       |       | SPARC、x86 |
| HA SAP                         |       | SPARC     |
| HA SAP DB                      |       | SPARC     |
| HA SAP liveCache               |       | SPARC     |
| HA Siebel                      |       | SPARC     |
| HA Solaris Containers          |       | SPARC、x86 |
| HA Sun N1 Grid Engine          |       | SPARC     |
| HA Sun N1 Service Provisioning |       | SPARC     |
| HA SWIFT Alliance Gateway      |       | SPARC     |
| HA Sybase ASE                  |       | SPARC     |
| HA WebLogic Server             |       | SPARC     |
| HA WebSphere MQ                |       | SPARC     |
| HA WebSphere MQ Integrator     |       | SPARC     |

## ▼ Java ES 以外の製品で高可用性を実装するには

Java ES 以外の製品が高可用性を必要とするインストールを計画している場合は、ここに記載されている手順を実行します。

- 1 **Java ES** 以外の製品をインストールして設定します。  
たとえば、『Sun Java Communications Suite 5 インストールガイド』を使用して Instant Messaging をインストールします。
- 2 **Java ES** インストーラの「ソフトウェアコンポーネントの選択」ページで、その製品をサポートする **Sun Cluster Agents** を選択します。  
たとえば、Java ES Sun Cluster Agents コンポーネントの HA Instant Messaging サブコンポーネントを選択します。
- 3 **Java ES** インストーラを使用して **Sun Cluster** エージェントをインストールします。
- 4 次の **Sun Cluster** データサービスマニュアルのうち、該当するマニュアルの説明に従ってエージェントを設定します。

- Solaris SPARC プラットフォームデータサービスのマニュアルは次の場所にあります。<http://docs.sun.com/app/docs/coll/1124.4>
- Solaris x86 プラットフォームデータサービスのマニュアルは次の場所にあります。<http://docs.sun.com/app/docs/coll/1125.4>
- 現在のリリースの Java ES に関する特別な手順は次の場所にあります。『Sun Cluster 3.1 8/05 Sun Java Enterprise System 5 用特記事項 (Solaris OS 版)』

## Java 仮想マシン (JVM) の設定

使用する Java ES 製品コンポーネントに必要なインストール後設定が完了したあとで、製品コンポーネントによっては、Java 仮想マシン (JVM) の調整が必要になる場合があります。JVM はいくつかのエンティティから構成されていますが、その中でもっとも重要なのは、コンパイラです。コンパイラは Java バイトコードをマシン命令に変換します。Java ES に付属するバージョンの JDK (Java Developer's Kit) には、JVM に対して適用可能なオプションがいくつか用意されています。

`-server` オプションは、JVM をサーバーモードで実行するための便利な調整オプションです。(オプションの一覧を取得するには `java -?` コマンドを使用する。)

ガベージコレクションについては、初期段階ではデフォルトのアルゴリズムで問題ありません。

Java ヒープメモリーも、設定しなければならない可能性のある重要な調整オプションの 1 つです。例:

- 次のコマンドは、Java ヒープサイズの初期値を設定します: `-Xms size`
- 次のコマンドは、Java ヒープサイズの最大値を設定します: `-Xmx size`

高負荷システムの場合、まずはヒープサイズの最大値を 1.2G バイトに設定していただくことをお勧めします。

## ルート以外の ID による製品コンポーネントの設定

Java ES インストーラを実行するには、ルートである必要があります。この理由により、インストーラによってマシンに配置されるすべてのファイルはルートの所有となります。ただし、インストール後に設定を行うとき、一部の製品コンポーネントにはルート以外の実行時ユーザーまたはグループを割り当てることができます。たとえば、ルートの所有でない Application Server インスタンス内に Access Manager を配備する可能性もあります。インストールまたは管理のために、さまざまな理由からルート以外の ID を使って製品コンポーネントを設定します。一般的にシステム上にはルート以外のユーザーがすでに存在していますが、これは製品コンポーネントによっても異なる場合があります。

次の表は、ルート以外の ID を使用した各製品コンポーネントの設定方法に関する情報へのリンクになっています。

表 6-3 各製品コンポーネントのルート以外の ID の設定

| 製品コンポーネント          | 参照先                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|--------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Application Server | root 以外のユーザーが所有および操作する管理ドメイン全体を設定します。詳細については、『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.2 管理ガイド』を参照してください。                                                                                                                                                                                       |
| Directory Server   | 通常のユーザーとしてサーバーインスタンスを作成するか、インスタンスの作成時にユーザーを指定します。詳細については、『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 管理ガイド』を参照してください。                                                                                                                                                                             |
| Portal Server      | Portal Server コンフィギュレータを使用してルート以外の設定を行います。コンフィギュレータの実行手順や使用する設定の説明については、『Sun Java System Portal Server 7.1 管理ガイド』の「インストール後の設定」の章を参照してください。                                                                                                                                                                     |
| Web Server         | デフォルトでは、Web Server は <code>webserverd</code> によって実行時ユーザーとして設定されます。Web Server コンフィギュレータを使用するときは、任意の実行時ユーザー ID を指定できます。詳細については、『Sun Java System Portal Server 7.1 Configuration Guide』の「Installing Portal Server 7.1 on Web Server 7.0」を参照し、「Installing Portal Server 7.1 as a Non-root User」の節まで下方にスクロールしてください。 |

## 次の手順

この章で説明した設定作業が完了したら、インストール後の設定を確認するために、153 ページの「インストール後設定のあとの確認」の説明に従って製品コンポーネントを起動します。



# インストール済み製品コンポーネントの確認

---

この章では、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) 製品コンポーネントが正常にインストールおよび設定されたことを確認するための手順について説明します。ここで説明する手順は、シングルサインオン設定などの初期設定後に発生する可能性のある、製品コンポーネント間のより複雑な相互作用には対応していません。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 150 ページの「この章の利用方法」
- 150 ページの「インストール後の確認」
- 153 ページの「インストール後設定のあとの確認」
- 155 ページの「Web コンテナを起動した状態での Portal Server デスクトップへのアクセス」
- 157 ページの「Access Manager の起動と停止」
- 158 ページの「Application Server の起動と停止」
- 159 ページの「Directory Proxy Server の起動と停止」
- 160 ページの「Directory Server の起動と停止」
- 161 ページの「Message Queue の起動と停止」
- 161 ページの「Monitoring Console の起動と停止」
- 161 ページの「Portal Server Secure Remote Access の起動と停止」
- 163 ページの「Sun Cluster ソフトウェアの停止と再起動」
- 163 ページの「Web Proxy Server の起動と停止」
- 165 ページの「Web Server の起動と停止」
- 166 ページの「次の手順」

## この章の利用方法

この章では、2種類の確認方法について説明します。インストール直後の確認と、すべてのインストール後設定が完了したあとの確認です。

- インストール後の確認。ここでは、インストールが基本的に正常に行われたかどうかを確認します。この時点では一部のコンポーネントだけが起動および停止できます。
- インストール後設定のあとの確認。ここでは、すべてのコンポーネントを起動して、実行できるかどうかを確認します。各コンポーネントを個別に起動して停止する手順が含まれます。

Java ES 製品コンポーネントのデフォルトのインストール場所は、オペレーティングシステムごとに異なります。そのため、この章で説明する手順では、便宜上プレースホルダでインストール場所を表すことがあります。たとえば、*AccessManager-base* という表記で、Access Manager のベースインストールディレクトリを表します。

---

ヒント-この章で示す例のほとんどは、デフォルトの情報に基づいています。設定時に指定したインストール値や設定値がわからない場合は、例に示されている値を試してください。デフォルトインストールディレクトリおよびポートの一覧は、『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の第2章「デフォルトのインストールディレクトリとポート」に記載されています。

---

## インストール後の確認

ここでは、Java ES 製品コンポーネントパッケージのサンプルセットのインストールが成功したことを確認するための手順について説明します。「今すぐ設定」インストールを実行した場合、この例のいくつかの製品コンポーネントは設定済みであり、すぐに実行できる状態になっています。ただし、ここで示す指針の目的は、パッケージがホストに正しくコピーされており、部分的にコピーされたパッケージや不足する製品コンポーネントが存在しないことを単純に確認することです。

パッケージが正常にインストールされたことを確認する簡単な方法の1つは、製品レジストリを調べることです。インストールが完了すると、Java ES インストーラは製品レジストリを更新し、インストールされた製品コンポーネントの情報を格納します。アンインストール時には、Java ES アンインストーラが製品レジストリを読み取り、現在存在していてアンインストールが可能な製品コンポーネントを特定します。製品レジストリは次の場所にあります。

- Solaris OS の場合: `/var/sadm/install/productregistry`
- Linux の場合: `/var/opt/sun/install/productregistry`
- HP-UX の場合: `/var/adm/sw/productregistry`

いくつかの製品コンポーネントディレクトリを調べて、ソフトウェアが適切なディレクトリにあるかどうかを確認する方法もあります。デフォルトディレクトリの一覧は、『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の第2章「デフォルトのインストールディレクトリとポート」に記載されています。Java ES コンポーネントのパッケージの一覧は、『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の第5章「インストール可能なパッケージの一覧」に記載されています。

インストールログを調べることもお勧めします。特に、一部のパッケージが製品レジストリに正しく登録されていない可能性がある場合には、有効な手段です。ログとログビューアの使用手順については、[200 ページの「インストールログファイルの検証」](#)を参照してください。

または、Web Server や Directory Server など、「今すぐ設定」インストールに含まれていた製品コンポーネントを起動できるか試すこともできます。

## ▼ インストールが成功したかどうかの確認

インストール後設定が完了したあと、例として挙げる次の手順の一部または全部を使用して、指定した製品コンポーネントのセットが基本的にインストールされているかを確認します。

- 1 部分的にインストールされたパッケージが存在しないことを確認します。**Solaris OS** の場合:

```
pkginfo -p
```

- 2 コンポーネントの正しいバージョンが存在していることを確認します。  
このリリースの正しい製品コンポーネントバージョンを確認するには、[付録 A](#) を参照してください。たとえば、Solaris 版の J2SE のバージョンは、1.5.0\_09 になっているはずです。

```
cd /usr/jdk
ls -l
```

- 3 インストール済み製品コンポーネントが製品レジストリに反映されていることを確認します。
  - a. **Solaris** の場合、**prodreg** ツールを使ってインストール済みパッケージを表示します。

```
prodreg &
```
  - b. **Java Enterprise System** のノードを展開し、**Java ES** インストーラによってインストールされたパッケージを表示します。

- c. また、次のコマンドを使って productregistry ファイルを直接表示することもできます。

```
more /var/sadm/install/productregistry
```

- 4 サマリーログを開き、インストール中に指定した設定データを確認します。

```
cd /var/sadm/install/logs
more Java_Enterprise_System_5_Summary_Report_install.*
```

- 5 「今すぐ設定」インストールの場合、**Portal Server** と関連サービスを起動します。

- a. **Directory Server** インスタンスを起動します。

```
/opt/SUNWdsee/ds6/bin/dsadm start /var/opt/SUNWdsee/dsins1
```

- b. **Web Server** インスタンスを起動します。

```
/var/opt/SUNWwebserver7/https-hostname.domainname/bin/startserv
```

Web Server を起動すると、Portal Server と Access Manager も自動的に起動されます。

---

注 - Web サーバー以外の Web コンテナを使用した場合は、プロセスが異なる可能性があります。

---

- c. **Web Server** の URL にアクセスします。

```
http://hostname:port
```

- d. 管理インスタンスを起動します。

```
/var/opt/SUNWwbsvr7/admin-server/bin/startserv
```

- e. **Web Server** の管理 URL にアクセスします。

```
http://hostname:8800
```

- 6 「今すぐ設定」インストールの場合、**Portal Server** と関連サービスを停止します。

- a. **Web Server** の管理サーバーを停止します。

```
/var/opt/SUNWwbsvr7/admin-server/bin/stopserv
```

- b. **Web Server** を停止します。

```
/var/opt/SUNWwbsvr7/https-hostname.domainname/bin/stopserv
```

- c. **Directory Server** を停止します。

```
/opt/SUNWdsee/ds6/bin/dsadm stop /var/opt/SUNWdsee/dsins1
```

- 7 「今すぐ設定」インストールの場合、**Web コンテナ**を起動して**Portal Server** および **Access Manager** サービスにアクセスします。  
155 ページの「[Web コンテナを起動した状態での Portal Server デスクトップへのアクセス](#)」
- 8 「今すぐ設定」インストールの場合、**Access Manager** コンソールにアクセスします。  
ログイン時のユーザー ID は amadmin です。パスワードはインストール時に入力したものです。  
`http://hostname:port/amconsole`
- 9 「今すぐ設定」インストールの場合、**Portal Server** にアクセスします。  
ログイン時のユーザー ID は amadmin です。パスワードはインストール時に入力したものです。  
`http://hostname:port/portal`
- 10 エラーが発生した場合には、**Web Server** を再起動し、手順を繰り返します。

## インストール後設定のあとの確認

ここでは、Java ES 製品コンポーネントのインストール後設定の完了後に、それらのコンポーネントが正しく動作していることを確認するための指針を示します。

Java ES を起動するには、特定の順序で製品コンポーネントを1つずつ起動します。  
ガイドライン:

- 最初に起動するのは、Directory Server と Web コンテナ (Web Server またはアプリケーションサーバー) によって提供される基本的なサービスです。Java ES は、インストール中に Java ES Application Server と Web Server の実行可能インスタンスを作成します。
- サードパーティ製の Web コンテナを使う場合、すでにインストールおよび実行されている必要があります。手順についてはサードパーティのマニュアルを参照してください。

---

注-HP-UX では、サードパーティの Web コンテナはサポートされません。  
Linux で「今すぐ設定」設定オプションを使用する場合、BEA WebLogic コンテナのみがサポートされます。

---

- Portal Server と Access Manager は Web コンテナ内で実行されるため、Web コンテナを起動すると Portal Server と Access Manager も起動されます。
- Java ES を起動するときにサービスがすでに実行中の場合は、そのサービスを停止してから、Java ES コンポーネントを実行したあとに再起動してください。

- Directory Service Control Center、Monitoring Console、および Sun Cluster ソフトウェアに関連する場合は特に、Sun Java Web Console 共有コンポーネントを停止して再起動することをお勧めします。
  - Solaris OS の場合: /usr/bin/smcwebserver stop
  - Solaris OS の場合: /usr/bin/smcwebserver start
  - Linux および HP-UX の場合: /opt/sun/webconsole//bin/smcwebserver stop
  - Linux および HP-UX の場合: /opt/sun/webconsole//bin/smcwebserver start

Java ES 製品コンポーネントセット全体を起動するための一般的なシーケンスは、次の表に示すとおりです。左側の列は起動手順の実行順序、中央の列は作業の内容、右側の列は作業の実行手順が解説されている場所をそれぞれ示しています。

表 7-1 Java ES の推奨起動シーケンス

| 順序 | 作業                                                                                 | 説明の場所                                                                                    |
|----|------------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1  | Directory Server を起動します。                                                           | 160 ページの「 <a href="#">Directory Server の起動と停止</a> 」                                      |
| 2  | 使用する Web コンテナを起動します。Access Manager と Portal Server がインストールされている場合は、それらが自動的に起動されます。 |                                                                                          |
|    | - Application Server を起動します (これにより Message Queue が起動)。                             | 158 ページの「 <a href="#">Application Server の起動と停止</a> 」                                    |
|    | - Web Server を起動します。                                                               | 165 ページの「 <a href="#">Web Server の起動と停止</a> 」                                            |
|    | - IBM WebSphere Server を起動します。                                                     | このサーバーに関しては、サードパーティーの資料を参照してください。                                                        |
|    | - BEA WebLogic Server を起動します。                                                      | このサーバーに関しては、サードパーティーの資料を参照してください。                                                        |
| 3  | Portal Server Secure Remote Access を起動します。                                         | 161 ページの「 <a href="#">Portal Server Secure Remote Access の起動と停止</a> 」                    |
| 4  | Web Proxy Server を起動します。                                                           | 163 ページの「 <a href="#">Web Proxy Server の起動と停止</a> 」                                      |
| 5  | Service Registry を起動します                                                            | 『Service Registry 3.1 管理ガイド』                                                             |
| 6  | Monitoring Console を起動します。                                                         | 『Sun Java Enterprise System 5 監視ガイド (UNIX 版)』の「 <a href="#">Monitoring Console の起動</a> 」 |

Java ES 製品コンポーネントセット全体を停止するときは、このシーケンスと逆の順序で行います。

## Web コンテナを起動した状態での Portal Server デスクトップへのアクセス

Portal Server の起動と停止のメカニズムは、実行先の Web コンテナ (Sun Java Systems またはサードパーティー製) の起動と停止のメカニズムの一部です。Portal Server は、Directory Server、Access Manager、および Access Manager SDK にも依存します。インストールと設定のあとで Sun の Web コンテナ、Access Manager、および Portal Server を起動する方法については、次の各節を参照してください。

- 158 ページの「Application Server の起動と停止」
- 165 ページの「Web Server の起動と停止」

Portal Server 管理者は Access Manager コンソールを使用して、Portal Server デスクトップへのエンドユーザーアクセスを管理します。Access Manager コンソールを開く方法については、157 ページの「Access Manager の起動と停止」を参照してください。

インストール後設定の完了後にエンドユーザー Portal Server Desktop にアクセスする手順は、以下のとおりです。

- 155 ページの「Sun Web コンテナから Portal Server デスクトップへのアクセス」
- 156 ページの「BEA WebLogic から Portal Server デスクトップへのアクセス」
- 157 ページの「IBM WebSphere から Portal Server デスクトップへのアクセス」

### ▼ Sun Web コンテナから Portal Server デスクトップへのアクセス

Portal Server の Web プロトコルとして、HTTP または HTTPS を使用できます。デフォルトでは、ホストは *hostname.domain* です。

- 1 ブラウザウィンドウで、次の URL 形式を使用してサンプルデスクトップを表示します (デフォルトの **Portal Access URL** およびデフォルトの **配備 URI** は /portal)。

`http://hostname.domain:port/portal`

URL を入力すると開始画面が開き、Portal Server の簡単な説明と、インストール時に選択したサンプルポータルへのリンクが表示されます。リンクの 1 つをクリックすると、そのサンプルポータルの匿名ポータルデスクトップにアクセスします。サンプルデスクトップが問題なく表示される場合は、Portal Server のインストールは正常に行われています。

- 2 ブラウザに次のように入力します。

`http://hostname.domain:port/psconsole`

- 3 指定されているポート (デフォルトは 443) 上でゲートウェイが動作していることを確認します。

```
netstat -an | grep port-number
```

ゲートウェイが動作していない場合は、次のコマンドを使用してゲートウェイを起動します。

```
PortalServer-base /bin/psadmin start-sra-instance -u amadmin -f
amadmin-password-file --instance-type gateway --instance-name
GatewayInstancename
```

- 4 ログファイルを表示して、問題が記録されていないことを確認します。
- 5 ブラウザにゲートウェイ URL を入力し、セキュリティ保護されたモードで Portal Server を実行します。

```
https://gateway-hostname,domainname:port
```

インストール時にデフォルトポート 443 番を選択した場合は、そのポート番号を指定する必要はありません。

- 6 モバイル装置の場合は、次の URL 形式を使用します。

```
http://hostname.domain:port/portal/dt
```

---

注 - Portal Server URL と配備 URI は一致している必要があります。たとえば、Portal Server URL が `http://hostname.domain:port/portal` の場合は、配備 URI は `/portal` にします。

- ポータル ID: デフォルト値は `portal1` です。
  - 検索 ID: デフォルト値は `search1` です。
  - 配備 URI: デフォルト値は `/portal` です。
- 

## ▼ BEA WebLogic から Portal Server デスクトップへのアクセス

- Solaris OS では、新しいブラウザウィンドウに次の URL を指定して、サンプルデスクトップを表示します。

```
http://beaweblogic-host:port/portal
```

サンプルデスクトップを表示することで、Portal Server が正常に BEA WebLogic に配備されていることを確認できます。

## ▼ IBM WebSphere から Portal Server デスクトップへのアクセス

- Solaris OS では、新しいブラウザウィンドウに次の URL を指定して、サンプルデスクトップを表示します。

`http://ibmwebsphere-hostname:port/portal`

サンプルデスクトップを表示することで、Portal Server が正常に IBM WebSphere に配備されていることを確認できます。

## Access Manager の起動と停止

インストール後設定のあとに Access Manager を起動して停止するには、Access Manager が実行している Web コンテナを起動して停止します。

## ▼ Access Manager のログインページへのアクセス

ログインページへのアクセス方法は、Access Manager に対して行ったインストールのタイプに応じて異なります。

- 旧バージョン (6.x):

`http://web-container-host:port/amconsole`

または、

`http://web-container-host:port/amserver`

- レルム (7.x):

`http://web-container-host:port/amserver`

- 1 次の URL 形式を指定して、旧バージョン (6.x) モードでデフォルトページにアクセスします。

`http://web-container-host:port/amconsole`

Access Manager のログインページが表示されます。

- 2 次の URL 形式を指定して、レルム (7.x) モードでデフォルトページにアクセスします。

`http://web-container-host:port/amserver`

Access Manager のログインページが表示されます。

### 3 ログインします。

デフォルトの管理者アカウントは、`amadmin` です。ログインすることにより、インストールが成功したことを確認できます。

## Application Server の起動と停止

Application Server はドメインとして設定されます。Java ES インストーラは、デフォルトのポート番号 4849 を使ってデフォルトの管理ドメインを作成します。管理サーバーのインスタンス名は、`server` です。インストール後設定の完了後に Application Server を使用するには、ドメインを起動し、グラフィカルな管理コンソールにアクセスします。詳細については、『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.2 管理ガイド』の第 1 章「概要」を参照してください。

---

注 - Application Server を起動すると Message Queue も起動されます。

---

### ▼ Application Server のドメインの起動

#### 1 コマンド行で、`ApplicationServer-base/bin` ディレクトリに移動します。

---

注 - 管理者パスワードファイルの内容は、`AS_ADMIN_PASSWORD=password` にしてください。

---

#### 2 ドメインを起動します。次に例を示します。

```
% asadmin start-domain --user admin-id --passwordfile path_to_admin-password_file domainname
```

#### 3 オプション部分には、インストール時に指定した値を入力してください。

サーバーが起動中であることを通知するメッセージが表示されます。

```
Starting Domain domain1, please wait. Log redirected to install_dir...
```

起動プロセスが完了すると、さらに次のメッセージが表示されます。

```
Domain domain1 started
```

#### 4 Application Server プロセスが実行中であることを確認します。Solaris OS の場合の例を次に示します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep appserv
/opt/SUNWappserver/appserver/lib/appservDAS domain1
```

## ▼ 管理コンソールへのアクセス

- 管理コンソールにアクセスするには、ブラウザで次の URL 形式を使用します。

`https://localhost:port`

Application Server をインストールしたホストでブラウザを実行している場合は、ホスト名に `localhost` を指定します。ブラウザが別のシステム上にある場合は、`localhost` を Application Server ソフトウェアが動作しているシステムの名前に置き換えます。`port` 変数には、インストール時に割り当てられた管理ポート番号を指定します。インストール時に割り当てられるデフォルトのポート番号は 4849 です。

`https://mycomputer.example.com:4849`

管理コンソールログイン画面が表示されることで、インストールが正しく行われたことを確認できます。

---

注 - Application Server のインストール方法、ドメイン管理サーバー、およびさまざまなポート番号と概念の詳細については、『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.2 Installation Guide』を参照してください。

---

## ▼ Application Server の停止

- 1 コマンド行で、`ApplicationServer-base/bin` ディレクトリに移動します。
- 2 **Application Server** インスタンスを停止します。次に例を示します。  

```
./asadmin stop-domain --domain domain1
```
- 3 **Application Server** が稼働していないことを確認します。次に例を示します。  

```
/usr/bin/ps -ef | grep appserv
```

## Directory Proxy Server の起動と停止

インストール後設定の完了後、次の手順を使用して Directory Proxy Server を起動および停止します。

### ▼ Directory Proxy Server の起動

- 1 **Directory Proxy Server** インスタンスがまだ存在していない場合は、作成します。
- 2 コマンド行で、`DirectoryProxyServer-base/bin` ディレクトリに移動します。

- 3 **Directory Proxy Server** インスタンスを起動します。次に例を示します。

```
./dpadm start /var/opt/SUNWdsee/dpsins1
```

## ▼ **Directory Proxy Server** の停止

- 1 コマンド行で、*DirectoryProxyServer-base/bin* ディレクトリに移動します。
- 2 **Directory Server Proxy Server** インスタンスを停止します。次に例を示します。

```
./dpadm stop /var/opt/SUNWdsee/dpsins1
```

## Directory Server の起動と停止

インストール後設定の完了後、ここに記載されている手順を使用して Directory Server を起動および停止します。Directory Server がクラスタの一部である場合は、論理ホストのアクティブノードで作業していることを確認してください。

---

注 - dsadm コマンドを使用して Directory Server を起動または停止する前に、LD\_LIBRARY\_PATH 環境変数の設定が解除されていることを確認してください。この変数の設定が解除されていない場合は、dsadm が依存しているライブラリを見つけることができないときに、エラーになる可能性があります。

---

## ▼ **Directory Server** の起動

- 1 **Directory Server** インスタンスがまだ存在していない場合は、作成します。
- 2 コマンド行で、*DirectoryServer-base/bin* ディレクトリに移動します。
- 3 **Directory Server** インスタンスを起動します。次に例を示します。

```
./dsadm start /var/opt/SUNWdsee/dsins1
```

## ▼ **Directory Server** の停止

- 1 コマンド行で、*DirectoryServer-base/bin* ディレクトリに移動します。
- 2 **Directory Server** インスタンスを停止します。次に例を示します。

```
./dsadm stop /var/opt/SUNWdsee/dsins1
```

## Message Queue の起動と停止

Message Queue は、ブローカを使用してメッセージの経路指定および配信を行います。Message Queue サービスを拡張するために、ブローカをクラスタ構成にすることができます。imqbrokerd コマンドを実行すると、ブローカが起動します。

### ▼ Message Queue ブローカの起動

- 1 コマンド行で、*MessageQueue-base/bin* ディレクトリに移動します。
- 2 Message Queue ブローカを起動します。  
`./imqbrokerd`
- 3 ブローカプロセスが実行中であることを確認します。次に例を示します。  
Solaris OS および HP-UX の場合: `/usr/bin/ps -ef | grep imqbrokerd`  
Linux の場合: `/bin/ps -ef | grep imqbrokerd`

### ▼ Message Queue ブローカの停止

- 実行中のブローカを停止するときは、ユーザー管理ユーザー名とパスワードの入力を求められます。  
Solaris OS の場合: `/usr/bin/imqcmd shutdown bkr [ -b hostname:port ]`  
Linux および HP-UX の場合: `/opt/sun/mq/bin/imqcmd shutdown bkr [ -b hostname:port ]`

## Monitoring Console の起動と停止

インストール後設定が完了したら、『Sun Java Enterprise System 5 監視ガイド (UNIX 版)』の「Monitoring Console の起動」の手順を参照してください。

## Portal Server Secure Remote Access の起動と停止

Portal Server の Secure Remote Access 製品コンポーネントにはブラウザ用にセキュリティ保護されたリモートアクセスが備わっているため、リモートデバイスの Java テクノロジ対応ブラウザから、ポータルコンテンツやサービスにアクセスすることができます。ゲートウェイサブコンポーネントは、リモートユーザーごとにインタフェースを確立して、内部の Web サーバーとアプリケーションサーバーからのコ

コンテンツを安全に配信します。Portal Server Secure Remote Access は、Portal Server と、Access Manager または Access Manager SDK に依存しています。

インストール後設定の完了後、次の手順を使用してゲートウェイを起動および停止します。

## ▼ Portal Server Secure Remote Access ゲートウェイの起動

- 1 ゲートウェイサブコンポーネントをインストールし、必要なプロファイルを作成したら、ゲートウェイを起動します。次に例を示します。

```
gateway-install-root/SUNWportal/bin/psadmin start-sra-instance --adminuser \
amadmin --passwordfile /tmp/password --name default --type gateway
```

default は、インストール時に作成されたデフォルトのゲートウェイプロファイルです。あとで独自に新しいプロファイルを作成し、そのプロファイルを指定してゲートウェイを再起動することもできます。

- 2 指定したポートでゲートウェイが実行中であることを確認します。

```
netstat -an | grep port-number
```

デフォルトのゲートウェイポートは 443 です。

## ▼ Portal Server Secure Remote Access ゲートウェイの停止

- 1 ゲートウェイを停止します。次に例を示します。

```
gateway-install-root/SUNWportal/bin/psadmin stop-sra-instance --adminuser /
amadmin --passwordfile /tmp/password --name default --type gateway
```

このコマンドを実行すると、指定したホスト上で動作中のすべてのゲートウェイインスタンスが停止します。

- 2 次のコマンドを実行して、指定したポートでゲートウェイが動作していないかチェックします。

```
/usr/bin/ps -ef | grep entsys5i
```

## Sun Cluster ソフトウェアの停止と再起動

Sun Cluster ソフトウェアはほかの Java ES コンポーネントのように起動または停止されることはありませんが、再起動時に非クラスタモードに変更することでソフトウェアを停止することは可能です。手順については、『Sun Cluster System Administration Guide for Solaris OS』を参照してください。

## Web Proxy Server の起動と停止

Web Proxy Server のインストール時には、デフォルトで2つのサーバーインスタンスがインストールされます。Web Proxy Server 管理サーバー インスタンスと Web Proxy Server インスタンスです。

### ▼ Web Proxy Server Administration Server とインスタンスの起動

- 1 コマンド行で、`WebProxyServer-base/proxy-admserv` に移動します。
- 2 **Web Proxy Administration Server** を起動します。次に例を示します。
  - Solaris OS の場合: `/opt/SUNWproxy/proxy-admserv/start`
  - Linux および HP-UX の場合: `/opt/sun/webproxyserver/proxy-admserv/start`
- 3 コマンド行で、`WebProxyServer-base/proxy-hostname.domainname` に移動します。
- 4 **Web Proxy Server** インスタンスを起動します。次に例を示します。
  - Solaris OS の場合: `/opt/SUNWproxy/proxy-server1/start`
  - Linux および HP-UX の場合: `/opt/sun/webproxyserver/proxy-server1/start`
- 5 **Web Proxy Server** プロセスが実行中であることを確認します。次に例を示します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep proxy
```

### ▼ Socks サーバーの起動

- 1 コマンド行で、`WebProxyServer_base/proxy-instance-name` に移動します。
- 2 **Socks** サーバーを起動します。

```
./start-sockd
```

- 3 **Socks** サーバードプロセスが実行中であることを確認します。次に例を示します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep sockd
```

## ▼ 管理サーバーのグラフィカルインタフェースへのアクセス

- `http://hostname.domainname:adminport` という形式で管理サーバーのグラフィカルインタフェースにアクセスします。次に例を示します。

```
http://host1.example.com:8888
```

ログインすることにより、インストールが成功したことを確認できます。

## ▼ Web Proxy Server の停止

- 1 コマンド行で、`WebProxyServer-base/proxy-admserv` に移動します。
- 2 管理サーバーを停止します。次に例を示します。
  - Solaris OS の場合: `/opt/SUNWproxy/proxy-admserv/stop`
  - Linux および HP-UX の場合: `/opt/sun/webproxyserver/proxy-admserv/stop`
- 3 コマンド行で、`WebProxyServer-base/proxy-instance-name` に移動します。
- 4 **Web Proxy Server** インスタンスを停止します。次に例を示します。
  - Solaris OS の場合: `/opt/SUNWproxy/proxy-server1/stop`
  - Linux および HP-UX の場合: `/opt/sun/webproxyserver/proxy-server1/stop`
- 5 **Web Proxy Server** プロセスが実行中でないことを確認します。次に例を示します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep proxy
```

## ▼ Socks サーバーの停止

- 1 コマンド行で、`WebProxyServer_base/proxy-instance-name` に移動します。
- 2 **Socks** サーバーを起動します。

```
./stop-sockd
```
- 3 **Socks** サーバードプロセスが実行中でないことを確認します。次に例を示します。

```
/usr/bin/ps -ef | grep sockd
```

# Web Server の起動と停止

Web Server のインストール時には、デフォルトで2つのサーバーインスタンスがインストールされます。管理サーバーインスタンスと Web Server インスタンスです。

## ▼ Web Server の起動

- 1 管理サーバーを起動します。次に例を示します。

Solaris OS の場合: `/var/opt/SUNWwbsvr7/admin-server/bin/startserv`

Linux および HP-UX の場合: `/var/opt/sun/webserver7/admin-server/bin/startserv`

- 2 **Web Server** インスタンスを起動します。次に例を示します。

Solaris OS の場合: `/var/opt/SUNWwbsvr7/https-instanceName/bin/startserv`

Linux および HP-UX の場合:

`/var/opt/sun/webserver7/https-instanceName/bin/startserv`

- 3 **Web Server Administration Server** 管理インスタンスにアクセスします。

ブラウザウィンドウで、`http://hostname.domainname:adminport` という形式を使用します。次に例を示します。

SSL ポート (これがデフォルト) の場合: `https://host1.example.com:8989`

HTTP ポートの場合: `http://host1.example.com:8800`

ログインすることにより、インストールが成功したことを確認できます。

## ▼ Web Server の停止

- 1 管理サーバーを停止します。次に例を示します。

Solaris OS の場合: `/var/opt/SUNWwbsvr7/admin-server/bin/stopserv`

Linux および HP-UX の場合: `/var/opt/sun/webserver7/admin-server/bin/stopserv`

- 2 **Web Server** インスタンスを停止します。次に例を示します。

Solaris OS の場合: `/var/opt/SUNWwbsvr7/https-instanceName/bin/stopserv`

Linux および HP-UX の場合:

`/var/opt/sun/webserver7/https-instanceName/bin/stopserv`

## 次の手順

この章を終えると、インストールと設定を終えた Java ES 製品コンポーネントが正常に機能することの確認が完了します。追加設定の実行や、製品コンポーネントの管理の開始が可能になります。以下のマニュアルは、その作業を始めるうえで役立ちます。

- すべての Java ES 製品マニュアル: <http://docs.sun.com/prod/entsys.06q4>
- 『Sun Cluster System Administration Guide for Solaris OS』
- 『Sun Cluster Data Services Planning and Administration Guide for Solaris OS』

# アンインストール

---

この章では、Java ES インストール中にインストールされた Sun Java™ Enterprise System (Java ES) 製品コンポーネントソフトウェアおよびその他の Java ES 関連ユーティリティをアンインストールする方法について説明します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 167 ページの「アンインストーラのしくみ」
- 170 ページの「前提条件の確認」
- 171 ページの「アンインストールの計画」
- 185 ページの「アンインストーラの実行」
- 193 ページの「Java ES レポートのアンインストール」
- 194 ページの「Sun Cluster ソフトウェアのアンインストール」
- 195 ページの「アンインストール後の作業の完了」

## アンインストーラのしくみ

ここで説明する内容は、次のとおりです。

- 168 ページの「アンインストーラの制限」
- 168 ページの「相互依存性の処理」

Java ES には、Java ES インストーラを使用してシステムにインストールした製品コンポーネントを削除するためのアンインストールプログラムが用意されています。

Java ES インストーラと同じく、アンインストーラは、グラフィカル、テキストベース、またはサイレントの各モードで実行できます。

Java ES インストーラはインストール中に、Java ES アンインストーラを次の場所に配置します。

- Solaris OS の場合: /var/sadm/prod/SUNWentsys5
- Linux および HP-UX の場合: /var/sadm/prod/sun-entsys5

---

ヒント-オプションの `-no` パラメータを使用して、ソフトウェアをアンインストールしない設定でアンインストーラを実行することができます。このオプションは、アンインストーラの動作に慣れるのに役立つだけでなく、状態ファイルを作成してサイレントアンインストールにそれを使用する場合にも便利です。

---

## アンインストーラの制限

- アンインストーラによって削除されるのは、Java ES インストーラによってインストールされた製品コンポーネントだけです。Java ES インストーラを使用せずにインストールした製品コンポーネントの削除については、各製品コンポーネントのドキュメントに記載されている操作手順を参照してください。
- アンインストーラは Java ES 共有コンポーネントを削除しません。
- アンインストーラの実行は、Java ES 製品コンポーネントがインストールされている個々のホストごとに行う必要があります。リモートアンインストールはサポートされていません。削除する製品コンポーネントを、ホストごとに1つまたは複数選択することができます。
- アンインストーラによって、設定ファイルとユーザーデータファイルが削除される場合があります。これらのファイルはコンポーネントによって異なります。アンインストールプロセスが完了したあとで、一部のファイルとディレクトリの削除が必要になる場合もあります。製品別の情報については、[172 ページの「Java ES 製品コンポーネントのアンインストール動作の確認」](#)を参照してください。
- 複数のセッションでアンインストールを行う場合、アンインストーラは必要に応じて製品コンポーネントの設定解除ページを表示します。
- アンインストーラがサードパーティー製の Web コンテナのインストール設定を解除することはありません。
- アンインストーラが Web コンテナでの Access Manager SDK のインストール設定を解除することはありません。Web コンテナの再設定は、元の classpath に戻すなどして手動で行う必要があります。



---

注意 - Sun Cluster ソフトウェアがインストールされているが、クラスタノードの設定に一度も使用されていない場合を除き、Sun Cluster ソフトウェアの削除にはアンインストーラを使用しないでください。詳細については、[194 ページの「Sun Cluster ソフトウェアのアンインストール」](#)を参照してください。

---

## 相互依存性の処理

アンインストーラの動作は、インストールした製品コンポーネント、および各製品コンポーネントの相互関係によって異なります。

- アンインストーラは、同一ホストにインストールされている製品間の依存関係を認識します。同一ローカルホスト上で依存関係を持つ製品コンポーネントをアンインストールしようとする、アンインストーラは警告を出力します。

たとえば、Portal Server がインストールされているホストから Access Manager をアンインストールしようとする、Portal Server は Access Manager がないと機能できないことを、アンインストーラが警告します。

- 通常は、他の製品コンポーネントが依存していない製品コンポーネントはアンインストールできます。

たとえば、Portal Server は Access Manager に依存していますが、Access Manager は Portal Server に依存していません。Portal Server をアンインストールしようとした場合、Access Manager は Portal Server がなくても機能できるため、アンインストーラは警告を発行しません。



注意-製品コンポーネントをアンインストールするときは、どの製品がその製品コンポーネントをサポートするように設定されているかを調べ、必要であれば追加の設定を行います。必要な追加設定を行わない場合、存在しなくなった製品をサポートするように設定された製品コンポーネントがシステムに残されることとなります。

アンインストーラは、次の相互依存性を認識しません。

- リモートホストからの依存関係
- 設定による依存関係

## リモートホストからの製品コンポーネント依存関係

製品コンポーネントの依存関係のなかには、リモートホストに配備された製品コンポーネントによって解決できるものもあります。アンインストーラはこのような依存関係を認識しません。

たとえば、Directory Server をアンインストールする場合、アンインストーラは、Access Manager が Directory Server に依存することを、両製品が同じホスト上に配備されている場合でも警告しません。これは、別のホスト上の別の Directory Server インスタンスが Access Manager をサポートする「可能性がある」からです。

## 設定による製品コンポーネントの依存関係

アンインストーラは、インストール後の設定によって生じる製品コンポーネント間の依存関係を認識しません。

たとえば、同じホストに Portal Server と Calendar Server をインストールし、Portal Server のカレンダーチャンネルとして Calendar Server を使用するよう Portal Server を設定したとします。この設定により、Portal Server は Calendar Server に依存します。た

だし、そのあとで Calendar Server をアンインストールしようとしても、アンインストール後はインストール後の設定を認識していないため、Portal Server が Calendar Server に依存することを警告しません。

## 前提条件の確認

次の表は、アンインストールの前に必要なタスクを示しています。タスクによっては、ご使用の環境に適用されない場合もあります。

左の列には作業の実行順序が、右の列にはその他の有用情報や手順の参照先が、それぞれ記載されています。

表 8-1 アンインストール前のチェックリスト

| 作業                                                                           | 便利な情報または参照先                                                                                                                                    |
|------------------------------------------------------------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 1. アンインストールする各製品コンポーネントの要求や動作を確認します。                                         | 172 ページの「Java ES 製品コンポーネントのアンインストール動作の確認」                                                                                                      |
| 2. 設定によって生じる製品コンポーネント間の依存関係を調べ、適切な対応をとります。                                   | 168 ページの「相互依存性の処理」<br>データのバックアップ、依存製品コンポーネントの設定変更による依存関係の解消、または特定の順序での製品コンポーネントのアンインストールが必要になる場合があります。                                         |
| 3. 製品レジストリファイルのコピーを作成します。このバックアップコピーは、アンインストールが失敗した場合にシステムを復旧するのに役立ちます。      | Solaris OS の場合: /var/sadm/install/productregistry<br>Linux の場合: /var/opt/sun/install/productregistry<br>HP-UX の場合: /var/adm/sw/productregistry |
| 4. 以後のインストールでデータの再利用を考えている場合は、アンインストールする製品コンポーネントの設定データまたはユーザーデータのコピーを作成します。 | 172 ページの「Java ES 製品コンポーネントのアンインストール動作の確認」                                                                                                      |
| 5. 必要に応じて、Directory Server と Access Manager の管理者アクセス情報を収集します。                | 184 ページの「アンインストーラ用の管理者アクセス権の付与」                                                                                                                |

表 8-1 アンインストール前のチェックリスト (続き)

| 作業                                                                                      | 便利な情報または参照先                                                                                                                                                                                                                             |
|-----------------------------------------------------------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 6. Access Manager をアンインストールする場合は、スキーマをアンインストールします。                                      | <p>次の LDIF ファイルを使って、アンインストールの前にスキーマを削除します。</p> <p>Solaris OS の場合:<br/>/etc/opt/SUNWam/config/ldif/ds_remote_schema_uninstall.ldif</p> <p>Linux および HP-UX の場合:<br/>/etc/opt/sun/identity/config/ldif/ds_remote_schema_uninstall.ldif</p> |
| 7. Sun Cluster ソフトウェアをアンインストールする場合は、まず Sun Cluster Geographic ソフトウェアをアンインストールする必要があります。 | Sun Cluster ソフトウェアの前に Sun Cluster Geographic Edition ソフトウェアをアンインストールします。                                                                                                                                                                |

## アンインストールの計画

アンインストーラを使用する場合は、データが紛失したり相互依存関係が消失したりしないように、事前にインストール状況を調査して、作業手順の計画を立てる必要があります。各種 Java ES 製品コンポーネントをアンインストールしたときに、残る製品コンポーネントがどのように動作するかを理解しておくことは重要です。

ここで説明する内容は、次のとおりです。

- [171 ページの「インストール済み Java ES ソフトウェアの調査」](#)
- [172 ページの「Java ES 製品コンポーネントのアンインストール動作の確認」](#)
- [184 ページの「アンインストーラ用の管理者アクセス権の付与」](#)

## インストール済み Java ES ソフトウェアの調査

各ホストにすでにインストールされている Java ES 製品コンポーネントソフトウェアを確認するには、次のいずれかの手順を実行します。

### ▼ アンインストーラによるインストール済みソフトウェアの表示

- 1 root として、アンインストーラが格納されているディレクトリに移動します。
  - Solaris OS の場合: /var/sadm/prod/SUNWentsys5
  - Linux および HP-UX の場合: /var/sadm/prod/sun-entsys5

- 2 ローカルホストを調査するために、ソフトウェアをアンインストールしない設定でアンインストーラを実行します。

グラフィカルモードの場合:

```
./uninstall -no
```

テキストベースモードの場合:

```
./uninstall -no -nodisplay
```

uninstall コマンドの完全な構文については、236 ページの「[uninstall コマンド](#)」を参照してください。

- 3 インストールされている製品のリストが表示されるまでアンインストーラのページを切り替えます。
- 4 インストールされている製品コンポーネントのリストを確認したら、アンインストーラを終了します。  
ソフトウェアのアンインストールは行われません。

## ▼ Solaris の prodreg ユーティリティによるインストール済みソフトウェアの表示

- prodreg ユーティリティを使用して、Java ES 製品コンポーネントを含む、システムにインストールされているすべてのパッケージに関する情報を表示します。  
この情報は、製品コンポーネントの依存関係を調べる場合に便利です。また、prodreg ユーティリティは、インストールが不完全で、特別な処理が必要なパッケージも示します。Solaris 10 および Solaris 9 オペレーティングシステムでは、次のユーティリティを実行します。

```
prodreg
```

詳細については、prodreg のマニュアルページを参照してください。

## Java ES 製品コンポーネントのアンインストール動作の確認

以下の中から関係のある表を調べて、アンインストーラが各 Java ES 製品コンポーネントに対して行う内容を確認してください。さらに、作業手順の計画を立てて、データが紛失したり相互依存関係が消失したりすることがないようにします。

注- 場合によっては、コンポーネントファイルがアンインストール後も残り、それが原因でそれ以降のインストールが失敗することがあります。その場合は、[207 ページ](#)の「アンインストール時に残されたファイルによるインストールの失敗」の解決のガイドラインを参照してください。

ここで説明する内容は、次のとおりです。

- 173 ページの「Access Manager のアンインストール動作」
- 174 ページの「Application Server のアンインストール動作」
- 175 ページの「Directory Proxy Server のアンインストール動作」
- 176 ページの「Directory Server のアンインストール動作」
- 176 ページの「HADB のアンインストール動作」
- 177 ページの「Message Queue のアンインストール動作」
- 178 ページの「Monitoring Console のアンインストール動作」
- 179 ページの「Portal Server のアンインストール動作」
- 180 ページの「Portal Server Secure Remote Access のアンインストール動作」
- 181 ページの「Service Registry のアンインストール動作」
- 182 ページの「Sun Cluster ソフトウェアと Sun Cluster Geographic Edition のアンインストール動作」
- 182 ページの「Web Proxy Server のアンインストール動作」
- 183 ページの「Web Server のアンインストール動作」

## Access Manager のアンインストール動作

表 8-2 Access Manager のアンインストールの詳細

| トピック                        | 詳細                                                                                                                                                                                                                                     |
|-----------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定データ                       | Directory Server のエントリは、Access Manager 固有のデータを含め、何も削除されません。                                                                                                                                                                            |
| このコンポーネントに必要な<br>その他のインストール | Directory Server<br>Web コンテナ                                                                                                                                                                                                           |
| このインストールを必要とする製品            | Portal Server は、Access Manager SDK と同じホスト上に存在する必要があります。                                                                                                                                                                                |
| アンインストール前の作業                | 次のファイルを使ってスキーマを削除します。<br><br>Solaris OS の場合:<br><code>/etc/opt/SUNWam/config/ldif/ds_remote_schema_uninstall.ldif</code><br><br>Linux および HP-UX の場合:<br><code>/etc/opt/sun/identity/config/ldif/ds_remote_schema_uninstall.ldif</code> |

表 8-2 Access Manager のアンインストールの詳細 (続き)

| トピック         | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|--------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| アンインストール後の作業 | <p>アンインストールによって、Web Server または Application Server 上でのみ、Access Manager のインストール設定すべてが Web コンテナから解除されます。サードパーティー製の Web コンテナから Access Manager の設定が解除されることはありません。Web コンテナの SDK の設定も解除されません。</p> <p>さらに、次のファイルが <code>/var/sadm/install</code> ディレクトリに格納されている場合は、それを削除します。</p> <p><code>.lockfile.pkg.lock.</code></p> <p>その他のアンインストール後の問題については、<a href="#">195 ページ</a>の「<a href="#">Access Manager アンインストール後の問題</a>」を参照してください。</p> |

## Application Server のアンインストール動作

表 8-3 Application Server のアンインストールの詳細

| トピック                                    | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|-----------------------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定データとユーザーデータ (Solaris OS および Linux のみ) | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ インストール時に作成されたデフォルトのドメインは、アンインストール時に削除されます。</li> <li>■ アンインストール時には、すべての管理サーバーインスタンスと Application Server インスタンスを含め、ユーザーが作成したドメインは削除されません。</li> <li>■ アンインストールが完了するまでに、すべての管理サーバーインスタンスと Application Server インスタンスは停止されます。</li> </ul> |
| このコンポーネントに必要なその他のインストール                 | 同一システム上に Message Queue が必要です。                                                                                                                                                                                                                                               |
| このインストールを必要とする製品                        | Application Server を Web コンテナとして使用するよう設定されたコンポーネント。                                                                                                                                                                                                                         |
| アンインストール前の作業                            | 設定データを保存するために、管理ドメインディレクトリのコピーを作成します。                                                                                                                                                                                                                                       |

表 8-3 Application Server のアンインストールの詳細 (続き)

| トピック         | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                         |
|--------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| アンインストール後の作業 | <p>システムから Application Server を完全に削除するために、残っている Application Server のログファイルとディレクトリを削除します。Application Server ディレクトリのデフォルトの場所は次のとおりです。</p> <p>Solaris OS の場合:</p> <pre>/var/opt/SUNWappserver</pre> <pre>/opt/SUNWappserver/appserver or <i>ApplicationServer-base</i></pre> <p>Linux および HP-UX の場合:</p> <pre>/var/opt/sun/appserver</pre> <pre>/opt/sun/appserver</pre> <p>Message Queue のアンインストール後の作業については、177 ページの「<a href="#">Message Queue のアンインストール動作</a>」を参照してください。</p> |

## Directory Proxy Server のアンインストール動作

表 8-4 Directory Proxy Server のアンインストールの詳細

| トピック                    | 詳細                                                                                                                                                                                           |
|-------------------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定データ                   | <p>アンインストールする Directory Proxy Server インスタンスの設定データは、アンインストール時に削除されます。</p> <p>Directory Proxy Server の複数のインスタンスで共有される設定データは、アンインストール後も残されます。</p> <p>Directory Proxy Server はユーザーデータを持ちません。</p> |
| このコンポーネントに必要なその他のインストール | Directory Proxy Server は、ローカルまたはリモートの Directory Server に論理的に依存しています。                                                                                                                         |
| このインストールを必要とする製品        | なし                                                                                                                                                                                           |
| アンインストール前の作業            | なし                                                                                                                                                                                           |
| アンインストール後の作業            | なし                                                                                                                                                                                           |

## Directory Server のアンインストール動作

表 8-5 Directory Server のアンインストールの詳細

| トピック                    | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
|-------------------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定データとユーザーデータ           | <p>ユーザーデータをホストする Directory Server をアンインストールする場合、Directory Server の LDAP データベースはアンインストール時に削除されます。</p> <p>注意:データの損失を避けるために、アンインストール前に Directory Server 情報をバックアップする必要があります。Directory Server には、Directory Server をバックアップしたり、設定データを移行したりするためのツールやユーティリティが、いくつか用意されています。詳細については、Directory Server のマニュアル (<a href="http://docs.sun.com/coll/1660.1">http://docs.sun.com/coll/1660.1</a>) を参照してください。</p> |
| このコンポーネントに必要なその他のインストール | なし                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| このインストールを必要とする製品        | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Access Manager</li> <li>■ Portal Server</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| アンインストール前の作業            | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 必要に応じて、Directory Server LDAP データベースをバックアップします。</li> <li>■ Directory Server インスタンスのパスを指定できるようにします。</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                            |
| アンインストール後の作業            | <p>あとで Directory Server を同じ場所にインストールする場合は、インストールディレクトリが存在してはいけません。同じ場所に再インストールする場合は、インストールディレクトリとすべてのカスタム設定ファイルを事前に手動で削除しなければならない場合があります。</p>                                                                                                                                                                                                                                                    |

## HADB のアンインストール動作

表 8-6 HADB のアンインストールの詳細

| トピック                    | 詳細                                                                                                                                                                                                                                          |
|-------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定データとユーザーデータ           | <p>設定データとユーザーデータはアンインストール時に削除されません。デフォルトでは、これらのデータは次の場所にあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris OS および Linux: /etc/opt/SUNWhadb, /var/opt/SUNWhadb</li> <li>■ HP-UX の場合: /etc/opt/sun-hadb, /var/opt/sun-hadb</li> </ul> |
| このコンポーネントに必要なその他のインストール | なし                                                                                                                                                                                                                                          |

表 8-6 HADB のアンインストールの詳細 (続き)

| トピック             | 詳細                                                                                                                                       |
|------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| このインストールを必要とする製品 | HADB を使用して高可用性セッションが持続するように設定された Application Server。                                                                                     |
| アンインストール前の作業     | HADB をアップグレードして設定データを再利用するように計画する場合は、『Sun Java Enterprise System 5 アップグレードガイド (UNIX 版)』の High Availability Session Store に関する章を参照してください。 |
| アンインストール後の作業     | 必要なくなった設定データとユーザーデータを削除します。                                                                                                              |

## Message Queue のアンインストール動作

表 8-7 Message Queue のアンインストールに関する詳細

| トピック                    | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
|-------------------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定データ                   | インスタンスに固有の設定データ、ユーザーリポジトリ、およびアクセス制御ファイルはアンインストール後も残され、以後の再インストール時に再利用できます。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                             |
| このコンポーネントに必要なその他のインストール | Directory Server (オプション)                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                               |
| このインストールを必要とする製品        | Application Server (Message Queue と同じホストに存在する必要がある)。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| アンインストール前の作業            | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 実行しているすべてのブローカを停止します。ユーザー名 (管理者) とパスワードの入力が求められます。<code>imqcmd shutdown bkr [ -b hostName:port ]</code></li> <li>■ Message Queue の再インストールを予定しておらず、各ブローカインスタンスに関連するダイナミックデータ、フラットファイルユーザーリポジトリ、アクセス制御ファイルを削除する場合は、次のコマンドを使用してこのデータを削除します。<code>imqbrokerd -name instanceName -remove instance</code></li> <li>■ Message Queue アップグレードスクリプトを使用して Message Queue をアップグレードする場合には、使用するプロセスを書き留めておいてください。アップグレードスクリプトがインストール情報を Java ES レジストリに書き込まないからです。詳細は、『Sun Java Enterprise System 5 アップグレードガイド (UNIX 版)』を参照してください。</li> </ul> |
| アンインストール後の作業            | Message Queue の再インストールを予定していない場合は、製品コンポーネントのマニュアルで説明されているコマンドを実行してシステムをクリーンアップします。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |

## Monitoring Console のアンインストール動作

表 8-8 Monitoring Console のアンインストールの詳細

| トピック                    | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
|-------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定データ                   | ユーザーデータはアンインストール後も残りますが、それらのデータは再インストール前に削除されます。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
| このコンポーネントに必要なその他のインストール | なし                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| このインストールを必要とするその他の製品    | なし                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| アンインストール前の作業            | なし                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| アンインストール後の作業            | <p>データを残しておく場合は、次のデータを持続的な場所にコピーしてから、再インストール後に元の場所にコピーします。</p> <p>Solaris OS の場合:</p> <pre> /etc/opt/SUNWmfwk/config/mfwk.properties /etc/opt/SUNWmfwk/config/masteragent.properties /etc/opt/SUNWmfwk/config/nodelist /var/opt/SUNWmfwk/persistence/ /var/opt/SUNWmfwk/alarms/ </pre> <p>Linux および HP-UX の場合:</p> <pre> /etc/opt/sun/mfwk/config/mfwk.properties /etc/opt/sun/mfwk/config/masteragent.properties /etc/opt/sun/mfwk/config/nodelist /var/opt/sun/mfwk/persistence/ /var/opt/sun/mfwk/alarms/ </pre> |

## Portal Server のアンインストール動作

表 8-9 Portal Server のアンインストールの詳細

| トピック                    | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
|-------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定データとユーザーデータ           | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ 設定データはアンインストール時に削除されます。設定の解除には、Portal Server によって Access Manager 内に作成されたサービスの削除も含まれます。</li> <li>■ ユーザーチャネルのプロバイダは、アンインストール時に削除されないため、以後のインストールで再利用できます。</li> <li>■ カスタマイズ設定データには、ディスプレイプロファイル、プロパティファイル、リソース文字列などのカスタマイズデータが含まれ、これらはアンインストーラによっては削除されません。カスタマイズ設定データは以後のインストールで再利用できますが、それには Portal Server を同一ホスト上に同じ設定で再インストールする必要があります。</li> </ul> |
| このコンポーネントに必要なその他のインストール | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Directory Server</li> <li>■ Application Server または Web Server (Solaris OS 上で IBM WebSphere または BEA WebLogic に依存するように設定することもできる。)</li> <li>■ Access Manager</li> <li>■ Service Registry</li> </ul>                                                                                                                                                    |
| このインストールを必要とする製品        | なし                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                            |
| アンインストール前の作業            | Directory Server と Web コンテナが動作していることを確認します。Web コンテナが Web Server である場合は、Web Server の管理サーバーが動作している必要があります。                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| アンインストール後の作業            | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Portal Server が Web Server 内で実行されており、Portal Server だけを削除する場合、Access Manager を再起動する必要があります。詳細については、<a href="#">195 ページの「Access Manager アンインストール後の問題」</a>を参照してください</li> <li>■ Portal Server が IBM WebSphere Web コンテナに配備されている場合、追加のアンインストール作業が必要となる場合があります。</li> </ul>                                                                                  |

## Portal Server Secure Remote Access のアンインストール動作

表 8-10 Portal Server Secure Remote Access のアンインストールに関する詳細

| トピック                    | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|-------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定データ                   | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Portal Server Secure Remote Access コア製品コンポーネントのすべての設定データは、アンインストール時に削除されます。</li> <li>■ 配備されているすべての Web アプリケーションの配備が解除されます。</li> <li>■ Portal Server Secure Remote Access のゲートウェイ、Netlet プロキシ、Rewriter プロキシの各サブコンポーネントの設定データには、ユーザーはアクセスできません。</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
| このコンポーネントに必要なその他のインストール | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Portal Server Secure Remote Access のゲートウェイ、Netlet プロキシ、および Rewriter プロキシは、Portal Server に依存しています。Portal Server を削除して、ゲートウェイ、Netlet プロキシ、および Rewriter プロキシを残しておくことはできません。</li> <li>■ Portal Server、Secure Remote Access ゲートウェイ、Netlet プロキシ、Rewriter プロキシの各サブコンポーネントは、Access Manager SDK に依存しています。</li> <li>■ Access Manager SDK は、ゲートウェイ、Netlet プロキシ、および Rewriter プロキシと同じホスト上に存在している必要があります。ゲートウェイ、Netlet プロキシ、および Rewriter プロキシを同一ディレクトリ内に置くことはできません。</li> <li>■ Portal Server Secure Remote Access のどの製品コンポーネントを削除する場合も、それに依存する製品コンポーネントを削除する必要はありません。</li> <li>■ ゲートウェイを削除しても、Access Manager SDK をホスト上に残すことができます。</li> </ul> |
| このインストールを必要とする製品        | なし                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| アンインストール前の作業            | なし                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
| アンインストール後の作業            | なし                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |

## Service Registry のアンインストール動作

表 8-11 Service Registry のアンインストールに関する詳細

| トピック                    | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|-------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定データ                   | <p>レジストリ設定プロセスは、レジストリデータベースドメインおよびサーバーキーストアを次のディレクトリ内にインストールします。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris OS の場合: /var/opt/SUNWsrvc-registry</li> <li>■ Linux および HP-UX の場合: /var/opt/sun/srvc-registry</li> </ul> <p>このディレクトリは、Service Registry をアンインストールしても削除されません。つまり、将来のインストールまたはリリースで使用するために、必要に応じてデータベースを残しておくことができます。</p>                                                                                                                                                                                                    |
| このコンポーネントに必要なその他のインストール | <p>Application Server (ドメイン管理サーバーとコマンド行管理ツール)</p> <p>HADB</p> <p>Message Queue</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| このインストールを必要とする製品        | なし                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
| アンインストール前の作業            | <ol style="list-style-type: none"> <li>1. <i>ServiceRegistry-base</i> /install ディレクトリに移動します。</li> <li>2. 次のコマンドを使って、Service Registry ドメインを停止します。<br/> <pre>.../ant -f build-install.xml appserver.domain.stop</pre> </li> <li>3. 次のコマンドを使って、Service Registry ドメインを削除します。<br/> <pre>.../ant -f build-install.xml appserver.domain.delete</pre> </li> </ol> <p>将来使用するためにレジストリデータベースを残しておく場合は、レジストリを再インストールする前に、Solaris OS の場合は /var/opt/SUNWsrvc-registry/3.0 ディレクトリを、Linux および HP-UX の場合は /var/opt/sun/srvc-registry/3.0 ディレクトリを別の場所にコピーします。</p> |
| アンインストール後の作業            | <p>一部のオプション作業については、<a href="#">196 ページ</a>の「<a href="#">Service Registry アンインストール後の作業</a>」を参照してください。</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |

## Sun Cluster ソフトウェアと Sun Cluster Geographic Edition のアンインストール動作

表 8-12 Sun Cluster と Sun Cluster Geographic Edition のアンインストールの詳細

| トピック                    | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
|-------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定データ                   | インストールされてはいるが、クラスタノードの設定に一度も使用されていない Sun Cluster ソフトウェアを除き、Sun Cluster ソフトウェアの削除には Java Enterprise System アンインストーラを使用しないでください。詳細については、 <a href="#">194 ページ</a> の「 <a href="#">Sun Cluster ソフトウェアのアンインストール</a> 」を参照してください。                                                                                 |
| このコンポーネントに必要なその他のインストール | <p>Sun Cluster Geographic Edition ソフトウェアは、Sun Cluster Geographic Edition コンポーネントが存在するすべてのホストで削除する必要があります。詳細は、『Sun Cluster Geographic Edition Installation Guide』の第 5 章「Uninstalling the Sun Cluster Geographic Edition Software」を参照してください。</p> <p>Sun Cluster コアと Sun Cluster エージェントは、同時に削除する必要があります。</p> |
| このインストールを必要とする製品        | なし                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| アンインストール前の作業            | <p>Sun Cluster ソフトウェアのアンインストールには、Sun Cluster のインストール時に提供されるユーティリティーだけを使用します。</p> <p>注意: Sun Cluster Geographic Edition ソフトウェアを削除するには、事前に Sun Cluster ソフトウェアを削除する必要があります。</p>                                                                                                                              |
| アンインストール後の作業            | Sun Cluster ソフトウェアのアンインストール後に、製品レジストリのアップデートが必要になる場合があります。詳細については、 <a href="#">194 ページ</a> の「 <a href="#">Sun Cluster ソフトウェアのアンインストール</a> 」を参照してください。                                                                                                                                                     |

## Web Proxy Server のアンインストール動作

表 8-13 Web Proxy Server のアンインストールの詳細

| トピック         | 詳細                                                                     |
|--------------|------------------------------------------------------------------------|
| 設定データ        | インストール場所の下にある alias ディレクトリ内の証明書データベースファイルのみが維持されます。その他のファイルはすべて削除されます。 |
| 依存性          | Directory Server (省略可能。外部 LDAP アクセス制御が選択された場合)                         |
| アンインストール前の作業 | Web Proxy Server のすべてのインスタンスを停止します。                                    |

表 8-13 Web Proxy Server のアンインストールの詳細 (続き)

| トピック         | 詳細                                                                                                   |
|--------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| アンインストール後の作業 | WebProxyServer-base/alias ディレクトリの下に証明書データベースが保存されています。再インストールの前に、証明書データベースを移動し、古いインストールディレクトリを削除します。 |

## Web Server のアンインストール動作

表 8-14 Web Server のアンインストールの詳細

| トピック                        | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
|-----------------------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定データとユーザーデータ               | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ アンインストール時に、ユーザーデータは削除されませんが、設定データは削除されます。</li> <li>■ Web Server の管理サーバーインスタンスと設定済みの Web Server インスタンスディレクトリは、削除されます。初期設定によるドキュメントルートディレクトリは削除されません。</li> <li>■ Web Server 管理サーバーインスタンスと Web Server インスタンスは、アンインストールが完了する前に停止されます。</li> </ul>                                             |
| このコンポーネントに必要な<br>その他のインストール | なし                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |
| このインストールを必要とする<br>製品        | Web Server を Web コンテナとして使用するように設定できるコンポーネント (Access Manager、Portal Server など)。Application Server ロードバランスプラグイン (Application Server が Web Server を Web コンテナとして使用する場合)。                                                                                                                                                              |
| アンインストール前の作業                | Web コンテナの管理者パスワードを入力できることを確認します。                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| アンインストール後の作業                | <p>設定データを維持する場合は、インストールディレクトリ内の管理サーバーインスタンスと Web Server インスタンスのディレクトリのバックアップを行います。</p> <p>Web Server を同じ場所に再インストールする場合は、インストールディレクトリが存在してはいけません。同じ場所に再インストールする場合は、インストールディレクトリとすべてのカスタム設定ファイルを事前に手動で削除しなければならない場合があります。</p> <p>その他のアンインストール後の問題については、197 ページの「Web Server アンインストール後の作業 (Web Server はアンインストールされていない)」を参照してください。</p> |

## アンインストーラ用の管理者アクセス権の付与

アンインストール対象として選択した製品コンポーネントによっては、Access Manager と Directory Server への管理者アクセス権をアンインストーラに付与する必要があります。

- Application Server 上の Access Manager Web アプリケーションの配備を取り消し、Access Manager スキーマを削除するには、Access Manager の管理者アクセス権が必要です。
- アンインストール時に設定ディレクトリを管理する必要がある場合は、Directory Server の管理者アクセス権が必要です。

次の表は、管理者アクセス権を付与するためにアンインストーラが必要とする情報を示しています。各表の左の列は、指定が必要な情報のグラフィカルモードのラベルと状態ファイルのパラメータを示します。右の列は、その説明です。

表 8-15 必要な管理情報

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                     | 説明                                                                                          |
|--------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------|
| <b>Access Manager</b>                |                                                                                             |
| 管理者ユーザー ID<br>IS_IAS81_ADMIN         | Application Server 管理者のユーザー ID                                                              |
| 管理者パスワード<br>IS_IAS81_ADMINPASSWD     | Application Server 管理者のパスワード。                                                               |
| Directory Manager DN<br>IS_DIRMGRDN  | Directory Server に対して無制限のアクセス権を持つユーザーの識別名 (DN)。<br>デフォルト値は cn=Directory Manager です。         |
| ディレクトリマネージャーパスワード<br>IS_DIRMGRPASSWD | ディレクトリマネージャーのパスワード。                                                                         |
| <b>Directory Server</b>              |                                                                                             |
| 管理者ユーザー ID<br>CONFIG_DIR_ADM_USER    | 設定ディレクトリに対して管理者権限を持つユーザー。このユーザーは、サフィックスの作成や削除など、Directory Server の設定を変更できます。アクセス制御の制約を受けます。 |
| 管理者パスワード<br>CONFIG_DIR_ADM_PASSWD    | 管理者のパスワード。                                                                                  |
| <b>Portal Server</b>                 |                                                                                             |

表 8-15 必要な管理情報 (続き)

| ラベルと状態ファイルのパラメータ                                   | 説明                                                |
|----------------------------------------------------|---------------------------------------------------|
| 管理者パスワード<br>PS_DEPLOY_ADMIN_PASSWORD               | Portal Server が管理者として Web コンテナにアクセスするとき使用するパスワード。 |
| Access Manager 管理者パスワード<br>PS_IS_ADMIN_PASSWORD    |                                                   |
| Directory Server 管理者パスワード<br>PS_DS_DIRMGR_PASSWORD |                                                   |
| Directory Server 管理者ドメイン<br>PS_DS_DIRMGR_DN        |                                                   |

## アンインストーラの実行

170 ページの「前提条件の確認」に記載されている関連作業が完了し、コンポーネントのアンインストール動作を計画すると、アンインストーラを実行する準備が整います。ここでは、アンインストーラを使用する 3 とおりの方法を説明します。

- 185 ページの「グラフィカルモードでのアンインストーラの実行」
- 188 ページの「テキストベースモードでのアンインストーラの実行」
- 191 ページの「サイレントモードでのアンインストーラの実行」

uninstall コマンドの構文については、付録 B を参照してください。

## グラフィカルモードでのアンインストーラの実行

ここでは、対話形式によるグラフィカルインタフェースを使用して、Java ES 製品コンポーネントをアンインストールする方法を説明します。

### ▼ グラフィカルアンインストーラの起動

- 1 (オプション) ローカルディスプレイへのアクセスを確保します。

リモートマシンにログインするときは、DISPLAY 環境変数がローカルディスプレイに適した設定になっていることを確認します。DISPLAY 変数が正しく設定されていないと、インストーラはテキストベースモードで実行されます。

- C Shell での例 (マシン名は myhost):

```
setenv DISPLAY myhost:0.0
```

- Korn Shell での例 (マシン名は myhost):

```
DISPLAY=myhost:0.0
```

ローカルディスプレイでインストーラを実行するには、表示権限の付与が必要になる場合があります。たとえば、次のコマンドを使用して、myhost から serverhost のルートユーザーに表示権限を付与することができます。

```
myhost\> xauth extract - myhost:0.0|rsh -l root serverhost xauth merge -
```

---

注 - このような権限を安全に付与する手順については、『Solaris X Window System Developer's Guide』の「Manipulating Access to the Server」の章を参照してください。

---

- 2 rootとしてログインしていない場合は、スーパーユーザーになります。
- 3 アンインストーラが格納されているディレクトリに移動します。
  - Solaris OS の場合: /var/sadm/prod/SUNWentsys5
  - Linux および HP-UX の場合: /var/sadm/prod/sun-entsys5
- 4 グラフィカルアンインストーラを起動します。

```
./uninstall
```

「ようこそ」ページが表示されます。
- 5 「次へ」をクリックして次に進みます。  
「コンポーネントの選択」ページが表示されます。

## ▼ アンインストールする製品コンポーネントの選択

- 1 製品コンポーネントを調べて、アンインストールするコンポーネントを選択します。
  - システムにインストールされて有効になっている製品コンポーネントを選択できます。システムにインストールされていない製品コンポーネントは無効になっています。
  - 製品コンポーネントによっては、サブコンポーネントを含むものもあります。それらの製品コンポーネントを展開すると、対応するサブコンポーネントが表示されます。
- 2 選択内容に問題がなければ、「次へ」をクリックします。

- 3 設定または依存関係の問題を解決します。  
アンインストーラが削除対象として選択された製品コンポーネント間の依存関係を認識し、設定データが失われる可能性が検出された場合には、警告メッセージが出力されます。次の選択肢があります。
  - a. 「続行」をクリックして、アンインストールを続行します。
  - b. 「閉じる」をクリックして、「ソフトウェアコンポーネントの選択」ページに戻ります。
- 4 設定解除ページが表示される場合は、その製品コンポーネントに必要な情報を入力します。

### ▼ 管理者アクセス権の付与

削除を指定した製品コンポーネントによっては、アンインストーラから管理者IDとパスワードが要求されます。アンインストーラで入力する必要のある情報の詳細については、184ページの「アンインストーラ用の管理者アクセス権の付与」を参照してください。

---

注-それに加えて、ポート番号またはホスト名の入力を求められる場合もあります。

---

- 1 必要な管理者情報を指定します。
- 2 「次へ」をクリックして、「アンインストールの準備が完了しています」ページに進みます。

### ▼ ソフトウェアのアンインストール

アンインストーラは、削除対象として選択された製品コンポーネントと再利用可能になるディスク容量の合計を一覧表示します。

- 1 アンインストールの選択内容を確認し、必要に応じて次の手順を使用して変更します。
  - a. 「戻る」を何度かクリックして「ソフトウェアコンポーネントの選択」ページを表示します。
  - b. 必要に応じて変更します。
  - c. 「次へ」をクリックし、アンインストーラページを再び先に進めます。  
アンインストーラは、ユーザーが以前に指定した値を記憶しています。ユーザーが以前に指定した値は変更可能です。

- 2 選択内容に問題がなければ、「次へ」をクリックします。  
アンインストーラはシステムからのソフトウェアの削除を開始し、次の情報を表示します。
  - 全体的な完了割合を示す進捗状況バー
  - 現在削除中のパッケージの名前
  - すべての製品コンポーネントソフトウェアの削除が完了すると、「アンインストールが完了しました」ページが表示されます。
- 3 「サマリーの表示」ボタンまたは「アンインストールログの表示」ボタンをクリックすると、アンインストールに関する情報が表示されます。
  - アンインストールサマリー: アンインストールされた製品コンポーネントおよびそれらの製品コンポーネントの設定情報がリストされます。
  - アンインストールログ: アンインストール時にアンインストーラが出力したすべてのメッセージが表示されます。
  - アンインストールのサマリーファイルとログファイルは、次の場所でも確認できます。  
Solaris OS の場合: /var/sadm/install/logsLinux および HP-UX の場合:  
/var/opt/sun/install/logs
- 4 「閉じる」をクリックしてアンインストーラを終了します。
- 5 **Access Manager、Service Registry** をアンインストールした場合は、[195 ページの「アンインストール後の作業の完了」](#)に進みます。

## テキストベースモードでのアンインストーラの実行

テキストベースインタフェースを使用すると、端末ウィンドウ内に表示されるプロンプトに順次応答することで、端末ウィンドウからアンインストーラを直接実行できます。使用方法については、[106 ページの「テキストベースのインタフェースの使用方法」](#)を参照してください。

アンインストール中に問題が発生した場合は、[第9章](#)を参照してください。

### ▼ テキストベースモードでのアンインストーラの起動

- 1 root としてログインしていない場合は、スーパーユーザーになります。
- 2 アンインストーラのディレクトリに移動します。
  - Solaris OS の場合: /var/sadm/prod/SUNWentsys5

- Linux および HP-UX の場合: /var/sadm/prod/sun-entsys5

### 3 アンインストーラを実行します。

```
./uninstall -nodisplay
```

「ようこそ」というメッセージが表示され、システムにインストールされているすべての使用可能な Java ES 製品コンポーネントがリスト表示されます。

## ▼ アンインストールする製品コンポーネントの選択

アンインストーラは、システム内で検出したインストール済みの Java ES 製品コンポーネントすべてに番号を付けてリストし、削除対象として選択します。システムにインストールされていない無効になっている製品コンポーネントは選択できません。インストール済みコンポーネントをすべてアンインストールする、または一部のインストール済みコンポーネントのみをアンインストールするように選択することができます。

### 1 アンインストールする製品コンポーネントを選択します。

- インストール済みの製品コンポーネントをすべてアンインストールするには、**Retrun** キーを押します。
- アンインストールする製品コンポーネントを指定するには、アンインストールする製品コンポーネントに対応する番号をコマンドで区切ってリストにし、**Return** キーを押します。

### 2 設定または依存関係の問題を解決します。

アンインストーラは、削除対象として選択された製品間に製品コンポーネントの依存関係を検出すると、設定データが失われる可能性があることを知らせる警告メッセージが表示されます。次の選択肢があります。

- a. アンインストールを続行するには、**Yes** と入力し、**Return** キーを押します。
- b. 「コンポーネントの選択」ページに戻るには、**No** と入力し、**Return** キーを押します。
- c. アンインストールを終了するには、**!**を入力し、**Return** キーを押します。

### 3 設定解除ページが表示される場合は、その製品コンポーネントに必要な情報を入力します。

## ▼ 管理者アクセス権の付与

- アンインストーラが管理者IDとパスワードを必要とする製品コンポーネントを選択した場合は、管理者IDとパスワードが要求されます。

アンインストーラで入力する必要がある情報の詳細については、184ページの「アンインストーラ用の管理者アクセス権の付与」を参照してください。

---

注-削除対象として選択した製品コンポーネントによっては、ポート番号またはホスト名の入力を求められる場合もあります。

---

## ▼ ソフトウェアのアンインストール

アンインストーラは、ソフトウェアをシステムから削除する前に、サマリーページを表示します。このページには、削除対象として選択された製品コンポーネントが表示されます。

- 1 選択した内容を確認します。
  - a. 変更が必要な場合は、「コンポーネントの選択」リストが表示されるまで、<文字>を入力し **Return** キーを押してページを順に戻ります。
  - b. 「コンポーネントの選択」リストを必要に応じて変更します。
  - c. アンインストーラ画面を再び先に進めます。
- 2 選択内容に問題がなければ、数値1を入力し、**Return** キーを押します。

アンインストーラは、システムからのソフトウェアの削除を開始します。アンインストール時に、アンインストーラは全体的な完了割合を示す進捗状況バーを表示します。

すべての製品コンポーネントソフトウェアが削除されたら、アンインストールサマリーおよびログを表示することができます。
- 3 1または2を入力し、**Return** キーを押してアンインストールに関する情報を表示します。
  - アンインストールサマリー:1を入力すると、アンインストールされた製品コンポーネントおよびそれらの製品コンポーネントの設定情報がリストされます。
  - アンインストールログ:2を入力すると、アンインストール時にアンインストーラが出力したすべてのメッセージがリストされます。

アンインストールのサマリーファイルとログファイルは、次の場所でも見ることができます。

Solaris OS の場合: /var/sadm/install/logsLinux および HP-UX の場合:  
/var/opt/sun/install/logs

- 4 !文字を入力して、アンインストーラを終了します。

Access Manager、Service Registry をアンインストールした場合は、195 ページの「アンインストール後の作業の完了」に進みます。

## サイレントモードでのアンインストーラの実行

サイレントアンインストールは、設定内容が似ている複数のホスト上の Java ES 製品コンポーネントをアンインストールする場合に便利です。サイレントモードでのアンインストール手順は、第5章で説明したサイレントモードでのインストール手順に似ています。

### ▼ 状態ファイルの作成

サイレントアンインストールを実行するには、まずグラフィカルモードまたはテキストベースモードで対話式アンインストールセッションを実行し、状態ファイルを生成する必要があります。詳細は、120 ページの「初期状態ファイルの生成」を参照してください。

- 1 root としてログインしていない場合は、スーパーユーザーになります。
- 2 アンインストーラのディレクトリに移動します。
  - Solaris OS の場合: /var/sadm/prod/SUNWentsys5
  - Linux および HP-UX の場合: /var/sadm/prod/sun-entsys5
- 3 アンインストーラのグラフィカルインタフェースを使用する場合は、ローカルディスプレイへのアクセスの確保が必要になることがあります。185 ページの「グラフィカルモードでのアンインストーラの実行」を参照してください。
- 4 サイレントモードでアンインストーラを実行します。例:

---

ヒント-このセッションでソフトウェアをアンインストールしない場合は、-no オプションを含めます。

---

グラフィカルモードの場合:

```
./uninstall -saveState statefile_path
```

テキストベースモードで、ソフトウェアをアンインストールしない場合:

```
./uninstall -no -nodisplay -saveState statefile_path
```

uninstall コマンドの完全な構文については、236 ページの「uninstall コマンド」を参照してください。

5 アンインストーラを最後まで実行します。

ユーザーが入力要求に応答するたびに、アンインストーラはその内容を指定された状態ファイルに記録します。アンインストールが完了すると、指定した場所に状態ファイルが保存されます。-no オプションを使用した場合は、ソフトウェアはアンインストールされません。

6 サイレントアンインストールを実行するホストごとに、状態ファイルのコピーを作成します。

7 各ファイルを編集して、サイレントアンインストールを実行するホストに固有の情報を設定します。

状態ファイルを編集する際の指針については、121 ページの「状態ファイルの編集」を参照してください。状態ファイルの編集には状態ファイル ID の生成も含まれます。これについては、124 ページの「プラットフォームに適した状態ファイル ID の作成」を参照してください。

## ▼ サイレントモードでのアンインストーラの実行

1 Java ES 製品コンポーネントをアンインストールするホストの状態ファイルが適切に準備され、編集されていることを確認します。

2 root としてログインしていない場合は、スーパーユーザーになります。

3 アンインストーラのディレクトリに移動します。

- Solaris OS の場合: /var/sadm/prod/SUNWentsys5
- Linux および HP-UX の場合: /var/sadm/prod/sun-entsys5

4 アンインストーラを起動します。例:

```
./uninstall -noconsole -state statefile_path
```

uninstall コマンドの完全な構文については、236 ページの「uninstall コマンド」を参照してください。

## ▼ サイレントアンインストールの進行状況の監視

1 端末ウィンドウで、ログファイルのディレクトリに移動します。

Solaris OS の場合: /var/sadm/install/logsLinux および HP-UX の場合:  
/var/opt/sun/install/logs

- 現在のアンインストールに関するログファイルを探します。監視対象のログファイルは、次のとおりです。

`Java_Enterprise_System_5_uninstall.Btimestamp`

`timestamp` 変数は、ログの作成時刻を表します。変数は `MMddhhmm` 形式で指定します。各表記の意味は次のとおりです。

`MM` 月を示す  
`dd` 日付を示す  
`hh` 時間を示す  
`mm` 分を示す

- `tail` コマンドを使用して、ログに書き込まれるメッセージを監視します。例:

```
tail -f logfile_name
```

`tail` プログラムを終了するには、`Ctrl+C` キーを押します。

## Java ES レポータのアンインストール

Java ES Reporter は Java ES インストーラによって管理されるコンポーネントではないため、アンインストーラを使用してレポータを削除することはできません。

### ▼ Java ES レポータのアンインストール

- Java ES** レポータを無効にします。  
[139 ページの「Java ES レポータのインストール後の設定」](#)に記載されている手順を実行します。
- root** として、次のファイルを削除します。

---

|                 |                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|-----------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| Solaris OS      | <code>/opt/SUNWmfwk/lib/commons-codec-1.3.jar</code><br><code>/opt/SUNWmfwk/lib/commons-httpclient-3.0.jar</code><br><code>/opt/SUNWmfwk/lib/mfwk_reporter.jar</code><br><code>/etc/opt/SUNWmfwk/config/reporter/config.properties</code><br><code>/var/opt/SUNWmfwk/jobtool/reporter/job_measurement_reporter.xml</code><br><code>/etc/cacao/instances/default/modules/com.sun.mjwk_reporter.xml</code><br><code>/etc/opt/SUNWmfwk/config/reporter/config_state.properties</code>                           |
| Linux および HP-UX | <code>/opt/sun/mfwk/share/lib/commons-codec-1.3.jar</code><br><code>/opt/sun/mfwk/share/lib/commons-httpclient-3.0.jar</code><br><code>/opt/sun/mfwk/share/lib/mfwk_reporter.jar</code><br><code>/etc/opt/sun/mfwk/config/reporter/config.properties</code><br><code>/var/opt/sun/mfwk/jobtool/reporter/job_measurement_reporter.xml</code><br><code>/etc/opt/sun/cacao/instances/default/modules/com.sun.mjwk_reporter.xml</code><br><code>/etc/opt/sun/mfwk/config/reporter/config_state.properties</code> |

---

## Sun Cluster ソフトウェアのアンインストール

Sun Cluster ソフトウェアがインストールされているが、クラスタノードの設定に一度も使用されていない場合を除き、Sun Cluster ソフトウェアの削除には Java ES アンインストーラを使用しないでください。Sun Cluster ソフトウェアのアンインストールには、Sun Cluster ソフトウェアのインストール時に提供されるユーティリティを使用します。Sun Cluster Core と Sun Java System 用 Sun Cluster エージェントは、同時に削除する必要があります。Sun Cluster Geographic Edition ソフトウェアを削除するには、事前に Sun Cluster ソフトウェアを削除する必要があります。Sun Cluster ソフトウェアの設定解除およびアンインストールの詳細については、『Sun Cluster Software Installation Guide for Solaris OS』を参照してください。

Sun Cluster ソフトウェアを手動でアンインストールしたら、Java ES アンインストーラを実行して Sun Cluster コンポーネントを製品レジストリから削除します。

## アンインストール後の作業の完了

ここでは、システムから Java ES 製品コンポーネントをアンインストールしたあとで実行が必要となる作業について説明します。実際に必要となる作業は、アンインストールした製品コンポーネントによって異なります。

- 195 ページの「Access Manager アンインストール後の問題」
- 195 ページの「Access Manager アンインストール後の作業 (Application Server はアンインストールされていない)」
- 196 ページの「Service Registry アンインストール後の作業」
- 197 ページの「Web Server アンインストール後の作業 (Web Server はアンインストールされていない)」

### Access Manager アンインストール後の問題

Access Manager はアンインストールしたが、その Web コンテナ (Application Server または Web Server) はアンインストールしなかった場合、Access Manager が配備されていたインスタンスに対して設定変更を適用する必要があります。

場合によっては、アンインストーラでは Access Manager ファイルの一部またはすべてが削除されないことがあります。その場合は、次のデフォルトディレクトリとその内容を削除して、最終的なクリーンアップを行います。

- Solaris OS の場合: /opt/SUNWam
- Linux および HP-UX の場合: /opt/sun/identity

Access Manager がデフォルトの場所にインストールされなかった場合:

*AccessManager\_base/identity*

### Access Manager アンインストール後の作業 (Application Server はアンインストールされていない)

Access Manager はアンインストールしたが、その配備先の Application Server はアンインストールしなかった場合、次の手順を実行する必要があります。

## ▼ Access Manager のアンインストール後の Application Server の再起動

- 1 必要に応じて **Application Server** の管理インスタンスを起動します。たとえば、**Solaris** ホストの場合は次のようにします。

```
cd /opt/SUNWappserver/appserver/bin ./asadmin start-domain --user admin_user --passwordfile
path_to_admin_password_file domainname
```

- 2 ブラウザウィンドウから **Application Server** の管理コンソールにアクセスします。デフォルトの URL は、`https://hostname:4849` です。
- 3 左の区画で、「アプリケーションサーバーインスタンス」の左の鍵をクリックします。
- 4 サーバーまたは **Access Manager** が配備されていた **Application Server** インスタンスの名前を選択します。
- 5 「再起動」をクリックします。

## Service Registry アンインストール後の作業

場合によっては、アンインストールではインストールファイルの一部またはすべてが削除されないことがあります。最終的なクリーンアップを行うには、次の場所にある *Service Registry-base* ディレクトリとその内容を削除します。

- Solaris OS の場合: `/opt/SUNWsrcv-registry`
- Linux および HP-UX の場合: `/opt/sun/srcv-registry`

Service Registry データベース、ドメイン、およびキーストアが格納されたディレクトリは、レジストリのアンインストール時に削除されません。

- Solaris OS の場合: `/var/opt/SUNWsrcv-registry`
- Linux および HP-UX の場合: `/var/opt/sun/srcv-registry`

必要であれば、このディレクトリを手動で削除してもかまいません。ただし、このデータベースを保存しておき、将来のインストール時やリリース時に使用するには、レジストリの再インストール前に次のディレクトリを別の場所にコピーし、再インストール後にそれを元の場所にコピーして戻します。

- Solaris OS の場合: `/var/opt/SUNWsrcv-registry/3.0`
- Linux および HP-UX の場合: `/var/opt/sun/srcv-registry/3.0`

再インストール時、Service Registry をインストール前にレジストリデータベースのコピーを作成した場合は、再インストール後、同じものをコピーし直してください。

3.0 ディレクトリに保存されているデータベースファイルとキーストアファイルを復元したら、プラットフォーム固有のバリエーションを使用して次のコマンドを実行します。

```
.../ant -f build-install.xml appserver.domain.stop export.registryOperatorCert install.cacerts \
appserver.domain.start
```

これにより、既存のユーザーは Service Registry Web コンソールを引き続き使用できます。

## Web Server アンインストール後の作業 (Web Server はアンインストールされていない)

Access Manager はアンインストールしたが、その配備先の Web Server はアンインストールしなかった場合、次の手順を実行する必要があります。

### ▼ Access Manager のアンインストール後の Web Server の再起動

- 1 必要に応じて Web Server の管理インスタンスを起動します。165 ページの「[Web Server の起動](#)」を参照してください。
- 2 Web Server の管理コンソールにアクセスします。例:  

```
/var/opt/SUNWwbsvr7 instance-config-root /admin-server/bin/startserv
```
- 3 「再起動」をクリックして Web コンテナを再起動します。



# トラブルシューティング

---

この章では、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) のインストールとアンインストールに関する問題を解決するためのヒントを提供します。

この章で説明する内容は、次のとおりです。

- 199 ページの「問題の解決方法」
- 207 ページの「インストールに関する問題の解決」
- 212 ページの「アンインストールに関する問題の解決」
- 214 ページの「Common Agent Container の問題の解決」
- 217 ページの「インストール後の起動/再起動の問題の解決」
- 219 ページの「製品コンポーネントのトラブルシューティングのためのヒント」

## 問題の解決方法

ここでは、Java ES のインストールおよびアンインストール時に、問題の原因を分析して特定するためのガイドラインを紹介します。

ここで説明する内容は、次のとおりです。

- 200 ページの「インストールログファイルの検証」
- 201 ページの「ログビューアの使用」
- 203 ページの「製品の依存関係の検証」
- 204 ページの「リソースと設定のチェック」
- 205 ページの「インストール後の設定のチェック」
- 205 ページの「配布メディアのチェック」
- 205 ページの「Directory Server の接続性チェック」
- 205 ページの「Web Server のファイルおよびディレクトリの削除」
- 206 ページの「パスワードの確認」
- 206 ページの「製品コンポーネントのインストール状態の検証」
- 206 ページの「アンインストールするための管理者アクセスの確認」

## インストールログファイルの検証

インストールまたはアンインストール中に問題が発生した場合は、発生した問題に関する情報を確認するために、最初にインストールログを調べます。ユーザーの選択、パッケージの操作、インストールまたはアンインストールの手順などの操作のあとは、情報メッセージ、警告メッセージ、およびエラーメッセージが発行されます。インストール、アンインストール、およびインストール時に行なった設定に関するメッセージは、ソースログファイルに収集されます。各メッセージに表示される情報は、日時、ログレベル、モジュール ID、およびメッセージテキストで構成されます。パスワードが出力されることはありません。

### ログファイルの形式

インストールまたはアンインストールの情報が収集されるログファイルには、次の 4 種類のファイルがあります。

- サマリーファイル。何をインストールして設定したかについての概要情報が記録されます。
- 詳細バージョン A ファイル。完了情報が記録されます。
- 詳細バージョン B ファイル。ログメッセージの詳細が記録されます。
- デバッグファイル。インストールに失敗したときにそれに関連する情報が記録されます。デバッグファイルは、ほかのログファイルのいずれかがエラーを示しているときに使用します。

ログメッセージは、ULF (Unified Logging Format) と呼ばれる Sun 標準形式で格納されます。ULF を読みにくい場合は、Java ES ログビューアを使ってログメッセージを表示することもできます。

ソースログファイルは、テキストエディタを使って編集できます。次の表は、ソースログファイルの形式を示しています。

表 9-1 ログファイルの形式

| ログに記録される内容 | ログファイル名の形式                                                                                                                                                                                                                                  |
|------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| インストーラ     | <code>Java_Enterprise_System_5_install.Atimestamp</code><br><code>Java_Enterprise_System_5_install.Btimestamp</code><br><code>JavaES_Install_log.timestamp</code><br><code>Java_Enterprise_System_5_Summary_Report_install.timestamp</code> |

表 9-1 ログファイルの形式 (続き)

| ログに記録される内容 | ログファイル名の形式                                                               |
|------------|--------------------------------------------------------------------------|
| アンインストーラ   | <code>Java_Enterprise_System_5_uninstall.Atimestamp</code>               |
|            | <code>Java_Enterprise_System_5_uninstall.Btimestamp</code>               |
|            | <code>JavaES_UnInstall_log.timestamp</code>                              |
|            | <code>Java_Enterprise_System_5_Summary_Report_uninstall.timestamp</code> |

アンインストールが完了すると、アンインストーラはインストーラ、ログビューア、およびアンインストーラ自体を削除します。ただし、ソースログファイルは削除されず、次の場所に格納されます。

- Solaris の場合: `/var/sadm/install/logs`
- Linux および HP-UX の場合: `/var/opt/sun/install/logs`

## ▼ ログファイルによるトラブルシューティング

### 1 サマリーファイルを調べます。例:

`Java_Enterprise_System5_Summary_Report_install.timestamp`

問題が発生した場合は、どのコンポーネントが問題の原因であるかを確認します。複数の問題が発生したかどうかを確認します。必要に応じて、詳細ログのいずれかまたは両方のファイルを調べる必要があります。

### 2 詳細ログを調べます。例:

`JavaES_Install_log.timestamp`

最初に発生したエラーまたは警告を探して、解決します。1つのエラーを解決すると、関連性がないように見える後続の多数のエラーも解決することがよくあります。

## ログビューアの使用

Java ES ログビューアは、`JavaES_Install_log.timestamp` ファイルまたは `JavaES_UnInstall_log.timestamp` ファイルの ULF ログメッセージを表示するための、グラフィカルな画面です。ログファイルを表示するには、ログビューアメインページの「ファイル」メニューから「Open」を選択します。指定するファイルがすでに存在する場合または書き込み権限で開けない場合には、ログビューアエラーが発生し、ログビューアメインページに戻ります。インストーラがソースログを記録するために使用するディレクトリに、そのようなファイルを置くことはできません。

「Search」 ボタンをクリックすると、フィルタ条件に一致するメッセージが1つのログテーブルに表示されます。ログテーブルが表示されたあとに、ログテーブルの各行を選択すると、その詳細が表示されます。複数行の形式で表示されることもあります。

## フィルタのしくみ

ログ出力を調整するには、ULF ログファイルを選択したあとに、ログビューアメインページで表示設定と検索条件を指定します。「Display Preferences」には、選択内容を表示する言語と、検索したレコードの表示に適用する制限を指定します。

- 「**Language**」。メッセージを表示するための翻訳言語を選択します。デフォルトは英語です。このリストは、インストーラによって格納される翻訳リソースバンドルに基づいて表示されます。リソースバンドルを指定しない場合は、メッセージとログビューアインタフェースは英語で表示されます。
- 「**Timestamp**」。フィルタで検索して表示するレコードを設定します。オプションは、「View All」、「Most Recent」、および「Oldest」です。
  - 「**View All**」。すべてのデータが検索されて表示されます。
  - 「**Most Recent**」。すべてのデータが検索されて、最新のデータが最初に表示されます。
  - 「**Oldest**」。すべてのデータが検索されて、もっとも古いデータが最初に表示されます。

メッセージをフィルタで検索するときには、重要度の高いものまたは目的に合っているものから表示されるように、3つの方法が用意されています。ログレベル別、ログ一別、および内容別の表示方法があります。

- 「**Log Level**」。メッセージを検索するときのログレベルを選択します。オプションは、「SEVERE」、「ERROR」、「WARNING」、「INFO」、「CONFIG」、「FINE」、「FINER」、および「FINEST」です。「FINEST」を選択することは、すべてのレコードを表示することを選択することになります。ログレベルを選択した場合は、そのログレベルまたはそれより重要度の高いレベルのメッセージだけが表示されます。指定したログレベルのメッセージだけを表示して、それ以外は除外する場合は、「Do not include more severe messages」チェックボックスをクリックします。
- 「**Logger**」。開いたファイルに適用するロガーを1つ選択します。何も選択しなくてもかまいません。ロガー (ULF ファイルの `moduleID`) によって、インストーラのどの部分があるログメッセージを書き込んでいるかがわかります。主要なロガーとして、`JAVAESConfig`、`JAVAESInstall`、`JAVAESUninstall` があります。選択したロガーに関連付けられているメッセージだけが表示されます。また、製品コンポーネントのロガーも指定できます。たとえば、`WebServerInstall`、`AccessManagerConfig`、`DirectoryServerUnInstall`などを指定できます。
- 「**Content**」。 「`configure`」などの文字列を「Only Show Entries Containing」テキストボックスに入力すると、その文字列を含むメッセージだけが選択されます。

一般的な検索条件をいくつか紹介します。

- ログレベルが「SEVERE」のログメッセージだけをこのファイルから表示する。
- ログレベルが「ERROR」以上のログメッセージだけを表示する。
- インストールログメッセージのうち、ログレベルが「ERROR」以上のメッセージだけを表示する。
- アンインストールイベントのログメッセージだけを表示する。

## ▼ ログビューアの実行

ログビューアは読み取り専用モードで動作するため、複数のユーザーが同時にログビューアを実行できます。

- 1 コマンド行で、ログビューアの場所に移動します。

- Solaris SPARC の場合: /var/sadm/prod/SUNWentsys5i/Solaris\_sparc
- Solaris x86 の場合: /var/sadm/prod/SUNWentsys5i/Solaris\_x86
- Linux の場合: /var/sadm/prod/sun-entsys5i/Linux\_x86
- HP-UX の場合: /var/sadm/prod/sun-entsys5i/HPUX\_PA-RISC

- 2 ログビューアを起動します。

```
./viewlog
```

ログビューアのメインページが表示されます。

- 3 「ファイル」メニューで、表示するログファイルを選択します。

選択したファイルが ULF でない場合は、選択したファイルが ULF でないため選択できないというメッセージが表示されます。ログビューアを使って表示できるのは、ULF ファイルだけです。

利用できる ULF ログファイルがない場合は、インストールまたはアンインストールがまだ完了していない可能性があります。しばらく待ってから、もう一度やり直してください。

- 4 目的に合わせて「**Display Preferences**」と「**Search Criteria**」を選択します。

- 5 「検索」をクリックします。

フィルタ条件に一致するレコードがログテーブルに表示されます。

## 製品の依存関係の検証

多数の製品コンポーネントに、インストール時の相互依存関係があります。1つの製品コンポーネントに影響を与える問題は、別の製品コンポーネントにも影響を与え

る可能性があります。まず、『Sun Java Enterprise System 5 インストール計画ガイド』で説明されている内容をよく理解してください。

- サマリーファイルおよびログファイルを参照し、関連付けられている製品に問題が発生していないかどうか確認します。これにより、最初に解決すべきことの手がかりが得られる可能性があります。
- 正しい接続情報を指定しているかどうかチェックします。例:
  - Directory Server の設定時に指定した情報は、その Directory Server を使用する製品コンポーネントに指定したディレクトリ情報と一致しているか。
  - Portal Server または Portal Server Secure Remote Access に指定した Access Manager の情報は、Access Manager に指定した情報と一致しているか。

製品コンポーネントの依存関係のほかに、一部の製品コンポーネントは Solaris パッケージがホストにインストールされているかどうかにも依存しています。パッケージが存在していない場合は、それが原因でインストールが失敗することがあります。詳細については、リリースノートの「ソフトウェア要件」の節を参照してください。

製品コンポーネントの起動時に問題が発生する場合は、その製品コンポーネントのログファイルを調べてください。多くの製品コンポーネントのログファイルの場所については、[219 ページの「製品コンポーネントのトラブルシューティングのためのヒント」](#)を参照してください。

## リソースと設定のチェック

次のホストレベルの問題は、インストール時に問題を引き起こす可能性があります。

- **アップデート:** 推奨アップデート (パッチ) は適用されているか。
- **ディスク容量:** ディスクパーティションをどのように設定し、どのパーティションにインストールディレクトリを作成するか。インストールディレクトリ /var/sadm および /etc/opt、または独自に指定したデフォルト以外のディレクトリに、十分なディスクの空き容量が必要です。
- **ネットワークポート:** 設定時に、Java ES 製品コンポーネントのポート番号を指定します。次の項目をチェックします。
  - /etc/services ファイルで標準ポート番号を調べる。
  - サマリーログファイルを参照し、標準の設定と比較する。ポート番号を誤って入力していないか、またはあるサーバーに対して通常は別のサーバーで使用するポートを設定していないか。
  - netstat -a コマンドを使用して、現在システムで使用しているポートを調べる。すでに他で使用中のポート番号を割り当てていないか。

**IP アドレス:** 設定時に、IP アドレスを指定します。正しい IP アドレスを入力したかどうかチェックします。確認する必要のあることがいくつかあります。

- このシステムに複数のネットワークインタフェースがある場合、それぞれに独自の IP アドレスが指定されているか。
- 高可用性設定において、論理ホストの IP アドレス、またはクラスタノードの IP アドレスを指定したか。

## インストール後の設定のチェック

製品コンポーネントの起動時に問題が発生する場合は、[第 6 章](#)に記述されている手順に正しく従っていたか確認します。

## 配布メディアのチェック

DVD または CD からのインストールでは、メディアの汚れや損傷を調べます。ディスクに汚れがあると、インストール時に問題が発生する可能性があります。

## Directory Server の接続性チェック

Directory Server に依存する製品コンポーネントをインストールする場合、次のいずれかの問題によって問題が発生する可能性があります。

- Directory Server に対して不正なユーザー ID およびパスワードを指定した。
- 不正な LDAP ポートを指定した。
- Directory Server に接続できない。

インストーラを対話モードで実行するとインストール時に Directory Server の接続性がチェックされますが、サイレントモードではチェックされません。Directory Server を利用できない状態でサイレントインストールを実行すると、Access Manager または Portal Server のインストールが失敗する可能性があります。

## Web Server のファイルおよびディレクトリの削除

編集済みの設定ファイルなど、カスタマイズされたファイルの上書きを防ぐために、そのファイルが格納されるディレクトリには Web Server をインストールできません。

Web Server を再インストールする場合、インストールディレクトリをチェックして、それが空であることを確認します。空ではない場合は、どこか別の場所にファイルをアーカイブしてからインストールを再試行します。

## パスワードの確認

インストーラは、製品コンポーネントごとにパスワードの入力を求めます。複数のホストに複数の製品コンポーネントをインストールする場合、各ホストで正しいパスワードを入力することが重要です。

パスワードの問題を解決するには、いったんアンインストールしてから再インストールすることが必要となる場合があります。アンインストールに失敗した場合は、[207 ページの「アンインストール時に残されたファイルによるインストールの失敗」](#)を参照してください。

## 製品コンポーネントのインストール状態の検証

製品コンポーネントをインストールしたものの問題があり、再インストールまたはアンインストールを実行できない場合は、Solaris の `pkginfo` コマンド、Linux の `rpm` コマンド、または HP-UX の `swlist` コマンドを使用して、インストールしたコンポーネントパッケージを調べます。その結果を、『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の第 5 章「インストール可能なパッケージの一覧」に記載されている Java ES パッケージと比較します。追加のトラブルシューティング情報については、[207 ページの「アンインストール時に残されたファイルによるインストールの失敗」](#)を参照してください。

---

ヒント - Solaris 9 と Solaris 10 では、製品レジストリ (`prodreg` ツール) を使用することもできます。このツールは、グラフィカルインタフェースを提供し、`pkg` ユーティリティの代わりに、各コンポーネントおよびそのパッケージへの索引付けをします。製品レジストリを起動するには、コマンドプロンプトで `prodreg` を入力します。詳細については、`prodreg(1)` のマニュアルページを参照してください。

---

## アンインストールするための管理者アクセスの確認

[184 ページの「アンインストーラ用の管理者アクセス権の付与」](#)で説明されているように、アンインストール時に管理者アクセス権をアンインストーラに付与しなければなりません。

# インストールに関する問題の解決

ここでは、インストール時に発生する可能性のある次の問題について説明します。

- 207 ページの「アンインストール時に残されたファイルによるインストールの失敗」
- 208 ページの「アンインストール後に製品レジストリに含まれる共有コンポーネントが削除されたためにインストールが失敗する」
- 209 ページの「IBM WebSphere を Portal Server の Web コンテナとして設定できない」
- 210 ページの「予期せぬ外部エラーが発生する」
- 210 ページの「グラフィカルインストーラが応答しない」
- 211 ページの「サイレントインストールの失敗: 状態ファイルに互換性がない、または破損している」
- 211 ページの「状態ファイルの編集後にサイレントインストールに失敗した」
- 212 ページの「マニュアルページが表示されない」

## アンインストール時に残されたファイルによるインストールの失敗

アンインストール時に製品コンポーネントファイルやパッケージが削除されずに残されることがあります。このような場合、Java ES を再インストールする前に、ファイルやパッケージの手動での削除が必要となる場合があります。削除したと知っているにもかかわらず、インストーラは製品コンポーネントがホスト上にあるとレポートします。

次の状況が発生した可能性があります。

- アンインストールが失敗し、アンインストールされなかったパッケージの名前がエラーメッセージで示されたが、問題が解決されなかった。
- アンインストールが失敗したがエラーが検出されなかったため、パッケージがアンインストールされていないのにアンインストールされたと思っている。

### ▼ 部分的なインストールのクリーンアップ

- 1 次のコマンドを使用して、一部だけがインストールされたパッケージがないかどうか調べます。

Solaris OS の場合: `pkginfo -p`

Linux の場合: `rpm -qa |grep -I ^sun | xargs rpm -V`

HP-UX の場合: `swlist -l product sun-*`

コマンドの出力で、一部だけがインストールされたパッケージのリストが表示されます。『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の第5章「インストール可能なパッケージの一覧」を参照し、返されたパッケージ名に基づいてそれらのパッケージが属している製品コンポーネントを調べます。

- 2 コンポーネントまたはパッケージを削除します。
  - Solaris 9 または Solaris 10 では、`prodreg` というツールを使用します。  
`prodreg` ツールを使用すると、ホスト上のパッケージベースのコンポーネントを管理できます。各製品コンポーネントとそのパッケージについて、相互依存関係を含む完全な情報を参照できます。`prodreg` ツールを使用して、安全に製品コンポーネントをアンインストールし、パッケージを削除することができます。`prodreg` ツールで製品コンポーネントを削除すると、再インストールできるようになります。
  - Linux では、`rpm -e` コマンドを使用します。  
 製品のレジストリファイルを編集するには、`/var/opt/sun/install/productregistry` ファイルを開きます。この XML ファイルには、各製品コンポーネントの説明があります。各製品コンポーネントの説明は、`<compid\>` タグで始まり、`</compid\>` タグで終わります。製品コンポーネントのエントリ全体を削除します。
  - HP-UX では、`swremove` コマンドを使用します。  
 製品のレジストリファイルを編集するには、`/var/adm/swproductregistry` ファイルを開きます。この XML ファイルには、各製品コンポーネントの説明があります。各製品コンポーネントの説明は、`<compid\>` タグで始まり、`</compid\>` タグで終わります。製品コンポーネントのエントリ全体を削除します。
- 3 次のディレクトリに **Java ES** 製品コンポーネントやパッケージがないことを確認します。  
`/opt`  
`/etc/opt`  
`/var/opt`
- 4 インストーラをもう一度実行します。

## アンインストール後に製品レジストリに含まれる共有コンポーネントが削除されたためにインストールが失敗する

Java ES 5 リリースから、インストールが終了すると、製品レジストリファイル内に共有コンポーネントが登録されるようになっています。

Java ES アンインストーラは、製品コンポーネントをシステムから削除しますが、共有コンポーネントは削除しません。アンインストールが終了しても、製品レジストリには共有コンポーネントのエントリが依然として含まれています。アンインストール後に Java ES の共有コンポーネントを手動で削除しても、それらのコンポーネントは製品レジストリからは削除されません。したがって、次の Java ES 5 のインストールは失敗します。なぜなら、手動で削除された共有コンポーネントに対するエントリが製品レジストリ内には依然として存在するため、インストーラはそれらのコンポーネントが存在するものと仮定するからです。

---

ヒント-Java ES の共有コンポーネントをシステムから手動で削除しないでください。

---

推奨される解決方法: 製品レジストリファイルから対応するエントリを削除するか、製品レジストリファイル自体を削除します。製品レジストリファイルからエントリを削除するとファイルが壊れる危険性があるため、製品レジストリの全体を削除することをお勧めします。これを行う前に、Java ES コンポーネント以外の製品が製品レジストリファイルを使用していないことを確認してください。

Linux および HP-UX では、Solaris OS に存在するグラフィカル製品レジストリに相当するものではありません。Linux または HP-UX 上のファイルを手動で削除した場合は、製品レジストリファイルを手動で編集してそれらのエントリを削除する必要があります。

## IBM WebSphere を Portal Server の Web コンテナとして設定できない

WebSphere を実行していない、または WebSphere のネイティブ設定と一致しない WebSphere 値を指定したことが原因として考えられます。この問題の解決には、次の 2 つの方法があります。Solaris OS では、IBM WebSphere のみが Web コンテナとしてサポートされます。

### 設定のチェック

1 つの方法は、WebSphere インスタンスの設定をチェックすることです。

#### ▼ WebSphere 設定のチェック

- 1 WebSphere が実行されていることを確認します。
- 2 次のインストーラフィールドの値を調べます。
  - WebSphere 仮想ホスト (状態ファイルの PS\_IBM\_VIRTUAL\_HOST)
  - Application Server 名 (状態ファイルの PS\_IBM\_APPSERV\_NAME)

- 3 **WebSphere** ツールで設定をチェックし、これらの値と一致する値を確実に入力します。
- 4 再試行します。

## 新しいインスタンスの作成

もう1つの方法は、WebSphere エンティティの新しいインスタンスを作成することです。

### ▼ **WebSphere** エンティティの新しいインスタンスの作成

- 1 `adminclient.sh` を使用して、**WebSphere** コンソールを起動します。
- 2 新しい仮想ホストのインスタンスおよび新しい **Application Server** のインスタンス名を作成します。
- 3 ノード (通常はホスト名) の下のエントリをクリックし、**Regen WebServer Plugin** を選択します。  
このプロセスにより、`plugin` 設定ファイルに新しいエントリが保存されます。インストーラによって、その正式名称がチェックされます。
- 4 インストーラに戻り、作成した値を入力します。

## 予期せぬ外部エラーが発生する

電源障害またはシステム障害が発生した可能性があります。または CTRL/C を入力して、インストーラのプロセスを停止した可能性もあります。

推奨される解決方法: インストール中または設定プロセスで障害が発生した場合は、おそらく一部だけがインストールされたままになっています。アンインストールを実行します。アンインストールが失敗した場合は、[213 ページ](#)の「アンインストールが失敗し、ファイルが削除されずに残った」の手順に従います。

## グラフィカルインストーラが応答しない

イメージが入力を受け付けるようになる前に、インストーラによって画面上にイメージが作成されることがあります。待ちきれずにインストーラウィザードで何度も「次へ」をクリックすることは避けてください。

推奨される解決方法: デフォルトの選択肢を表すボタンには、青い四角形が表示されます。この四角形は、ボタンが表示されたあとに表示されることがあります。ボタンをクリックするときは、青い四角形が表示されるまで待ってください。

## サイレントインストールの失敗:状態ファイルに互換性がない、または破損している

使用しているプラットフォームで作成された状態ファイルを使用している場合、ファイルが壊れ、原因不明であるというエラーが発生する可能性があります。この問題の解決には、次の2つの方法があります。

### 新しい状態ファイルの生成

- サイレントインストールを実行しているのと同じプラットフォームで状態ファイルを作成した場合は、新しい状態ファイルを生成して再インストールします。
- 別のプラットフォームまたは別のバージョンで作成した状態ファイルを使用している場合、問題は、その状態ファイルが、作成したときと同じタイプのプラットフォームだけで実行できることです。たとえば、状態ファイルを Solaris 9 で作成した場合、そのファイルは Solaris 10 では使用できません。また、x86 プラットフォームで作成した状態ファイルは、SPARC プラットフォームでは使用できません。

### プラットフォームに適した新規IDの作成

状態ファイルを作成したプラットフォームが、サイレントインストールを実行しているプラットフォームと異なる場合、状態ファイルに対してプラットフォームに適したIDを新たに作成します。この方法については、[124 ページの「プラットフォームに適した状態ファイルIDの作成」](#)を参照してください。

## 状態ファイルの編集後にサイレントインストールに失敗した

状態ファイルを編集した場合、それによってエラーが発生した可能性があります。次の点をチェックし、[120 ページの「状態ファイルの作成」](#)の説明に従って状態ファイルを再生成します。

- すべてのローカルホストパラメータが設定され、矛盾のない値が設定されているか。
- パラメータ値の大文字、小文字の区別は適切か。
- 目的のパラメータを入力せずに、必須のパラメータを削除してしまっていないか。
- 使用するすべてのポート番号は有効であり、かつ割り当て済みではないか。

推奨される解決方法: 問題を解決し、状態ファイルを再生成します。

## マニュアルページが表示されない

この問題が起きる場合、たいていはインストールしたコンポーネントの MANPATH 環境変数が正しく設定されていないことが原因です。

推奨される解決方法: 新しいマニュアルページに直接関連付けるように /etc/MANPATH を更新します。131 ページの「[マニュアルページの確認](#)」を参照してください。

## アンインストールに関する問題の解決

ここでは、アンインストール時に発生する可能性のある次の問題について説明します。

- [212 ページの「アンインストーラが見つからない」](#)
- [213 ページの「アンインストールが失敗し、ファイルが削除されずに残った」](#)
- [214 ページの「製品レジストリが破損している」](#)

## アンインストーラが見つからない

Java ES のインストールプログラムは、システム上の次の場所に `uninstall` (アンインストーラ) を格納します。

- Solaris OS の場合: `/var/sadm/prod/SUNWentsys5`
- Linux および HP-UX の場合: `/var/sadm/prod/sun-entsys5`

アンインストーラがこのディレクトリにない場合は、次のいずれかの原因が考えられます。

- このホストに Java ES がインストールされたことが一度もない
- Java ES アンインストーラは、すでにアンインストーラを含むすべての製品コンポーネントをこのホストから削除している。  
アンインストール時に、どの Java ES 製品コンポーネントもホストに存在しないことを検出すると、アンインストーラはアンインストーラ自身をもアンインストールします。
- 失敗したインストールの実行中に、次のいずれかの状況が生じた。
  - アンインストーラがホストにインストールされなかった。
  - アンインストーラは削除されたが、一部の Java ES 製品コンポーネントはホストに残された。

推奨される解決方法: [213 ページの「アンインストールが失敗し、ファイルが削除されずに残った」](#)の説明に従ってシステムを手動でクリーンアップします。

# アンインストールが失敗し、ファイルが削除されずに残った

アンインストーラがファイルまたはプロセスを削除できなかったために手動クリーンアップが必要となった場合は、次の手順を実行し、システムからパッケージを削除します。

## ▼ 手動でのパッケージのクリーンアップ

### 1 削除が必要なパッケージを特定します。

システム上のパッケージを、『Sun Java Enterprise System 5 インストールリファレンス (UNIX 版)』の第5章「インストール可能なパッケージの一覧」に記載されている Java ES パッケージと比較します。207 ページの「[アンインストール時に残されたファイルによるインストールの失敗](#)」も参照してください。次のコマンドを使用して、インストールされているパッケージを判定できます。

- Solaris OS `pkginfo` または `prodreg` ユーティリティ
- Linux `rpm` コマンド
- HP-UX `swlist` コマンド

### 2 Java ES 製品コンポーネントの実行中のプロセスをすべて停止します。

プロセスの停止手順の概要については、[第6章の製品コンポーネントマニュアル](#)を参照してください。

### 3 以後のインストールで再利用を考えているカスタム設定データとユーザーデータをすべてバックアップします。

バックアップすべき設定データやユーザーデータについては、[172 ページの「Java ES 製品コンポーネントのアンインストール動作の確認」](#)を参照してください。詳細については、各製品コンポーネントのマニュアルを参照してください。

### 4 `pkgrm`、`rpm -e`、または `swremove` コマンドを使って Java ES コンポーネントパッケージを削除します。

### 5 以後のインストールで使用しない、残されている製品コンポーネントディレクトリとその内容をすべて削除します。これらのディレクトリをあとで利用する場合は、別の場所に移動します。

### 6 次の場所にある製品レジストリファイルを更新します。

- Solaris OS の場合: `/var/sadm/install/productregistry`
- Linux の場合: `/var/opt/sun/install/productregistry`
- HP-UX の場合: `/var/adm/sw/productregistry`

アンインストーラはこのレジストリを使用して、ホストにインストールされている製品コンポーネントを特定します。インストーラとアンインストーラは、インストールまたはアンインストールの完了時に製品レジストリを更新します。

---

注-アンインストーラを使用せずに、パッケージを手動で削除した場合は、システムにインストールされているソフトウェアを製品レジストリが正しく反映するように、このファイルを手動で更新する必要があります。

---

7 次の場所にあるシステムのログファイルをクリーンアップします。

- Solaris OS の場合: /var/sadm/install/logs
- Linux および HP-UX の場合: /var/opt/sun/install/logs

ログファイルは、パッケージを手動削除したあとのシステムの状態を正しく反映していない可能性があります。

## 製品レジストリが破損している

アンインストール時に、アンインストーラは製品レジストリファイルを使用して、アンインストールが必要な要素を特定します。

- Solaris OS の場合: /var/sadm/install/productregistry
- Linux の場合: /var/opt/sun/install/productregistry
- HP-UX の場合: /var/adm/sw/productregistry
- アンインストーラが失敗した場合は、バックアップコピーから製品レジストリを復元してからアンインストールを再実行しなければならないことがあります。
- パッケージを手動で削除した場合、製品レジストリは自動更新されません。製品レジストリがシステムの状態を正しく反映していないために、後でアンインストーラを実行したときに問題が生じる可能性があります。このような場合は、再インストールを行ってから、アンインストーラを再実行します。

## Common Agent Container の問題の解決

ここでは、Common Agent Container の共有コンポーネントに関連して起きる可能性のある次の問題について説明します。

- 215 ページの「ポート番号の競合」
- 216 ページの「ルートパスワードの安全性が危惧される場合」

## ポート番号の競合

Java ES に付属の Common Agent Container (V2.0) は、デフォルトで次のポート番号を予約します。

- JMX ポート (TCP) = 11162
- SNMP アダプタポート (UDP) = 11161
- トラップ用 SNMP アダプタポート (UDP) = 11162
- Commandstream アダプタポート (TCP) = 11163
- RMI コネクタポート (TCP) = 11164

Sun Cluster ソフトウェアのインストールの問題を解決する場合、Sun Cluster ソフトウェアでは異なるバージョンの Common Agent Container が使用されるため、ポートの割り当てが異なります。この場合、デフォルトのポートは次のようになります。

- JMX ポート (TCP) = 10162
- SNMP アダプタポート (UDP) = 10161
- トラップ用 SNMP アダプタポート (UDP) = 10162
- Commandstream アダプタポート (TCP) = 10163
- RMI コネクタポート (TCP) = 10164

上記のポート番号のいずれかがすでにインストール時に予約されている場合は、Common Agent Container が使用するポート番号を次の手順の説明に従って変更します。

### ポート番号の確認

Common Agent Container の `cacaoadm` コマンドの詳細については、`cacaoadm` のマニュアルページを参照してください。このマニュアルページをコマンド行に表示できない場合は、`MANPATH` が正しく設定されているか確認します。131 ページの「[マニュアルページの確認](#)」を参照してください。

### ▼ Solaris OS のポートの確認

- 1 **root** として、**Common Agent Container** 管理デーモンを停止します。

```
/usr/sbin/cacaoadm stop
```

- 2 次の構文を使用して、ポート番号を変更します。

```
/usr/sbin/cacaoadm set-param param=value
```

たとえば、SNMP アダプタが占有するポートをデフォルトの 11161 から 11165 に変更するには、次のようにします。

---

注 - Sun Cluster ソフトウェアの場合は、前述のポートを使用します。

---

```
/usr/sbin/cacaoadm set-param snmp-adaptor-port=11165
```

- 3 **Common Agent Container** 管理デーモンを再起動します。

```
/usr/sbin/cacaoadm start
```

## ▼ **Linux** または **HP-UX** のポートの確認

- 1 **root** として、**Common Agent Container** 管理デーモンを停止します。

```
/opt/sun/cacao/bin/cacaoadm stop
```

- 2 次の構文を使用して、ポート番号を変更します。

```
/opt/sun/cacao/bin/cacaoadm set-param param=value
```

たとえば、SNMP アダプタが占有するポートを 11161 から 11165 に変更するには、次のようにします。

```
/opt/sun/cacao/bin/cacaoadm set-param snmp-adaptor-port=11165
```

- 3 **Common Agent Container** 管理デーモンを再起動します。

```
/opt/sun/cacao/bin/cacaoadm start
```

## ルートパスワードの安全性が危惧される場合

Java ES が稼働するホストで、セキュリティーキーを再生成することが必要になる場合があります。たとえば、ルートパスワードが他の人に知られたおそれがあり、安全性が危うくなっている場合には、セキュリティーキーを再生成することが必要です。Common Agent Container サービスによって使用されるキーは、次の場所に格納されています。

Solaris OS の場合: /etc/opt/SUNWcacao/securityLinux および HP-UX の場合:  
/etc/opt/sun/cacao/security

通常の動作では、これらのキーはデフォルトの構成のままとなります。キーの安全性が危うくなったために、キーを再生成することが必要な場合は、次の手順でセキュリティーキーを再生成できます。

## ▼ **Solaris OS** の場合のキー生成

- 1 **root** として、**Common Agent Container** 管理デーモンを停止します。

```
/usr/sbin/cacaoadm stop
```

- 2 セキュリティーキーを再生成します。

```
/usr/sbin/cacaoadm create-keys --force
```

### 3 Common Agent Container 管理デーモンを再起動します。

```
/usr/sbin/cacaoadm start
```

---

注-Sun Cluster ソフトウェアの場合は、この変更をクラスタ内のすべてのノードに伝達する必要があります。詳細については、『Sun Cluster Software Installation Guide for Solaris OS』の「How to Finish a Rolling Upgrade to Sun Cluster 3.1 8/05 Software」を参照してください。

---

## ▼ Linux および HP-UX の場合のキー生成

### 1 root として、Common Agent Container 管理デーモンを停止します。

```
/opt/sun/cacao/bin/cacaoadm stop
```

### 2 セキュリティーキーを再生成します。

```
/opt/sun/cacao/bin/cacaoadm create-keys --force
```

### 3 Common Agent Container 管理デーモンを再起動します。

```
/opt/sun/cacao/bin/cacaoadm start
```

cacaoadm コマンドの詳細については、cacaoadm(1M) のマニュアルページを参照してください。

## インストール後の起動/再起動の問題の解決

ここでは、インストール後に発生する可能性のあるさまざまな問題について説明します。

- 217 ページの「監視規則が動作しなくなる (状態は不明)」
- 218 ページの「Java DB の再起動後、ポータルデータベースが見つからない」

### 監視規則が動作しなくなる (状態は不明)

Application Server を再起動した場合、Application Server と Monitoring Console の間の通信が中断され、再度有効にする必要があります。以前動作していた監視規則が動作しなくなり、不明の状態になります。Application Server ホストで共通エージェントコンテナを再起動した場合は、Monitoring Console ホストでも共通エージェントコンテナを再起動する必要があるため、問題は引き続き存在します。

## ▼ Application Server から Monitoring Console への通信の再確立

- 1 root として、Application Server があるホストで共通エージェントコンテナを再起動します。例:

```
/usr/sbin/cacaoadm start
```

- 2 次に、Monitoring Console があるホストに移動し、共通エージェントコンテナを再起動します。例:

共通エージェントコンテナがすでに実行されている場合は、いったん停止してから、次のコマンドを使用して起動します。

Solaris OS の場合:

```
/usr/sbin/cacaoadm stop
/usr/sbin/cacaoadm start
```

Linux および HP-UX の場合:

```
/opt/sun/cacao/bin/cacaoadm stop
/opt/suncacao/bin/cacaoadm start
```

## Java DB の再起動後、ポータルデータベースが見つからない

これは、デフォルトの Application Server コマンドを使用して Java DB を再起動した (asadmin stop-database、次に asadmin start-database) あとで、Java DB を使用する Application Server サンプルを配備したときに発生することがあります。Portal Server サンプルにアクセスできなくなります。

推奨される解決方法: この問題の対処方法は多数あります。

1. Java DB を停止しないでください。
2. Java DB を停止した場合は、Application Server データベースを代替の場所に作成できる次のコマンドを使用して Java DB を再起動します。

Solaris OS の場合: `/asadmin start-database --dbhome /var/opt/SUNWportal/derby`

Linux および HP-UX の場合: `/asadmin start-database --dbhome /var/opt/sun/portal/derby`

データベースをデフォルトの場所に配置する場合は、デフォルト以外のポートを使用して Java DB の 2 つ目のインスタンスを起動し、Application Server サンプル common.properties ファイルで正しい Derby ポートを指定します。例: `asadmin start-database --dbport 1528`

# 製品コンポーネントのトラブルシューティングのためのヒント

このセクションの表では、製品コンポーネントの問題を解決するためのさまざまなヒントを提供し、役立つマニュアルを紹介します。ここで説明する内容は、次のとおりです。

- 219 ページの「Access Manager のトラブルシューティングのヒント」
- 220 ページの「Application Server のトラブルシューティングのヒント」
- 220 ページの「Directory Server のトラブルシューティングのヒント」
- 221 ページの「Message Queue のトラブルシューティングのヒント」
- 221 ページの「Monitoring Console のトラブルシューティングのヒント」
- 222 ページの「Portal Server のトラブルシューティングのヒント」
- 223 ページの「Portal Server Secure Remote Access のトラブルシューティングのヒント」
- 223 ページの「Service Registry のトラブルシューティングのヒント」
- 224 ページの「Sun Cluster ソフトウェアのトラブルシューティングのヒント」
- 224 ページの「Web Proxy Server のトラブルシューティングのヒント」
- 225 ページの「Web Server のトラブルシューティングのヒント」
- 225 ページの「トラブルシューティングの追加情報」

## Access Manager のトラブルシューティングのヒント

表 9-2 Access Manager のトラブルシューティングのヒント

| トピック            | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
|-----------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定ファイル          | AMConfig.properties <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris OS の場合: /etc/opt/SUNWam/config</li> <li>■ Linux および HP-UX の場合: /etc/opt/sun/identity/config</li> </ul>                                                                                                                                                               |
| ログファイルとデバッグファイル | ログファイルのディレクトリ: <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris OS の場合: /var/opt/SUNWam/logs</li> <li>■ Linux および HP-UX の場合: /var/opt/sun/identity/logs</li> </ul> デバッグファイルのディレクトリ: <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris OS の場合: /var/opt/SUNWam/debug</li> <li>■ Linux および HP-UX の場合: /var/opt/sun/identity/debug</li> </ul> |
| デバッグモード         | 『Sun Java System Access Manager 7.1 Developer's Guide』の「Auditing Features」の章を参照してください。                                                                                                                                                                                                                                                    |

## Application Server のトラブルシューティングのヒント

表 9-3 Application Server のトラブルシューティングのヒント

| トピック        | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                       |
|-------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ログファイル      | <p>ログファイルのディレクトリ:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris OS の場合: /var/sadm/install/logs/</li> <li>■ Linux および HP-UX の場合: /var/opt/sun/install/logs/</li> </ul> <p>Application Server インスタンスのログディレクトリ (最初に作成するインスタンスのデフォルトの場所):</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris OS の場合: /var/opt/SUNWappserver/domains/domain1/logs</li> <li>■ Linux および HP-UX の場合: /var/opt/sun/appserver/domains/domain1/logs</li> </ul> <p>メッセージログのファイル名:</p> <p>server.log (サーバーインスタンスごとに存在する)</p> |
| 設定ファイル      | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris OS の場合: /opt/SUNWappserver/appserver/config/asenv.conf</li> <li>■ Linux および HP-UX の場合: /opt/sun/appserver/config/asenv.conf</li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| トラブルシューティング | 『Sun Java System Application Server Enterprise Edition 8.2 トラブルシューティングガイド』を参照してください。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |

## Directory Server のトラブルシューティングのヒント

表 9-4 Directory Server のトラブルシューティングのヒント

| トピック        | 詳細                                                                                                                                                                                                                                     |
|-------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ログファイル      | <p>インストールログファイル:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris OS の場合: /var/sadm/install/logs</li> <li>■ Linux および HP-UX の場合: /var/opt/sun/install/logs</li> </ul>                                                              |
| トラブルシューティング | <p>『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 管理ガイド』のパート I 「Directory Server による管理」を参照してください。</p> <p>『Sun Java System Directory Server Enterprise Edition 6.0 管理ガイド』のパート II 「Directory Proxy Server による管理」を参照してください。</p> |

## Message Queue のトラブルシューティングのヒント

表 9-5 Message Queue のトラブルシューティングのヒント

| トピック        | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
|-------------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ログファイル      | インストールログファイル: <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris OS の場合: <code>/var/sadm/install/logs</code></li> <li>■ Linux および HP-UX の場合: <code>/var/opt/sun/install/logs</code></li> </ul> ブローカログファイル: <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris OS の場合: <code>/var/mq/instances/instance-name/log</code></li> <li>■ Linux および HP-UX の場合: <code>/var/opt/sun/mq/instances/instance-name/log</code></li> </ul> |
| トラブルシューティング | 『Sun Java System Message Queue 3 2005Q4 管理ガイド』の「問題のトラブルシューティング」の章を参照してください。<br><br>パフォーマンスの問題については、『Sun Java System Message Queue 3 2005Q4 管理ガイド』の「メッセージサービスの分析と調整」を参照してください。                                                                                                                                                                                                                                          |

## Monitoring Console のトラブルシューティングのヒント

表 9-6 Monitoring Console のトラブルシューティングのヒント

| トピック   | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                              |
|--------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| 設定ファイル | Monitoring Console の場合: <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris OS の場合: <code>/opt/SUNWjesmc/WEB-INF/web.xml</code></li> <li>■ Linux および HP-UX の場合: <code>/opt/sun/jesmc/WEB-INF/web.xml</code></li> <li>■ Solaris OS の場合: <code>/etc/opt/SUNWmfwk/config/mfwk.properties</code></li> <li>■ Linux および HP-UX の場合: <code>/etc/opt/sun/mfwk/config/mfwk.properties</code></li> <li>■ Solaris OS の場合: <code>/etc/opt/SUNWmfwk/config/masteragent.properties</code></li> <li>■ Linux および HP-UX の場合: <code>/etc/opt/sun/mfwk/config/masteragent.properties</code></li> </ul> |

表 9-6 Monitoring Console のトラブルシューティングのヒント (続き)

| トピック        | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
|-------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ログファイル      | <p>Monitoring Console の場合:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ /var/log/webconsole/console/console_config_log (すべてのプラットフォーム)</li> <li>■ /var/log/webconsole/console/console_debug_log (すべてのプラットフォーム)</li> </ul> <p>Monitoring Framework の場合:</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris OS の場合: /var/opt/SUNWmfwk/logs</li> <li>■ Linux および HP-UX の場合: /var/opt/sun/mfwk/logs</li> </ul> |
| トラブルシューティング | <p>Monitoring Console にアクセスできない場合は、『Sun Java Enterprise System 5 監視ガイド (UNIX 版)』の「Monitoring Console のトラブルシューティング」を参照してください。監視対象のコンポーネントが Monitoring Console に表示されない場合は、『Sun Java Enterprise System 5 監視ガイド (UNIX 版)』の「Monitoring Framework のトラブルシューティング」を参照してください。</p>                                                                                                                                     |

## Portal Server のトラブルシューティングのヒント

Portal Server は、Access Manager と同じログファイルとデバッグファイルを使用します。

表 9-7 Portal Server のトラブルシューティングのヒント

| トピック     | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |
|----------|------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| デバッグファイル | <p>Solaris OS の場合: /var/opt/SUNWam/debug</p> <p>Linux および HP-UX の場合: /var/opt/sun/identity/debug</p> <p>Portal Server デスクトップのデバッグファイル:</p> <p>Solaris OS の場合: /var/opt/SUNWam/debug/desktop and /var/opt/SUNWam/debug/desktop.dpadmin.debug</p> <p>Linux および HP-UX の場合: /var/opt/sun/identity/debug/desktop and /var/opt/sun/identity/debug/desktop.dpadmin.debug</p> <p>dpadmin、par、rdmgr、および sendrdm という Portal Server コマンド行ユーティリティには、デバッグメッセージを生成するためのオプションがあります。それらのオプションについては、『Portal Server 管理ガイド』を参照してください。</p> |
| ログファイル   | <p>Solaris OS の場合: /var/opt/SUNWam/logs</p> <p>Linux および HP-UX の場合: /var/opt/sun/identity/logs</p>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |

表 9-7 Portal Server のトラブルシューティングのヒント (続き)

| トピック        | 詳細                                                  |
|-------------|-----------------------------------------------------|
| トラブルシューティング | 『Sun Java System Portal Server 7.1 管理ガイド』を参照してください。 |

## Portal Server Secure Remote Access のトラブルシューティングのヒント

Portal Gateway のデバッグログは次のディレクトリに格納されます。

- Solaris OS の場合: /var/opt/SUNWportal/debug
- Linux および HP-UX の場合: /var/opt/sun/portal/debug and /var/opt/sun/identity/debug/desktop/debug

注 - Solaris OS の場合、Access Manager 管理コンソールからログインをオンにすると、NetFile などの Portal Server サービスのログは /var/opt/SUNWam/debug に作成されます。

## Service Registry のトラブルシューティングのヒント

表 9-8 Service Registry のトラブルシューティングのヒント

| トピック        | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                    |
|-------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ログファイル      | インスタンスログのディレクトリ: <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris OS の場合: /var/opt/SUNWsrvc-registry/domains/registry/logs</li> <li>■ Linux および HP-UX の場合: /var/opt/sun/srvc-registry/domains/registry/logs</li> </ul> メッセージログファイルの名前は server.log です。 |
| 設定ファイルの場合   | Solaris OS の場合: /opt/SUNWsrvc-registry/install/install.properties<br>Linux および HP-UX の場合: /opt/sun/srvc-registry/install/install.properties                                                                                                           |
| トラブルシューティング | 『Service Registry 3.1 管理ガイド』を参照してください。                                                                                                                                                                                                                |

## Sun Cluster ソフトウェアのトラブルシューティングのヒント

注 - HP-UX および Linux では、Sun Cluster コンポーネントはサポートしません。

表 9-9 Sun Cluster ソフトウェアのトラブルシューティングのヒント

| トピック        | 詳細                                                                                                 |
|-------------|----------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ログファイル      | デフォルトのログディレクトリ: <code>/var/cluster/logs/install</code><br>エラーメッセージ: <code>/var/adm/messages</code> |
| トラブルシューティング | 『Sun Cluster Software Installation Guide for Solaris OS』を参照してください。                                 |

## Web Proxy Server のトラブルシューティングのヒント

表 9-10 Web Proxy Server のトラブルシューティングのヒント

| トピック          | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
|---------------|-----------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ログファイル        | デフォルトのログの場所: <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris OS の場合: <code>/opt/SUNWproxy/proxy-instance-name /logs</code></li> <li>■ Linux および HP-UX の場合: <code>/opt/sun/webproxyserver/proxy-instance-name/logs</code></li> </ul> <p>errors ログファイルには、サーバーで発生したすべてのエラーが一覧表示されます。access ログファイルには、サーバーに対する要求と、サーバーからの応答に関する情報が記録されます。詳細については、『Sun Java System Web Proxy Server 4.0.4 管理ガイド』を参照してください。</p> |
| 設定ファイルのディレクトリ | Solaris OS の場合: <code>/opt/SUNWproxy/proxy-instance-name /config</code><br>Linux および HP-UX の場合: <code>/opt/sun/webserver/proxy-instance-name /config</code>                                                                                                                                                                                                                                               |
| デバッグモード       | <code>/server-root/proxy-instance-name/config/server.xml</code> ファイル内の LOG 要素の <code>logLevel</code> 属性の値を、次の値に設定できます。info、fine、finer、finest。                                                                                                                                                                                                                                                             |

## Web Server のトラブルシューティングのヒント

表 9-11 Web Server のトラブルシューティングのヒント

| トピック          | 詳細                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
|---------------|--------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| ログファイル        | <p>Web Server のログファイルは 2 種類あります。errors ログファイルと access ログファイルです。errors ログファイルには、サーバーで発生したすべてのエラーがリストされます。access ログファイルには、サーバーに対する要求と、サーバーからの応答に関する情報が記録されます。詳細については、『Sun Java System Web Server 7.0 管理ガイド』を参照してください。</p> <p>これらのログは、次のディレクトリにあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris OS の場合: <code>/var/opt/SUNWwbsvr7/https-<i>instancename</i>/logs</code></li> <li>■ Linux および HP-UX の場合: <code>/var/opt/sun/webserver7/https-<i>instancename</i>/logs</code></li> </ul> <p>Web Server の設定が「今すぐ設定」インストール時に失敗する場合は、次のログの追加情報を参照してください。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris OS の場合: <code>/var/opt/SUNWwbsvr7/setup/WebServer_Install.log</code></li> <li>■ Linux および HP-UX の場合: <code>/var/opt/sun/webserver7/setup/WebServer_Install.log</code></li> </ul> <p>管理サーバーのエラーログは、次の場所にあります。</p> <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris OS の場合: <code>/var/opt/SUNWwbsvr7/admin-server/logs/errors</code></li> <li>■ Linux および HP-UX の場合: <code>/var/opt/sun/webserver7/admin-server/logs/errors</code></li> </ul> |
| 設定ファイルのディレクトリ | <ul style="list-style-type: none"> <li>■ Solaris OS の場合: <code>/var/opt/SUNWwbsvr7/https-<i>instance-name</i>/config</code></li> <li>■ Linux および HP-UX の場合: <code>/var/opt/sun/webserver7/https-<i>instance-name</i>/config</code></li> </ul>                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                |

## トラブルシューティングの追加情報

このマニュアルに記載されている次の情報も、トラブルシューティングに役立ちます。

- **第 6 章**には、インストール後設定の実行手順が含まれています。
- **第 8 章**には、Java ES ソフトウェアのアンインストール時に発生する可能性のある問題に関する情報が含まれています。



## このリリースの Java ES コンポーネント

---

この付録では、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) ソフトウェアに含まれる製品コンポーネントと共有コンポーネントの一覧を示します。

- 227 ページの「製品コンポーネント」
- 230 ページの「共有コンポーネント」

### 製品コンポーネント

Java ES インストーラの「ソフトウェアコンポーネントの選択」ページでは、製品コンポーネントが、提供されるサービスごとにグループ化されています。製品コンポーネントのインストール時とともにインストールされるサブコンポーネントは、それぞれ次のとおりです。

---

注 - HP-UX では、Sun Cluster コンポーネント、Directory Preparation Tool、HADB、またはサードパーティーの Web コンテナはサポートされません。Linux で「今すぐ設定」設定オプションを使用する場合、Sun Cluster コンポーネントはサポートされず、サードパーティーコンテナは BEA WebLogic のみがサポートされます。

---

#### コラボレーションサービス

- Portal Server 7.1
- Portal Server Secure Remote Access 7.1
  - ゲートウェイ
  - Netlet プロキシ
  - Rewriter プロキシ
- Directory Preparation Tool 6.4 (Directory Server で Communications Services がサポートされるときに使用される)

#### Web サービスとアプリケーションサービス

- Application Server Enterprise Edition 8.2
  - Domain Administration Server
  - Application Server ノードエージェント
  - コマンド行管理ツール
  - Load Balancing Plugin
    - Web Server 6.x または Apache Web Server 1.3.33 以降のリリースのいずれかで使用できます。これは、設定時に選択できます。Apache Web Server は、HP-UX ではサポートされません。デフォルトは Web Server です。
  - サンプルアプリケーション
- Web Server 7.0
  - Web Server CLI
  - Web Server コア
  - Web Server サンプル
- Web Proxy Server 4.0.4
- Message Queue 3.7 UR1
- Service Registry 3.1
  - Service Registry クライアントサポート
  - Service Registry 配備サポート

#### ディレクトリサービスとアイデンティティサービス

- Access Manager 7.1
  - Access Manager コアサービス
  - Access Manager 管理コンソール
  - 連携管理の共有ドメインサービス
  - Access Manager SDK
  - Access Manager 分散認証ユーザーインタフェース
  - Access Manager クライアント SDK
  - Access Manager セッションフェイルオーバークライアント
- Directory Server Enterprise Edition 6.0
  - Directory Server 6 Core Server
  - Directory Service Control Center
  - Directory Server コマンド行ユーティリティ
  - Directory Proxy Server 6 Core Server

#### 可用性サービス

---

注 - Sun Cluster コンポーネントは、Linux または HP-UX で利用できません。

---

- Sun Cluster 3.1 8/06

- Sun Cluster コア
- Sun Cluster Agents 3.1

---

注 - 利用可能な Sun Cluster エージェントのリストは、SPARC オペレーティングシステムと x86 オペレーティングシステムとで異なっています。

---

- HA Application Server
  - HA Message Queue
  - HA Directory Server
  - HA Messaging Server
  - HA Application Server EE (HADB)
  - HA/Scalable Web Server
  - HA Instant Messaging
  - HA Calendar Server
  - HA Apache Tomcat
  - HA Apache
  - HA DHCP
  - HA DNS
  - HA MySQL
  - HA Sun N1 Service Provisioning
  - HA NFS
  - HA Oracle
  - HA Samba
  - HA Sun N1 Grid Engine
  - HA Solaris Containers
- Sun Cluster Geographic Edition 3.1 2006Q4

---

注 - Sun Cluster Geographic Edition は、Solaris x86 ではサポートされません。

---

- Sun Cluster Geographic Edition コア
  - Sun StorEdge Availability Suite
  - Hitachi Truecopy データ複製サポート (SPARC のみ)
  - EMC SRDF データ複製
- High Availability Session Store 4.4

#### 共有サービス

- すべての共有コンポーネント
- Monitoring Console 1.0
- Java DB 10.1
  - Java DB クライアント

- Java DB サーバー

## 共有コンポーネント

共有コンポーネントは、製品コンポーネントにローカルサービスとテクノロジサポートを提供します。Java ES 製品コンポーネントをインストールすると、そのコンポーネントに必要な共有コンポーネントがインストールされていない場合に、インストーラは自動的にそれらの共有コンポーネントをインストールします。共有コンポーネントは選択可能ではありません。

このリリースの Java ES には、次の共有コンポーネントが含まれています。

- ANT (Jakarta ANT Java/XML ベースのビルドツール) 1.6.5
- ACL (Apache Common Logging) 1.0.4
- BDB (Berkeley Database) 4.2.52
- Common Agent Container 1.1 (Sun Cluster のみ)
- Common Agent Container 2.0
- FastInfoSet 1.0.2
- ICU 3 ((International Components for Unicode) 3.2
- J2SE™ (Java 2 Platform, Standard Edition) platform 5.0 Update 6

---

注 - HP-UX では、バージョン 5.0 Update 3 がサポートされます。

---

- JAF (JavaBeans™ Activation Framework) 1.0.3
- JATO (Java Studio Web Application Framework) 2.1.5
- JavaHelp™ 2.0
- JavaMail™ API 1.3.2
- JAXB (Java API for XML Binding) 2.0.3
- JAXP (Java API for XML Processing) 1.3.1
- JAXR (Java API for XML Registries) 1.0.8
- JAXRPC (Java API for XML-based Remote Procedure Call) 1.1.3\_01
- JAXWS (Java API for Web Services) 2.0
- JDMK (Java Dynamic Management™ Kit) 5.1\_02
- JSS (Java Security Services) 4.2.4
- JSS3 (Java 用のネットワークセキュリティーサービス) 3.1.11
- JSTL (Java Server Pages 標準タグライブラリ) 1.0

- KTSE (KT Search Engine) 1.3.4
- LDAP C SDK 6.0
- LDAP Java SDK 4.19
- MA Core (Mobile Access Core) 6.3.1
- NSPR (Netscape Portable ランタイム) 4.6.3
- NSPRD (Netscape Portable ランタイムの開発) 4.6
- NSS (ネットワークセキュリティーサービス) 3.11
- NSSU (Network Security Service Utilities) 3.11
- SAAJ (SOAP with Attachments API for Java) 1.3
- SASL (Simple Authentication and Security Layer) 2.19
- Sun Explorer Data Collector (Solaris OS のみ) 4.3.1
- Sun Java Monitoring Framework 2.0
- Sun Java Web コンソール 3.0.2
- WSCL (Web Services Common Library) 2.0
- XWSS (XML Web Services Security) 2.0



# インストールコマンド

---

この付録では、Sun Java™ Enterprise System (Java ES) インストールユーティリティーの実行で使用するコマンド構文とオプションについて説明します。

- 233 ページの「[installer または install コマンド](#)」
- 236 ページの「[uninstall コマンド](#)」
- 237 ページの「[viewlog コマンド](#)」

## installer または install コマンド

Java ES には 2 つのインストーラがあります。

- **installer** ユーティリティー: Java ES 標準のインストーラで、オペレーティングシステムディレクトリの最上位インストールディレクトリにあります。インストーラにパッチが適用されている場合を除いて、このインストーラを使用します。
- **install** ユーティリティー: パッケージ版の Java ES インストーラで、パッチを適用するために使用されます。**installer** にバグがある場合は、Sun が **installer** を修正して、そのインストーラパッケージ用のパッチを作成することがあります。パッチの適用以降は、そのリリースにはパッケージ版のインストーラ (**install**) を使用するようになしてください。つまり、パッチによる修正が含まれるインストーラを起動することになります。このユーティリティーは、**viewlog** ユーティリティーとともに次のディレクトリにあります。
  - Solaris OS の場合: `/var/sadm/prod/SUNWentsys5i`
  - Linux および HP-UX の場合: `/var/sadm/prod/sun-entsys5i`

コマンドの構文はどちらも同じです。

```
installer [option]...
```

次の表に、**installer** コマンドまたは **install** コマンドのオプションを説明します。

表 B-1 Java ES インストールコマンドのオプション

| オプション                           | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|---------------------------------|-------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| -help                           | インストーラに使用できるコマンド行オプションを定義します。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
| -id                             | 状態ファイル ID を画面上に出力します。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                   |
| -no                             | ソフトウェアをインストールしない設定でインストーラを実行します。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| -noconsole                      | インストーラをサイレントモードで起動し、グラフィカルインタフェースを抑制します。サイレントモードでインストーラを起動するには、このオプションと <code>-state</code> を組み合わせて指定します。                                                                                                                                                                                                                                                               |
| -nodisplay                      | インストーラをテキストベースモードで起動します (グラフィカルインタフェースを起動しない)。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
| -noreporter                     | Java ES レポータのインストールを抑制します (レポータインストールユーティリティを起動しない)。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                    |
| -reporter                       | コマンド行で Java ES レポータインストールユーティリティを個別のインストールセッションとして起動します。 <code>-noreporter</code> オプションを使用して Java ES インストールを実行した後、または Java ES のサイレントインストール (Java ES のサイレントインストールではレポータをインストールできない) を実行した後で使用します。レポータインストールのためのユーザー入力には、レポータがインターネット経由で Sun にアクセスするために使用するプロキシの URL または IP アドレスを含めます。                                                                                    |
| -saveState [ <i>statefile</i> ] | <p><i>statefile</i> によって指定される場所に状態ファイルを生成するようにインストーラに指示します。状態ファイルは、サイレントインストールの実行に使用されます。</p> <p>指定されたファイルが存在しない場合、このファイルは自動的に作成されます。</p> <p><i>statefile</i> の値を省略すると、インストーラはデフォルトの <code>statefile.out</code> ファイルに書き込みます。</p> <p>以後のインストールセッションで連続して同じ状態ファイルを指定することができます。初回のセッションが終了すると、ファイル名に <i>n</i> が追加されます。この <i>n</i> はゼロ (0) から始まる整数で、セッションが開始されるたびに増えます。</p> |
| -state <i>statefile</i>         | 指定された状態ファイルをサイレントインストールの入力として使用します。サイレントインストールを開始するには、このオプションと <code>-noconsole</code> を組み合わせて指定します。                                                                                                                                                                                                                                                                    |
| -version                        | 製品名、日付、ビルド、パッチレベルなどのビルド情報を出力します。主に内部で使うツールですが、バグを送信するときに役立つことがあります。                                                                                                                                                                                                                                                                                                     |

## 例

次の表または例では、使用するインストーラ (`installer` または `install`) に置き換えてください。

インストールディレクトリからインストーラをグラフィカルモードで実行する。

```
./installer
```

インストーラをテキストベースモードで実行する。

```
./installer -nodisplay
```

ソフトウェアをインストールせずに、インストーラをグラフィカルモードで実行する。

```
./installer -no
```

ソフトウェアをインストールせずに、状態ファイルをグラフィカルモードで作成する。

```
./installer -no -saveState myInstallStatefile
```

ソフトウェアをテキストベースモードでインストールしながら、状態ファイルを作成する。

```
./installer -nodisplay -saveState myInstallStatefile
```

インストーラをサイレントモードで実行する。

```
./installer -noconsole -state myInstallStatefile
```

Java ES レポータをインストールせずに、インストーラをグラフィカルモードで実行する。

```
./installer -noreporter
```

レポータインストールユーティリティを使用して、個別のセッションとして Java ES レポータをインストールする (Java ES インストーラを起動しない)。

```
./installer -reporter
```

## uninstall コマンド

インストールが完了すると、アンインストーラ `uninstall` ユーティリティーが次の場所に配置されます。

- Solaris OS の場合: `/var/sadm/prod/SUNWentsys5`
- Linux および HP-UX の場合: `/var/sadm/prod/sun-entsys5`

Java ES `uninstall` コマンドの書式は次のとおりです。

```
uninstall [option]...
```

次の表に、`uninstall` コマンドのオプションを説明します。

表 B-2 Java ES アンインストールのコマンド行オプション

| オプション                               | 説明                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                      |
|-------------------------------------|---------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------------|
| <code>-help</code>                  | アンインストーラに使用できるコマンド行オプションを定義しません。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| <code>-id</code>                    | 状態ファイル ID を画面面上に出力します。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                  |
| <code>-no</code>                    | ソフトウェアを削除しない設定でアンインストーラを実行します。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                          |
| <code>-noconsole</code>             | アンインストーラをサイレントモードで起動し、グラフィカルインタフェースを抑制します。サイレントモードでアンインストーラを起動するには、このオプションと <code>-state</code> を組み合わせて指定します。                                                                                                                                                                                                                                                                                           |
| <code>-nodisplay</code>             | アンインストーラをテキストベースモードで起動します (グラフィカルインタフェースを起動しない)。                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                                        |
| <code>-saveState [statefile]</code> | <p><code>statefile</code> によって指定される場所に状態ファイルを生成するようにアンインストーラに指示します。状態ファイルは、サイレントアンインストールの実行に使用されます。</p> <p>指定されたファイルが存在しない場合、このファイルは自動的に作成されます。</p> <p><code>statefile</code> の値を省略すると、アンインストーラはデフォルトの <code>statefile.out</code> ファイルに書き込みます。</p> <p>以後のアンインストールセッションで連続して同じ状態ファイルを指定することができます。初回のセッションが終了すると、ファイル名に <code>n</code> が追加されます。この <code>n</code> はゼロ (0) から始まる整数で、セッションが開始されるたびに増えます。</p> |
| <code>-state statefile</code>       | 指定された状態ファイルをサイレントアンインストールの入力として使用します。サイレントアンインストールを開始するには、このオプションと <code>-noconsole</code> を組み合わせて指定します。                                                                                                                                                                                                                                                                                                |

表 B-2 Java ES アンインストールのコマンド行オプション (続き)

| オプション    | 説明                                                                  |
|----------|---------------------------------------------------------------------|
| -version | 製品名、日付、ビルド、パッチレベルなどのビルド情報を出力します。主に内部で使うツールですが、バグを送信するときに役立つことがあります。 |

## 例

アンインストーラディレクトリからアンインストーラをグラフィカルモードで実行する。

```
./uninstall
```

アンインストーラをテキストベースモードで実行する。

```
./uninstall -nodisplay
```

ソフトウェアを削除せずに、アンインストーラをグラフィカルモードで実行する。

```
./uninstall -no
```

ソフトウェアを削除せずに、状態ファイルをグラフィカルモードで作成する。

```
./uninstall -no -saveState myUninstallStatefile
```

ソフトウェアをテキストベースモードでアンインストールしながら、アンインストール状態ファイルを作成する。

```
./uninstall -nodisplay -saveState myUninstallStatefile
```

アンインストーラをサイレントモードで実行する。

```
./uninstall -noconsole -state myUninstallStatefile
```

## viewlog コマンド

インストールが完了すると、ログビューア viewlog ユーティリティーが次の場所に配置されます。

- Solaris OS の場合: /var/sadm/prod/SUNWentsys5i
- Linux および HP-UX の場合: /var/sadm/prod/sun-entsys5i

Java ES viewlog コマンドの書式は次のとおりです。

```
viewlog [option]...
```

次の表に、viewlog コマンドのオプションを説明します。

表 B-3 Java ES ログビューアのコマンド行オプション

| オプション | 説明                            |
|-------|-------------------------------|
| -help | ログビューアに使用できるコマンド行オプションを定義します。 |

## 例

ログビューアをグラフィカルモードで実行する。

```
./viewlog
```

## 状態ファイルの例

---

この付録では、サイレントインストールの状態ファイルの例を示します。  
PSP\_SELECTED\_COMPONENTS パラメータは、対話式インストールで選択したコンポーネントを示します。



---

注意-サイレントインストール用に作成した状態ファイルの変数には、管理者パスワードなどの機密データが指定されている場合があります。配備しても安全なように、ファイルが保護されていることを確認してください。

---

```
#
Wizard Statefile created: Wed Feb 07 17:16:37 MET 2007
Wizard path: /tmp/.entsys_CaChE/Solaris_x86/.install/EntsysInstall_SunOS_x86_10.class
#
Install Wizard Statefile section for Sun Java(tm) Enterprise System
#
[STATE_BEGIN Sun Java(tm) Enterprise System 25f6b7f551f760d3476335edb9218b383660ffd7]
LICENSE_TYPE =

PSP_SELECTED_COMPONENTS = JSS, JSS3, JAXP, JAXB106, JavaMail, SOAPRuntime, JAXR, JDMK,
Cacao, JAXB, JAXWS, MFwk, JAXRPC, XWSS, ISConfigurator, SASL, LDAPCSdk, ExternalJARs,
HiddenCommonComponent, IdentityServerSDKAlone, JavaHelpRuntime, appserv, WSCCommon,
HADBCConfigurator, HADB, JavaDBCommon, JavaDBClient, JavaDBServer, ASEE, ASCommon,
SunONEMessageQueue, ASAdmin, ASCore, EntsysUninstallerSUNWentsys5,
ISAdministrationConsole, Dssetup, DSEEShared, DSCLI, DPSCLI, DSEEUtils,
DSEEConsoleAgent, DSServer, webproxyserver, SunCluster, Explorer, Cacao11, SCCore,
KTSE, SCDirServer, DirectoryServer, SunCluster_HA_NFS_3.1, WSCLI, WSCore64, WSCore,
SCAppServer, ClientSDK, DistributedAuthentication, MonitoringConsole, DPSServer,
SunCluster_HA_APACHE_TC_3.1, JavaDB, SCGECORE, HitachiTruecopy,
SunCluster_HA_Samba_3.1, SunONEWebServer, ASNA, SCCalServer, SCMsgServer, PortalSRA,
DSEEConsole, StorEdgeAvlbtSuite, SunCluster_HA_DHCP_3.1, SRACCommon, PortalAdminForSRA,
SRAGateway, MAPCore, IdentityServ, SunCluster_HA_SUN_GRID_ENG_3.1, SRARewriterProxy,
RegistryServer, HiddenUtil, BDB, SessionFailOverClient, ISCommonDomainDeployment,
```

MAPplugin, SunONEIdentityServerManagementandPolicyServices, DAS,  
 SunCluster\_HA\_N1G\_SPS\_3.1, SRANetletProxy, SCGE, WSSamples, ServiceRegistryDev,  
 ServiceRegistryDeploy, ASSamples, SCMQ, SunCluster\_HA\_Oracle\_3.1, LB,  
 SunCluster\_HA\_SOLARIS\_ZONES\_3.1, SunCluster\_HA\_MYSQL\_3.1, SCHADB, SCInstantMessaging,  
 SunCluster\_HA\_DNS\_3.1, SCWebServer, SharedComponent, PortalAdmin, WebNFS, SRACore,  
 PortalServer, SCAgents, IdentityServerSDKALoneL10N, webproxyserverL10n, DSServerL10n,  
 ClientSDKL10N, DistributedAuthenticationL10N, MonitoringConsoleL10n, DPSServerL10n,  
 SunONEWebServerL10n, PortalSRAL10n, DSEEConsoleL10n, MAPCoreL10n, MAPpluginL10n,  
 PortalSRANetletL10n, ServiceRegistryDevL10n, ServiceRegistryDeployL10n,  
 PortalServerL10n, SunOneMessageQueueDe, ASAdminDe, SCCoreDe, SCAppServerDe, DASDe,  
 SCMQDe, SCHADBDe, SCWebServerDe, SunOneMessageQueueJa, ASAdminJa, SCCoreJa,  
 SunCluster\_HA\_NFS\_3.1Ja, SCAppServerJa, SCGECOREJa, HitachiTruecopyJa,  
 StorEdgeAvlbtSuiteJa, DASJa, SCMQJa, SunCluster\_HA\_Oracle\_3.1Ja, SCHADBJa,  
 SunCluster\_HA\_DNS\_3.1Ja, SCWebServerJa, SunOneMessageQueueFr, ASAdminFr, SCCoreFr,  
 SCAppServerFr, DASFr, SCMQFr, SCHADBFr, SCWebServerFr, SunOneMessageQueueKo,  
 ASAdminKo, SCCoreKo, SCAppServerKo, SCGECOREKo, HitachiTruecopyKo,  
 StorEdgeAvlbtSuiteKo, DASKo, SCMQKo, SCHADBKo, SCWebServerKo,  
 SunOneMessageQueueCh, ASAdminCh, SCCoreCh, SunCluster\_HA\_NFS\_3.1Ch, SCAppServerCh,  
 SCGECORECh, HitachiTruecopyCh, StorEdgeAvlbtSuiteCh, DASCh, SCMQCh,  
 SunCluster\_HA\_Oracle\_3.1Ch, SCHADBCh, SunCluster\_HA\_DNS\_3.1Ch, SCWebServerCh,  
 SunOneMessageQueueTCh, ASAdminTCh, SCCoreTCh, SCAppServerTCh, DASTCh, SCMQTCh,  
 SCHADBTCh, SCWebServerTCh, SunOneMessageQueueEs, ASAdminEs, SCCoreEs, SCAppServerEs,  
 DASEs, SCMQEs, SCHADBEs, SCWebServerEs

PSP\_EXIT\_ON\_DEPENDENCY\_WARNING = no  
 PSP\_LOG\_CURRENTLY\_INSTALLED = yes  
 REMOVE\_BUNDLED\_PRODUCTS =  
 LOCALE = true  
 CCCP\_UPGRADE\_EXTERNAL\_INCOMPATIBLE\_JDK =  
 CMN\_WPS\_INSTALLDIR = /space/opt/SUNWproxy  
 DSEE\_BASE = /space/opt/SUNWdsee  
 CMN\_DSSETUP\_INSTALLDIR = /space/opt/SUNWcomds  
 CMN\_WS\_INSTANCEDIR = /space/var/opt/SUNWwbsvr7  
 CMN\_WS\_INSTALLDIR = /space/opt  
 CMN\_SRA\_INSTALLDIR = /space/opt  
 CMN\_IS\_INSTALLDIR = /space/opt  
 CMN\_AS\_DOMAINSDIR = /space/var/opt/SUNWappserver  
 CMN\_AS\_INSTALLDIR = /space/opt/SUNWappserver  
 CMN\_REG\_SERVER\_ROOT = /space/opt  
 CMN\_PS\_INSTALLDIR = /space/opt  
 CMN\_UNINSTALL\_INSTALLDIR =  
 CONFIG\_TYPE = Custom  
 CMN\_ADMIN\_USER = admin  
 CMN\_ADMIN\_PASSWORD = adminadm  
 USE\_DEFAULT\_PASSWORD = true  
 CMN\_HOST\_NAME = mycomputer  
 CMN\_DOMAIN\_NAME = example.com  
 CMN\_IPADDRESS = 192.168.255.255

```
CMN_SYSTEM_USER = root
CMN_SYSTEM_GROUP = root
WS_ADMIN_IS_SERVER_MODE = true
WS_START_ON_BOOT = false
WS_64BIT_INSTALL = false
WS_ADMIN_HOST = mycomputer.example.com
WS_ADMIN_SSL_PORT = 8989
WS_ADMIN_HTTP_PORT = 8800
WS_ADMIN_SERVER_USER = root
WS_ADMIN_LOGIN_USER = admin
WS_ADMIN_LOGIN_PASSWORD = adminadm
WS_INSTALL_CLI_ONLY = false
WS_NODE_HOST =
WS_NODE_SSL_PORT =
WS_REGISTER_NODE =
WS_SERVER_NAME = mycomputer.example.com
WS_HTTP_PORT = 80
WS_SERVER_USER = root
WS_DOCROOT = /space/var/opt/SUNWwbsvr7/https-mycomputer.example.com/docs
HADB_DEFAULT_AMDINPORT = 1862
HADB_DEFAULT_RESDIR = /var/opt
HADB_DEFAULT_GROUP = root
HADB_ALLOW_GROUPMANAGE = N
AS_ADMIN_USER_NAME = admin
AS_PASSWORD = adminadm
S_ADMIN_PORT = 4849
AS_JMX_PORT = 8686
AS_HTTP_PORT = 8080
AS_HTTPS_PORT = 8181
AS_MASTER_PASSWORD = adminadm
ASNA_ADMIN_HOST_NAME = mycomputer.example.com
ASNA_ADMIN_USER_NAME = admin
ASNA_PASSWORD = adminadm
ASNA_MASTER_PASSWORD = adminadm
ASNA_ADMIN_PORT = 4849
ASNA_NODE_AGENT_NAME = mycomputer
AS_WEB_SERVER_LOCATION = /space/opt
AS_WEB_SERVER_INSTANCE_LOCATION = /space/var/opt/SUNWwbsvr7/https-mycomputer.example.com
AS_WEB_SERVER_PLUGIN_TYPE = Sun Java System Web Server
CREATE_INSTANCE = true
DSEE_INSTANCE_DIR = /var/opt/SUNWdsee/dsins1
DSEE_INSTANCE_PORT = 389
DSEE_INSTANCE_SSL_PORT = 636
DSEE_DN_MANAGER = cn=Directory Manager
DSEE_INSTANCE_USER = root
DSEE_INSTANCE_GROUP = root
DSEE_INSTANCE_PASSWORD = adminadm
DSEE_SUFFIX = dc=example,dc=sun,dc=com
```

```
IS_LDAPUSERPASSWD = adminadmin
IS_ADMINPASSWD = adminadm
IS_LDAP_USER = amldapuser
IS_ADMIN_USER_ID = amAdmin
AM_ENC_PWD = nDmQOJQCnv3ABtzioxL5gqMu4Fkxezlh
AM_REALM = disabled
AM_APPL_USER_ID = anonymous
AM_APPL_PWD =
DeploymentServer = AppServer
PortalSelected = TRUE
IS_WS_HOST_NAME =
IS_WS_INSTANCE_DIR =
IS_WS_INSTANCE_NAME =
IS_WS_INSTANCE_PORT =
IS_WS_ADMIN_PORT =
IS_WS_ADMIN_ID =
IS_WS_ADMIN_PASSWORD =
FORCE_UNINSTALLATION =
IS_WS_INSTANCE_DIR_ROOT =
IS_SERVER_PROTOCOL = http
IS_WS_PROTOCOL =
IS_APPSERVERBASEDIR = /space/opt/SUNWappserver/appserver
IS_AS_CONFIG_DIR =
IS_IAS81INSTANCE = server
IS_IAS81INSTANCEDIR = /space/var/opt/SUNWappserver/domains/domain1
IS_IAS81INSTANCE_PORT = 8080
IS_IAS81_ADMIN = admin
IS_IAS81_ADMINPASSWD = adminadm
IS_IAS81_MASTERPASSWD = adminadm
IS_IAS81_ADMINPORT = 4849
ASADMIN_PROTOCOL = https
IS_IAS81_PROTOCOL = http
IS_IAS81_HOST = mycomputer.example.com
IS_SUNAPPSERVER_DOCS_DIR = /space/var/opt/SUNWappserver/domains/domain1/docroot
IS_BEA_INSTALL_DIR =
IS_BEA_ADMIN_PASSWD =
IS_BEA_ADMIN_PORT =
IS_BEA_DOMAIN =
IS_BEA_INSTANCE =
IS_BEA_DOC_ROOT_DIR =
IS_BEA_WEB_LOGIC_JAVA_HOME_DIR =
IS_BEA_MANAGED_SERVER =
IS_IBM_INSTALL_DIR =
IS_IBM_VIRTUAL_HOST =
IS_IBM_APPSERV_NAME =
IS_IBM_APPSERV_PORT =
IS_IBM_DOC_DIR_HOST =
IS_IBM_WEB_SERV_PORT =
```

```
IS_IBM_WEBSPPHERE_JAVA_HOME =
IS_WAS40_NODE =
CONSOLE_HOST = mycomputer.example.com
CONSOLE_DEPLOY_URI = amconsole
PASSWORD_SERVICE_DEPLOY_URI = ampassword
IS_SERVER_HOST = mycomputer.example.com
IS_SERVER_PORT = 8080
CONSOLE_PORT = 8080
SERVER_DEPLOY_URI = amserver
COOKIE_DOMAIN_LIST = .example.com
USE_DSAME_SERVICES_WEB_CONTAINER =
CDS_DEPLOY_URI = amcommon
ADMIN_COMPONENT_SELECTED = true
CONSOLE_PROTOCOL = http
CONSOLE_REMOTE = false
USE_CURRRENT_DS = true
IS_DS_HOST = mycomputer.example.com
IS_DS_HOSTNAME = mycomputer
IS_DS_PORT = 389
IS_ROOT_SUFFIX = dc=example,dc=sun,dc=com
IS_DIRMGRDN = cn=Directory Manager
IS_DIRMGRPASSWD = adminadm
IS_EXISTING_DIT_SCHEMA = n
IS_LOAD_DIT = y
IS_ORG_OBJECT_CLASS = sunISManagedOrganization
IS_ORG_NAMING_ATTR = o
IS_USER_OBJECT_CLASS = inetorgperson
IS_USER_NAMING_ATTR = uid
IS_DIRECTORY_MODE = 1
DIST_AUTH_DEPLOY_URI = amdistauth
CLIENT_DEPLOY_URI = amclient
PS_DEPLOY_TYPE = SUNONE8
PS_DEPLOY_DIR = /space/opt/SUNWappserver/appserver
PS_DEPLOY_INSTANCE_DIR = /space/var/opt/SUNWappserver/domains/domain1
PS_DEPLOY_INSTANCE = server
PS_DEPLOY_PROTOCOL = http
PS_DEPLOY_PORT = 8080
PS_DEPLOY_DOCROOT = /space/var/opt/SUNWappserver/domains/domain1/docroot
PS_DEPLOY_ADMIN_PORT = 4849
PS_DEPLOY_ADMIN = admin
PS_DEPLOY_ADMIN_PASSWORD = adminadm
PS_DEPLOY_ADMIN_PROTOCOL = https
PS_DEPLOY_ADMIN_HOST = mycomputer.example.com
PS_PORTALACCESS_URL = http://mycomputer.example.com:8080/portal
PS_DEPLOY_DOMAIN_NAME =
PS_DEPLOY_DOMAIN = domain1
PS_DEPLOY_DOMAIN_DIR =
PS_DEPLOY_JDK_DIR = /usr/jdk/entsys-j2se
```

```
PS_DEPLOY_HOST = mycomputer.example.com
PS_DEPLOY_NOW = y
PS_DEPLOY_CELL =
PS_DEPLOY_NODE =
PS_PORTAL_ID = portal1
PS_SEARCH_ID = search1
PS_INSTANCE_ID = mycomputer-8080
PS_DEPLOY_URI = /portal
PS_SAMPLE_PORTAL = true
PS_ENTERPRISE_PORTAL = true
PS_COMMUNITY_PORTAL = true
SRA_SWITCH_CORE = true
PS_IS_INSTALLDIR = /space/opt
PS_IS_LDAP_AUTH_PASSWORD = adminadmin
PS_IS_ADMIN_PASSWORD = adminadm
PS_SERVER_PROTOCOL = http
PS_DS_DIRMGR_DN = cn=Directory Manager
PS_DS_DIRMGR_PASSWORD = adminadm
SRA_LOG_USER_PASSWORD = adminadm
SRA_IS_INSTALLDIR =
SRA_SERVER_DOMAIN = example.com
SRA_GATEWAY_PROTOCOL = https
SRA_GATEWAY_DOMAIN = example.com
SRA_GATEWAY_PORT = 443
SRA_GATEWAY_PROFILE = default
SRA_GW_PROTOCOL = https
SRA_GW_HOSTNAME = mycomputer
SRA_GW_SUBDOMAIN =
SRA_GW_DOMAIN = example.com
SRA_GW_PORT = 443
SRA_GW_IPADDRESS = 192.168.255.255
SRA_GW_PROFILE = default
SRA_NLP_HOSTNAME = mycomputer
SRA_NLP_SUBDOMAIN =
SRA_NLP_DOMAIN = example.com
SRA_NLP_PORT = 10555
SRA_NLP_IPADDRESS = 192.168.255.255
SRA_NLP_GATEWAY_PROFILE = default
SRA_RWP_HOSTNAME = mycomputer
SRA_RWP_SUBDOMAIN =
SRA_RWP_DOMAIN = example.com
SRA_RWP_PORT = 10443
SRA_RWP_IPADDRESS = 192.168.255.255
SRA_RWP_GATEWAY_PROFILE = default
SRA_IS_CREATE_INSTANCE = y
SRA_SERVER_PROTOCOL = http
PS_SERVER_HOST = mycomputer.example.com
PS_SERVER_PORT = 8080
```

```
SRA_IS_ORG_DN = dc=com
SRA_IS_SERVICE_URI = /amserver
SRA_IS_PASSWORD_KEY =
SRA_CERT_ORGANIZATION = Sun Microsystems
SRA_CERT_DIVISION = Software
SRA_CERT_CITY = Santa Clara
SRA_CERT_STATE = CA
SRA_CERT_COUNTRY = US
SRA_CERT_PASSWORD = adminadm
SRA_CERT_SELFSIGNED =
SC_REMOTE_CONFIG = Yes
WPS_ADMIN_USER = admin
WPS_ADMIN_PASSWORD = adminadm
WPS_ADMIN_PORT = 8888
WPS_ADMIN_RUNTIME_USER = root
WPS_INSTANCE_RUNTIME_USER = nobody
WPS_INSTANCE_PORT = 8081
WPS_INSTANCE_AUTO_START = N
WPS_PROXY_DOMAIN = mycomputer.example.com
[STATE_DONE Sun Java(tm) Enterprise System 25f6b7f551f760d3476335edb9218b383660ffd7]
```



# 索引

---

## A

### Access Manager

Directory Server を使用する例 (単一セッション), 79-81

Portal Server と別ホスト, 82-84

Portal Server を使用する例 (単一セッション), 79-81

root 以外のユーザーでのインストール, 86

アンインストール後の作業, 195

アンインストール動作, 173-174

インストール後の設定, 134-135, 135

起動と停止, 157-158

サードパーティー製 Web コンテナ, 135

トラブルシューティングのヒント, 219-220

Access Manager SDK, サードパーティーの Web コンテナを使用する例, 76-79

ACL (Apache Common Logging), 230-231

amconfig ユーティリティ, 79

amsamplesilent ファイル, 78, 79

ANT, 230-231

Apache Logging (ACL), 230-231

Apache Web Server, 51-53, 228

### Application Server

アンインストール動作, 174-175

インストール後の設定, 135-138

監視のトラブルシューティング, 217-218

起動と停止, 158-159

データサービスの設定, 142-146

トラブルシューティングのヒント, 220

負荷分散用 Apache Web Server, 51-53

マニュアルページの場所, 131

例 (単一セッション), 51-53

## B

BEA WebLogic, 23-24, 41-42, 47-66, 135, 156

Berkeley Database, 230-231

## C

Calendar Server データサービスの設定, 142-146

Common Agent Container, 230-231

トラブルシューティング, 214-217

マニュアルページの場所, 131

Communications Suite, Sun Cluster の例, 72-76

## D

Directory Preparation Tool, 24

### Directory Proxy Server

アンインストール動作, 175-176

インストール後の設定, 138

起動と停止, 159-160

マニュアルページの場所, 131

例 (単一セッション), 53-55

### Directory Server

Access Manager を使用する例 (単一セッション), 79-81

アンインストール動作, 176

インストール後の設定, 138

起動と停止, 160

データサービスの設定, 142-146

トラブルシューティング, 220-221

マニュアルページの場所, 131

Directory Server (続き)

例(単一セッション), 55-57

Directory Service Control Center, インストール後の設定, 138

Directory Services Control Center, Sun Java Web コンソール, 154

Directory Server の暗号化, 55-57

Directory Server のレプリケーション, 55-57

DISPLAY 環境変数の設定, 33-34

## F

FastInfoSet, 230-231

## H

HADB

アンインストール動作, 176-177

インストール後の設定, 139

インストールの例, 84-86

データサービスの設定, 142-146

## I

IBM WebSphere, 157, 179-180, 209-210

ICU バージョン, 230-231

imqbrokerd.conf ファイル, 140

installer コマンド

オプション, 233-235

例, 235

installer コマンドのオプション, 233-235

Instant Messaging, データサービスの設定, 142-146

## J

J2SE, 230-231

JAF, 230-231

JATO, 230-231

Java DB, 218, 230-231

Java ES, インストールの例, 45-86

Java ES, ソフトウェアの入手, 41-42

JavaDB, 230-231

Java ES 以外の製品の高可用性, 145-146

Java ES ソフトウェアの入手, 88, 106

Java ES の起動シーケンス, 153-154

Java ES レポータ

アンインストール, 193-194

インストール, 103-104, 117

概要, 30

コマンドオプション, 233-235

有効化と無効化, 139

JavaHelp ランタイム, 230-231

JavaMail ランタイム, 230-231

Java 仮想マシン (JVM) の調整, 146

JAX 共有コンポーネント, 230-231

JDMK, 230-231

JSS 共有コンポーネント, 230-231

JSTL, 230-231

JVM の調整, 146

## K

KT Search Engine (KTSE), 230-231

## L

LDAP C SDK, 230-231

LDAP Java SDK, 230-231

## M

MA Core, 230-231

MANPATH, 環境変数の更新, 131-132

MANPATH の確認, 131-132

Message Queue

アップグレード, 57-58

アンインストール動作, 177-178

起動と停止, 161

単独でインストール, 57-58

データサービスの設定, 142-146

トラブルシューティングのヒント, 221

例(単一セッション), 57-58

Messaging Server, データサービスの設定, 142-146

Monitoring Console, 45-47  
 アンインストール動作, 178-179  
 インストール後の設定, 133  
 インストールの制限, 90  
 起動と停止, 161  
 トラブルシューティング, 217-218  
 トラブルシューティングのヒント, 221-222  
 マニュアルページの場所, 131  
 例 (単一セッション), 58-60  
 Monitoring Framework, 133, 230-231

## N

NS 共有コンポーネント, 230-231

## P

Perl, インストールの確認, 39  
 pkginfo コマンド, 33  
 Portal Server  
 Access Manager と別ホスト, 82-84  
 Access Manager を使用する例 (単一セッション), 79-81  
 root 以外のユーザーでのインストール, 86  
 アンインストール動作, 179-180  
 インストール後の設定, 140  
 起動と停止, 155-157  
 サンプルが見つからない, 218  
 トラブルシューティングのヒント, 222-223  
 例 (単一セッション), 49-51  
 Portal Server Secure Remote Access  
 アンインストール動作, 180-181  
 インストール後の設定, 140  
 起動と停止, 161-162  
 トラブルシューティングのヒント, 223  
 例 (単一セッション), 60-62  
 Portal SRA のゲートウェイ, 起動と停止, 161-162  
 prodreg コマンド, 33

## R

root 以外のユーザーでのインストール, 86

rpm -qa コマンド, 33  
 RSMRDT ドライバ機能 (Sun Cluster), 75-76

## S

SAAJ, 230-231  
 SASL, 230-231  
 Schema 2, 55  
 Service Registry  
 アンインストール後の作業, 196-197  
 アンインストール動作, 181-182  
 再インストール, 196-197  
 トラブルシューティングのヒント, 223-224  
 例 (単一セッション), 62-64  
 SOAP for Java (SAAJ), 230-231  
 Solaris 10  
 ゾーンのインストール例, 66-67  
 メモリー、ディスク、およびスワップ空間の検証, 35-36  
 ロード済みのソフトウェア, 32  
 Solaris 10 ゾーンの継承ファイルシステム, 70  
 Solaris コンテナ (ゾーン), 66-67  
 Sun Cluster  
 アンインストール, 194  
 アンインストール動作, 182  
 インストール後の設定, 133-134  
 インストールの例, 72-76  
 追加機能のサポート, 74  
 停止と再起動, 163  
 特殊機能のインストール, 75-76  
 トラブルシューティングのヒント, 224  
 マニュアルページの場所, 131  
 Sun Cluster Agents, 142-146  
 インストール後の設定, 142-146  
 Sun Explorer Data Collector, 230-231  
 Sun Java Monitoring Framework, 230-231  
 Sun Java Web Console, 68-69  
 Sun Cluster エージェント, インストールの例, 73  
 Sun Cluster データサービスの設定  
 Calendar Server, 142-146  
 Directory Server, 142-146  
 HADB, 142-146  
 Instant Messaging, 142-146  
 Java ES 以外の製品, 145-146

## Sun Cluster データサービスの設定 (続き)

Messaging Server, 142-146

Web Server, 142-146

## Sun Cluster の再起動, 163

## Sun Java Web コンソール, 230-231

起動, 154

## swlist コマンド, 33

## Java ES ソフトウェアの入手, 41-42

**T**

tail コマンドおよびサイレントインストール, 127

**U**

## uninstall コマンド

オプション, 236

例, 237

uninstall コマンドのオプション, 236

**V**

viewlog コマンド, 30, 203, 237-238

**W**

## Web Proxy Server

アンインストール動作, 182-183

起動と停止, 163-164

情報, 224

設定, 141

トラブルシューティングのヒント, 224-225

## Web Server

64 ビットサポート, 142

アンインストール後の作業, 197

アンインストール動作, 183-184

インストール後の設定, 142

起動と停止, 165

データサービスの設定, 142-146

トラブルシューティング, 225

例 (単一セッション), 64-66

Web Server に対する 64 ビットサポート, 142

Web とアプリケーションサービスの例, 84-86

WSCL, 230-231

**X**

XWSS, 230-231

**あ**

アップグレード, 28-29

必要な作業の識別, 34-35

アンインストーラ, 概要, 31

アンインストーラの管理者アクセス権, 184-185

アンインストール, 167-197

Access Manager アンインストール後の作業, 195

Access Manager の動作, 173-174

Application Server の動作, 174-175

Directory Proxy Server の動作, 175-176

Directory Server の動作, 176

HADB, 176-177

Java ES レポート, 193-194

Message Queue の動作, 177-178

Monitoring Console の動作, 178-179

Portal Server Secure Remote Access の動作, 180-181

Portal Server の動作, 179-180

Service Registry の動作, 181-182

Sun Cluster, 194

Sun Cluster の動作, 182

Web Proxy Server の動作, 182-183

Web Server のアンインストール後, 197

Web Server の動作, 183-184

アンインストール後の作業, 195-197

インストール済みコンポーネントの調査, 171-185

管理者アクセス権, 184-185

グラフィカルインタフェース, 185-188

コンポーネントの動作, 172-184

しくみ, 167-170

実行, 185-193

状態ファイル, 191-192

前提条件, 170-171

- アンインストール (続き)
  - 相互依存性の処理, 168-170
  - トラブルシューティング, 199-225
  - 部分的なアンインストールのクリーンアップ, 207-208
- アンインストール後の作業, 195-197
  - Access Manager, 195
  - Service Registry, 196-197
  - Web Server, 197
  
- い
- インストーラの言語, 24-25
- インストーラのモード, 24
- インストーラモード, 24
- インストール
  - インストール後の設定, 129-147
  - インストール前のチェックリスト, 38-41
  - 概要レポート, 102-103, 130
  - 確認, 150-153
  - グラフィカルインタフェース, 87-104
  - 言語の概要, 24-25
  - サイレントモード, 119-127
    - およびプラットフォームに適した ID, 124-125
    - トラブルシューティング, 211
  - サイレントモードでの実行, 125-127
  - サイレントモードのプロセス, 119-120
  - シーケンスの例, 45-86
  - 準備, 21-44
  - 状態ファイルを使用した, 120-124
  - 設定タイプ, 27-28
  - 追加のコンポーネントのインストール, 103-104
  - テキストベースのインタフェース, 105-117
  - トラブルシューティング, 199-225
  - 取り消し, 101
  - ネットワーク上の共有イメージ, 42-44
  - プロセス, 21-31
  - モード, 24
  - ログ, 102-103, 200-201
- インストール後設定, 確認, 153-154
- インストール後設定のあとの確認, 153-154
- インストール後の確認, 150-153
  
- インストール後の設定, 129-147
  - Access Manager, 134-135, 135
  - Application Server, 135-138
  - Directory Proxy Server, 138
  - Directory Server, 138
  - Directory Service Control Center, 138
  - HADB, 139
  - Portal Server, 140
  - Portal Server Secure Remote Access, 140
  - Sun Cluster, 133-134
  - Web Proxy Server, 141
  - Web Server, 142
  - 監視, 133
- インストール済みコンポーネントの調査, 171-185
- インストール済みソフトウェアの検出, 26, 32-35
- インストールのシーケンス, 45-86
- インストールのシナリオ, 45-86
- インストールの取り消し, 101
- インストール前のチェックリスト, 38-41
  
- え
- エージェントおよび Sun Cluster, 142-146
  
- か
- 概要
  - Java ES インストール, 27-28
  - アップグレード, 28-29
  - インストールの準備, 21-44
  - インストールの例, 45-47
  - インストールプロセス, 21-31
  - 共有コンポーネント, 230-231
  - 言語の選択, 24-25
  - コンポーネント, 227
  - コンポーネントのチェック, 25
  - 設定タイプ, 27-28
- 概要レポートとインストールログ, 102-103, 200-201
- 確認手順, 149-166

## き

- 共有インストールイメージ, 42-44
- 共有コンポーネント
  - アップグレード, 28-29
  - 一覧, 230-231
  - ゾーンへのインストール, 68-69

## く

- グラフィカルインタフェース
  - アンインストール, 185-188
  - インストール, 87-104
  - ログビューア, 201-203

## こ

- コマンド行インストール, 105-117
- コンポーネント
  - アンインストール動作, 172-184
  - 依存性の確認, 26
  - 一覧, 23-24, 227-231
  - インストール済みのバージョンの検出, 32-35
  - インストール済みのバージョンの調査, 171-185
  - 概要, 227-231
  - 起動と停止, 153-154
  - 追加インストール, 103-104
  - トラブルシューティング, 219-225
  - ルート以外の ID による設定, 146-147
- コンポーネントの依存性の確認, 26
- コンポーネントの起動と停止, 149-166
  - Access Manager, 157-158
  - Application Server, 158-159
  - Directory Proxy Server, 159-160
  - Directory Server, 160, 161-162
  - Message Queue, 161
  - Monitoring Console, 161
  - Portal Server, 155-157
  - Sun Cluster, 163
  - Sun Java Web コンソール, 154
  - Web Proxy Server, 163-164
  - Web Server, 165
- コンポーネントのチェックとインストーラ, 25

コンポーネントのバージョン, 23-24

## さ

- サードパーティー Web コンテナ, 76-79
- サードパーティー製 Web コンテナ, 135
- サイレントアンインストール, 191-192
- サイレントインストール, 119-127
  - インストーラの実行, 125-127
  - および状態ファイル, 120-124
  - 状態ファイルの例, 239-245

## し

- シーケンスの例, 45-86
  - ガイドライン, 45-47
  - 単一セッション, 47-66
- システムの準備完了, 35-37
- システム要件, 36, 95
- 状態ファイル
  - インストールでの使用, 120-124
  - およびアンインストール, 191-192
  - トラブルシューティング, 211
  - パラメータ, 122-124
  - プラットフォームに適した ID, 124-125
  - 例, 239-245

## せ

- 製品レジストリ, 151-153
  - トラブルシューティング, 206, 208-209, 214
  - 場所, 39
- 設定タイプ, 27-28

## そ

- ゾーン, ロード済みのソフトウェア, 32
- ゾーン (Solaris 10)
  - 疎ルートの例, 71-72
  - 例, 66-67

## ソフトウェア

- 入手方法, 106
- ファイルサーバー, 41-42
- ロード済み, 41-42
- ソフトウェア、入手, 41-42
- 疎ルートゾーン, 71-72

## た

- 単一セッションインストールの例, 47-66

## て

- データサービスの設定 (Sun Cluster), 142-146
- テキストベースのインストール, 105-117

## と

- トラブルシューティング, 200-201
  - Access Manager のヒント, 219-220
  - Application Server のヒント, 220
  - Common Agent Container, 214-217
  - Directory Server のヒント, 220-221
  - Message Queue のヒント, 221
  - Monitoring Console, 217-218
  - Monitoring Console のヒント, 221-222
  - Portal Server Remote Secure Access のヒント, 223
  - Portal Server のヒント, 222-223
  - Service Registry のヒント, 223-224
  - Sun Cluster のヒント, 224
  - Web Proxy Server のヒント, 224-225
  - Web Server のヒント, 225
  - アンインストール, 212-214
  - インストール, 199-225
  - コンポーネント, 219-225
  - サイレントモードでのインストール, 211
  - 状態ファイル, 211
  - 製品レジストリ, 214
  - テクニク, 199-206
  - 部分的なアンインストールのクリーンアップ, 207-208
  - ポータルデータベースが見つからない, 218

## トラブルシューティング (続き)

- ポート番号, 215-216
- ルートパスワード, 216-217
- ログ, 200-201

## ね

- ネットワーク共有インストール, 42-44

## は

- パッケージ, Sun Cluster の特殊機能, 75-76
- パッケージコマンド, 33
- パッチ
  - インストール中, 95
  - インストール中の追加, 96, 112
  - クラスタ, 36
  - 手順例, 36-37
  - 要件, 36-37

## ひ

- 評価インストールの例, 48-49

## ふ

- 負荷分散
  - Apache Web Server, 51-53
  - Web とアプリケーションサービスの例, 84-86
- プラットフォームに適した状態ファイルの ID, 124-125
- ブローカ, 「Message Queue」を参照

## ほ

- ポート番号, 競合, 215-216
- ホストの調査, 33

## ま

マニュアルページのデフォルトの場所, 131

## よ

## 要件

アンインストール, 170-171

インストールシーケンスのガイドライン, 45-47

インストール前のチェックリスト, 38-41

システム, 35-37

用語集、リンク, 16

## る

ルート以外の ID、コンポーネントの設定, 146-147

ルートパスワード、トラブルシューティング, 216-217

## れ

## 例

Access Manager, 49-51

Access Manager と Portal Server, 49-51

Access Manager とは別ホストの Portal Server, 82-84

Application Server, 51-53

Directory Proxy Server, 53-55

Directory Server, 55-57

HADB, 84-86

installer コマンド, 235

Message Queue, 57-58

Monitoring Console, 58-60

Portal Server Secure Remote Access, 60-62

Service Registry, 62-64

Solaris 10 ゾーン, 66-67

Sun Cluster, 72-76

uninstall コマンド, 237

viewlog コマンド, 238

Web Server, 64-66

Web とアプリケーションサービス, 84-86

アイデンティティ管理, 79-81

## 例 (続き)

インストールシーケンス, 45-47

インストールのシーケンス, 45-86

概要, 45-47

サードパーティー Web コンテナ, 76-79

状態ファイル, 239-245

単一セッションインストール, 47-66

パッチのインストール, 36-37

評価, 48-49

負荷分散, 84-86

レポートユーティリティ

アンインストール, 193-194

概要, 30

コマンドオプション, 233-235

有効化と無効化, 139

## ろ

ロード済みのソフトウェア, 32

ロードバランスプラグイン, 52-53, 84-86

ログ, 30

インストール, 102-103

トラブルシューティングのために使用, 200-201

ログビューア, 30, 201-203

ログビューア, 30, 200-201

viewlog コマンド, 237-238